
F B I から来た女: 6 ~ 漆黒・黒の章

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FBIから来た女：6）漆黒・黒の章

【Nコード】

N2970E

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

ついに黄の組織も壊滅し、残すは黒の組織だけとなったペンデュラムアッド。手がかりを求めてアメリカに旅立ったコナン達は、盗賊団の女ボスと出会う。彼女との出会いをキッカケに、運命の歯車は回り出していく。そして、ついに悪魔達の秘密が明かされていく。・これは、コナン達と黒の組織との戦いを描いた話である・・・

ファイル556：盗賊団の女ボスとの出会い

哀達が乗っていたカーペットを撃ち落とした集団の長と思われる少女が、コナン達に近づいて来た。

ザッ、ザッ・・・

「あなた達・・・ペンデュラムアッドでしょ？死刑よ。」

女性は親指を下に向けた。

哀

「私達は『アル』よ！！ペンデュラムはあなた達でしょうが！？」

哀は女性に詰め寄った。

「んー？」

女性は目を前の光景をよく見た。

ジーッ・・・

「・・・アタシ、何か勘違いしてた？」

哀

「私達はペンデュラム倒そうとしてるのよ！-！」

理沙

「伊澄君・・・」

伊澄

「ええ。最悪の事態じゃ、ないみたいですネ。」

青井玲子^{アオイレイコ}『20 メアリードの女ボス』

「アタシ達もペンデュラムじゃないわ！盗賊ドルギ『メアリード』よ！！アタシは女ボスやつてる青井玲子って言うの。間違って悪かったわねえ。あなた達みたいな子供が、ペンデュラムなワケないわよねえ！！」

哀

「失礼な人ねアンタ！！」

コナン

「あのー・・・メアリードって事は、ボク達から：RINGとかを奪う気ですか？」

玲子

「ムッ！？」

玲子はコナンやハヤテ達男性陣をマジマジと見た。

玲子

「よく見てみればカワイイ男の子達いっぱい！アタシ、男の子からは物取らない主義なの！」

コナン達は哑然とした。

玲子

「ずーっとペンデュラムのアホ共とっ捕まえようとしてたけどサッ

パリだわ。他のトコにいる仲間からも連絡ないし！砦に1度戻るかな。あなた達もアイツら敵だと思ってるんでしょ？一緒に来ない？」

哀

「平気かしら、コナン君？」

コナン

「メアリードは情報伝達は並じゃないからね。ヤツらの動向を探るには良いと思うよ。それにあの人、悪い人じゃなさそう。」

玲子

「決まり。お客さん連れて帰りましょ。ディメンション：RING
『ワープゲート』！この一帯の人間を全て、メアリードの砦へ！！」

コナン達は、砦へとワープした。

ブンッ！

『メアリードの砦』

玲子

「・・・なるほどね・・・高校生名探偵に元黒の組織の科学者、ペンデュラムの要が持ってたしゃべる：RING。アイツらから狙われるワケね！それで逃げるためでなく戦うために結成されたのが・・・アル・・・か！美しい・・・少し遅かったのかも知れないわねえ・・・」

そう言うと、玲子はマジックボールを投げた。

ヒュッ！

カァッ！

そこには、世界各地のヒドイ光景が映っていた。

哀

「な・・・」

玲子

「これが・・・今の世界と言って良い。イギリス、オーストラリア、ブラジル、アフリカ・・・調べただけでも、半分近くの国が連中に破壊されている。見せたい物があるわ。来て。」

哀達は、砦の裏へと案内された。

そこには、多くの墓があった。

玲子

「メアリードの同志達の・・・墓よ。アタシは・・・ヤツらを絶対に許さない。ここだけじゃない・・・全土が今、墓場になりつつあるのよ。ペンデュラムアッドの宣戦布告で！！」

ユーリ

「そうだ！そしてこれが過去のやり方と同じなら・・・テロ的に行うこの第１段階から、第２段階に戦争内容は移行される！」

康太郎

「第2段階!？」

ユリ

「『組織大戦』だよ。半分程度の国々を叩き潰し存分に脅威を与えた後、“戦い”という名のゲームを持ちかけるんだ。それは造反する者達を直接殺していくためであり、RING等を手に入れるためであり、自分達こそが世界の覇者だという証を打ち立てるためのもの! 8年前の組織大戦では、明美ちゃんやオレ達が参戦し、勝利を導いた! 1度このゲームに負けているヤツらは、おそらく復讐もかねて同じようなゲームを挑むハズ!」

そこまで言った時、哀が壁に拳を打ちつけた。

ゴッ!!

哀

「ゲームですって……? たくさんの人達を殺して、さらに人殺しのゲームですって……!？」

哀の怒りは、最大になっている。

その時、玲子の部下がやって来た。

「玲子! 動きのあるペンデュラムを発見! ヨーロッパの南西の村、デイストリアだ! ーまだ暴れているらしい! ー!」

玲子

「“地底湖のデイストリア”か! 行った事あるからワープゲートの範囲内ね! どう……アル? アタシを連れてって見ない? ー瞬でヤ

ツらのトコ行けるわよ!」

哀

「わかったわ! ディストリアまで飛ばさせて!! 玲子さん!!」

玲子を仲間に引き入れた哀達!

ディストリアで彼女達を待ち受ける者とは、一体・・・

ファイル557：ディストリアへ・・・地底湖の戦い！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル71

あおい れいこ
青井玲子

盗賊ドルギ『メアリード』の女ボスで、仲間思いの人情家。

青いニット帽をかぶっており、オデコには斬りキズがついている。

第1章の回想話（バスジャック事件）に登場しているが、出す機会がなくしばらく出番がなかった。

ただし第2章でも少しだけ出ている。

ペンデュラムアッドによって同志達を殺されてしまったため、ペンデュラムアッドに対して敵対心を持ち、必ず連中を叩き潰すと心に誓っている（後にその仇の名がペンデュラムアッド第2の輩であるスレイプニルだとわかる）。

そのせいか、哀達をペンデュラムアッドと勘違いし攻撃しようとした事も。

男からは物を奪わない主義。

超がつくほどの男好き。

氷の：RINGを扱う氷使いで、精神力・魔力共にかなりのもの。
年齢は20歳。

ファイル557：ディストリアへ・・・地底湖の戦い！！

玲子

「よし、決まり！！ディメンション：RINGワープゲート発動！！このメンバーを・・・ディストリアへ！！」

ブンッ！

哀達は、ディストリアへとたどり着いた。

ブンッ！

哀

「！！！」

哀達の目の前に広がっていたのは、所々破壊された悲惨な光景だった。

玲子

「何て、マネを・・・っ。水と森の村ディストリア・・・前に来た事あったけど、美しいトコだった。それが・・・」

康太郎

「ヒデエ・・・」

哀

「許せない・・・」

そう言う哀達の前に、何人か人がやって来た。

「アンタ達・・・何しに来なさった？」

「ペンデュラムか？FBIか？もうどちらでも良いがね。ディストリアはもう終わりだ。これ以上破壊されても同じ事・・・助けも遅かった・・・好きにしてくれ。畑も家も潰された。我々はもう生きる氣力すらないのだ・・・」

哀

「そんな事言わないでよ、おじさん！元氣出して！！壊れたってまた作れば良いじゃない！！」

「ムダだよ・・・作ってもまた壊されるだけさ。私はね、4年前までFBIのメンバーだった。しかし、何の抵抗もできなかった・・・たった2人のペンデュラムアッドに・・・無力だった。村を救うどころか、何もできなかったんだ・・・」

コナン

「とにかくまずケガしてる人を手当てしよう！播磨さん！成美さん！！」

紅子・成美

「はい！！」

玲子

「その2人はどこ行っただかわかる？」

「ああ。まだディストリアの中だ。そこの外れにある地底湖への入

口に入って行つた。隠された：RINGを手に入れると言ってな・
・」

玲子

「行く、哀ちゃん？」

哀

「当然!!」

松葉

「アタシもつき合つてええよん」

「アンタら、まさかあの2人と戦う気か!? 止めておいた方が良い
!! それに・・・あの地底湖には、亡霊が災いを招くという言い伝
えがある・・・」

哀

「どっちも怖くない! 仇を取って来るわ!! だから元気出してよ!
!」

哀達3人は洞窟に入って行つた。

伊澄

「康太郎様は、私が渡した：RINGを使って畑を直してください。
使い方はわかりますね？」

康太郎

「はい。」

「ア、アンタ達一体・・・」

康太郎

「アル！！ペンデュラムを倒そうとしてる命知らずです！！」

「ま・・・魔力！！」

「フッ！マヌケなアンタでも気づいた？3人よ！」

ゼクト

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビシヨップ』

「う、うん気づいた！！」

ビターズ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビシヨップ』

「村の連中じゃないわね！FBIかしら？何でも良いわ！組織対戦の前に、そこそこのヤツと戦える良い機会じゃないのよ！！ブチ殺してやるわ！！」

哀達3人は、洞窟内を進んでいた。

ゆっくり進んでいた松葉の後ろに、何かが現れた。

ボウ・・・

松葉

「キヤー！！何や今のおーっ！？」

玲子

「幽霊が出るって言うのはホントだったか！確かに魔力とはちがつて薄ら寒い妙な気が充満してる！以前からここに：RINGが隠されているのは聞いた事あった。昔手に入れようとしてただけで連中が封印してて。それが原因で狙われたんでしょね。」

しばらく進むと、道が2手に分かれていた。

玲子

「ん・・・道が2手だわ。別れなきゃいけないわね！」

哀達はジャンケンをし、その結果哀とイズナが左側、玲子と松葉が右側に行く事になった。

玲子と松葉は、先に奥へと進んで行った。

イズナ

「さて、私達も奥に・・・」

その時、イズナの背を悪寒が走った。

ドクン！

哀

「？どうしたのイズナ？」

イズナ

「（何！？この感覚は・・・！？誰！？）誰かそこにいるわね！？出て来なさい！！」

イズナが叫ぶと、哀達の後ろから何者かが現れた。

哀

「（ペンデュラム・・・アッド！？）誰！？」

ダイ

「ごめんなさい、怪しい者じゃない。ボクはディストリアの村民でダイっていうんだ。」

哀

「何だ、ペンデュラムかと思っただわ！」

イズナ

「（ん？感覚がなくなった・・・気のせいかしら？）」

ダイ

「ボク達を助けようとしてくれる皆さんにとっても感謝してるんだ。少しでも君達に協力したくてここへ来た。ボクに戦う事はできないけど、迷わずに道を教える事くらいならできるよ。同行させてくれないか？」

哀

「それは助かるわ！よろしくね、ダイ！・・・でさあ、この子達幽霊・・・憑いたりしない？」

ダイ

「平気。ボクはここが好きでよく来るんだけど、何かされた事なんてない。」

哀

「こんなトコが好き？変ねあなた。」

ダイ

「そうかな？でも入って来たのは久しぶりだ。懐かしいなこの感じ。君、何て名前？」

哀

「哀！灰原哀！この子は私の：RING・イズナ！一緒にペンデュラムを倒すのよ！」

ダイ

「フーン。」

哀

「フーンて何よフーンて！」

ダイ

「ゴメンゴメン。だって・・・ペンデュラムって強いよ？」

哀

「知ってるわ！でも絶対に倒してやる。私はアイツらが許せない！アイツらのせいで、たくさんの人々が苦しめられている！誰かが止めなきゃいけないの！私がそれをやる！」

ダイ

「8年前の明美さんのように?」

哀

「私は明美を超えるの!」

ダイ

「・・・ワクワクしてきたよ。期待してる・・・」

一方、右の道を進んでいる松葉と玲子は・・・

玲子

「ねえ、哀ちゃんってどんな子なの?」

松葉

「カワイイ子や。アタシが会った事のないタイプやね。(そう・・・会った事がない。アタシの故郷では・・・)」

『アリスよ・・・RINGを蒐めよ!そして、探し出せ!!あの女を・・・殺せ!!』

「松葉ちゃん、松葉ちゃんて!!」

松葉

「何や・・・!」

玲子

「気づくの遅いわよくノ。魔力よ。」

ボコ・・・

湖の中から、何かが飛び出して来た。

ザバア！！

ゼクト

「魔力・・・強い魔力！！」

ゼクトは仮面をはぎ取った。

ガッ！

ゼクト

「オマエら・・・何？敵？」

ダウン！！

松葉

「うつわ・・・気色悪っ・・・」

松葉の言葉に、ゼクトは過敏に反応した。

カチン！

ゼクト

「オ、オレ・・・気持ち悪くないーっ！！」

ゼクトはいきなり殴りかかって来た。

松葉は難なく避ける。

ドゴォ！！

松葉

「（岩盤を力任せに殴って手にキズ1つついていない・・・体中が岩以上の硬度になっている状態！力自慢が愛用する身体硬質化タイプのネイチャー：RINGか・・・）」

玲子

「下がってて良いよ アタシに任せといてーっ。」

松葉

「あら、随分余裕やね？1人でできるって事やるか。」

玲子

「そうね。アタシを誰だと思ってるの？メアリードのボス、玲子よ。ペンデュラムアッドブチのめしたい気持ちだったらね・・・哀ちゃん達にだって負けてないのよ。」

果たして、玲子の實力とは・・・？

次回、2人の刺客との対決！！

ファイル558：青井玲子の能力（チカラ）！！

ゼクト

「何だよオマエーッ！！」

ゼクトは玲子に殴りかかって来た。

ゴッ！

砕いた石の数個ひっつかみ、玲子に向かって投げてくる。

ブンッ！

玲子はかるうじて避けた。

松葉

「危なっかしいなあ。手伝ったるってば！」

玲子

「問題なしよ！」

ゼクト

「腹、減った。」

そう言うと、ゼクトは懷からソーセイジなどを取り出して食べ始めた。

ガフガフ・・・

ゼクト

「オマエら・・・オレ誰だか知らないのか？ペンデュラムアッドのゼクトだぞ！知らなかったらかわいそう、死ぬから。知って来たのなら・・・バカ。やっぱり死ぬ。」

ペロペロ・・・

玲子は無言で指を鳴らした。

コキ、コキン！

玲子

「お腹一杯になったかしら、大きいの！よく噛みしめなさい。ア
ンタの最後の晚餐よ。」

ゼクト

「晩・・・餐？」

松葉

「（青井玲子・・・盗賊ドルギ『メアリード』の女ボス。今わかってるんは、同志を殺したペンデュラムアッドに敵対心を持つとる事。どんな子なんか、どれくらいの力を持つとるのかもわからへん。とりあえず感じる魔力はさほど高くない！あのリアンちゃんくらいの実力者なら魔力をあえて抑える事かてできるけど、玲子が今、それをやっているのかは未知！お手並み、拝見やな）」

玲子

「やる前に１度聞いておくわよ。ディストリアを破壊したのはあなたね？」

ゼクト

「そう！ゼクトとビターズがやった！！」

玲子

「どんな気分だった？」

ゼクト

「楽しかった！家とか壊した！みんなゼクト怖がった！仲間達もたくさんやってる！壊して壊して殺してる！ゼクトももっと殺したい！でも1回城に帰らなきゃいけない！組織対戦が始まるからゼクトも帰る！オマエ達殺したら、ゼクトもビターズも城に帰る！」

玲子

「アンタはもう・・・誰も殺せないわよ。そしてどこにも帰れない。ここがアンタの墓場よ。」

玲子は冷たく言い放った。

ゼクト

「それゼクトの言いたい事ーっ！！」

ゼクトは再び玲子に殴りかかった。

グアッ！！

だが・・・

ドン！！

ゼクトの怪力を、玲子は片手で受け止めた。

ゼクト

「!?!」

松葉

「（あの怪力を・・・受け止めた!?!）」

玲子

「弱いわねえ、アンタは・・・」

玲子は飛び上がると、ゼクトを湖めがけ殴り飛ばした。

バキィ!!

ゼクト

「ごく!!」

バシヤア!!

松葉

「（腕力向上型の：RINGを使った!?!?ちがう!?!:RINGとシンクロした気配なんてまったく感じなかった!?!）」

ゼクト

「ゴホツ・・・カァ・・・」

玲子

「アンタに、最後の質問よ。ペンデュラムの中に・・・人間の血を残さず吸い取る：RINGを持つヤツがいるハズよ。その子の名前、教えなさい。」

ゼクト

「そっ・・・それ、知ってる知ってる！！スレイプニル！！た、助けてくれーっ！！」

玲子

「スレイプニル・・・それがメアリードの仇の名前ね・・・ありがとうね。」

そう言うと、玲子は両手にある・・・RINGを光らせた。

ガッ！

玲子

「フロスティック・アイ！！！」

冷気の衝撃が、ゼクトを襲った。

ドンッ！！

ゼクト

「ギャアアアア！！！」

松葉

「（氷のネイチャー・・・RING！！氷使い！！）」

玲子

「つつ・・・どうしてかしら？これを使ったびに、誰かを思い出しそうになるわ。ま、こんなトコね！」

松葉

「フン・・・やるやない！（この子・・・今の瞬間魔力が跳ね上がった！あれでも本気を出していない・・・！！）」

哀

「何・・・これ！！幽霊船？・・・！下がって、ダイ！」

ダイ

「え？」

哀

「魔力だわ・・・つまり、ペンデュラムアッドだわ！！」

ビターズ

「何だ、1人かあ？しかもガキじゃん。何よアンタは？アタシはペンデュラムアッドのビターズよ！ブツ殺される覚悟は決めてるんでしょうね？」

イズナ

「1人じゃないわよ！私だっているわ！」

ビターズ

「イズナ・・・そうか、アンタが・・・スレイプの言ってた女・・・ダゴンの：RINGを使ってる女、シェリー！今は灰原哀っていうらしいわね？1000年早いよ、クソアマアーツ！！アンタみたいなカスが使いこなすにはね、マヌケーツ！！こっちまで来なさいよ、アンタ。ダゴンに言いみやげができそうだわ！」

哀

「ビターズとか言ったわね。ディストリアを壊したのはあなた？」

ビターズ

「壊したのはもっぱらゼクトって子よ。アタシは殺し専門。特にガキ狙って殺したわ！本当はもう少し楽しみたかったんだけどね、地底湖にある：RINGを探しに来たの。でもこの船の中にもそれらしい物ないのよねえ・・・アンタどこかで：RING拾った？アンタは元同志だし、それをよこすなら半殺しで許してあげるわ。」

しかし、哀は無言でイズナをハンマーバージョンに変えた。

哀

「アイツ・・・ブツ倒すわよ、イズナ。」

ビターズ

「気に入らないわね、その態度！この：RINGでアンタも死刑よ！！ネイチャー：RING・フレアドアース！！」

哀とビターズは、戦闘を開始した。

外では、コナンが次々とケガ人を治療していた。

キイイイン・・・

「おお・・・痛みが！」

「スゴイ！これで15人目！折れた骨まで治すなんて、スゴイ：R

INGだ！」

紅子

「新ちゃん、少し休んで！」

成美

「顔色が良くない！精神力が保ちませんよ！」

コナン

「ヤダ。紅子ちゃん成美ちゃん、邪魔すると焼いちゃうぞーっ」

紅子・成美

「・・・」

康太郎

「おおりゃあーっ！！ウェーブアース！！」

ドカン！！

康太郎

「よし、こんなものか。ここに、東宮家特性の豆！これをみんなでまきましよう！一晩で実がなります！（こっちもがんばってるよ、哀さん達！そっちも気合い入れてやってよ！！）」

哀はビタースに殴りかかった。

ブンッ！

ビターズ

「くっ！！（この子・・・アタシの魔力と互角！？冗談じゃないわ！！）ハッ！アタシが人を殺したのがそんなに腹立ったかぁ！！？」

ビターズは左手に炎の剣をまとうせると、哀に斬りかかった。

ガカツ！

『助けて・・・』

哀

「？」

ドカ！

哀

「ねえ。あなた今、『助けて』って言った？」

ビターズ

「あー？今、助けて欲しいのはアンタでしょ！バーカ。助けてあげないけど。特大のフレアドアースくれてやるわ！！」

『助けて・・・助けて・・・』

哀

「（幽霊達！？）」

『船を海に出して・・・ここにずっといるのはもうイヤだ・・・』

『船を出して・・・あの岩壁を・・・崩して穴を開けて・・・』

『助けてくれるのならば、あなたに：RINGを差し上げましょう・
・・』

哀

「・・・よくわからないけど、ビターズ倒すのと一緒にやってみるか！アレ使っわよ、イズナ！！」

イズナ

「あれって、あなたまさか！？」

ビターズ

「（魔力の波長が変わった！？この子・・・何かをしようとしている！！）でももう遅いーっ！！喰らって死にやがれ！！」

ゴウツ！！

イズナ

「アレを使うと・・・あーっ！！もう良い！！私は知らないからねっ・・・」

哀

「バージョン3！！出て来なさいSFG！！！！」

果たして、2章から謎だった、イズナの3番目の能力とは、一体・
・！？

次回、死闘の決着！！

ファイル559：イズナの第3の能力

哀

「バージョン3・・・出て来なさい、SFG!」

哀が叫ぶと、船の甲板に穴が開いた。

そして、何かが出て来た。

ヌウ・・・

ズオオオオ・・・

『オオオオオン・・・』

出て来たのは、強大な魔物だった。

魔物は拳を振り上げると、飛んで来た炎の塊を殴り、粉々に破壊した。

バキヤアアア!!

ビタース

「なっ・・・（ガーディアン!!?何なのあれは!!?見た事もないタイプじゃないの!!それに・・・数あるガーディアンのどれともちがう何かを感じる・・・!!!）」

回想・・・

2章のあの時・・・

コナン『・・・何これ！？哀ちゃん！！』

哀『3つ目のマジックボールで想像して造った力！SFG・・・シエリングフォードガーゴイルよ！！ホラ、コナン君はフウちゃん持つてるし、他の人も持つてるでしょ？私もガーディアンタイプの能力欲しかったの！！』

コナン『でも・・・これ・・・スゴイよ！モノスゴい力を感じる！哀ちゃんの想像力が強すぎて生まれた、とんでもないガーディアンだよ！！この子を使い過ぎるのはスゴく危険だってば！！！特殊能力を持つ：RINGは、使うたびに術者の精神力を吸っていくの。高度で能力値の高い物ほど、比例して精神力を使う！リアンちゃんくらい魔力のある子ならともかく、今の哀ちゃんじゃこの子は危険すぎる！！ヘタをしたら・・・精神が破壊される事だってあるかもしれない！！多用は禁物だよ！！』

哀

「仇を取ってあげたい。助けてあげたい。倒したい！！今は使って良い時よね。コナン君！」

ダイ

「（1つ目はハンマー・・・たいした想像力ではないと思ったけど・・・これは素晴らしい。素晴らしいよシェリー。もっと見せておくれ・・・）」

ビターズ

「くー！！ゼクトー！！こっちに来なさいアンタ！！どうして返事しないのよーっ！！？」

そう叫ぶビターズの前に、ガーゴイルが迫って来た。

ズン！

ビターズ

「ハッ！！ナ・・・ナメんじゃないわよーっ！！」

ビターズは苦し紛れのフレアドアースを放ったが、ガーゴイルは羽で炎弾を防いだ。

ボン、ボン、ボン！

『グルル・・・』

ビターズ

「み、見逃してよ！助けて！もう殺しはしないから・・・さ。」

哀

「同じ事を言ったディストリアの人達に・・・あなたは何をした？」

ビターズ

「ア・・・アハハ・・・」

哀

「ブッ飛んで反省しなさい！！！」

ガーゴイルは鉄拳で、ビターズを吹っ飛ばした。

ドガァ！！

ビターズ

「キャアアアア!!」

ビターズは吹っ飛ばされ、湖に落っこちた。

バシャアアン!!

『助けて・・・船を・・・壁に穴を・・・』

哀

「わかったわかった!今度はあなた達の番ね!」

ドン・・・

ダイ

「(今まで彷徨っただけだった霊達が、皆助けを求め始めた。それは、その人物なら助けてくれるであろうという霊なりの6感なのか・・・)」

哀『私、灰原哀!この子は私の:RING・イズナ!一緒にペンデュラムを倒すの!!私は明美を超えるの!』

ザ・・・

『今・・・どこにおられるのですか?ほとんどの者達が城に集まりつつあります。どうぞお帰りください。ダゴン・・・』

ダイ『ダゴン』もう少し時間をくれ。今・・・とても気分が良いんだよ、スレイプ。』

哀

「いきなさい！ガーゴイル！！」

ガーゴイルは壁に殴りかかったが、なかなか碎けない。

ガッ、ガッ・・・

哀

「相当分厚いわね、これは！仕方ないわ！！アレ出すわよ！！」

ビッ！

ガーゴイルが口を開けると、くわえていたリングが放たれた。

ガパ！

ダゴン『（ハハ・・・次は何を見せてくれるんだい？シェリー！！）

』

哀

「シェリングガーゴイルレイ！！！！」

哀が叫ぶと、リングが光り出し、強大な光線が放たれた。

ドン！！

ガーゴイルの攻撃により、壁は一瞬にして碎け散った。

哀

「もついいわ、イズナ！」

ガーゴイルはイズナの姿に戻った。

ウン・・・

イズナ

「哀ちゃんーっ!!」

哀

「任務・・・完了! 疲れた。」

ダゴンは、哀とイズナに気づかれないように去って行った。

イズナ

「このバカ娘ーっ!! 力使い過ぎよーっ!!」

哀

「あー、あー。今は説教聞きたくないーっ。」

そんな2人の前に、霊達の長と思われる女性が現れた。

カアア・・・

『ありがとう・・・これでここに閉じ込められていた私達も・・・海へ・・・そして天にのぼる事ができます。』

哀

「アハハッ。良いつて事よ! 良かった・・・」

パタ・・・

哀は気絶した。

イズナ

「哀ちゃんーっ!!」

『せめてものお礼に、：RINGを差し上げましょう。あなたの力になりますよう・・・』

玲子に敗れたゼクトは、逃げていた。

ゼクト

「ハアー、ハアー。ゼクト帰る・・・みんなに助けてもらっ・・・」

そんな彼の前に、誰かが現れた。

ザ・・・

ゼクト

「だ、誰！？さっきのヤツの仲間！？許して!!もうゼクト戦えない!!」

ダゴン『何て情けない弱虫の目なんだろう。ペンデュラムアッドとして、あまりにその姿は許し難いね。』

ゼクト

「あれ？オマエ・・・」

ピシ・・・

ゼクト

「ダ。」

ズバッ！！

ダゴンと言い切る前に、ダゴンはゼクトをバラバラに斬り刻んだ。

ダゴン『少しはシェリーを見習いなよ。来世でね。』

しばらくして、哀が目を覚ました。

哀

「ん・・・」

松葉

「あ、起きた！」

玲子

「よし、あなたも1人倒したみたいね！」

哀

「ここ、どこ？」

玲子

「入り口の真ん前！アタシがここまで背負って来たのよ！」

哀の手の中に、マジックボールとカギが乗っていた。

哀

「マジックボールと、カギ？」

イズナ

「あの幽霊達が落としていったわ！くれると言ってた。」

哀

「松葉ちゃん、このカギ何だかわかる？」

松葉

「：RINGと思うけどわからへん。さっきも少し触ってみたけど、能力発動もしないんや。多分、特別な・・・」

松葉がそう言いながら哀を見ると、また寝ていた。

松葉

「ありや・・・」

哀達はその後、コナン達と合流した。

そして海の向こうに、脱出した船が浮かんでいた。

『ありがとう・・・小さき女勇者・・・！』

成長した哀とイズナ・・・

次回、敵からの宣告が来る！！

ファイル560：月夜の宣戦布告、託された戦い！！

グビグビ・・・

イズナ

「プハアーツ！もつと酒ーっ！！」

イズナは酔っていた。

イズナ

「あなたも飲みなさい哀ちゃん！レディーでもお酒をたしなむのは自由・・・あら？どうしてあなた3人もいるの？」

哀

「あーうつとーしい！」

今ディストリアでは、宴が行われている。

「久々にみんな笑顔を見せている。1度は自ら死ぬ事すら考えていた我等が、生きる勇気を取り戻した！このたくさんの作物！東宮さんが与えてくれた！」

康太郎

「アハハ！大した事ないですよ！」

哀

「大した事ない事ないでしょ、東宮君！あれはいくら何でも育ちすぎじゃないの？」

そう言う哀の眼前には、もっさりと育った作物があった。

康太郎

「た、確かに・・・自分でも驚いてるんですけどね。魔力が上がった事にプラスして、鷲之宮からもらった地のネイチャーのマジックボール！かなりボク成長したみたいだね。」

「そして・・・1人1人ケガ人を直し、元気をコナン君が与えてくれた！」

クプクプクプ・・・

コナン

「プハア。このジュースもつと欲ちいーっ!!」

コナン、イズナ化。

「それに地底湖に入りペンデュラムを倒してくれた3人！ヤツらに殺された者達も浮かばれましょう！」

「特に哀ちゃん！あなたには勇気を与えてもらった！」

「あなたのような女の子がペンデュラムと戦いがんばっている！」

「大人のオレ達がくすぶってんのは情けねえよな!!」

「デイストリアは復興しますよ。あなた方に与えられた力で、させてみせる!!」

玲子

「！哀ちゃん！月を見て！」

哀

「ん？月が何・・・。！！！」

哀が空を見上げると、月が鏡のようになっていた。

その月に、1人の男の姿が映った。

ブン・・・

スレイプニル『世界全土に存在する・・・我等ペンデュラムアッドに敵意を抱く、全ての者達に告ぐ・・・！！再び組織対戦を始めようではないか！！』

ユーリ

「やはり・・・そうきたか！！！」

スレイプニル『場所はユーラシア大陸中央部に位置するデイルゼイヴ城！！既に我等手中に落ちたこの城に我等との戦いを望む者は集え！！8年前の恨み、我等は忘れてはいない！！1人として集まらぬその時は、我等で世界全土を焦土と化す！！楽しませてくれる人間の参加を待っているぞ！！特に！！ダゴンの：RINGでありながらペンデュラムを裏切ったイズナ！！そしてそれを持つ少女！！開戦は明後日、正午！！待っているぞ！！フハハハハハハハ！！』

フ・・・

コナン

「酔いもいつぺんで冷めちゃった。行こう、哀ちゃん！！ディールゼイヴへ！！」

康太郎

「そうだ！ディストリアみたいな所をこれ以上増やさないため・・・っていうか、この前までただの高校生だったボクにできるのかな？」

ユーリ

「姿無き亡霊の影響でFBIの人数が減っている今、何人集えるかは期待できないが・・・行くしかない！！」

玲子

「FBIなんかいなくて良いわよ。アタシがいるからね。」

松葉

「雰囲氣的に、おりられへんって感じ？（それに、気になる事もあるしな・・・）」

「哀ちゃん！我等は壊された村を全力で直す！！」

「託してよいか！？この世界の命運を！！」

「情けないのはわかってているが、我等に力はない。しかしペンデュラムと戦う力のあるあなた方ならば、世界全土に勇気を、希望を与えられる！！託されてくれますか、組織対戦を！！？」

「そして勝利して、またここへ・・・復興したディストリアにいらしてくださいね。」

哀

「任せて!!」

ついに宣戦布告してきたペンデュラム・・・

哀達は決戦の地へと向かう事に!

果たして、哀達を待ち受けるのは・・・?

次回、予選のテスト開始!!

ファイル561：血塗られた予選テスト！！

8年前、『ペンデュラムアッド』を名乗る集団が第1次組織対戦を行う。

世界の約半数にのぼる国を破壊した後、彼等は『組織対戦』なる“遊び”を民衆に投げかける。

それは世界の命運をかけて戦う『バトル』であった。

結果は明美率いるFBIが敵将ダゴンを討ち、世界は平和を手にしたのだった。

しかし今、復活した彼等は全く同じやり方で再び戦争を巻き起こしたのだ！！

ディールゼイヴ城

「もうじき正午だな。」

「ああ、誰も来ねえ・・・」

「オレ達のこの城も壊されるのかなあ・・・」

「っていうか、世界全部が壊されるさ・・・」

「！おいつ、見ろっ！！」

白野兵士達が入口を見ると、瑛祐や秀一達が入って来た。

「FBI!!」

「それに・・・見ろ!! 『黒き戦士』 黒澤陣!!」

ズン・・・

「前回の組織対戦での強敵!？」

「最後のゲームで、FBIを苦しめた方だ!」

「今回は味方として来てくれた!!」

それからしばらくして、哀達も着いた。

哀

「うわー、大きい城ねこりゃー!!」

コナン

「セーフっぱいね!」

玲子

「前にここにも来た事があってね! ワープゲートの範囲だったの!」

ユリ

「どこにでも行くんだな、君は・・・」

松葉

「で? ペンデュラムはどこやねん・・・」

哀

「瑛祐君！久しぶり！」

瑛祐

「あ、ああ。（哀ちゃん！？この魔力・・・まるで別人じゃないか！？）」

秀一

「正午だ・・・」

ゴーン、ゴーン、ゴーン・・・

「お集まりいただいた皆様、ようこそデイルゼイヴへ・・・心より歓迎致します。」

「姫・・・！！」

哀

「姫？」

「あの方は、我々デイルゼイヴの姫君なのだ・・・」

哀

「（どうして、お姫様が・・・？）」

「今より、組織対戦を開催致します。その前に、このゲームをするに相応しき者がテストを行います。参加希望者は、その台座に置かれているマジックボールを手にとってください。」

哀達は、マジックボールを手にとった。

「テスト、開始・・・」

カアッ！

哀

「!？」

康太郎

「急に真っ暗になった!!っていつかみんなどこ!？」

松葉

「あのボール、ディメンションやな。1人1人を個別に、異空間へと跳ね飛ばした!!」

ブン・・・

秀一

「ただのポーン兵か。これでテストとは、随分ナメられたものだ。」

哀

「ハアッ!!」

哀はポーン兵を殴り飛ばした。

ドガア!!

その瞬間、哀は元の場所に戻った。

それと同時に、他の人達も戻って来た。

哀

「あ！」

康太郎

「楽勝ーっ。」

コナン

「みんな大丈夫？」

玲子

「あの程度、準備運動にもならないわ！」

哀

「ん？どうしたの瑛祐君？」

瑛祐

「ユーリさん以外のFBIが1人も帰って来ない……」

秀一

「ジンまでが……！！！」

ブン、ブン……

哀

「何よ、帰って来たじゃない！」

秀一

「あ、ああ。」

一安心した秀一と瑛祐だったが、次の瞬間愕然とした。

そこには、他のFBIの無惨な亡骸が転がっていたのだ。

瑛祐

「みんな・・・！！」

ザ・・・

カミュ『ペンデュラムアッドの試合進行役』

「フフフ・・・全つ部死体です。今回のFBIは1部を除き不作でしたね。ポーンにも劣るカスばかりでした。」

秀一

「くっ・・・ジンはどこだ！？アイツがポーンに負けるなど、ありえない！！」

カミュ

「フフフ。誰がポーンだけと言いましたかね？マジックボールの中に1つだけ『ハズレ』がありましたね。運の悪い方が1人、それがその方であつたのでしょうか。」

コオオオオ・・・

トード『ペンデュラムアッド第8の輩』・・・

「秀一・・・」

ブン！

秀一

「ジン!!」

ヨロ・・・

ジン

「不覚だった・・・!!よもや・・・このオレがゲーム前に失格とは・・・!!」

哀

「まだ生きてる!!コナン君!!」

コナン

「うん!!」

カミユ

「さすがは元黒の組織構成員のジン。負けたとはいえ、悪魔のトー
ドを相手に命が残っているのですから。とりあえず誉めます。さて・
・合格者は・・・」

灰原哀

江戸川コナン

東宮康太郎

赤井秀一

本堂瑛祐

桜野松葉

ユウリ・ハートネス

青井玲子

カミユ

「この8人！イズナも入れると9人ですか！」

ちなみに伊澄達は別の準備のために1度帰っている。

カミュ

「少ない・・・少ないですね。前回のFBIは50人以上いましたか？それに皆女子供ばかり！これではダゴンも楽しめないでしょうなあ。」

哀

「楽しませるところか、ビビらせてやるわよ！！早くゲーム始めようじゃない！！！」

カミュ

「まあそうカッかならず。今日はあくまでも予選。組織対戦は明日より行うのです。今日1日だけは・・・命ある幸運をありがたく思いお休みください・・・」

そう言うと、カミュとトードは消えた。

ブン・・・

康太郎

「たったの8人・・・？ボク達だけで組織対戦・・・？ハッキリ言っ
て、ビビってるよ・・・」

「皆様は、こちらでお休みください。」

玲子

「ねえ、あなたこの城の姫でしょ？どうして組織対戦の前口上なんてしてたの？」

「民のためです。言う事を聞かねば、外にいる者達の命も危ういでしょう・・・彼等を守るため、私は何でもするつもりです。1国の姫なのですから。」

ダゴン「・・・そうか。8人が・・・その中に、シェリーはいるんだよね？」

スレイプニル「はい。」

ダゴン「じゃあ問題ないんじゃない？きっと充分楽しませてくれるハズさ。楽しみにしている者も、たくさんいるだろうからね・・・」

ビターズ

「ブツ殺してやる！！ブツ殺してやる！！イズナを持つてるあの小娘・・・！！今度はアタシの本当の力でブツ殺してやる！！！！」

瑛美

「・・・」

組織対戦を託されたのは、たったの8人だけ・・・！！

次回、いよいよ1STバトル開始！！

ファイル562：組織対戦、開始

カミュ

「昨夜は良く眠れましたか、皆さん？では、これより組織対戦のルールを説明いたします。バトルはチーム戦！人数はバトルごとにダイス1個または2個の目によって変わります。この時、戦うワールドもダイスにより決定します。えーと、あなたお名前は？」

カミュは康太郎を指差した。

康太郎

「あ、東宮康太郎です！」

カミュ

「たとえば・・・」

カミュは紙を見せた。

×ペンデュラム1 - 哀

×ペンデュラム2 - コナン

ペンデュラム3 - 康太郎×

カミュ

「この図のように、東宮さんが個人で負けていてもチームとして勝利していれば、東宮さんは次のバトルにも参加できます。死んでなければね。反対にチームは負けてもペンデュラム3は個人で勝利しているのです、やはり次のバトルにも参加できます。」

哀

「えーと・・・どういうルールなの、玲子さん？」

玲子

「あなたの頭はスッカラカンか!!」

松葉

「つまりチームとして勝てばええっちゅう事やな。万一負けたとしても、個人で勝った人間には次がある！」

コナン

「最終的には、強い人間だけが残っていくゲームなんだね。」

秀一

「ルールは前回と同じようだな。とすると、キャプテンを決める事が必要か？」

カミユ

「左様。あなた方8人の中で1人、キャプテンを選んでいただきます。」

ペンデュラム1 - 康太郎×

×ペンデュラム2 - 玲子

×ペンデュラム3 - 松葉

カミユ

「チームが勝利してもキャプテンが負けた場合、例外としてゲームは終了です。前はFBIのキャプテンが『宮野明美』・・・我等ペンデュラムは悪魔第1の輩『ダゴン』でしたね。さあ、誰を選びます？」

全員の視線が、哀に注がれた。

哀

「わ・・・私!？」

秀一

「本当は、オレが瑛祐君かりアン君にしておきたいが、リアン君は今来ていない。それに君は、『あの子の妹』だ。賭けてみたい、君に。」

哀

「世界の命運が、私に・・・」

瑛祐

「不安でいっぱいだけどな。ゲン担ぎってヤツだね。」

哀

「だったらアンタ達2人の内のどちらかがなりなさいよ!バカ!!」

カミュ

「それではそろそろ良いでしょう・・・組織対戦・・・開始!!」

ディールゼイヴの姫が、2個のダイスを投げた。

カッソ!

3 1

カミュ

「人数3VS3!!場所はこの地、ディールゼイヴフィールド!!」

巨大なチェス盤のような物が落ちて来た。

ドカン！！

玲子

「へーっ、こんなん仕掛けてたの。ご苦労な事ね！」

カミュ

「出でよ！ペンデュラム第1のチーム！！ウエスティンファミリー！！！！」

カミュが叫ぶと、2人の男と1人の女が現れた。

ドン！！

その中の2人に、コナンと哀は見覚えがあった。

哀

「西沢歩ちゃんと弟の一樹君！？」

コナン

「戦いの後逃げたってヒナギクさんが言ってたけど、まさかこんなトコにいたとはね・・・」

一樹

「ハッ、本当に8人だけだな。」

歩

「楽勝っぽい感じ！ね、オジー！」

「・・・」

カミュ

「そちらの3人をお決めください！」

哀達はジャンケンし合い、結果灰原哀・東宮康太郎・赤井秀一の3人に決まった。

西沢一樹「データ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク」

「女の子は1人出たか。できればあの子と戦いたいな。」

赤井秀一

『FBI捜査官』

「まずオレが出よう。これが実戦だというものを見せてやる。」

カミュ

「第1試合、開始！！」

一樹

「言うねえ、色男！！」

ドンッ！！

秀一

「ガーディアン：RING・14トーテムポール！ロッドバージョ
ン！！」

ガッ！

秀一と一樹はぶつかり合った。

「ど、どっちが有利に見える？」

「互角・・・？」

ジン

「あれはまだ本気ではない。秀一は・・・オレが今まで戦ったヤツの中で一番の手練れだ！！」

ダゴン『ヘエ・・・随分大きくなったねあの子。8年も経ったんだもんね・・・懐かしいな。あの服じゃわからないけど、彼にプレゼントした呪いは進行中かな？ボクに会いに来てくれたんだよね？秀一君。』

ダゴンが秀一にプレゼントした呪いとは何か？

次回、秀一の力が・・・

ファイル563：赤井秀一VSデイト

8年前・・・

秀一『止める！！これ以上オレの仲間を殺すな！！』

ダゴン『良い目をしている。勇気ある君に、良いプレゼントを贈ろう。』

ユーリ『止める、ダゴン！！シユウは組織対戦に関係ねえ！！』

ダゴン『これはボクが君を気に入った証だよ。受け取ってまたいつかおいで。不死の絆！！』

ドンッ！！

ダゴン『その印が体中^{シルシ}に回りきったその時、君はボクと同類、生ける屍となる。友達になるうよ、秀一君。』

一樹

「ネイチャー：RINGフリースボール！！喰らって冷えくされ！！」

ヒュゴッ！

一樹が氷の弾を複数発放った。

秀一はそれを全て避ける。

秀一

「選択権を与えようか。“苦痛を受ける敗北”と、“苦痛を受けない敗北”のどちらを選ぶ？」

一樹

「あん？その選択肢の中には、“テメエが死ぬ”ってのではないのかい？」

秀一

「殺しはしない。オマエ達と同じになるのはイヤだし、オレの狙っているのはただ1人だからね。」

歩

「ちょっとオジー！アイツ、アタシら眼中にないみたいな事言ってる！！ムカツくよねーっ！！」

「・・・下がれ一樹・・・相手が悪い。」

一樹

「アホな事言ってんなオジー！！冷氣よ！刃にまとわれ！！」

秀一

「苦痛を受ける敗北の方がお気に入りだようだ。」

秀一がそう言うのと同時に、トーマボールが一樹を突き上げた。

ドンー！！

一樹

「ゴフツ・・・」

ズシャ！！

カミュ

「勝負あり！！FBI、赤井秀一の勝ち！！」

哀

「い・・・一撃で・・・」

一樹

「ぐっ・・・」

歩

「下がってなさい、カズ！次はアタシの出番！！姉ちゃんが仇とつたる！！」

降りて来た一樹に代わり、歩がステージに上がった。

哀

「よし！！私が相手を・・・」

康太郎

「ちよっ、ちよっと待って哀さん！！ここは1つ、ボクに任せてくれませんか？」

哀

「あら、やる気満々ね！良いわよ？」

康太郎が代わりを買って出たのは、言わずもがな・・・

ゴゴゴゴゴ...

康太郎

「（あんなのとやれねーつつのー!!）」

カミユ

「第2試合!!」

「あの、お嬢ちゃん。あの子は・・・？ただの高校生にしか見えませんが強いんですか？」

松葉

「んにゃ？強い。」

歩「ミモザ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク

「さーで、どうやって苦しめちゃおうかな？」

康太郎

『アル メンバー』

「・・・」

松葉

「そやけどアタシらの中じゃ一番弱い。」

「（強いけど弱い!?!）」

「（どつちだ！？）」

果たして、康太郎は勝てるのか！？

次回、康太郎・男の戦い！！

ファイル564：東宮康太郎VSミモザ

カミュ

「第2試合・・・開始!!」

歩

「何かあなた弱っちそうね。さっきの人と比べて全然パツとしない。」

康太郎

「な、何を・・・ボクの力見せてやる!!ネイチャー：RING・自然のスコップ!!」

ズン!!

哀

「東宮君!!来るわよ!!」

歩は木刀を変化させて殴りかかって来た。

ゴッ!!

歩

「妖木刀・影炎斬!!シャドーボールハンマー影球体金槌!!」

ガガガガ!!

康太郎

「うぐ!!」

歩

「意外にかわすね！でも・・・これならどうかな？」

ガチ・・・

先端のボールが外れた。

歩

「ドオンッ！！」

ブンッ！！

ドカツ！！

康太郎

「がっ・・・」

歩

「この術はボールを着脱できるの。しかも動く相手を追尾する。もうお終いでしょ？」

秀一

「戦力外だな。殺される前にギブアップした方が良い。」

哀

「そんな事ない！あの子だってこの2日間がんばって修業してたわ！！今度戦力外なんて言ったら、ブツ飛ばすわよ！」

康太郎は体制を整えると、何かのタネをまいた。

パラパラ・・・

歩

「？」

康太郎

「育てっ！ビーンズウィップ！」

康太郎がスコップを叩きつけると、ツルのような物が歩に襲いかかった。

ギュルル・・・

歩

「なっ！！！」

ツルが歩を絡め取った。

ニユル・・・

歩

「キャ・・・！！！」

康太郎

「動きは封じさせてもらったよ！！さーて、トドメを刺すよ！」

康太郎は歩に近づいた。

歩

「く・・・負けてたまるかーっ!!」

歩が叫んだその時、康太郎のアソコにボールが直撃した・・・

ゴン!!

パタ・・・

カミユ

「ダウン!!勝者、ペンデュラムアッド・ミモザ!!」

ユーリ

「これで1VS1になったな!次の哀ちゃんが決まる・・・」

松葉

「・・・」

呆れてものも言えない。

カミユ

「どのみち哀はキャプテン。哀の負けはあなた方の負けとなるのです!大將戦!!ペンデュラムアッド・ジエネヴァ!!」

西沢王牙!!ジエネヴァ

『ペンデュラムアッド構成員

!!クラス!!

ビショップ』

「ム・・・」

カミユ

「FBI・灰原哀!!」

哀

『アル メンバー

キャプテン』

「私は『アル』よ!!間違えないであなた!!さーて、一発気合い入れますか!!」

康太郎は後少しの所でダウン・・・

果たして、哀の運命は!?

次回、大将戦開始!!

ファイル565：灰原哀VSジェネヴァ『1』

スレイプニル『出て来ましたね。灰原哀……ですか。』

ダゴン『うん。』

スレイプニル『私はこの少女を1度見かけますが、正直なぜあなたがそこまで興味を抱くのか解せません。』

ダゴン『面白い……創造力を持っているんだ。それに、宮野明美に似ている。』

カミュ

「1STバトル最終戦！開始！！」

「おい……あの娘は確かキャプテンだよな？」

「そうさ、つまり……あの哀という少女に世界がかかっているんだ！」

「うわーん、どうしようっ。」

コナン

「応援するのだ！！」

「頑張れ哀ーっ！！」

「負けんなよチックショー!!」

哀

「ウフフ、気分良いわねー。」

イズナ

「そんな余裕あるの、哀ちゃん!あのジェネヴァという男・・・あなたの倍は大きいわよ!!」

ズン・・・

王牙

「灰原哀・・・と言ったな?正直、オマエには同情を禁じ得ない。8人だけのチーム!そしてオマエのような娘がキャプテン!そのプレッシャーは相当だろう。さらに・・・相手が私であるのだからな来い。」

王牙は手招きした。

コナン

「頑張れーっ、哀ちゃんーっ!!」

哀

「イズナ。」

イズナ

「うん。」

哀

「バージョニー!大きいからってビビってないわよーっ!!」

哀は王牙に突っ込んだ。

哀

「ハアッ!!」

ゴッ!!

哀は一気に先制攻撃を仕掛けた。

ガガガガ!!

王牙

「女にしては良い拳だ。良い6感も感じる。だが・・・効かぬ。」

王牙はそう言うと、哀を殴り飛ばした。

ゴッ!!

哀

「ぐっ・・・き、効いた・・・」

王牙

「見よ。左手に身体硬質化タイプのネイチャー：RING5つ!右手には腕力向上型のネイチャー：RINGが5つだ!」

康太郎

「あんなにいっぱいって、ズルくないか・・・?」

瑛祐

「ズルくないんだよ、一応・・・（10もの：RINGを同時発動させられる精神力・・・あの男、ビシヨップの中でも上のヤツか！）」

秀一

「（どうする、哀君？オレ達を信用させる戦いを見せてくれ。）」

哀

「まだまだ！おじさん！！これならどう！？」

ジャキツ！！

哀

「シャボンガトリンガー！！」

哀は泡爆弾を連射した。

ドン！！

ドカドカドカドカ！！

ヒヨオオオオオ・・・

王牙

「少し、痛かったな。」

哀

「ゲ！！マジ！！！？」

王牙は哀に突っ込むと、哀を殴り地面に叩きつけた。

バキ！！

ユリ

「敵ながら、強い！！」

王牙

「この試合で組織対戦は終わる。ダゴンが出る必要もなくな・・・」

そう言つて、王牙は行こうとした。

哀

「待ちなさいよ、おじさん。」

王牙

「！」

哀

「まだ私、死んでないわよ。」

自分より倍も大きい男に対し、哀の反撃はいかに・・・？

次回、決着！！

ファイル566：灰原哀VSジエネヴァ『2』

王牙

「良い度胸をしている。楽には死ねぬぞ、哀!」

哀は集中力を高め始めた。

ス・・・

王牙

「（魔力の波長が変わった・・・!!何か別の手が来る・・・!!）
」

「おい・・・哀、やる気あるのか？」

「わからん・・・」

秀一

「（何だ？何をする気だ哀君・・・!!）」

玲子

「気づいてる？松葉ちゃん。」

松葉

「当然。あちこちにウジャウジャ！ペンデュラムの連中が哀ちゃんを見ている。見定めている。アタシらのキャプテンの力量・・・これから使うであろう力を!!」

玲子

「アタシも興味あるわ。哀ちゃんがどんな力を使って地底湖のヤツを倒したのかをね。」

コナン

「（使う気だね、哀ちゃん・・・!）」

哀

「いくわよ。おじさん!!バージョン3!!」

オウツ・・・

哀

「シェリングフォードガーゴイル!!!!」

『オオオオオン!!!!』

グオツ・・・

王牙

「ガーディアン：RINGがあっ!!その力もはねのけてくれよう!!!!」

王牙はガーゴイルの拳を受け止めようとした。

しかし・・・

ドゴン!!

王牙

「うぐっ・・・（こゝこれは・・・）」

松葉

「何・・・あれ・・・！！アタシでも見た事がないガーディアン！
！それに・・・あの吹き上がる魔力は何やの！？」

秀一

「とんでもない隠し技だな・・・（１０もの：RINGを使う男と、
化け物じみたガーディアン使い！ここから先は精神力の戦いだ！！）」

「

歩

「オ・・・オジー！！」

哀

「あなた達は、楽しむためだけにたくさんの人を殺す！それが許せるかーっ！！」

哀の叫びと同時に、ガーゴイルが王牙を押し返した。

その時、１０個の：RINGが割れた。

パキン！！

王牙

「（冗談じゃない！こっちは１０の：RINGをコントロールして
たんだぞ・・・！？）」

ガーゴイルは王牙を殴り飛ばした。

ドガァ！！

王牙

「ぬぐっ・・・おふっ・・・おぶっ・・・」

ガーゴイルが追撃しようとしたその時、歩が前に立ち塞がった。

ザッ！

王牙

「歩・・・」

歩

「オジの負けで良いから、助けて！アタシ達にとっては大事な叔父なんだ！！」

哀はそれに応じ、イズナを元に戻した。

ウン・・・

カミュ

「1STバトル終了！！哀の勝ちによりアルの勝利！！」

哀、見事逆転勝利！！

次回、ペンデュラムアッドが哀に注目！？

ファイル567：ダゴンに注目された哀！！

カミュ

「1STバトル勝利おめでとうございます。明日の2NDバトルに備えてください。明日のバトルも3VS3！場所は砂漠フィールドにてとり行います。良い夢を・・・」

その夜

ペンデュラム城

スレイプニル「正直、あれほどの力をこの短期間で身につけるとは
思いませんでしたよ。先程も『哀と戦いたい』という者が何人も申
し入れをして来ました。ドレイク！トード！イフリート！ビターズ
エトセトラ
！ETC・・・」

ダゴン「ドレイクやトードまで？そりゃスゴイ！！ナイト級にまで
興味を与えちゃったか、哀は！でもまだダメだよ。ゲームはすぐ終
わっちゃつまらないよね。育てて育てて・・・熟しきってから・・・
食べるんだ。」

その時、女の声が聞こえた。

「ダゴン・・・話がある。ちょっと良い？」

ダゴン「えーと・・・君は確か、本堂瑛美。キュラソー・・・だっ
け？戦争幕開け前の時、1人で勝手な行動をして哀と戦って・・・

負けて、大事な者を・・・壊されちゃった人。』

瑛美

「一番過酷な試練の扉の：RINGをちょうだい。アタシは修業をし直す。」

スレイプニル『本当に一番強烈なヤツで良いのか？死ぬぞ、オマエ。』

瑛美

「・・・あんな物見せられちゃったら・・・アタシもやるっきゃないっしょ。アタシはナイト級まではい上がる。哀を殺す。そして、海斗をあんな姿にしたヤツも殺す。」

翌日

カミユの前に、コナン・松葉・玲子が進み出ていた。

カミユ

「さて・・・本日の組織対戦のメンバーはこの3人ですか！昨日とは全くちがうメンバーですね。結構結構」

秀一

「なぜオレが入っていない!？」

玲子

「シュウちゃん昨日思いつきり暴れたじゃない！！今日はアタシ達に暴れさせて！！」

秀一

「誰がシュウちゃんだ！！」

瑛祐

「まあまあ、赤井さん。結局、哀ちゃんと康太郎君は帰って来なかったな。今頃どこで何をしてるんだ？」

松葉

「あの2人の事やから、どうかで修業でもしてるんやろ！安心せえて！！」

コナン

「そつ。今日はボク達に任せて！！そういえば、刃・・・リアンちゃんはまだ来ないの？」

ユーリ

「最近寝不足で、ずっと爆睡してるらしい・・・」

コナン

「・・・」

カミユ

「それではあなた方を本日の舞台へお連れします。用意は良いですね？」

3人は頷いた。

カミュ

「ワープゲート！！砂漠フィールドへ！！」

ウンー！！

トッ！

コナン

「わっ・・・」

組織対戦2NDステージ 砂漠フィールド

玲子

「うわっ！広いわねーっ！ここで戦うのね！？」

松葉

「暴れ甲斐があるやない」

「3人共どっか行っちゃったぞ！？」

「これじゃ戦況がわからねえ！！」

「イヤ、見るあれ！！」

ボウ・・・

球体のような物に、コナン達の姿が映った。

「おお！あれで見れるってか！！」

「意外と親切だなペンデュラム！！」

「ペンデュラムなんか誉めるなバカ！！」

カミュ

「出でよ、ペンデュラムアッド！！」

カミュが叫ぶと、3人の男女が砂から現れた。

ボツ！！

カミュ

「サンブーカ！！シャルトリューズ！！スーズ！！」

玲子

「よし出て来たわ！！まずはアタシが・・・」

コナン

「ちよつと待って！！」

ズテッ！

コナン

「ボク、行くよっ！！よっしゃーっ！！」

コナンは走って行った。

玲子

「（独特の世界観を持った子ね・・・さ、逆らえない・・・）」

スーズ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「アタシから行くよ。」

ザッ！

コナン

『アル メンバー』

「（がんばるからねっ、哀ちゃん!!）」

ダゴン『出て来ましたね、コナン・・・戦いを仕掛けてくるとは・・・
・どんな気分ですか？クイーン』

????? ??????

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

クイーン』

「最高ね。私が会いたかった人間・・・私に会いたがっている人間・・・
・今回の組織対戦ね・・・ダゴン。面白い事になりそうだね。」

この女の正体は、一体・・・？

次回、コナンの初陣!!

ファイル568：戦う男の子、コナン！！』1』

カミュ

「2NDゲーム1戦目！！始め！！」

スーズ

「あなたでしょ？少年探偵団のエース、江戸川コナンっていうのは。」

コナン

「そだよっ。何か文句ある！？」

スーズ

「話に聞いてた通り元気が良いね。あなたと戦えるなんて光栄よ。遠慮なくやらせてもらいますか。」

ジャラ・・・

スーズの周りに風が巻き起こった。

スーズ

「ネイチャー：RINGヴィンディールウ。アタシの名は風使いのスーズ！！よろしく。ウィンディカッター！！」

スーズは風のかまいたちを放った。

ドン！！

コナン

「よっ、ハッ。」

コナンは風をかわすと、手を握った。

コナン

「ネイチャー：RING・・・フレアドアース!!」

コナンの手から炎の塊が放たれた。

ボッ!!

オオオオオ・・・

スーズ

「トルネード。」

スーズは風で炎を止めた。

バキィ!!

玲子

「ヘエッ。コナン君案外やるじゃない?」

松葉

「炎使いね。」

コナンとスーズはぶつかり合う。

サンブーカ

「どう見えますか? シャルト。」

シャルトリューズ

「強い意思を感じます。あの時とはまるで別人のよう。あの子が変わった原因は、あの存在・・・シェリー。彼女もまた、別人のようになっただけだね。」

サンブーカ

「しかしこの砂漠フィールドでは彼は不利・・・スーズは風使い、戦略はいくらでもありますからね。」

哀「あのね、新一君。明日から組織対戦始まるって時にこんな事言うのも何だけど、あなた・・・出なくても良いのよ。死ぬかもしれない戦いだし・・・」

パン！

コナン「良い？志保ちゃん。次そのセリフ言ったら釜茹でにしちゃうぞ」

コナン

「ボクだって、できる・・・」

スーズ

「そろそろ終わりにしましょう！！コナン君！！ウィンディカット
！！！！」

風が砂を巻き上げ、壁のようになった。

ゴオオオオオ！！

コナン

「（砂の・・・壁！！どこから来るか・・・わからない！！）」

コナンがとまどっていると、壁からスーズが飛び出して来た。

ボツ！！

コナン

「！！」

スーズ

「お休みの時間よ。コナン君・・・」

スーズはコナンのお腹に鉄拳をブチ込んだ。

ドカツ！！

「ああっ！？」

「まともに入った！！」

秀一

「（新一君・・・！！）」

哀『そこまで言うのなら良いよ！ただしどんな時も約束して！諦めないでよー！！』

コナン

「・・・フウちゃんっ・・・」

コナンは炎のダルマを出すと、その手に乗った。

ドンッ！！

ポスッ・・・

コナン

「まだ寝ないよ、スーズ！！諦めない！！」

コナンの初陣、勝利となるか！？

次回、決着！！

ファイル569：戦う男の子、コナン！！『2』

ザッ・・・

スーズ

「見事ねコナン君！！でも次で終わりよ！！ネイチャー：RING
ヴィンディールウ！！トルネード・・・トルネード。トルネード、
トルネード。トルネード！！」

スーズの周りに、5つもの竜巻が発生した。

ゴオオオオオ・・・

玲子

「何て数の竜巻なの！？あんなの喰らったらコナン君・・・！！」

サンブーカ

「ただでは済まないでしょうねえ・・・スーズは終わりにするつもりですよ。」

スーズ

「あなたと戦える事に光栄を感じたのはウソではない。しかし・・・
最後に勝つのは私よ！！コナン！！トルネード×5（ファイズ）！！」

スーズはトルネードを放った。

ゴオオオオオ！！

風がコナンを包み込んだ。

玲子

「コナン君!!」

ヒュウウウウウ・・・

スーズ

「どこかに吹き飛ばされたか・・・砂の底に沈んだか・・・どのみちコナンは・・・」

スーズがそう言った時、風が消えた。

スーズ

「!!!何よあれは!!!?」

炎のダルマ達が、コナンを囲んでいた。

コナン

「ありがとう、フウちゃん達っ。」

松葉

「ガーディアン：RING・フレアマン。なるほど。あれに囲まれる事で竜巻を防いだ!」

コナン

「さ、て、と!!!これでフィニッシュ!!!行くよスーズ!!!」

コナンは突っ込んだ。

スーズ

「ハッ・・・（何・・・！？何が来る！！？）」

コナン

「もう1回フウちゃんっ！！！」

超巨大炎ダルマが、スーズを押しつぶした。

ドン！！

スーズ

「がっ・・・ああ・・・（あんな小さな・・・男の子に・・・！！）」

カミユ

「勝者っ・・・アル！コナン！！」

コナン

「プウ。」

サンブーカ

「ガーディアンの使い方が上手かったですね。」

シャルトリユーズ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「ただの男の子じゃないです。シャルト少しビックリしました。次はシャルト出たいです。良いですね、サンブーカ？」

シャルトリューズが進み出た。

サンブーカ

「どうぞ。あなたと戦う相手はかわいそうだ。どちらが、餌食となるのか・・・」

玲子

「アタシ。行かせてもらっわよ。理由！！アタシ、男の子大好きなの！！アハ」

松葉

「何がアハや！！」

玲子が前に出た。

カミユ

「それでは第2試合を・・・始めましょう。青井玲子VSシャルトリューズ！！」

サンブーカ

「クク・・・玲子とかいうあの娘・・・シャルトを外見で判断していると、ヒドイ事になるでしょうね・・・」

コナンは勝利したが、果たして玲子は大丈夫なのか？

次回、シャルトの技が炸裂！！

ファイル570：玲子とシャルト！呪いのワラ人形！！

カミュ

「2NDバトル！第2試合・・・始め！！」

玲子

「さーて。どこからでも来なさい、ボウヤ　ボーイズファーストよ。
お先にどうぞ。」

コナン

「え・・・」

松葉

「余裕ってヤツ？あのアホ・・・ッ。」

シャルトリューズ

「シャルトもナメられたものです。少し怒りました。1発で決めて
あげますから。」

シャルトリューズはそう言うと、背負っていたトランクを地面に降
ろした。

ドスン・・・

玲子

「お、何？オモチャでも入ってるのかしらその中に！」

ゴソゴソ・・・

シャルトリユーズ

「んー・・・これにします。呪いの7つ道具の1つ・・・リュカネスー！動きを・・・封ずー！！」

カッ！

シャルトリユーズがそう言うと、玲子の動きが止まった。

ピキーン・・・

玲子

「あら？あら・・・体が・・・動かない！！」

松葉

「あの男・・・ダークネス：RING使い！！」

シャルトリユーズ

「呪いの、ワラ人形！」

ボンー！！

シャルトリユーズ

「スパイク&ハンマー。」

シャルトリユーズは次々と武器を取り出した。

玲子

「ちよっ・・・ちよっと待って！！何する気よあなたあー！！？」

シャルトリユーズ

「ボーイズファーストですから。」

シャルトリューズはそう言うと、クギをハンマーで人形に打ち込んだ。

コンー！

玲子

「痛あーっ！！」

コナン

「松葉ちゃん！！あれ、もしかして・・・」

松葉

「ダークネスやな！呪いの：RING！！それを使うたび術者にも災いを招く：RING！！」

シャルトリューズ

「この：RING達はシャルトにとっては災いではないのです。副作用は『年齢が下がっていく』ですから。使うたびに若返っていきます。シャルト、これでも33歳です。」

コーン！

玲子

「ぐうっ・・・！！」

シャルトリューズ

「やりますね。大抵の人、2本でショック死します。スパイクは後3本。何本保つのか楽しみです。3本目。」

シャルトリューズは3本目を打った。

カーン！

玲子

「かはっ・・・」

コナン

「ギブアップして玲子さん！！本当に死んじゃうよ！？」

玲子

「そうねえ・・・ギブアップしようかなあ・・・コナン君が後で水着姿見せてくれたらね！」

コナン

「見せません！！」

コナンは叫んだ。

哀がこの光景を見ていたらどうなっていた事か。

玲子

「フフッ・・・じゃあ・・・もう少し粘るわ。」

玲子が両手を広げると、リュカネスにヒビが入った。

ピシ・・・

シャルトリューズ

「（リユカネスをホーリー：RINGじゃなくて精神力だけで破った！？信じられません！！）4本！！」

カーン！

玲子は右手をシャルトリューズに向けた。

ゴゴゴゴゴゴ・・・

ス・・・

シャルトリューズ

「（化け物・・・）5本！！」

カッ！

ドンッ！！

シャルトリューズがクギを打ち込むと同時に、ワラ人形に冷撃が落ちた。

ワラ人形はあっという間に碎けた。

玲子

「この氷をブチ当てたいのはあなたじゃない。スレイプニルとかいうアホウよ！！だから今日は・・・この辺に・・・しといてあげる・・・」

玲子は気絶した。

パタ・・・

カミュ

「勝者！！ペンデュラムアッド・シャルトリューズ！！」

シャルトリューズ

「（5本確かに打った・・・それでも生きている・・・動けないハズなのに反撃までされた。シャルトを狙えたハズなのにそれもせず・・・実力でシャルトが負けてました・・・）」

サンブーカ

「よくやりましたよ、シャルト。次は私が、アル初の死人を出しましょう。」

余裕発言のサンブーカに対し、松葉の反応は・・・？

次回、緊張の戦いが始まる！！

ファイル571：恐るべきくノ一、松葉！！『1』

松葉

『アル メンバー』

「言ってくれるなあ。アタシを誰か知らへんのかな？」

サンブーカ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「あなたなど知りませんよ。そして興味もありません。これから死ぬ者の事などね。」

松葉

「アタシが・・・死ぬ？アハッハッハッ！！アハッハッハッ！！アハッ、アハッ、アハッ・・・冗談にしては笑えへんな。」

コナン

「（笑い過ぎつてくらい笑ってたよ！！）」

カミユ

「2NDバトル最終戦、始め！！」

玲子

「松葉ちゃんか！！戦うところ見るのは初めてねえ。」

スーズ

「サンブーカなら大丈夫よね？」

シャルトリユーズ

「多分。ただ、気になる事が1つ・・・あの女・・・どこかで見たような・・・」

松葉

「まずは・・・小手調べ！アーミングー！」

ボンッ！

ガシャガシャガシャ・・・

サンブーカ

「そんな誰でも扱える様な：RING・・・私もバカにされたものだ。」

そう言うと同時に、アーミングの動きが止まった。

カキッ！

コナン

「ガーディアン動きがっ・・・止まった!!」

サンブーカ

「奇遇でしたね。私もガーディアン：RING使いなのですよ。」

サンブーカの前から、流動体の生物が現れた。

ドロドロ・・・

サンブーカ

「私のガーディアン『バキユアス』！！包み込んだ物を全て・・・破壊します。」

アーマールリングは壊れ、：RINGも割れた。

ボンッ！

パキン・・・

松葉

「ヘエ、結構レアな：RING持つとるやん。それ欲しいな。」

サンブーカ

「差上げますよ。あなたに私が倒せたならばね！行け、バキユアス！！」

ドロオオオ！！

松葉

「ガーディアン！！ブリキス！！」

松葉はブリキスを召喚した。

ドスン！

サンブーカ

「ホウ。哀のガーゴイルよりも大きい！確かにそのガーディアンなら易々と包み込む事はできないでしょうね。ただ・・・」

ブリキスがバキユアスに殴りかかった。

ドガ!!

プルン!

ニユル・・・

サンブーカ

「バキュアスは流動体!ダメージは・・・受けません。」

松葉

「フ・・・」

コナン

「松葉ちゃん・・・笑ってる・・・?」

松葉の目つきが変わった。

ス・・・

シャルトリューズ

「!!! (あの目!!! 似ている・・・? いや、まさかそんな・・・そんなハズは!!!)」

?????

「この子が私のよく知る女・・・アリスならば・・・あの青マント。力不足ねえ。」

松葉

「戻り、ブリキス!」

松葉はブリキスを戻した。

ボンッ！

サンブーカ

「おや？観念しましたか。次は・・・あなた自身を包み込んであげましょう。そして死ぬ。アル初の死者となりゲーム終了だ！！」

松葉

「ディメンション：RING・・・ジッパー！！」

ボンッ！

ジジ・・・

ジイ・・・

松葉

「ど・れ・に・し・よ・う・か・な。アンタを殺す：RING」

余裕のサンブーカに対し、松葉の次なる攻撃は・・・？

次回、松葉の非情さが明らかになる！！

ファイル572：恐るべきくノ一、松葉！！『2』

松葉

「これでもないなあ・・・これもちがう・・・ん！やっぱりコイツやな」

松葉は：RINGを取り出した。

チリーン・・・

サンブーカ

「ホウ？それは何の：RINGですか？ウェポン？ガーディアン？どのみちあなたは・・・バキュアスに包み込まれて死ぬのです！
ククク・・・包め、バキュアス！！」

ドロオオオオオ・・・

バキュアスが松葉に向かって行く。

だが、松葉は余裕の表情だ。

松葉

「出ておいで。リリ。」

松葉が一言言くと、空間に穴が開いた。

そして、今まさに松葉に飛びかかろうとしていたバキュアスに噛みついた。

そして、そのまま引きずり込んだ。

ズル・・・ン！

サンブーカ

「！！！？」

クチャ、クチャ・・・

グチュ、グチュ・・・

「何だ！？」

「何が起こってるんだ！？」

秀一

「（くノ一・・・松葉！！）」

クチャ・・・

ゴクン・・・

ペッ！

空間から何かが吐き出された。

それは、：RINGの破片だった。

サンブーカ

「！！バキュアスッ・・・私のバキュアスがつ！！！？」

松葉

「おいしかった？リリ」

松葉の声に答えるように、空間を壊しながら1匹のネコが出て来た。

バキバキバキ・・・

「なあんかドロドロしてて・・・マズいわねえ・・・」

松葉

「：RING・・・壊してもうたやない。アホネコッ、アホネコッ
！！」

松葉はネコをペシペシと叩いた。

ペシペシ！

「イタタツ・・・スマン松葉ちゃん！！食べて良いとばかり・・・」

松葉

「ま・・・いらなかったけどな、あんな趣味悪いの。」

サンブーカ

「喰った！？バキュアスを喰っただと！！？」

松葉

「ガーディアン：RING『レインキャット』。名前はリリ、お気に入りの子や。食いしん坊でなあ・・・」

サンブーカ

「ギ・・・ギブアップだ！！私はもう：RINGを持っていないんだあー！！」

カミユ

「勝者つ・・・」

松葉

「待ちや。まだ終わらせへん。」

松葉はサンブーカに近づいた。

松葉

「ゴメンな。アタシ、みんなみたいに優しくないんよ。覚えとき・・・アタシは女忍者・松葉！リリ・・・食べな。」

リリは口を大きく開けた。

グアツ・・・

サンブーカ

「え・・・」

リリはサンブーカに噛みつくと、食べ出した。

ガブ・・・

クチュ、クチュ・・・

シャルトリューズ

「サンブーカ・・・」

コナン

「ヒドイッ・・・殺す事なかったのに!!」

玲子

「それはちがうわよ、コナン君。これは戦争なの。明日はあなたが殺されるかもしれない!これは遊びじゃない。松葉ちゃんはそう言いたかったんじゃないかしら。」

ボン・・・

松葉

「あらあら。ペンデュラム初の死人になってもたな。」

遊びじゃない・・・

これは戦争なのだ・・・

次回、新たな強敵が登場!!

ファイル573：ロマネコンティと新たな希望

カミュ

「2NDゲームオーバー！！勝利、アル！！」

松葉達は、デールゼイヴ城に戻った。

ウン・・・

「スゴイツ・・・連勝だぁーっ！！」

「このチーム強いぞ！！」

「お姉ちゃん負けちゃったけどね。」

玲子

「えーい、やかましい！！」

秀一

「（桜野松葉・・・この娘が敵でなくて良かった・・・）」

松葉

「来る。」

ウン、ウン・・・

哀と康太郎が戻って来た。

哀

「疲れたあゝつ。」

康太郎

「お、鬼だよ・・・あの人・・・」

ザ・・・

秀一

「やはりオマエが2人を連れて行ってたのか。どうだった、ジン？」

ジン

「ああ。なかなか育てるのが面白いぞ、アイツら。見よ。」

ジンは2人目掛けて石を投げた。

ブンッ！！

哀はすんでのところで石を避けた。

ヒュッ！

康太郎は右手を上げ、拳で石を砕いた。

バキッ！

哀

「何すんのよ、ジン！！」

康太郎

「ギャース!!手がくっ!!」

ジン

「まあ、こんなところだ。」

秀一

「（魔力も通わせてない石の気配を読んだ!!この短時間で・・・
康太郎君はバカだが・・・）」

イズナ

「この子らバカ2人だけではない!!私だってパワーアップした
のよ!!」

コナン

「イズナちゃんも修業してたの?」

イズナ

「私はスゴイ女だから修業なんかしない!!これを見なさいコナン
君!デストリアの地底湖で見つけた、4つ目のマジックボールセ
ット!!」

イズナの左手の平に、マジックボールが入っていた。

コナン

「えーっ!?!どんな力を創造したの!?!」

イズナ

「ウッフッフッ、それはまだ秘密なのよ。」

哀

「何いばってんの。創造して造ったの私でしょうが？」

イズナ

「うるさーいつー!!」

カミユ

「2NDバトルの勝利、おめでとうございます！それでは早速ですが、明日の3RDバトルの人数とフィールドを決めさせていただきます。」

デイルゼイヴの姫が、ダイスを2個投げた。

コンッ！

5 4

カミユ

「5VS5!!氷山群フィールド!!」

哀

「氷山？」

イズナ

「それよかお酒っつ。私もう疲れたあっつ。」

「あの・・・」

1人の女が、哀達の前に現れた。

「み、見事な戦いでした・・・あ、明日はよ、よろしく願いします・・・」

康太郎

「・・・誰？」

「わ、わあつ、すみません！！名前も名乗らず出て来てしまつてスミマセン！わ、私はペンデュラムアッドのロマネコンティと申します。あ、明日のバトルに出ると思いますので、ごあいさつに・・・」

コナン

「何？ちつとも悪い人に見えないよ？」

ユリ

「ペンデュラムにもこんな子がいるんだなあ・・・」

康太郎

「えーと。」

ロマネコンティ

「そ、それでは失礼します！！」

ピューツ・・・

シャルトリューズ

「（ロマネ・・・ついに、ナイト級の人間が動いた・・・！！）」

哀

「ヘエ！コナン君と松葉ちゃんが勝ったのね！スゴイ！！」

イズナ

「で、あなたが負けたと。男の子に甘えてる場合か！」

玲子

「やかましいわ！！」

「負けたって言っても、スゲー緊張感のある戦いだっただぜ！！」

「そつだ！あの冷撃さえ当たればよ！！」

「さすがは我々メアリードのボスね！」

「さすがボス！！」

「ボス！！」

哀

「あーっ、アンタら！？」

第2章で哀達からイズナを盗もうとした人達。

「まあまあ哀君。過去は水に流そうではないか。」

哀

「それは私のセリフでしょ！！」

「しかし・・・我々もビックリしてるんですよ哀君！！我々が盗も

うとしていたイズナが・・・ペンデュラムと互角以上に戦える、：
RINGだっただなんてね！！」

「頼むわ、なんて図々しいけどな、哀。殺された人々やアタシ達メ
アリードの仇を、ボスと一緒に晴らしてやって！ボスはああ見えて、
仲間思いの良い人なんだ。殺させないでくれ。」

ユーリ

「フフ・・・懐かしいな。」

康太郎

「何がですか？ユーリさん。」

ユーリ

「8年前の組織対戦の時もな、勝った日はこうしてみんなで酒なん
ぞ酌み交わして笑っていたんだ。」

秀一

「覚えている。」

瑛祐

「あの時は明美さんがいて、色々希望を与えてくれましたよね。」

「『悪いヤツが栄えた試しはないのよ！！』とか、『アタシ達は必
ず勝つ！！』と言って、いつも励ましてくれたっけ・・・明美さん
が今いれば・・・」

哀は無言でイズナの近くに行った。

哀

「イズナ!!」

イズナ

「うにゃ？」

哀はイズナの手から酒瓶を引ったくつた。

ガッ!

イズナ

「あつ・・・バカ!!それはっ・・・」

哀はそのまま、一気に酒を飲んだ。

グーイッ!

「おおーっ、哀ーっ!!良い飲みっぷりじゃねーかあ!!」

やんややんや!

哀は酒瓶を地面に投げつけると、叫んだ。

哀

「この世界は私達を守るの!!良い!?私達は必ず勝つ!!明美の妹が言ってるのよ。信じなさい!!」

「マ・・・マジ・・・?」

哀

「ヒック。」

哀は目がトロンとなると、バタリと倒れた。

バタリ・・・

「わーっ、倒れたーっ！ー！やっぱり子供にお酒はいかんー！ー！」

コナン

「子供じゃないでちゅ。赤ちゃんでちゅー。」

ベローン・・・

コナン、またしても・・・

「ユーリさんっ、今の話・・・」

ユーリ

「ああ。」

ジン

「この顔を良く覚えておくが良い。コイツは間違いなく明美の妹！
！」

ユーリ

「我々の新たな希望だ！ー！」

松葉

「（この戦い・・・糸を引いてるのはダゴンとかいう人間とちゃう。アンタなんやろ？引きずり出したるわ。）」

ペンデュラム城

ビターズ

「・・・まさか、もうあなたが出るとはね。驚いたわ。ロマネ。」

「イ、イヤー、あの・・・アハハハハ。じ、実は私が一番驚いてるんですよ・・・」

ビターズ

「どうしてビショップのアタシよか、あなたが先なの？ダゴンの考えが全くわからないわ！！」

「じ、実のところ私にもよくわかっていないのですよ。『君なら大丈夫だよ』って・・・ど、どういう意味なんでしょ？うーん。」

ビターズ

「（相変わらずイライラする子ね・・・）とりあえず哀を殺さないでよ！！ヤツをブチ殺すのはアタシだからね！！」

ロマネコンティ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「ウフフ・・・瑛美さんも同じ事・・・言っていましたね。ダメですよ・・・そんなに期待させちゃ・・・」

ペンデュラムアッド・ナイト級の人間は、別名『トウェンフォルアツク』とも呼ばれる。

トウエンフォルアック
二十四星座。

24人のナイトが存在するからだ。

その中の1人、ロマネコンティ。

明日の3RDバトルにて・・・

その姿が明らかにされる・・・

次回、あの女が見参！！

ファイル574：遅れて来た女、リアン！！

カミュ

「さて・・・本日の3RDバトルですが・・・アルの5人は・・・誰ですか？」

赤井秀一・灰原哀・東宮康太郎・江戸川コナンの4人が名乗り出た。

「あのメンバーか！」

「4人だ。松葉か玲子が出ないのか？」

ユーリ

「2人共乗り気じゃないらしい。しかも玲子は昨日の呪いが祟ってるから、男の子とイチャイチャするんだと。」

瑛祐

「心配ないよ！ちゃんともう1人いるんだから！出て来な、5人目！！！」

瑛祐が指を差した方向に、リアンが現れた。

リアン

「おはよう、諸君。」

カミュ

「！！！」

ジン

「リ・・・」

「リアン!？」

「リアンだあーっ!!」

「前回の組織対戦で明美の右腕だった女!!」

「生きていたのか!!？」

「スゲエ・・・アルにこんな隠し玉がいたとは・・・」

リアン

「久しぶりやな、ジン。」

ジン

「スマン・・・オレは組織対戦前のテストに失格して、バトルに参加できない事になってしまったのだ・・・!!」

カミュ

「そう、そしてあなたも参加できません。テストを受けていないのですから。いかに前回の実力者とはいえ、認める訳には・・・」

リアン

「おい、その力ボチャ!!」

リアンが振り向いた方向、城の城壁にドレイクがいた。

ヒョウウ・・・

リアン

「8年前は引き分けやったな。どや？ケリつけたくないか？」

ドレイク『……カミュ！！』

カミュ

「あつ……。はい！！ドレイク様！！」

ドレイク『今ダゴンからの伝言が届いてね、偶然だがオレと同じ答えが出た！特例として、リアンの組織対戦参加を認め、また今後来たヤツでもテストに合格すれば参加を認めると！！』

「な、なら……。陣さんも……」

ドレイク『ソイツもダゴンとの意見が一致していてねえ……。ヒュヒュ……。』裏切り者に用はない！！』

ジン

「！！」

康太郎

「ガツカリしないでください、ジンさん！！ジンさんはボク達を鍛えてくれてるじゃないですか！成長見せましょうね、哀さん！」

哀

「ええ！」

カミュ

「それではこの5人を……。氷山群フィールドへ！！ワープゲート！！」

哀達は、ワープした。

組織対戦3RDステージ 氷山群フィールド

哀

「わーっ！本当に冰山だわ！！」

康太郎

「あのさ、氷口に落ちたら死ぬ？」

カミユ

「多分。」

康太郎

「でしょうね・・・」

コナン

「ねえ。ペンデュラムのメンバーはいないの？」

カミユ

「それが・・・そのう。1人・・・寝坊した人がいまして・・・」

哀

「寝坊！！ペンデュラムが寝坊だつてゝ！！」

哀が大笑いしていると、空間が光った。

ウン・・・

カミュ

「あ！来たようですね。」

ドン！

2人の男と2人の女が現れた。

哀

「4人しかいない！？後の1人は・・・！！！？」

歩

「ここで転んでいるわ・・・」

哀はコケた。

ザ・・・

ロマネコンティ

「み、みつともないトコ見せてしまいました・・・し、しかも寝過
ごしてしまって。きよ、今日の戦いの事考えてたら眠れなくて・・・
今日はよ、よろしく願います・・・」

ニッコニコ

哀

「昨日の変な人だわ！」

コナン

「うーん、本当に悪い人に見えないなあ。」

リアン

「覚えとるか、シユウ？」

秀一

「ああ、8年前にもいた女だ。」

リアン

「あの時は確か、ルークかビショップ級やったが・・・ナイト級になつとるわ！」

チリーン・・・

リアン

「あん時は何もできなかったアンタが組織対戦に出とるくらいや。時間は確かに動いとるって事やな！いきなりアタシが出てやる。」

パキポキ・・・

リアン

「ナイトの姉ちゃん！出て来おへんのか？どの子が相手でもええんやで。」

ロマネコンティ達4人は、沈黙している。

そんな中、1人の男が進み出た。

「どいつもコイツもビビってんのか！？だらしねんだよバーカ！オレが・・・こんなポンコツ速攻倒してやらあ！！！」

ぬら・・・

「そしたら意気地のねえロマネ！！オマエが格下げされて・・・オレがルークからナイトに2階級特進する事になるだろうな！！」

ロマネコンティ

「そうになったら・・・仕方ないですよ。がんばってくださいねアブサン・・・！」

「（情けないぞよ！！なぜにこの娘がナイトなのじゃ！？）」

歩

「アタシもあの娘はゴメンだよ。行きなアブサン！！」

「・・・」

アブサン

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ルーク』

「ギヒッ・・・オレがオマエを殺したら、ドレイクもさぞ悔しいだろうなあ・・・！！」

ザ・・・

リアン

『FBI捜査官』

「威勢のええ若造やな。勇気だけ高う買ったるわ。」

カミュ

「3RDバトル1戦目・・・始め!!」

アブサン

「ガーディアン：RING・・・魔神のランプ!!」

ボンッ!

アブサン

「教えてやるぜ、FBI捜査官のリアンちゃんよ!オレをルークと
思っ^{クラス}てナメるな!!ペンデュラムには人間によつて級が存在する!
だがその階級に『強さ』が比例してるとはかぎらねえ!!ルークだ
つてビショッブよりも強いヤツはいるし、ロマネみてえなアホナイ
トもいる!!要は：RINGの使い方!それによつちや金星だつて
取れるのさ!ルークのシャルトだつて玲子つて女倒したしなあ!!
そしてこの：RINGは、大金星を取れる：RINGよ!!」

アブサンはランプをこすつた。

ゴシゴシ・・・

アブサン

「出でよ、ランプの精!!」

ランプから魔神が出て来た。

アブサン

「コイツはオレの第6感との波長が一番合う!ナイトの人間だつて
簡単に扱えねえハズの代物よ!!わかつたか?オレはデメエを・・・

」

アブサンの言葉を、リアンが遮った。

リアン

「あー、わかったわかった。来い。」

コナン

「ダ、ダメだよリアンちゃん！！そんな余裕見せちゃ・・・玲子さんみたいに負けちゃうよーっ！！」

玲子

「ムカ・・・」

康太郎

「た、確かにあの魔神強そう・・・」

秀一

「イヤ・・・君達はまだ・・・わかっていない。あの娘の怖さを！！」

アブサン

「余裕かまして死にやがれ！！」

魔神はリアンへと突っ込んだ。

だが・・・

リアン

「やれやれやな・・・」

リアンはそう言つと同時に雷を拳にまわせると、一撃で魔神を粉砕した。

ドンー！

アブサン

「なあ！？」

驚くアブサンの目の前に、リアンが現れた。

ザ・・・

アブサン

「ヒッ・・・ウソ・・・！！？」

リアンは鉄拳をアブサンの腹にブチ込んだ。

ドゴッ！！

そしてアブサンの背中をつかむと、引きずりながら歩き出した。

リアン

「アンタは3つ。間違つてた。」

ズル、ズル・・・

アブサン

「ヒイイー！！」

リアン

「1つ目。：RINGつちゅうのは完全にシンクロするまでに時間がかかる。集中力、第6感。魔力を戦闘中に練り上げる。別の意思持つガーディアンやったら、なおさら精神力が必要や！初めっから奥の手出しとるアンタは・・・アホや。」

リアンは氷口までアブサンを引きずって来た。

アブサン

「ヒッ、ヒイイ・・・」

リアン

「2つ目・・・アタシと戦うには早過ぎやったなあ。」

アブサン

「やっ・・・止める！！止めて！！わかったから止めてーっ！！止め・・・」

リアンはアブサンを氷口の中に突き落とした。

トンッ！

アブサン

「ギアアアアア・・・」

リアン

「3つ目・・・誰にむかってタメ口きいてんねん。」

これがリアンの強さ・・・！！

次回、康太郎の雪辱戦！！

ファイル575：男を見せる康太郎！幻惑のキノコ！！

カミユ

「第1戦つ・・・リアンの勝利！！」

哀

「スゴイワリアンちゃん！！魔神を1発で倒した！！」

リアン

「あんな魔力もろくに通ってないの、風船と同じやからな。」

コナン

「後、4人・・・」

歩

「やっぱりアブサンじゃダメだったね。次はアタシが出まっす。」

歩が進み出て来た。

哀

「あら？歩ちゃんのチームは倒したのに、歩ちゃんはまた出るの？」

秀一

「やはりバカだ！ルールを全然理解していない。たとえチームが負けても、個人的に勝利した人間は次のバトルにも出られるんだよ。」

歩

「（姉ちゃん、頑張るからねっ！！）さあて、相手は誰！？」

康太郎

「ボクが相手だ!!」

康太郎が前に出た。

歩

「えーっ、あなたあ？1回アタシに負けたじゃない。大して強くないんだから引ッ込んでなさい!!」

康太郎

「ボクが怖いかな？」

哀

「ねえ、歩ちゃん！東宮君を、この前と同じと思わない方がいいわよ。」

歩「ミモザ

『ペンデュラムアッド構成員

「クラス」

ルーク』

「・・・オッケー。相手してあげるよ。今度は、殺す気でね。」

カミュ

「第2戦、東宮康太郎VS西沢歩・ミモザ！初め!!」

カチン・・・

歩

「ドカンッ!!」

歩は前と同じように、ボールを飛ばして来た。

歩

「（加速・・・曲がれっ！！）」

ボールが不規則に曲がる。

康太郎

「（ジんさんのパンチはまだまだ見切れてないけど・・・この動きは、わかる！！）」

康太郎は背後から飛んで来たボールを受け止めた。

バシィ！！

歩

「（つかんだ！？）」

だが、康太郎は手を押さえた。

プルプル・・・

リアン

「（カッコつけるからや、このアホ・・・）」

康太郎はむき出しになっている地面にスコップを突き刺した。

ドス・・・

康太郎

「今度はこっちの番だ!!」

歩

「（あれが来る!?!）」

康太郎はスコップを刺したまま、ゆっくりと歩いて来た。

ザッ、ザッ・・・

コナン

「丸腰!?!何考えてるんだよ康太郎君!?!」

歩

「バカだねっ!!悪いけど、連勝させてもらっよっ!!!x6（へキサゴン）!!!」

そう言うのと、ボールが6つに分かれた。

ギョーン、ギョーン・・・

康太郎

「今のボクじゃ見切れて5つ・・・まだまだジンさんとの修業が必要だなあ。」

そう言うのと、康太郎は突っ込んだ。

ドンッ!!

歩

「捨て身の直進?本当にバ・カ」

康太郎はボールを避けながら、歩に近づいて行く。

後少しというところで、ボールの破片が康太郎に当たった。

ゴッ・・・

歩

「おしかったよ。」

康太郎

「イヤ・・・作戦成功だ!!」

歩

「何を・・・」

ビクン!

歩

「痛っ・・・」

歩が痛みに反応すると、腕のあちこちに何かが刺さっていた。

歩

「・・・?木の・・・トゲ?」

康太郎

「出て来い!!」

康太郎が叫ぶと、スコープが光った。

カッ！

スコップが光った瞬間、歩の腕からキノコが複数生えてきた。

ポンポン！

歩

「！？イヤーツ！！何よこれーっ！！？」

康太郎

「ミラクルマツシユルーム！！タイプ１！！」

歩

「ぬ・・・ぬ・・・ぬ、抜けないよおお！！気持ち悪い！！ーっ！！」

歩がキノコを抜こうとしていると、冰山が噴氷した。

ドカアアアアン！！

歩

「冰山がつ・・・噴氷したあーっ！！」

続いて、歩の腕にミミズがまとわりついた。

歩

「イヤアアアアアアアア！！」

歩は暴れ出した。

バタバタ・・・

「な、何か・・・様子がおかしいぞよ!？」

ロマネコンティ

「・・・幻覚です・・・」

「何・・・？幻覚？」

コナン

「あのキノコの形見た事あるよ!マラライダケ!」

哀

「食べ物？」

リアン

「食べ物つちゅうか毒キノコやな。幻覚作用が主な特徴や。UP系に入ると、神様が降りてくる感覚になるが・・・DOWN系に落ちてまうと・・・ああなる。」

歩

「えいつ!!えいつ!!」

ロマネコンティ

「・・・バラライカさんが同じような事できます・・・か、彼は植物を操るネイチャー：RING使いですね・・・」

哀

「（試練の扉でジンと修業しながら、あんな新しい技を考えてたの

ね！頑張ってるじゃない、東宮君！！」

康太郎は歩へと近づいた。

康太郎

「そのキノコはボクしか抜けないよ！ギブアップするか、西沢さん？」

歩

「あ・・・」

康太郎

「ボクに抜かせてくれ！西沢さん！！」

康太郎の顔が、凜々しくなった。

パアアアア・・・

歩

「・・・はい。ギブアップしまーすう」

歩は康太郎に抱きついた。

ポム

カミュ

「第2戦・・・アル、東宮康太郎の勝利！！」

バラライカ

『ペンデュラムアッド構成員』

「クラス」

ナイト」

「・・・」

哀

「やったじゃない、東宮君!!」

コナン

「ボク、見直しちゃった!!」

康太郎

「ま、あんなもんだよ・・・」

リアン

「あんなキノコで勝ったぐらいでデカイ顔すんな。」

康太郎

「初めて勝ったんだから、誉めてくださいよ!!」

コナン

「よしよし!!次、ボク出ますよぉーっ!!このまま3連勝だい!!」

ロマネコンティ

「・・・2VS0ですね・・・そろそろ・・・追い詰められています・・・」

「（出るのか!?ナイトの1人ロマネ!!）」

ロマネコンティ

「・・・という事で・・・勝って来てください、トニックさん・・・」

「何ぞよ、それ!!?」

ロマネコンティ

「わ、私は男の子と戦うのがとても照れくさいのです・・・それとも・・・コリンズさん出ます?」

Mr・トニック

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ビシヨップ』

「わかったぞよ!!ならば、某がコナンと戦おう!!」

Mr・トニックは進み出た。

ザ・・・

カミュ

「ペンデュラムアッド、Mr・トニック!!アル、江戸川コナン!!第3戦・・・開始!!」

Mr・トニック

「この勝負・・・もはや結果は明らかぞよ!!」

リアン

「確かに・・・コナン君は勝てへん。」

リアンとトニックの言葉の意味は、一体・・・?

次回、コナンの弱点が発覚!!

ファイル576：ボク負けないよ！氷山群のコナン！！

Mr・トニック

「5分で終わらせるぞよ！コナン殿！！スクリューブレード！！」

Mr・トニックは螺旋状の剣を発動した。

ジャキッ！！

ギュルルルル！！

コナン

「フレアリング！！炎の剣！！」

飛んで来た剣を、コナンは炎をまとった剣で受け止めた。

カキィ！！

哀

「コナン君調子良いじゃない！！何が『勝てない』よ。リアンちゃん！！」

リアン

「・・・アンタ・・・なんも見えてへんのやなあ・・・」

コナン

「ハア、ハア・・・」

Mr・トニック

「フッフッフ・・・もう2分は経ったぞよ？限界は・・・近いであろう？」

ピシ・・・

コナン

「（炎の剣が・・・形を成さない・・・！！）」

Mr・トニク

「ここはそなたにとっては地獄のフィールド！！」

ギョル！！

秀一

「コナン君の扱う：RINGの属性は『炎』・・・彼は常にその：RINGとのシンクロを余儀なくされるため、低温や氷に体質からして弱体化している。簡単な事だ。冰山群フィールドという冷気の地で彼は誰よりも体力を消費している。それによる肉体的・精神的疲労は：RINGとのシンクロを鈍らせる。魔力は低下し、彼に勝機はない！！」

康太郎

「そういう意味だったのか・・・マズイよ哀さん！ギブアップさせた方・・・」

哀

「コナン君ーっ！！もう良い。次、私やるから！！」

コナン

「まだ・・・やれるよっ。」

哀

「・・・!!」

コナン

「（大丈夫・・・最後の一撃のために・・・弱ってる魔力を少しづつ練り上げたんだよ。）」

Mr・トニツク

「後・・・1分!!」

チャラ・・・

コナン

「フウちゃんっ。」

巨大化した炎のダルマが、Mr・トニツクに向かって行った。

オンッ!!

Mr・トニツク

「この状況下でよくぞ出した!!しかーし!!某とてこれを予期しなかったワケではないぞよ!!」

カッ!

Mr・トニツク

アンガードアンカー

「怒之砦!!!」

巨大な砦が、ダルマを押しつぶした。

ドカァァン！！

哀

「コナン君ーっ！！」

秀一

「勝敗は明らかだ。コナン君のギブアップという事で良いかな？」

Mr・トニツク

「かまわんぞよ。（コナン殿は殺す事ができぬ。あの方に命令されているからの。）」

『新一は生かして私の前に連れて来い・・・』

哀はコナンに駆け寄った。

哀

「大丈夫、コナン君！？」

コナン

「うん・・・スゴく疲れちゃった・・・ゴメンナサイ・・・諦めてなかったよね？ボク・・・」

哀

「（バカ・・・やっぱりあの時の、私の言葉を・・・！！）」

リアン

「コナン君はしばらく戦線を離脱させる。この子はもう限界や！！
アンタよお、哀ちゃん。この子とつるんでから実は何も見えてなか

ったのかもなあ。この子はアンタより年下の17歳なんやで。少しさ、休ませてやるつや。」

哀

「立てる？コナン君。」

コナン

「うん．．うん。」

カミユ

「第3戦ーっ！！ペンデュラムアッドMr・トニックの勝利ー！！」

コナン

「．．．ねえ哀ちゃん．．．ボクって．．．足手まといになってないかな？」

哀

「んな事ない！！あなたは立派に戦ってるー！！」

哀はコナンを背負った。

コナン

「わっ．．．」

哀

「ただ．．．これからは諦めないだけじゃなくて、ムリもしないで。あなた死んだら、みんな悲しいのよ。私もね。」

コナン

「うん．．．」

衰弱負けしたコナン・・・

次回、呪いVS聖なる守護者!!

ファイル577：哀VSコリンズ！ロウソクの呪いと聖なる守護者！！

組織対戦3RDバトル、冰山群フィールド

1戦目、リアンVSアブサン 圧倒的な実力差でリアンの勝利。

2戦目、康太郎VS歩 ミラクルマッシュルームという新技で康太郎の勝利。

3戦目、コナンVS Mr・トニック 冷気で衰弱していたコナンは、Mr・トニックのアンガードアンカーに沈んだ・・・

3RDバトル残りし戦士は、4人・・・

Mr・トニック

「楽な勝負だったぞよ。しかし・・・残りの2人は注意した方が良
いぞよ。哀と秀一というたか。楽には勝てぬハズ！！」

ロマネコンティ

「そ、そうですね、どうしましょう・・・コリンズさん？どっちが
先に出来ます？」

コリンズ、無言。

ロマネコンティ

「・・・コリンズ・・・さん？」

コックリコックリ・・・

ツルッ！

コリンズは下に落ちた。

ベシヤッ！

「ほぐわー！！？」

シーン・・・

「あら。アブサンは？」

歩

「1戦目で死んだじゃないっ・・・って・・・アンタ・・・もしかして・・・今まで寝てたのーっ！！？」

「まあ真打ちは後で登場っちゅうこっちゃ。残ってるのはコリンズと誰や？」

ロマネコンティ

「わ・・・私です・・・」

「さよか。ほんならコリンズ出てみよう。向こうで残ってるんは誰と誰や？」

秀一

「次のペンデュラムはあの関西弁の女か・・・ナイトの女は最後だな。ナイトはオレがやる。行って来い、哀君！！」

哀

「命令されるの、何かムカつく!!」

秀一

「忘れるな。君はキャプテンだろう？戦闘能力的にまだ未熟な君は、ナイトと戦うには危険すぎる！君はどんな事があっても勝ち続けなければならぬ。キャプテンの負けはそのチームの負けになるのだから。」

哀

「わかったわ！行くわよイズナ!!」

哀は進み出た。

コリンズ

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ビショップ』

「ヘエ、ジェネヴァを倒したアンタか？悪くないなあ。」

カミュ

「ペンデュラムアッド、コリンズ!!アル、灰原哀!!勝負・・・開始!!」

ス・・・

コリンズは哀に左手を向けると、一言叫んだ。

コリンズ

「ドーン。」

哀

「???今・・・何されたの?」

コリンズ

「アンタはこれでコリンズに呪われた。カワイソウなこっちゃ!」

コリンズはシルクハットを脱いだ。

コリンズ

「このロウソクが燃え尽きた時にはな・・・ロウソクになったアンタも消えてまうっちゅうんじゃ!」

コリンズの頭の上に、ロウソクが燃えていた。

哀

「なっ・・・」

康太郎

「何ーっ!?!?」

秀一

「ヤツのリングを壊せ哀君!!ダークネス:RING・キャンドルボディ!!ヤツの言っている事は本当だ!!」

コリンズは:RINGを口に入れた。

パク!

ゴクン!

コリンズ

「タネも仕掛けも・・・消えてしもたってこつちゃ！」

哀

「お腹ブン殴って吐かせてやる！！イズナ・バージョン1！！」

哀はイズナをハンマーモードにすると、コリンズに突っ込んだ。

ドンッ！！

ガッ！

ガキッ！

コリンズ

「およっ・・・（オイオイやつこさん！！ちよいと速いねえ！！？）

」

哀はコリンズの腹に鉄拳をブチ込んだ。

ゴッ！！

コリンズ

「ゲホ・・・本当に吐きそうになってしもて笑えない！作戦変更やね。」

コリンズは左手に持ったウェポン：RINGで、ロウソクに火をつけた。

ボンッ！

ドロオオオ・・・

哀の溶ける速度が速まった。

哀

「！！」

コリンズ

「1秒でも速いトコ、燃え尽きてもらうのも悪くない！！ダークネス：RING・キャンドルボディ！コリンズの頭の上にあるロウソクが今のアンタっちゅうこっちゃ！アンタは今ロウソクなんや。もうすぐドロドロに溶けて消えてまう。」

秀一

「マズイな・・・よりによって、ダークネス：RING使いとは・・・ダークネス：RINGはクセのある：RINGだからタチが悪い。2NDバトルで玲子君が苦戦を強いられたように、真っ向からの防御が数限られる！！」

康太郎

「あの技を破る方法はあるんですか？」

コナン

「2つしかないよ。：RING自体を破壊するか、ホーリー：RING！！」

リアン

「チツ・・・1戦目のタコを哀ちゃんとやらせるんやった・・・！！」

「オイオイ・・・何か・・・ヤベエぞ哀!!」

松葉

「哀ちゃん・・・!!」

ポタ、ポタ・・・

哀

「コリンズって言ったわね？あなた、どうしてペンデュラムなんかやってるの？あなたも、人を殺す事が楽しいの？」

コリンズ

「・・・人殺しには興味あらへん！ただコリンズって女は、スリルと刺激が欲しいんや。組織対戦なんて刺激的や。悪くないやろ？ギリギリの命を賭けた『ゲーム』に興味あるんや。コリンズが負けて死んでも悪くない！アンタに勝ってスッキリするんも悪くないっちゆうこっちゃ。」

哀

「ただのバトルバカかあなた？単なる悪者じゃないわね？」

コリンズ

「そういう意味じゃアンタ側について、ペンデュラムの連中と戦ってたんも悪くない話やったなあ。」

哀

「イズナ!!」

イズナ

「うん！使う時が来たわね！！成長するのは緊張するけど・・・あれしかあるまい！！」

哀は魔力の波長を変化させた。

ス・・・

コリンズ

「（魔力の波長が変化したな？ガーゴイルってヤツか！？）」

康太郎

「ガーゴイル！！？」

秀一

「イヤ、ちがう！！」

リアン

「（この涼しげな魔力・・・ま、まさか・・・）」

哀

「バージョン4！！」

ポワ・・・

コリンズ

「！！」

哀

「聖なる守護者・ルピナス！！！！」

哀の背後に、美しき聖女が現れた。

パアアアア・・・

ルピナスが両手を哀に向けると、溶けるのが直り出した。

スウウ・・・

コナン

「と、溶けるのが直っていくよっ・・・あれがイズナちゃんの4つ目の能力!!」

リアン

「ホーリーの力を持つガーディアン!!この1戦を前に、あの力を創造してたんはラッキーやったな!!（これで哀ちゃんはダークネスの呪いを無効化できる・・・!!明美さんの妹・・・!!）」

哀

「よし!これでまた1から戦いましょう!!とことん相手してあげるわよコリンズ!!こっからは・・・ただのケンカよ!!」

コリンズ

「・・・アカンなあ・・・失敗してしもたなあ・・・アンタみたいなおバカさん相手に、キャンドルボディなんか使わなきゃ良かった・・・最初っからただのケンカ・・・してれば良かったなあ・・・」

そう言うコリンズの頭が、溶け出していた。

ドロ、ドロ・・・

哀

「コリンズ!!?」

秀一

「代償だ。ダークネス：RINGは、術者に何かしらの反作用をもたらす。キャンドルボディの代償・・・『失敗は術者を逆に溶かす』」

コリンズ

「アンタ！ペンデュラムはナイト級からがホンマの戦いやで！ホンマの敵は・・・これから出て来るつちゅうこっちゃ！負けんなや・・・（敵にこういう言葉を贈って、消えてくのも悪くない・・・）」

その言葉を最後に、コリンズは完全に溶解した。

ドロオオオ・・・

哀

「コリンズ・・・」

カミュ

「第4戦！！灰原哀勝利！！これによりアルの勝利ですが・・・戦士の出場権をかけるため、戦いは続きます！！最終戦！！」

ロマネコンティ

「あ、あら・・・ついに定番・・・来ちゃいました・・・」

勝利と引き替えに失ったのは、心通わした少女の死・・・

次回、ついにナイトの女が出陣！！

ファイル578：もう1人の不死の絆！赤井秀一VSロマネコンティ！！

哀

「何とか勝つて来た！」

康太郎

「スゴイですよ哀さん！何ていうんですかあの女の子！」

哀

「えーと、ルピナス！」

康太郎

「でも・・・あれもイズナさんなんだよね・・・」

コナン

「ルピナス、か・・・想像で創造したっていうか、妄想で創造したガーディアンだね！哀ちゃんあんな風になりたいって事？」

哀

「妄想なんかしてません！！」

リアン

「ま、姿形はどうあれ、あの能力をプラスしたんは正解やったな。ルピナスを創造してへんかったら今頃アンタは死んどる。」

哀

「うん・・・でも代わりにコリンズが死んじゃった・・・あの子・・・ただの悪者じゃなかったのに・・・」

リアン

「やらなきゃやられてたんや！！コリンズかてペンデュラムに入つた時から覚悟は決めとったハズやで。アンタも覚悟を決めるんや、哀ちゃん！思い出し！ペンデュラムが何をした軍団か！組織対戦でアタシらに勝つた後、何をしようとしとる軍団か！！アンタの姉は希望となった！！戦いを迷うな、哀ちゃん！！戦え！！哀ちゃん！！」

哀

「うん。」

秀一

「とりあえず生き残った事を誉めるよ。次はオレだ。」

秀一が準備を始めた。

『ペンデュラムはナイトからがホンマの戦いや。ホンマの敵はこれから出て来るっちゅうこつちゃ。』

哀

「き・・・気をつけて、赤井さん！！」

秀一

「ああ。」

ロマネコンティ

『ペンデュラムアッド構成員

』
「クラス」

ナイト』

「そ・・・それでは・・・私も行って来ますね・・・」

テテテ・・・

Mr・トニック

「（某は・・・8年前の組織対戦に参加していながらナイトの実力というものを知らぬ。見せてもらっぞよ、ナイトの力を！！）」

カミュ

「3RDバトル最終戦！！赤井秀一VSロマネコンティ！！始め！！」

秀一

「14トーテムポール！！」

ドン、ドン！！

ロマネコンティ

「あわわっ・・・イヤ～ン！！」

ヒョイッ！

秀一

「イツ・・・イヤ～ン！？」

ロマネコンティ

「ダメ～ッ。」

ヒョイッ！

ロマネコンティ

「キャッッ!!」

ヒョイツ!

ロマネコンティは悲鳴を上げながら、ポールを抜けた。

ズズ・・・

秀一

「（全てのポールを・・・抜けた!?）」

リアン

「油断すんな!! 来るで!!」（運良く逃げたんとちゃう!! 見切つとる!!!）」

ロマネコンティ

「じゃ・・・じゃあ次は・・・私の番ですね。」

ロマネコンティの目つきが変わった。

ロマネコンティ

「キューブストーン!!」

氷山の地面がはがれ、多数の石の立方体になった。

カキ・・・

ロマネコンティ

「はねなさい・・・」

石が秀一へと向かって来た。

秀一

「(石・・・使い!!)」

秀一は石を避け、その上に乗った。

だが・・・

『3、2、1、』

ピーッ!

ドカン!!

石は突然爆発した。

秀一は間一髪で逃げた。

秀一

「爆弾石の・・・ネイチャー：RING!!」

ロマネコンティ

「当たり・・・です・・・!」

そう言うロマネコンティが、秀一の腕にある印に気づいた。

ロマネコンティ

「!あなた・・・ダゴンの・・・せ、洗礼を受けているのですね?・・・なら・・・私と・・・同類ですね・・・」

そう言うと、ロマネコンティは左手のソデをめくった。

秀一

「なっ・・・なぜだ!!?なぜダゴンは味方のオマエに・・・その印を入れた!!?それは不死の絆『デスタトゥー』!!印が体中に回りきった時・・・その人間は、死する事のない生ける屍と化すと知っているのか!?」

コナン

「呪い・・・!?!?」

哀

「(じゃあ赤井さんも、その呪いを・・・!?!?)」

ロマネコンティ

「なぜ・・・そんなに激昂するのですか?これは・・・選ばれし者の証明ではありませんか・・・私は・・・自ら望んで洗礼を受けました・・・彼と同じ道を歩むために・・・」

カツ!!

秀一

「なぜだ!!?自ら生ける屍を望むのは、なぜだ!!オマエがそこまでダゴンと共にある理由・・・それは何だ!!!?!?」

ロマネコンティ

「彼が私の・・・居場所だから・・・私は子供の頃、両親を早く亡くしました。たった1人で生きていました。周りの人間は無関心だった・・・みんな、私を見て見ぬふり。あるいは、本当にその視界

に入っていないかったのかもしれない．．．放っておいたらそのまま死んでいたであろう、^{セイジャク}脆弱な娘など．．．そんなある日、彼が現れたんです．．．私に大きなフライドチキン差し出してくれた彼．．．そして、『一緒に来るかい？』．．．彼はただ一言そう言いました．．．」

ドカン！！

秀一

「くっ．．．（強い．．．！！）」

ロマネコンティ

「そしてダゴンは．．．色々．．．教えてくれた．．．わ、私の中に眠っていた第6感．．．戦い方．．．生き方．．．世界を私達だけの物にするという考え方．．．私はそれに乗りましたよ．．．？あなたのそれも彼に認められた証じゃないですか．．．こっちの人間になりませんか？」

秀一

「オマエは利用されてるだけだ！！なぜそれに気づかない！！」

ロマネコンティ

「それでも良いんですよ．．．彼に必要とされてるならばね．．．」

そう言うのと、氷山の氷口の氷岩がへび状になって出て来た。

ドロオオオ．．．

ロマネコンティ

^{アイススネーク}

「氷岩蛇．．．はねなさい．．．」

キシヤアアアア・・・

氷の蛇が、秀一に襲いかかった。

ドガア！！

秀一

「（これが・・・ナイトの力！！）」

吹っ飛ばされ地面に叩きつけられた秀一に、そのまま蛇が突っ込んだ。

ドゴオオオ！！

哀

「赤井さんーっ！！」

哀が叫んだ、その時・・・

ピキ・・・

バキヤアアアア！！

氷の蛇が碎けた。

「おお！！石の蛇が碎けた！！」

「何があつたんだ！？」

玲子

「喰わせたのよ。14トーテムポールを蛇の口の中にねじ込ませたのね。コンマ1秒の判断・・・やっぱ強いわシュウちゃんは！」

松葉

「そやけど・・・」

秀一

「ハア、ハア・・・」

リアン

「：RINGの乱発で、集中力が途切れたか！精神力の限界や！負けを認めろ、シュウ！！」

カミユ

「ギブアップを宣告しますか？赤井秀一・・・」

秀一はゆっくりとロマネコンティに近づく。

ザッ、ザッ・・・

哀

「バカ、赤井さんあなたーっ！！ムチャしてんじゃないわよーっ！！死ぬわよバカーッ！！」

イズナ

「わからないの哀ちゃん！あの男のプライドと意地を・・・！！秀一君は負けたくないのよ。ペンデュラムアッドにも・・・あなたにもね。」

ロマネコンティ

「わ、私は・・・できれば人を殺める事はしたくないのです・・・
ギブアップしてください秀一さん・・・さもなくば・・・あなたは
爆死します・・・」

秀一

「・・・ハイスピード・・・14・・・トータムボール・・・!!」

トータムボールが、強烈な速さでロマネコンティの右頬を直撃した。

ドオオッ!!

ロマネコンティ

「!・・・」

秀一

「ギブアップだ・・・今のオレはナイト級にそう遠くない。通用する事を理解した!足りないものは1つ!魔力の持久力!!すぐに追いついてやるぞ・・・」

カミュ

「勝者つ・・・ペンデュラムアッド!ロマネコンティ!!」

ロマネコンティ

「(秀一さん・・・次の戦いのために割り切りましたね・・・ダゴンがどうして印を入れたかわかりましたよ・・・素晴らしい素質です・・・)」

カミュ

「3RDバトル終了です!!生き残ったメンバーをデイルゼイヴ

へ!!」

哀達はデイルゼイヴに戻って来た。

ウン・・・

哀

「ただいま！玲子さん、松葉ちゃん！色々あったけど勝って来たわ
！！」

玲子と松葉が、ある一点を見上げている。

哀

「ん？」

「・・・あれ・・・見ろよ・・・!!」

「生きてやがった・・・!!」

「生き還ってたんだあーっ!!!!」

哀の視線の先には、ダゴンがいた・・・

後1歩及ばなかった秀一・・・

次回、25人のナイトが集結!!

ファイル579：ダゴンの狂気とトウェンフォルアック！再び試練の扉へ！！

哀

「あなた・・・ダイ！ディストリアのダイじゃない！！ヤッホーッ、元氣ーっ！？」

イズナ

「あの時感じた感覚・・・こういう事だったのね・・・！！」

哀

「何言ってるの？イズナ・・・」

リアン

「アンタ・・・何勘違いしとんねん！哀ちゃん！！アイツは・・・ペンデュラムアッドの司令塔！！ダゴンや！！！」

哀

「（アイツが・・・アイツが！！お姉ちゃんにキズをつけた男、ダゴン！！！！）テッ・・・テメエそこ動くんじゃないわよ！！ブツ殺・・・」

イズナ

「待って、哀ちゃん！！」

リアン

「動かへん方がええんはアンタや！今のアンタじゃ、ヤツにキズ1つつけられへん！！」

秀一

「その瞳に・・・良く焼きつけるんだ。ヤツこそ・・・倒さねばならない最大の敵だ!!」

ダゴン『ロマネ・・・上手にできたねえ・・・誉めてあげるよ。』

ロマネコンティ

「あ、ありがとうございます・・・！光荣ですダゴン・・・」

ダゴン『アルやFBIの君達もなかなか頼もしい。フフ・・・25人がゲームに興味を持ち始めたようだよ・・・』

ヌツ・・・

23人の構成員達が、ダゴンの周りに現れた。

ザツ・・・

姿形もそれぞれで、恐ろしい。

松葉

「（あの女は・・・いない。）」

玲子

「魔力がケタ外れに強いわよ・・・あの24人・・・」

リアン

「ロマネも合わせて25人！！トウエンフォルアック二十五星座のナイト！！」

ダゴン『ねえ。哀！ボクはこの世界が大っ嫌いだ！！臭くて臭くてたまらない。花も木も石も水も鳥も村も町も山も・・・でも一番臭

いのは・・・人間だ。世界の中心に置くのは常に自分。他者をキズつけ、妬み^{ネタ}・嫉み^{ソネ}・・・それでもいつも自分が正しいと思っている。嫉妬・憎悪・背信・不遜^{フソン}・傲慢^{ゴウマン}・欺瞞^{キマン}・・・それが人間の本质^{シュウハク}・・・醜悪だね・・・見せかけだけ。皆バカばかりだ。だから全て殺す事を決めたのさ。ペンデュラムの人間は、この世を見限った者が集まった。逆に言えば、世界から捨てられた者達ばかりなのさ・・・だからボク達は1つになった。・・・どうかな？君さえ良ければ、こちら側の人間になっても良いのだけれど・・・」

哀

「ふざけるな！！アンタのやってる事こそ自己中心的でしょうが！
！私はアンタをブツ倒す！！」

ダゴン『明美と同じ事を言うんだね。それ故に哀れだ・・・これを・・・あげるよ。』

そう言うと、ダゴンはボールを投げた。

コッ！

ダゴン『イズナのボールだ。強くなって会いにおいで。まさか8年前ボクが使っていた：RINGと戦うとは思わなかったな。ねえイズナ？2人共・・・楽しませてくれよ・・・』

ダゴン達は消えて行った。

ウン・・・

イズナ

「（あの男が・・・過去私を使っていた男・・・！！）」

哀

「（倒すべき・・・敵！！）」

数分後

カミユ

「さて・・・組織対戦は3日おきに1日休みがあります。明日は自由^{フット}に寛ぎください！」

玲子

「よっしゃ！ナンパよ！！」

秀一

「そんな事してる場合かバカ！！」

康太郎

「やっぱり修業ですよね・・・」

哀

「その前に、試してみたい事があるの！赤井さんの呪いを今から解く！ルピナスでね！」

哀は魔力を注いだ。

イズナはルピナスの姿になると、秀一に向けて光を当てた。

パアアアア・・・

だが・・・

シーン・・・

何も起きない。

哀

「ルピナス？」

フルフル・・・

ルピナスは消え、イズナに戻った。

フツ・・・

哀

「赤井さん!!」

秀一

「オレの呪いは、ダゴンにかけられたものだ。ヤツを殺す以外、消す事はできない・・・気持ちだけ受け取っておく。ありがとう、哀君。」

康太郎

「でも・・・ダゴンは死んでも生き返るゾンビなんですよ？どうすれば解けるんですか!？」

秀一

「後々考えるさ。それより、ジン！」

ジン

「ああ。哀、康太郎、秀一、玲子、松葉！オマエ達には今から、1日分試験の扉に入ってもらおう！！」

コナン

「あの・・・ボクは？」

リアン

「言ったハズやでコナン君！アンタは少し休んでもらう。」

コナン

「シュン・・・」

コナンはシュンとした。

哀

「1日って言うと、あの中じゃ60日分ね！！」

ジン

「それも、今回は特別メニューだ。もうオマエ達に余裕はないのだ！！」

リアン

「確かに・・・ナイト級が動き出した。これからのバトルにナイトが入って来る事は必至！！」

ジン

「覚悟は良いな？5人共。」

ジャラ・・・

ペンデュラム城

ペンデュラム城では、ダゴン達25人のナイトが集まっていた。

「次こそ私が出るって言うてんだよおギャハハハハハ！殺したくて殺したくてウズくんだよお！！ダゴン！！許しを頂戴っ！頂戴よお！！！！」

ダゴン『うん．．．でもねえ．．．他にも出たいって人もいてね．．．』

「知ったこっちゃないんだよお！！何なら邪魔するヤツブツ殺してでも出てやるさ！！」

ドレイク『ヒュヒュ．．．言ってくれるなマラスキーノ。相手になつてやるうか？』

「まあまあ。仲間内で揉めても仕方ない．．．」

イフリート『言ったら聞かない子よ。彼女の好きにさせようかしらね．．．』

「決まりね！！」

そう叫ぶと、女はローブを脱いだ。

バサッ．．．

マラスキーノ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「4THバトルは私の物さ！！ギャハハハ！！絶頂しちゃっよー
っ！！！！」

ヤバそうな女性ナイト・マラスキーノが見参！！

果たして、哀達の運命は・・・！？

次回、修練開始！！

ファイル580：敵は自分自身！？シャドーヒューマンバトル！！

ヒョウウ・・・

哀

「・・・」

哀『あら？今回はジン入って来ないの？』

ジン『5人相手なんかするか！！オマエ達は今回・・・』ある意味最も戦いにくい敵』と戦う事になる。』

玲子

「戦いにくい敵ねえ・・・男の子かしら。」

松葉

「松葉ちゃんはーっ。修行なんかしなくてもナイト級とやりあえるつもりなのにいーっ。」

秀一

「5人を別々の場所に分けた・・・仲間同士戦わせる修行と思ったが・・・ちがうのか・・・？」

康太郎

「ん？」

康太郎が足下に目をやると、地面から彼の影が出て来た。

ズル、ズル・・・

康太郎

「何だあーっ!!?」

ドン!!

哀

「はわわ・・・」

松葉

「アタシの影が・・・立体化しよった・・・」

ジン

「そういう事だ、5人共!!今回オマエ達の戦う相手は自分自身!
!ネイチャー:RING『シャドーヒューマン』!!影とはいえ、
魔力の強さも各々全て同じ!!体をイジメ抜いて魔力を向上させよ
!!魔力が高まれば、シャドーヒューマンも同じ魔力になって応戦
するがな。己の敵は己という修行だ!!」

ヒュドン!!

玲子

「キャーッ!!」

ドコドコドコ!!

秀一

「(同じ能力も使うという事が!!)14トーテムポール!!」

ドン、ドン!!

グルル・・・

松葉

「こんなにやろう・・・リリまで・・・!!」

康太郎

「うわああん!! 同じ強さだなんてウソだあーっ!! ボク・・・
こんなに強くないもん!!」

ジン

「それぞれが魔力値MAXの状態で攻撃して来るぞ! 極限の力で立ち向かえ!! 己の限界を突破するのだ!!」

哀

「ガーゴイルVS・・・ブラックガーゴイルってところね・・・!
!(強くなる・・・アイツを・・・倒すのよ!!) ハアアアア
!!」

コナン

「・・・ねえリアンちゃん。お願いがありますっ。」

リアン

「何や?」

コナン

「ボクも試練の扉に入りたいです。」

リアン

「！！！」

ナイト級のマラスキーノは、地底湖で哀が戦ったビターズの姉だった！！

殺戮の宴が始まる予感・・・！！

次回は番外編、伊澄と理沙だ！！

ファイル581：伊澄と理沙の最初の出会い！！

鷺之宮伊澄と朝風理沙。

現在主人とメイドの関係になっている2人だが、当然ちゃんと出会った過程があるワケで・・・

今回はその出会いの話をいたしましょう！

数ヶ月前・・・

鷺之宮邸

着替えていた伊澄は、氷田と火枝を呼んだ。

伊澄

「ねえ」。氷田「火枝」！」

火枝

「はい？」

氷田

「いかなさいました？伊澄お嬢様。」

伊澄

「やっぱりこれ気に入らないから、青い和服持って来てください。」

ガチャ！

伊澄はドアを開けた。

下着姿のままです。

当然ながら2人は放心。

伊澄

「・・・って、どうしたんです？」

火枝・氷田

「お嬢様あー！！せめてストールぐらい羽織ってからお呼びになってくださいー！！」

伊澄

「な・・・何ですか急に・・・」

2人の執事は、伊澄の事について相談をしていた。

火枝『ヒメタ 鷺之宮家に仕えて18年。34歳』

「マズいな・・・ハッッ。」

氷田『ヒョウタ 鷺之宮家に仕えて16年。35歳』

「ああ。これは由々（ゆゆ）しき問題だ・・・フッッ。」

火枝

「伊澄お嬢様ももうじき14歳。ずっと子供だと思っていたが・・・」

「

氷田

「最近成長が著しいからなあ・・・」

火枝

「仕方ない。こうなったら・・・」

2人は伊澄にある話を持ちかけた。

伊澄

「はい？専属のメイドさんを雇う？却下！じゃあ私は咲夜の所に行つて来ますわ。」

伊澄、即答。

氷田

「お待ちくださいお嬢様！！」

伊澄

「何ですか。」

氷田

「やはりお嬢様も女性として肉体が成長してきてる以上、男だけでお仕えというワケにはいきません！！」

伊澄

「私は気にしないから良いんですよ。」

火枝

「我々が気にします!!」

伊澄

「けどそれなら、乳母の織田信子さんがいるでしょうが！彼女1人じゃ不満なんですか。」

火枝

「信子さんも今年で米寿の88歳。『まだいけると思っていたが昔のように若さに任せた仕事はできない。そろそろユニホームを脱ぐ時が来たのかも知れない』と現役引退を考えておられます。」

伊澄

「・・・けどマリア様のように非の打ち所のない天才とか、サキ様とワタル君のように姉弟のような関係とか、千桜さんと咲夜のように元気良い関係なら、良いんでしょうけど・・・いきなり赤の他人につきまとわれても私、気が休まりませんよ?」

火枝

「ご心配なく！お嬢様にピッタリのメイドさんを見つけ、画期的プロジェクトがあるのです!!」

伊澄

「え?」

伊澄達3人は、目的地に着いた。

メイド喫茶『イス ミン』

伊澄

「・・・とりあえず・・・看板がム力つくので変えてくれますか？」

火枝

「!？」

『シャクナゲ』に変更。

伊澄

「まあ、あなた達の考えそうな事は大体読めてたけど・・・私のメイドさん1人探すのにどれだけ金を掛けているんですか。」

伊澄と火枝と氷田は、モニタールームにいる。

火枝

「ですが、これなら実益と・・・何より働きっぷりや人間性も見ることが出来ます。」

伊澄

「本当ですか。けど、イマイチピンと来る子が・・・」

伊澄はモニターを見ながら愚痴る。

氷田

「そんな事ございません。ホラ、そう言ってる間に・・・新しい子

が・・・」

朝風理沙がシャクナゲに入って来たのがモニターに映った。

伊澄

「・・・イヤ、これはないでしょう？」

火枝

「なぜです？マジメそうでカワイイじゃないですか？」

伊澄

「カワイイのは良いのです。けどこんなつまらなさそうな顔を1日中されてたら、私の気が滅入っちゃいますわ。やっぱり私のメイドさんをやってもらうのなら・・・もっと明るくて元気で、そして何より私が吹き出すくらい面白い人じゃないと・・・」

伊澄は文句を言っていた。

ところが、数分後・・・

理沙

「お帰りなさいませ ご主人様」

キュピーン

ブホッ！

理沙のキャラの変わりように、伊澄は飲んでいた紅茶を吹き出しました。

理沙

「お帰りなさいませご主人様。今日は何になさいます？コーヒー？紅茶？それとも私のえ・が・お」

伊澄

「・・・」

氷田

「明るくて元気じゃないですか。」

火枝

「っていうか、お嬢様今吹き出しましたよね？」

伊澄

「た・・・！！確かに！！確かに面白かったけど・・・！！面白いだけでメイドさんが勤まりますか！！やっぱりテキパキ仕事ができなきゃ・・・」

朝風神社と白皇生徒会で鍛えられた実力。

テキパキ、テキパキ・・・

伊澄

「・・・」

氷田

「できてますね。」

火枝

「能力高いですね。」

伊澄

「け……！！けど肝心なのは私との相性でしょうが……それが良くないなら結局……！！」

火枝

「では、会って直接お話ししますか？」

伊澄

「え？……あ……私ちよつと用事思い出した……！そんなワケで出かけて来ますわ……！」

氷田・火枝

「ええ？お嬢様……？」

愛沢邸

伊澄は咲夜の家遊びに来ていた。

ハヤテは千桜の手伝いをしている。

ハヤテ

「どうなさったんですか伊澄さん。何だか浮かない表情ですけど……」

伊澄

「明るくて元気で、能力があって面白い・・・」

ハヤテ

「はい？」

伊澄

「どうしてハヤテ様、男なんです！！どうしてメイドさんじゃなくて執事やってるんです！！」

ハヤテ

「え！？え！？」

咲夜

「別にメイドでもかまへんよ？」

千桜

「私もどちらかというところの方が」

ハヤテ

「・・・」

咲夜と千桜に言われ、ハヤテは困った。

咲夜

「っていうか伊澄さん、人の家まで来て何浮かない顔をしてるんや？」

伊澄

「何って、そりゃ・・・。・・・ねえ咲夜・・・どうしてハヤテ様と恋人同士になったの？」

ハヤテ

「えっと・・・それはボクの男としての魅力に疑問が・・・」

伊澄

「え！？ちがいますちがいます！！そうじゃなくて・・・！！ホラ、彼氏って言っても初めはどんな人かわからない赤の他人よ！？それなのに能力とかも見ないで彼氏に決めたのは・・・」

咲夜

「運命や。」

伊澄

「え？」

咲夜

「あの日・・・運命に出会ったんや！それだけや。」

伊澄

「・・・」

伊澄はゲームセンターに来ていた。

伊澄

「（運命か・・・まあ確かに、それくらいのものがないと・・・赤の他人に惚れるワケないか・・・）」

『ヴァタリアン13』

チャリンチャリン！

伊澄

「（あ……っていうか、思わずお金入れちゃったけど……これどうすれば良いんでしょう？えーと確か……あら？）」

理沙

「銃を軽く振って弾を装填。前のボタンは手榴弾ですよ。」

伊澄の横に理沙がいた。

伊澄

「え？へ？（あ、この人……さっきの……）」

理沙

「あ、スミマセン。カワイイ女の子が1人でプレイしているのが珍しくて……ついコインを入れてしまいました……ご迷惑でしたか？」

伊澄

「イー！イヤ、そんな事ないですよー！」

理沙

「（『ないですよ』、それに和服……和風の子か……）では早速……」

伊澄

「けど私、こんなの初めてですから・・・すぐ死んじゃうかもしれないよ?」

理沙

「・・・あなたは死なない・・・」

伊澄

「え?」

理沙

「私が守るから。(綾波レイ風)」

理沙にとってそれは・・・

本人にあまり自覚のない悪いクセだったワケだが・・・

元ネタをあまり知らない伊澄には効いたという・・・

理沙

「では行きます!」

伊澄

「は!!--はい!!--」

そして・・・

『シャー!!--!』

理沙

「これで!!--!」

ジャキッ！！

理沙

「ラストオ！！」

ドン！！

見事クリアー。

伊澄

「フウ・・・何とかクリアしたみたいですね・・・」

理沙

「けどうまかったですね。飲み込みも早かったですし・・・」

理沙は伊澄に自販機で買ったミルクティーを渡した。

伊澄

「イヤ、そんな事ないですよ。けど、こんな怖い女の子がやる物じゃないですねえ。」

伊澄がミルクティーを飲みながら言う。

理沙

「女の子でもストレス発散に、コイン2枚でカワイくない2次元のゾンビを撃ち殺すくらいは良いでしょ？それに、悪いゾンビから地球の平和も守れましたよ。」

伊澄

「ハハ。けど架空のでしょ？」

理沙

「ええ。ゾンビだけに・・・リセット1つで蘇ります。」

伊澄

「え？」

理沙

「・・・」

伊澄

「・・・」

理沙

「しー！失礼しました！！では私はこれで・・・！！」

伊澄

「アハ そんな置いて行かないでくださいよ。私は・・・面白い人が大好きなんです だから待ってくださいよメイドさん。」

理沙

「ええ！？」

こうして、朝風理沙は鷺之宮伊澄のメイドになったのだった。

似た者同士って事なのかな？

次回、悪夢の4THバトル開始！！

ファイル582：4THバトル開始！！

ジン

「そろそろ・・・帰って来る頃合だな。」

リアン

「・・・来る。」

オン、オン！！

哀

「ただいまっ！！」

康太郎

「シャドーヒューマン60日はキツかったです・・・死ぬかと思った。」

「あの・・・陣さん。彼等は修行に行っていたのですよね？何か変わったように見えますか？」

ジン

「フ・・・わからぬか？リアン。」

リアン

「あん？」

ジン

「年はとりたくないものだな。」

リアン

「アタシはまだ若いでジン!!」

ジン

「正直・・・ここまで上がるとは・・・」

リアン

「磨けば、磨くほどか・・・」

カミュ

「おはようございます。それでは本日より、組織対戦を再開させて頂きます。」

ディールゼイヴの姫がダイス2個を振った。

コツ・・・

6 4

カミュ

「6VS6!!場所は・・・炎原ステージ!!」

秀一

「6人か。」

康太郎

「コナン君がいらないからピッタリですね!」

リアン

「イヤ・・・今回アタシは・・・出えへん。」

哀・玲子

「なっ……」

哀

「リアンちゃん！！あなた一番強いでしょうが！！」

玲子

「1回勝っただけでワガママですか！？」

リアン

「あーっ。ウルセエうるせえ！^{ウルセ}五月蠅え！！今回はアンタらがどんぐらいマシになったか見届けたるわ。アタシがおらんと負けてまうぐらいやったら……その程度の戦争やっただってこっちゃ！！」

哀

「（……試してる……この状況で何て娘なの……！！）」

玲子

「やったりましょ。この子なんていないわ！！」

カミュ

「それではこの5人を……炎原ステージへ！！」

哀達は、炎原フィールドへとワープした。

ウンッ！！

組織対戦4THバトル 炎原フィールド

ゴオオオオオ・・・

康太郎

「暑ーっ!!」

松葉

「氷の場所から一転して炎の場所やからねえ・・・」

哀

「相手は6人なんですよ？私達どうすれば良いの？」

カミュ

「はい。5人の内誰か1人にもう1度戦う事になって頂きます。ただし、1度戦闘に勝っている人間に限られます。」

秀一

「・・・来るぞ。」

オン・・・!!

ザ・・・ン!!

4人の男と1人の女が現れた。

男達の中に、3RDバトルでコナンを倒したMr・トニックもいる。

女はもちろん、あのビターズだ。

そして、もう1人女が・・・

ガスッ!!

マラスキーノ

「暑いね暑いねえ!! こういう時はどうすれば良いんだい!? 冷つたーい物を喰うのさ!! オマエ達全員冷しゃぶにして喰ってやるよ おおーっ!!!! この美しいマラスキーノ様がねえーっ!!!!」

哀

「・・・」

この女・・・

ヤ・バ・す・ぎ・るっ!!

次回、秀一が空を舞う!!

ファイル583：静かなる闘志・・・秀一のか！！

マラスキーノ

「チビ！！！！不細工な女！！！！もう1人不細工！！！！鰯！！！！醜女^{ブス}！！！！テメエら全員地獄に叩き堕とすよおお！！！！ブツ殺してやる！！！！ギャハハハハハハハハハハ！！！！」

ぎやははははは・・・

哀

「なっ・・・何なのあのドリル頭のオバサンはっ・・・」

カミユ

「マラスキーノ様・・・クラスはナイト！！！！性格はヒステリックで好戦的で自己中心的。しかし・・・強いですよ。」

マラスキーノ

「さあ行くよおお！！！！」

いきなり自分が出ようとするマラスキーノ。

そのマラスキーノをビターズが止めた。

ビターズ

「ちよっ・・・ちよっと待ってよお姉ちゃん！！」

マラスキーノ

「何だいビターズ？」

ビターズ

「お姉ちゃんはお姉ちゃんのアタシ達のボスでしょ？やっぱ最後の方が良いよ！
」

マラスキーノ

「んんー？まあ・・・カワイイ妹がそう言うならねえ・・・」

「そうですね。それにお言葉ですがマラスキーノ様。あの2人はブサイクとは思いませんよ？カワイイです」

ビターズ

「バ・・・バカ！お姉ちゃんに謝・・・」

パン！！

マラスキーノが男の1人の頬をはたいた。

マラスキーノ

「じゃあ・・・どっちが美しいんだいーっ！？あの2人とお・・・私のさあ！！！」

「・・・マ・・・マラスキーノ様です・・・」

マラスキーノ

「言葉にや気をつけな、私はデリケートなんだ！！このクソ男！！
！ブタ！！！！」

Mr・トニツク

『ペンデュラムアッド構成員

』
「クラス」

ビショップ』

「それでは・・・某が1番手を任されるぞよ。（ナイトにも、色々なタイプがおるなあ・・・）」

Mr・トニックが進み出た。

ザッ、ザッ・・・

秀一

「喜劇は終わったようだな。相手はあの男か・・・コナン君の仇でも取らせてもらうか。ジャンケンにも勝った事だし。」

哀

「どうして1発で決まるのよーっ!!」

ブー、ブー!!

秀一

「オマエ達全員『パー』だからだ。」

カミュ

「4THバトル第1戦!! 赤井秀一VS Mr・トニック!!」

ス・・・

Mr・トニック

「!!」

秀一

「来い。始めはノーガードでいてやるよ。」

Mr・トニツク

「くっ！！愚弄するかぁ！！？フィッシンググロッドーッ！！」

Mr・トニツクは釣り竿を出した。

ザシャアア！！

Mr・トニツク

「追尾せよ！！」

ヒュルル・・・

釣り針が秀一の左肩に迫る。

ザクッ！

Mr・トニツク

「1本釣り！！」

秀一は空中に放り出された。

フワッ・・・

Mr・トニツク

「空中では逃げられぬ！！ハープーンスパアッ！！」

Mr・トニツクは槍型：RINGで秀一を襲った。

ブンッ！！

だが・・・

バキヤアアアア!!

秀一は槍を叩き折った。

Mr・トニツク

「折ったあーっ!!?」

「あの男・・・」

「強い!!」

「やっぱりカワイイです。」

ボソ・・・

タツ・・・

ビターズ

「あの男使えないわ!!お姉ちゃん!!」

マラスキーノ

「ギャハハハ!!!!Mr・トニツク!!!!負けたらどうなるかわか
つてるねええ!!!!制裁が待ってるよおおーっ!!!!」

Mr・トニツク

「ム・・・ムチャを言うな・・・!!!!」

一口にクラスと言っても、その中ではランクが存在する。

ナイトに限りなく近いビショップ、ルークに近いビショップと・・・

ビショップのランクが『1（強）』『10（弱）』の『10』に分けられたとすると、Mr・トニックは『10』そこそこののだ。

1 強

2

3

4

5

6

7

8

9

10 弱

Mr・トニック

「あの男は・・・まだ：RINGすら出していないんだぞ！！」

Mr・トニックは、後ろに下がった。

Mr・トニック

「うう・・・（あの男・・・ロマネと戦った時よりも確実に強さを増している！！息1つ乱さず：RING1つ使わず戦うとは！！某最強で最後のあれを使うしかないぞよ！！魔力を極限まで！！狙いを定めよ！！）行くぞ！！アングードアンカー！！！！」

アングードアンカーが、秀一に降り注いだ。

ドンッ！！

ドカアアア！！

マラスキーノ

「終わりだねえ・・・」

マラスキーノがそう言うと、Mr・トニツクの後ろに秀一が現れた。

Mr・トニツク

「ハア・・・」

トンッ！

Mr・トニツクは倒れた。

ドサッ・・・

カミュ

「勝者！！チームアル！赤井秀一！！」

哀

「よっしゃあーっ！！」

康太郎

「ナイスです秀一様あー！！」

秀一

「（あれから8年が経ち、確かに戦争は繰り返された。そして今、

オレは組織対戦で戦っている。」

哀

「楽勝だったじゃないのよコノヤローツ!!」

イズナ

「誉めて使わす!!アハハハ!!」

秀一は笑顔になると、こう言った。

秀一

「哀君・・・この世界が好きか？」

哀

「当たり前よ!!」

松葉

「何やの秀一さん？その質問？」

秀一

「じゃあ・・・オレと同じだな。一緒にペンデュラムを倒すぞ!!この戦争は、オレ達が今度こそ終わらせる!!」

そう、今度こそ世界に平和を・・・

次回、康太郎が出動だ!!

ファイル584：…どうする康太郎！封じられた植物戦法！！

ザッ、ザッ・・・

マラスキーノ

「負けちゃったねええ！！制裁だよおMr・トニツク！！！！」

Mr・トニツク

「こ・・・殺すのか・・・？」

マラスキーノ

「さてねえ・・・それはオマエ次第さ！！ジャンケンをしようよお
おお！！オマエにとって一世一代のヤツをねええええ！！！！」

Mr・トニツク

「ジャ・・・ジャンケン！！！！？」

マラスキーノ

「そうさ！！行くよおーっ！！ジャンケン・・・」

Mr・トニツク

「ま、待つて・・・」

マラスキーノ

「ホイ！！！！」

マラスキーノ：チヨキ Mr・トニツク：パー

Mr・トニツク

「負け・・・」

そう言ったMr・トニツクの首が、飛んだ。

ザシユッ！！

Mr・トニツク

「たわ。」

ドサツ・・・

マラスキーノ

「運がないねえ！！Mr・トニツクウーッ！！！！ギャハハハハハハハハハハ！！！！」

マラスキーノが高笑いした時、哀の怒鳴り声が聞こえた。

哀

「おいババア！！！！アンタは自分の仲間も殺すの！！？それがペンデュラムのやり方なの！！？」

マラスキーノ

「ああいい・・・オマエ・・・今何て言った・・・！！？」

松葉

「ババアっちゅうてるんやババア。ハッキリ言つてさっきから不愉快なんやよね、アンタ。その大きいダミ声も、姿形も・・・ムカツくっいたらありやせんわ！！！」

イズナ

「全くだわ。無礼極まりないわね。作法も知らぬ愚か者よ!!」

松葉とイズナにも罵^{ののし}られ、マラスキーノはついにキレた。

ビキ・・・

マラスキーノ

「ああ、今、人をスゴク殺したいーっ!!!全員来いよおコラア!!」

ビターズ

「まっ、待ってよお姉ちゃん!!お姉ちゃんには一番おいしい所をやらせてあげる。もうしばらく辛抱してて。」

マラスキーノ

「哀・・・くノ一・・・アイツら死なないと・・・絶頂なんかできないよおーっ!!」

ヒョコッ!

コアントロー

『ペンデュラムアッド構成員

』
「クラス」

ビショップ

「次。オレ出る。次、オレ、アイツらの1人倒す。マラスキーノ様見てる。オレ勝つトコ見てる。」

哀・松葉・康太郎・玲子

「ホイ!!」

哀・松葉・玲子：パー 康太郎：チヨキ

康太郎

「よしっ！！ボクの番だな！！」

哀

「東宮君！！」

康太郎

「行つて来る！！」

カミュ

「第2試合！！ペンデュラムアッド、コアントロー！！アル、東宮康太郎！！開始！！」

コアントローはランプをバラバラとくった。

そして、コアントローは1枚のカードを康太郎に向けて投げた。

シュピッ！

サクッ！

康太郎

「？」

絵柄はジョーカー。

コアントロー

「それオマエの運命・・・死。オマエ、オレに絶対勝てない理由あ

る。マジカルハンマー!!」

ブン!

康太郎

「フン!!絶対なんて絶対じゃないんだよ!!ボクがどれだけ成長したか・・・見せてやる・・・」

パラパラ・・・

ドカツ!

康太郎

「育て!!ビーンズスイップ!!」

シーン・・・

康太郎

「あれ?」

玲子

「そうか!!溶岩が満ちている上の地面じゃ・・・植物は育たないんだわ!!」

コアントローはハンマーを持って突っ込んで来た。

ドンッ!!

康太郎

「ぬぬ!!」

コアントローのハンマー攻撃を、康太郎はスコープで受け流す。

ドコ、ドコ、ドコ!!

康太郎

「（見切れる!!見切れるぞ!!60日間の自分との戦いは、シャドーヒューマン確かな手応えありだね!!）」

ザッ・・・

コアントロー

「一撃・・・一撃入ればオレの勝ち決定。一撃当てる!」

そう言うと、コアントローは康太郎の方を向いて言った。

コアントロー

「ああーっ!!あれ何!!?」

康太郎

「・・・引っ掛からない!!」

コアントロー

「（後ろ向く思ったのに!!コイツ中々やる!!）仕方ない。これ使う!スロードリュー!!」

コアントローが：RINGを発動させると、康太郎の動きが止まった。

ピーン・・・

康太郎

「あ……れ……体……が……重い……動か……ない……
・？」

秀一

「ダークネス：RINGだ。」

哀

「何ですって！？」

秀一

「オレも1つ持っている。相手の動きを完全に封じるタイプの物だ。コイツの場合、使った代償は全身を走る激痛だが……『スロードリユー』、相手の動きを鈍らせる！あのタイプの代償は確か……発動させている間視力を失う！！」

ザッ、ザッ……

コアントロー

「さて、どこ？」

康太郎

「（クソ！！こんな簡単に負けてたまるか！！それに……）」

『この世界が好きか？なら、一緒にペンデュラムアッドを倒すぞ！』

康太郎

「（ボクは白皇学院っていうお金持ちが集まる学校の高校生やつてるから、『この世界が好きか？』って聞かれても話が大きすぎて正

直ピンと来ない。ボクにとって、この世界を守るって事は・・・この世界のために戦うって事は・・・イギリスで執事修行してる野々原と、野々原と一緒にいる姉貴のために戦うって事だ。」

グッ！

康太郎は魔力を上げ始めた。

秀一

「ダメだ康太郎君！！魔力を上げるのは逆効果だ！！」

コアントロー

「感・・・じた！！」

コアントローはハンマーで康太郎を殴った。

ドゴッ！！

康太郎

「アイテテ・・・クソッ・・・！！あつ・・・体の重みがなくなつた！！よし！！ここから・・・あれ？」

康太郎が上を見上げると、コアントローが大きくなっていた。

ドン・・・

康太郎

「きょ！！巨大化してる！！？」

コアントロー

「逆。オマエ小さくなった。マジカルハンマーで一撃当てる。相手小さくなる。」

そう言うと、コアントローは康太郎を蹴った。

ゴッ！

康太郎

「ごふー！！」

ザリザリザリ・・・

コアントロー

「何度も蹴る。死ぬまで蹴る！コアントロー負けない！Mr・トニツクみたいに死にたくない！！」

ズン、ズン・・・

コアントローの攻撃が続く。

ドゴッ！！

グシャッ！！

ゴッー！！

哀

「どうにかならないの赤井さんー！！」

秀一

「難しいな・・・あのハンマーを壊すか、術者を倒せば良いのだが・
・あの体の大きさのちがい・・・そしてビーンズウィップを封じ
られている今は・・・」

康太郎

「負けないぞ。ここでボクが死んだら、最大の執事不幸並びに姉不幸じゃないか！！見ててくれよ（ムリだけど）野々原、姉貴！！ボクはこの世界のために最高の孝行をするぞーっ！！（この体の大きさのちがいじゃ打撃は効かない！！ミラクルマッシュルームも小さすぎて効果は期待できない。あれを使うしかない！！）」

ザッ・・・

リアン

「康太郎君・・・何かを考えよったみたいやな。」

コアントロー

「その顔・・・気に入らない。」

そう言うと、コアントローは康太郎を蹴ろうとした。

ヒュオッ！

康太郎は蹴りを避けると、コアントローのブーツにしがみついた。

康太郎

「ぬぐっ・・・」

コアントロー

「堕ちろ。」

コアントローは康太郎を振り落とそうとしたが、康太郎は耐えた。

そして・・・

康太郎

「秘技！！ロッキクライミング！！」

康太郎はコアントローの体を登り始めた。

ダダダダダ・・・

コアントロー

「く！！（何をする気！？）」

タンッ！

康太郎

「だぁーっ！！」

コアントロー

「！！（何も・・・起こらない・・・？）」

ゴクン！

コアントロー

「！！オ・・・マエ・・・コアントローに何飲ませた・・・！？」

康太郎

「おいしい・・・物ですよ。育て！！ビーンズウィップ！！！！」

康太郎がスコップをかざすと、コアントローの口から植物が生えてきた。

ニョローツ!!

コアントロー

「・・・!!」

コアントローは倒れた。

ズズン・・・

カミュ

「勝者!! 東宮康太郎!!」

哀

「大逆転だわーっ!!」

秀一

「キュウソ窮鼠猫を噛むとは、まさにこの事だな・・・」

コアントロー

「うぐう・・・」

コアントローは這いながらマラスキーノ達の所に戻った。

マラスキーノ

「ジャーン。ケーン。ホイッ!!」

マラスキーノ：ゲー コアントロー：チヨキ

マラスキーノはコアントローの首をはねた。

ザシュツ！！

マラスキーノ

「ギャハハハハハハハハ・・・」

哀

「アイツまた仲間を！！もう許せな・・・」

松葉

「頭に血が上りすぎやで、今の哀ちゃん 次は松葉ちゃん行っきまーす！！おい、出て来いよババァーッ！！」

ビキ・・・

康太郎、奇跡の大逆転！！

次回、松葉が？秒で勝利！？

ファイル585：優しい配慮？桜野松葉、5秒の戦い！！

松葉

「次は松葉ちゃん行っきまーす！！おい、出て来いよババァーッ
！！」

ビキ・・・

マラスキーノ

「だ、だ、誰がババァなんだい！！？私はまだ29なんだけどね
っ！！」

松葉

「ウソつけ。どう見ても40やババァ。死ね。」

マラスキーノ

「キーンッ！！ギーンッ！！！！」

ズカズカズカ・・・

ビターズ

「ま、待つてよお姉ちゃん！！あんなブスの挑発に乗るなつてば！
！お、お姉ちゃんの方が・・・全然キレイ・・・よ・・・！？」

ピタ！

マラスキーノ

「そうかいそうかいビターズウー　カワイイ妹がそう言うなら本当
だろうねえ」。　」

ビターズ

「え、ええ！ホントだってば……！！後……4人か……」

松葉

「あら。あのババアのつてこないや。つまらへんの！」

哀

「松葉ちゃん。」

松葉

「なあに？哀ちゃん。」

哀

「ペンデュラムでも……殺しちゃダメ！松葉ちゃんも女の子でしょう？私、松葉ちゃんが人殺しする所なんか見たくない！！」

玲子

「甘いわよ、哀ちゃん。これは戦争……」

松葉

「よし！約束する。」

カミユ

「第3戦！！ペンデュラムアッド・アドヴォカート！！アル・桜野松葉！！開始！！」

アドヴォカート

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビシヨップ』

「オレの：RING『ゼロキー』！！コイツはどんな物でも斬る！
！：RINGでも・・・だ！」

アドヴォカートがそう言った瞬間、松葉がミニナイフで彼の腹を裂いた。

ザンツ！

アドヴォカート

「なっ・・・何もしてない・・・」

松葉

「急所外したから。死なへんよ」

カミュ

「勝負あり！！勝者、桜野松葉！！」

わずか5秒で試合終了。

松葉

「イエイツ！！これで良い？哀ちゃん」

哀

「は・・・はい。」

秀一

「（強い・・・松葉君はもう、ナイト級だ・・・！！）」

アドヴォカート

「う．．．ジャンケンか．．．」

ヨロ．．．

マラスキーノ

「オマエみたいなクズは、ジャンケンする．．．必要もない。すぐ死ぬ。」

アドヴォカートは首をはねられた。

ボツ．．．

「次、行きますっ。アドヴォカートのようにはいきませんからっ。」

ザッ．．．

「カルーア君、がんばっちゃうよーっ」

ロリーン

イズナ

「何なの、あのブリブリは！！？あれが戦うの！！？」

次に出て来たのは、一見弱そうなロリロリ少年．．．

果たして、彼の实力はいかに？

次回、玲子の優しさが垣間見える！！

ファイル586：カルーアとアコヤ君と玲子流！！

ポテポテポテ・・・

「わーい。わーい。わーい。」

玲子

「アルで残ってるのは・・・アタシ達2人か・・・哀ちゃん。あの子の相手は任せてね！！」

康太郎

「来たあーっ！！」

秀一

「言っと思った！」

松葉

「スケベ。」

玲子

「スケベは納得いかない！！」

哀

「良いわよ。向こうも、私と戦いたがっている子がいるみたいだから。でも玲子さん、2NDバトルでシャルトって男の子に負けたんでしょ？大丈夫かなあゝっ。」

玲子

「そっという事言わなくて良いの！！男の子相手にはね・・・それな

りの・・・戦い方があるのよ。」

カルーア

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「がんばっちゃうよーっ!」

ダゴン『フッフ・・・玲子ちゃんか・・・君・・・だよね？彼女と
“知り合い”なのは・・・戦ってみたいかい?』

?????〓?????

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「・・・」

カミュ

「第4戦!ー青井玲子VSカルーア!ー開始!ー!」

玲子

「お先にどうぞ。ボーイズファーストよ!」

松葉

「あのアホ・・・!!前回負けた事全っ然懲りてない!!」

康太郎

「もっと言ってやってください!!アホって!!」

カルーア

「わあ！何て優しい人なんでしょ！！ありがとうございます。それでは・・・甘えちゃおっかな」

カルーアは服の中から：RINGを取り出した。

カルーア

「ガーディアン：RING！！出て来てアコヤ君！！」

ドズズズン！！

カルーア

「GOーっ！！」

ドン！！

玲子

「な、何！？貝！？ウェポン：RING！！ペガスランス！！」

玲子はランスを持つと、真上からアコヤガイ目掛けて突っ込んだ。

ガキン！

しかし、何ともない。

玲子

「（硬っ・・・！！）」

カパ！

アコヤ貝は口を開けると、真珠を撃ち出して来た。

ピュピュピュピュ!!

玲子

「キャ!! 真珠!!?」

カルーア

「アコヤ君は最高の防御力を持つてるの 必殺技『パールラッシュ』の味はどうですか? カワイイお姉さん。」

ドガガガガガガ!!

シュウウウウウ...

玲子

「残念だったわねえ。1発も当たらなかったわ。」

カルーア

「あら。まあ。フムウ。それでは作戦を変えましょう!!」

ロリン

カルーア

「アコヤ君を1回消してーっ...」

ヴン!

カルーア

「やっ」

ポンッ！

カルーアはスケート靴を履いた。

玲子

「ん！？スケート靴！？」

哀

「ウエポン：RINGかしら？」

松葉

「そうは見えへんけど・・・ようわからん敵やなあ。」

カルーア

「せーの・・・スイーツ！！」

ジャッ！

カルーアは玲子の周りを滑り出した。

カルーア

「スイーツ、スイーツ、スイーツ、スイーツ。」

しばらく回った後、カルーアは止まった。

カルーア

「よし！！行きますよーっ。玲子さん！プハーツ・・・」

カルーアはサザエの笛を吹いた。

ブオオオオオ！！

すると、玲子の真下に何かが見えた。

ヌラ・・・

玲子

「！！」

地面が割れると、巨大な怪魚が現れた。

バシャッ！！

玲子

「（スケートで円を描いてたのは・・・コイツの出現場所のマーキングだった！！）」

怪魚は玲子を飲み込んだ。

バクン！

ザブン！！

哀

「玲子さんーっ！！」

カルーア

「ネイチャー：RING・スピカラです。これでカルーアは炎海のお友達を呼べるんですよ！」

水面に血が浮かび上がった。

ザア・・・

哀

「（血！？玲子さん・・・の・・・！？玲子さん・・・）れっ・・・
玲子さんーっ！！」

ザパアアアッ！！

哀が叫ぶと、飛び上がった怪魚に切れ目が入った。

ピシ・・・

哀・カルーア

「！！」

ズバアアア！！

玲子

「哀ちゃん、呼んだ？」

玲子が外に飛び出すと、怪魚は地面に落ちた。

ドオオオオン！！

玲子

「ペガススランス！さっきの貝は失敗だったけど、斬れ味は抜群よーっ 魚のエサになるなんて、シャレにもならないからねえ。」

カルーア

「ヤダ・・・」

カルーアの脳裏に、首を斬られたMr・トニック、コアントロー、アドヴォカートの姿がフラッシュバックした。

カルーア

「首を斬られるのはイヤですう！！アコヤ君！！」

ドン！！

カルーアはアコヤ貝を召喚すると、貝の口の中に入った。

ヒョイ！

バクン！

玲子

「そろそろ・・・潮時ねえ。」

キュル・・・

ギュルルル・・・

カルーアを入れたアコヤ貝が、回り始めた。

カルーア

「ローリング・・・アコヤ君アタックですうーっ！！！！」

ドンッ！！

アコヤ貝は玲子に突っ込んだ。

玲子

「上等よ。」

アコヤ君の中で回転してるカルーアは、目を回していた。

カルーア

「（この勝負に負けたら・・・カルーアもマラスキーノ様に首を斬られるかもしれません。勝たせてください、玲子さん！！）」

近づいて来るアコヤ貝に対し、玲子は両腕に魔力を集中させ、一気に冷撃を放った。

玲子

「フロスティックアイ！！！」

ヒュドン！！

哀

「（氷の：RING！！）」

バフツ！

アコヤ貝の口が開くと、カルーアがふらつきながら出て来た。

ザ・・・

カルーア

「へ．．．へ．．．へ□へ□ッ．．．」

フラフラ．．．

カルーアは倒れた。

パタ．．．ン！

カミュ

「勝者！！玲．．．」

玲子

「ちょっと待ったーっ！！」

カミュが勝利宣言をしようとしたその時、玲子が止めた。

見ると、玲子が大の字で倒れていた。

玲子

「アタシももうバテバテよ。って事は．．．両者ドローで良いですよ？」

カミュ

「あ、あなたさっきまでピンピン．．．」

玲子

「バテバテよ、文句ある！？」

哀

「玲子さん．．．（あの子を助けようとしてるんだわ．．．）」

カルーア

「れ．．．玲子さん．．．」

カミュ

「．．．第4戦！！両者、ドロー！！」

カルーア

「（玲子さん．．．ありがとう．．．）」

哀

「やるじゃないのよ玲子さんーっ！！私見直した！！」

イズナ

「意外と聖女じゃない！」

玲子

「イヤーン、もっと言ってえ。これが．．．男の子とやる玲子流『それなりの戦い方』ですわ。シュウちゃんも勉強しなきゃダメよ！」

秀一

「なぜオレに言う？」

康太郎

「ちよつと待つて．．．何か様子がおかしいぞ．．．！！」

そう、カルーアは今、制裁を受けようとしていたのだ．．．

カルーア

「どうして・・・何でジャンケンなんですか！？カルーア・・・ドローでしたよ！？」

マラスキーノ

「敵に情けをかけてもらって恥ずかしくないのかいいーっ！？オマエは負けたんだよブタアア！！だから制裁なんだよおおカルーアーッ！！」

カルーア

「わかりました。ジャンケンに勝てば、首斬りはなしですもんね？」

マラスキーノ

「ああ。そうともそうとも。ジャーンケーン・・・ホイ！！」

マラスキーノ：パー　カルーア：チヨキ

カルーア

「勝ったっ・・・」

カルーアがホッとしたその時、彼の腹を炎の剣が貫いた。

ズン！！

カルーア

「うぐ！？」

ビターズ

「アタシが・・・グーよ。」

マラスキーノ

「ヒヤハハハハハ！！！」

カルーア

「れ．．．玲子さん．．．」

その言葉を最後に、カルーアは絶命した。

ガク．．．

玲子

「カルーア．．．」

哀

「テツ．．．テメエーッ！！！」

ビターズ

「ヒヤハハハハハッ！！！」

本当ならカルーアはアイコだったのに．．．

あまりにも非情なビターズに、哀、ついに怒髪天！！

次回、ビターズの逆襲！！

ファイル587：逆襲のビターズ！ヒュドラVSガーゴイル！

ドサ・・・

ビターズ

「ヒヤハハハハハッ！やっぱり男を殺すのは楽しいわーっ！」

哀

「デメエーッ！」

哀は突っ込んだ。

ドンッ！！

カミュ

「しっ・・・試合開始ーっ！！」

ビターズ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショッブ

「ヘッ・・・アンタと戦うのを待ってたわよ、哀！！フレアドアース！！」

ビターズは炎弾を連発した。

哀は炎弾を破壊していくが、急に飛んで来た巨大な炎弾を避けきれず、炎弾に当たった。

ゴッ！！

ズシャッ・・・

哀

「チッ・・・チクショーツ！！バージョ３！！ガーゴイル！！」

哀がガーゴイルを召喚した。

ドンッ！

ビターズ

「来たわね！ディストリアでアタシを殴ったガーディアン！！それ
相応の：RINGは用意しといたわ！ガーディアン：RING！！
ヒュドラ！！」

ビターズは炎のガーディアンを召喚した。

突っ込んで来たガーゴイルを、ヒュドラはこともなげに殴り飛ばした。

ゴッ！！

哀

「・・・ガーゴイルが・・・力負けした！？チクショウチクショウ・・・
チクショウチクショウ！！」

秀一

「マズイな。感情に流されて続けている！」

松葉

「魔力を少しも練り込んどらへんな！あの状態じゃ、いくらゴーゴイルでも……」

ビターズ

「ああいい……デストリアの地底湖では世話になったわよねえ・
・今日はそうはいかない！！なぜならここは炎の空間！！炎使い
のアタシにとってはその力を何倍にもしてくれるのよ！！今のアタ
シはナイト級にも匹敵する！！そんなにカルーアを殺した事が腹立
ったかバカヤロウ。アンタは敵にも同情する甘ちゃんかってーの！
！」

マラスキーノ

「良いよおーっ、さすが妹おーっ！！惚れ惚れしちゃうよお！！」

ビターズ

「許してくださいって言うてみな。考えてやらない事もないのよ！
？ヒヒ……」

哀

「誰が……誰がアンタみたいなヤツに謝るかぁ！！もう一回よ！
！もう一回ガーゴイル！！」

そう叫ぶ哀の前に、イズナがいた。

哀

「イズナ……？ガーゴイルだつてば……」

イズナ

「イヤよ。しっかりしなさい愚か者ーっ！！」

イズナは哀を殴った。

ドゴツ!!

イズナ

「確かにあなたの怒りはわかる!! ヤツは女として最低だわ!! だけれどね・・・ヤツはそうする事によってあなたを挑発し、あなたの戦い方を荒くしたのよ!! 頭を冷やさない。この私の使い手でしょうが!!」

哀

「スーッ、ハーツ・・・ありがとね。イズナ!」

イズナ

「じゃあ行きますか!! あの女、無礼を通り越して鬼畜だわ!! プッ倒すわよ!!」

哀

「おい。ビターズ! 許してくださいって言ってみなさいよ。許さないけどね。」

ビターズ

「だっ・・・誰にも言うてやがるのクソヤロウ・・・!! 喰らいなさいビッグフレアドアース!!」

哀の言葉にキレたビターズは、巨大な炎弾を乱射して来た。

哀

「バージョン2! シャボンガトリンガー!!」

哀はランチャーから泡爆弾を乱射し、炎弾を破壊した。

ゴン、ゴン!!

ビターズ

「こっ・・・このガキヤゝツ!!」

哀

「ビターズ。あなた達はどうして仲間も殺せるの？」

ビターズ

「ハア？簡単な事じゃないのよバァーカ!!仲間だと思ってないからよーっ!!アイツらは所詮使い捨ての道具なのよ!!道具が壊れたら捨てる!!使えない道具になんか用がある!？」

哀

「・・・やっぱりそういう答えか・・・可愛いそんな子よ、あなたは。」

ビターズ

「かわいそうなのはアンタよ哀ーっ!!ネイチャー：RING!ヒートクレバス!!」

ピシィ・・・

哀の足下がヒビ割れる。

ゴッ・・・

哀はその中に落ちて行った。

ズズズズズン・・・

マラスキーノ

「さすが！！妹お！！」

ビターズ

「フッ・・・フッ・・・アル、キャプテン死亡！！組織対戦終了
よお！！！！」

カミュ

「勝者！！ビタ・・・」

カミュがそう言いかけたその時、地面が吹っ飛んだ。

ドン！！

ビターズ

「？」

ビターズが振り返ると、哀がゼリー状の物体に包み込まれていた。

プルルン・・・

ビターズ

「なっ・・・何よあれえーっ！！！！」

哀

「イズナ・バージョん5『ディフェンスジェリー』！！どんな重た

い攻撃も、このジェリーは吸収しちゃうのだ!!」

リアン

「なっ・・・何やあの能力は・・・!!? ガーディアンでもない! ネイチャーでもない!! 属性が良くわからへん・・・!!」

ビターズ

「チ・・・チクショウチクショウチクショウ!! チクショウ!! チクショウ!! ヒュドラ!!!」

ドンッ!

哀

「ガーゴイル!!」

ビターズ

「勝負よーっ!!!」

ガーゴイルとヒュドラは、再びぶつかり合った。

ガキン!

マラスキーノ

「良いよお!! そのままガーゴイルの腕へし折ってやりなあ!!」

ビターズ

「(ここは炎原!! 炎のガーディアン・ヒュドラは100パーセント以上の力を出す事ができる!! 負けるハズがない!!)」

哀は目を瞑っている。

秀一

「わかるか松葉君？」

松葉

「うん。さつきとは全然ちがう・・・！魔力が通っている。それもその上がつて行くスピードがハンパやない！！まだ上がる・・・まだ上がったる！！」

玲子

「さあてどうなる！？」

ビターズ

「この大自然全てがあなたの味方よ！！魔力MAX！！行けヒュドラア！！！」

ビターズが叫んだその時、哀は目を見開いた。

それと同時に、ガーゴイルがヒュドラの両腕をもぎ取った。

ブチィ！！

ビターズ

「なっ・・・」

ガーゴイルはシェリングガーゴイルレイで、ヒュドラを吹っ飛ばした。

ドン！！！！

ビターズの手の：RINGが割れた。

パリン！

ビターズ

「ウソ！！？」

ビターズの前に、ガーゴイルが降り立った。

ズン！！

ビターズ

「ハッ・・・！！」

哀

「次はあなたよ。ビターズ！！」

ビターズ

「わ、わる・・・悪かったわ、ホント反省してる。ホントだって、悪かったって・・・」

哀

「ブツ飛んで反省しなさい。」

狼狽えるビターズを、ガーゴイルが殴り飛ばした。

ドガア！！！！

ビターズ

「キャーッ！！！！」

キラーン・・・

ビターズは星になった。

カミユ

「第5戦！！灰原哀VSビターズ！！勝者、灰原哀！！」

哀

「プハツ・・・スッキリしたーっ！！」

非情な女に、哀の鉄拳成敗が炸裂！！

次回、ヒステリックなマラスキーノ相手に松葉が本領を発揮する！

ファイル588：桜野松葉VSマラスキーノ！唄え、クレイジーメルト！！

マラスキーノ

「・・・よくも・・・よくも！！よくもカワイイ妹にあんな事してくれたねーっ！！哀しい！！！！6戦目もテメエが出て来い哀！！ビターズの仇を討ってやるよおーっ！！」

哀

「上等よ。あなた達姉妹にはムカついてるからね！！」

そう言っ出て出ようとした哀を、松葉が止めた。

松葉

「アカンで哀ちゃん。今の戦いでだいぶ精神力を使ったハズやで。あのババアの相手はアタシに任せて下がりなさい。」

哀

「松葉ちゃん・・・」

松葉

「おーい！！わかったかババア！！松葉ちゃんが相手してやるで！喜べーっ！！」

秀一

「確かに松葉君は3戦目、一瞬で終わらせたからな。」

玲子

「体力有り余ってるわね！」

マラスキーノ

「ババア・・・ババアって・・・そんなに私を絶頂させたいのかい・・・？ 相手になってやるよぉーっ！！くノー！！！！」

松葉

「そつのつ前にーっ・・・フフーン」

カチャ！

松葉は別の：RINGをつけた。

康太郎

「あ！：RINGをつけ替えた！！」

秀一

「上級の：RINGだろう。松葉君は決してマラスキーノをナメていない。トウエンフォルアツク二十五星座。ナイトの1人だからな。」

カミュ

「4THバトル最終戦！！桜野松葉VSマラスキーノ！！開始！！」

ユラ・・・

マラスキーノ

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ナイト』

「まずは・・・軽くイッちゃっようおお。フレアスパイク！！」

炎のトゲが、松葉に襲いかかった。

ガシャガシャガシャ！

松葉はそれを華麗に避ける。

松葉

「よっ・・・ババア。ナメてんの？こんな攻撃じゃ康太郎君も倒せへんよ。」

マラスキーノ

「私は美しい・・・ブサイクなオマエには、わからないようだから教えよう。周りをよく見てみな！！」

松葉の周りのトゲが、動き出した。

ズズズズズ・・・

マラスキーノ

「スパイクサンド！！」

ガシャ！！

壁が松葉を挟み込んだ。

マラスキーノ

「もう1度言つてやるよ！私は美しい。オマエはメスブタだくノー！！」

マラスキーノがそう言った時、松葉が壁を何かで押し返した。

ギギギギギギ・・・

松葉

「い、今は少し・・・驚いたでババア!!」

そう言うと、松葉は壁を破壊した。

ドゴォ!!

松葉

ファイアリウイング

「熱風蝶翼!!」

哀

「あ、あれ・・・松葉ちゃんが空を飛ぶ時に使ってる翼!!」

秀一

「ただの翼を忍者が使うと思うか？あれは・・・」

マラスキーノ

「そうか・・・オマエ・・・炎風使い!!」

ヒュオオオオオ・・・

マラスキーノ

「このメスブタめ、炎風使いかい!!私の炎と・・・どっちが強いかねえーっ!!」

マラスキーノは再び炎のトゲを出した。

パギパギ・・・

松葉は翼でトゲを全てなぎ払った。

松葉

「相殺。アンタの炎はアタシに絶対当たらん。ざーんねーんでしたーっ」

そう言うのと、松葉は翼をはためかせて風を飛ばした。

ヒュン！

風がマラスキーノの左頬をかすった。

チツ！

マラスキーノ

「あっ・・・私の顔にキズ・・・私の美しい顔にいいっ！っ！っ！やってくれたねメスプターツ！！！！本気でえ・・・絶頂^{イカ}させてもらうよおおっ！！」

そう言うのと、マラスキーノの髪がざわめきだした。

ザワ・・・

マラスキーノ

「ネイチャー：RING『マスターヘアー』！！！！」

ゴゴゴゴゴ・・・

マラスキーノは髪を変化させると、周りの地面に突き刺した。

ドン、ドン、ドンー！

松葉

「髪でバリアを張ったつもり！？そんなもん熱風で斬ってやるでババア！」

松葉は翼をはためかせた。

その時・・・

ズンー！

松葉の下腹部に髪が突き刺さった。

松葉

「ゴホッ・・・！！（これは・・・硬質化した髪の毛！？地炎を碎いてアタシの懐に入ってきた・・・しもた・・・！！）」

哀

「松葉ちゃん！！」

康太郎

「あの・・・松葉さんが！！」

マラスキーノ

「風使いには1つ弱点がある！！自分の中心は台風の目！つまり・・・無風空間が存在する！！その深手じゃもう風も生み出せないだろう！？ええーっ！？メスブタア！！！！マスターヘアーツ！！！！」

ズシヤアアア！！

マラスキーノはマスターヘアーで松葉を痛めつけた。

哀

「もう止めてーっ！！松葉ちゃんの負けよー！！」

マラスキーノ

「お生憎様だねえ・・・ビターズは男、私は女を殺すのが大好きなのさあ！！昔ある所に4人の家族が住んでいました。父、母、姉、妹・・・ある時病気で父が死にました。後夫と再婚した母は変わりました。姉妹に食べ物も与えず、毎日ムチで2人を殴りました。2人には心に大きなキズがつき・・・ある日ついに・・・2人は斧で眠っている母親と義父を殺しました。どうだいーっ！！泣ける話だろう！？その姉妹が私達さあーっ！！私はくノ一を殺して次のバトルに出る。そして次は哀！！オマエだあ！！」

松葉

「泣ける話ねえ・・・自分達だけが辛い思いをしてきたみたいな顔すんなや。殺したくなくても・・・殺さなアカン人間かておるんや！！！」

哀

「（松葉ちゃん・・・！？）」

松葉

「ゴホッ・・・ちよいと・・・ヤバイね・・・仕方ないや。コイツを使うか！出て来な・・・！！」

松葉は人形のようなガーディアンを召還した。

ボンッ！

マラスキーノ

「死に損ないが・・・！！それがオマエの使う最期の：RINGになるよ、メスブタ！！」

松葉

「ガーディアン：RING・・・クレイジーマルト！！」

人形のファスナー状の口が開いた。

ジイイ・・・

『おはよう松葉アタイだよ！！スクラップのクレイジーマルトさ！！今日アタイは何をすればいいんだい！？何てったって外に出たのは何日ぶり！？何ヶ月ぶり！？それとも何年ぶりかもしれないよねえ！！道具箱のような所にアタイをずーっとしまっただけ！！』

松葉

「キ、キズに染みる・・・！！こっちで大声出さんとしてくれへん！？今日の獲物は・・・あれやで。」

髪を振り乱したマラスキーノ。

『ヒャーッ！！またスゴイヤツがいるよーっ！！キラキラのゴテゴテ！！出しゃばりなシスター達の中でもあんなヤツはいないよ！！』

松葉

「あのババア倒してくれへん？」

『イヤよ！！アタイは今、久々に自由なんだ！！何をしてもかまわないの！！花を摘んだり石コロを動かしてみたり小さな子供達と遊ぶ事だっしていいのさ！！んう！！？』

メルトはキズだらけの松葉を見た。

『松葉死にそうなキズじゃないのさ！？誰にやられたの！？そうか！！アイツね？アイツなのね！？』

哀

「うっ、うるさい：RINGねえ・・・」

康太郎

「全然強そうにも見えないし・・・」

秀一

「（松葉君が戦闘前につけ替えたくらいの：RINGだ。何も無いハズがない！！）」

『許せない！！許せないよ！！アタイのお友達にあんな事をして！！クレイジーメルトは今、怒っているのさ！！！！』

メルトは突っ込んだ。

ゴウ！！

マラスキーノ

「しゃらくさいねーっ！！！！マスターヘアー！！！！」

マラスキーノは髪を伸ばした。

ヒュン！

メルトはそれを華麗に避ける。

『アンタもクレイジーかい！！？でも残念！！アタイはもっともつとクレイジーなのさ！！！』

メルトはマラスキーノの頭上を回り出した。

グルングルン・・・

マラスキーノ

「！？何だいつ・・・！？何をする気だい、この人形みたいなガイデイアンは！？」

松葉

「唄え。クレイジーメルト！！！」

メルトは唄い出した。

『井戸の中見りやイタチが1匹、助けようにも助からない なぜってヤツには羽がないからね 井戸の中にはアタイは入れない なぜってメルトに染みがつくからね！！！！』

ビリビリ・・・

マラスキーノ

「なっ・・・何だぁ！？この唄声は・・・！？頭がグシャグシャに

なるっうーっ！！！」

秀一

「怪音波……！！人間を不快にさせる音波を造り出すガーディア
ン！！」

玲子

「ここから聴いても頭が痛い！！マラスキーノならたまったものじ
やないわよこれ！！」

哀

「んーっ！！」

マラスキーノ

「（こ……こんな所で……負けられないんだよおお！！ビター
ズの仇討ってやるんだ！！見ててよビターズ、姉ちゃんが頑張って
る所……！！ビターズ……カワイイビターズ……私のたった
1人の肉親……）」

その時、松葉の風がマラスキーノの腹部を裂いた。

バシユ！！

マラスキーノ

「あ……（一瞬で……）」

マラスキーノは倒れた。

ズン……

マラスキーノ

「（ガーディアンを消して、風に切り替えた・・・ビター・・・ズ・・・絶頂・・・できなかったよぉ・・・）」

カミュ

「桜野松葉VSマラスキーノ！！勝者、桜野松葉！！！！」

哀

「やったわ松葉ちゃんーっ！！」

玲子

「わーっ！！」

康太郎

「ん？」

倒れているマラスキーノの元に、松葉が歩み寄った。

松葉

「ナイト級のアンタやったら知ってるハズや。答えてもらっで・・・『ディアナ』という女を知っているな？」

マラスキーノは驚いた表情でこう言った。

マラスキーノ

「な・・・なぜ・・・クイーンの名を・・・！？」

松葉

「・・・やっぱりな。点と点が繋がった。アタシは忍者の国に1度戻らなアカン・・・」

松葉がマラスキーノから聞き出したのは、ディアナというクイーン
の情報・・・

果たして、彼女と松葉の関係とは・・・！？

次回、哀達が忍者の国に向かいます！！

ファイル589：忍者の国、インセディアへ（前書き）

ペンデュラムアッドの階級

キング

クイーン

ナイト

ビショップ

ルーク

ポーン

ファイル589：忍者の国、インセディアへ

カミュ

「4THバトル終了！！生き残ったメンバーを・・・」

玲子

「待つて!!」

玲子はカルーアを抱えていた。

哀

「玲子さん・・・」

玲子は海まで行くと、カルーアを海に降ろした。

ザパ・・・

玲子

「安らかに眠るのよ・・・カルーア君・・・」

カルーアは海の底へと沈んで行った。

ザアアア・・・

カミュ

「・・・4THバトル終了です。生き残ったメンバーを・・・ディールゼイヴへ!!」

哀達はディールゼイヴへと帰って来た。

ヴン！

「英雄達のお帰りだ！」

「スゴイぞ！全戦全勝じゃないか！！」

「松葉ちゃん。」

松葉が声のした方に振り向くと、コナンがホーリー：RINGを持つて立っていた。

カッ！

松葉のキズは、一瞬にして塞がった。

スウ・・・

松葉

「これだけ深いキズを一瞬で直した・・・アンタもまた魔力が上がったな？」

コナン

「うん！！ついさっきまでシャドーヒューマン修業してたのだ！」

「ビターズブツ飛ばした時はスッキリしたわ！！さすが哀ちゃん！！」

哀

「イヤッ。」

「赤井もよーやった!!」

秀一

「当然だ。」

「玲子さんステキだったーっ!!」

「結婚してーっ!!」

玲子

「浮気はするわよ？良い？」

リアン

「アンタら今回は100点の戦い方やったで。特に松葉ちゃんはナイトを1匹倒したからな!!」

松葉

「リアンちゃん。話がある。」

松葉はリアンに耳打ちした。

リアン

「何や・・・と？」

カミュ

「えー・・・アルの皆さんに報告があります。明日の組織対戦は1日延期になりました。」

秀一

「なぜだ。」

カミュ

「ダゴン様の命令です。彼は明日行きたい所があるらしく・・・そうするとあなた方の戦いが観覧できないのが残念なので、そうしたようですね。」

哀

「よし！たまにはゆつくりしますかー！」

玲子

「よっしゃ！デートよー！」

康太郎

「あなたそればかりですねえ・・・」

カミュ

「それでは・・・解散・・・」

哀達はディールゼイヴ城で食事をしていた。

哀

「イヤーッ、勝利の後のゴハンはおいしーっ！ー！」

康太郎

「本当ですねーっ。」

松葉

「みんな！話がある・・・」

松葉の言葉に、哀達は一斉に振り返った。

松葉

「明日、アタシと一緒にインセディアに来て欲しい。」

康太郎

「インセディア？インセディアって・・・？」

リアン

「忍者の国インセディア！！他の国との国交をほとんど持たずにおる、地球の中でも未知なる場所や！！」

松葉

「みんなにも関係がある大事な話がある。アタシを信じて来て欲しい。」

コナン

「ボク達にも・・・関係がある・・・？」

哀

「良いじゃない！！忍者の国なんてワクワクするわ！！みんなで行きましょう！！インセディアへ！！」

翌日

松葉

「ほな・・・いくで。このメンバーを・・・インセディアへ!!」

カツ!!

ヴン!!

哀達は、神秘的な場所に着いた。

コナン

「こ・・・ここが・・・」

リアン

「インセディア!!」

哀

「忍者の国・・・そして・・・松葉ちゃんの生まれた所!!」

松葉

「あの浮いてる城が目的地や。行くで。」

イズナ

「うう・・・ん・・・」

哀

「どうしたのイズナ？」

イズナ

「私はここを知っている！！私はここに来た事がある・・・！！？あるいは・・・」

哀達は門へと歩いて来た。

「アリス様・・・アリス様ではありませんか！！お帰りなさい！！」

松葉

「ただいま、ティム。門を開いてちょうだい。」

ティム

「ハッ！！しかし・・・この者達は・・・？いかにも怪しげな連中に見えますし・・・インセディアの掟として他国の者は・・・」

松葉

「仲間や。特例として入れてあげて欲しいの。」

ティム

「ハッ・・・はい！！」

ガコン・・・

哀達は門の中に入った。

「あーっ！！アリス姉様！！」

「アリス様？」

「アリスだ!!」

「アリス!!何年ぶりだ!？」

「お帰りなさいアリス様!!」

「リリやクレイジーマルトも元気か？」

松葉

「まーな。皆も元気そうで何よりや。」

「ところであの者達は？」

松葉

「子分みたいなものかな!」

秀一

「誰がだ!!」

「アリス姉様、外の国のお話聞かせて!!」

松葉

「ゴメンな。今日は大ババ様とお話があるんや。」

「!見つけたのか・・・!？」

コクン!

「ならば早く城へ!!」

康太郎

「あれが城？浮いてるし。どうやって行けば良いんですか？」

松葉

「このメンバーをインセディアの城へ！！ドロン・リドルウー！！」

松葉の呪文で、哀達はワープした。

ウンー！！

哀

「わぁ！！スゴイ！！」

秀一

「（魔力に満ちた国だ・・・全ての民にそれを感じた。小さな子供にさえも・・・）」

哀達はしばらく歩き、松葉が急に止まった。

松葉

「着いたで。」

哀達は奥へとたどり着いた。

「久方じゃのう、アリス・・・帰って来たという事はつまり・・・」

松葉

「はい、大ババ様。ディアナを見つけました。」

松葉の言葉に、コナンは過敏に反応した。

コナン

「！！！（ディアナ・・・ディアナって・・・）」

松葉

「ペンデュラムアッドを御存知ですか大ババ様？」

「ウム。8年前世界に戦火を灯した者達じゃな。」

松葉

「その中のクイーンです、ディアナは！！アタシの姉はインセディアを捨て、そして・・・素性を隠してベビーシッターとなり・・・コナン君を育てた者の1人となった！！」

康太郎

「ど、どういう事ーっ！？えーっとクイーンってのもペンデュラムですよ？」

リアン

「ナイトの上にいる2人の存在の1人や！！8年前の組織対戦では、2人共見つけれず、決着がつかんかったと言つてええ！！・・・見つかるワケがあらへん！！味方やと思つてた中に、ソイツはおつたんやからな！！」

哀

「クイーンが松葉ちゃんのお姉ちゃん！？どういう事なの！？」

松葉

「ディアナは・・・昔から何でも欲しがった。食べ物もオモチャで

も・・・そしてその欲望はついに、爆発して大事件になった！！インセディアに存在した897個の特殊能力を持った：RINGを、盗んでインセディアの外に逃げた！！」

「ウム・・・10年も前の事じゃったな。ディアナは、インセディアを裏切り、捨てた反逆者じゃ。禁を破りし者は掟として身内が何とかせねばならぬ。アリス・・・ディアナを殺せるか？」

松葉

「はい。殺します。」

哀

「（殺す・・・松葉ちゃん・・・！！！！）」

松葉に課せられた、実の姉を殺す指令・・・

果たして、哀の反応は・・・？

次回、インセディアに侵入者が・・・！？

ファイル590：ディアナの真実

哀

「そんなのダメよ！！松葉ちゃん約束したじゃない！！それにいくらペンデュラムの人間だからって・・・お姉ちゃん・・・なんでしょ？」

「少女よ・・・何の約束を交わしたかは存ぜぬがこの件は特別じゃ。アリスはディアナの唯一の肉親・・・肉親が手を下さねばならんじゃない。それも、インセディアの掟・・・！！」

哀

「松葉ちゃん・・・どうして黙ってるのよ！本当にそれで・・・」

リアン

「哀ちゃん！！ここから先のディアナの話は・・・アタシが語つたろう。12年前・・・アタシやリリー姉達が新米FBIやった頃の話や。」

康太郎

「リアンさんってFBI特別部隊のナンバー2じゃなかったんですか！？」

リアン

「その頃FBIはあつたが、特別部隊は存在しとらへん。ペンデュラムがおらんかったからな。不幸が起こった。アタシ達が世話になつていたベビーシッターが亡くなつたんや。当時まだ幼かったアタシ達はたくさん泣いたな。見てるジェイムズさん達が痛いくらい泣いた。アタシ達を心配した当時のボスは、新しいベビーシッターを

世界中の民に求めた。そやけど、なかなかボスのおめがねにかなう人は現れなかった。2年が過ぎた。1人の女性が現れたんや。」

秀一

「その女が・・・ディアナ！」

リアン

「誰にでも優しくかったディアナはアタシ達もすぐに気に入り、実の親子のように仲良くなった。聞いた話では、新一君も彼女に世話になったと聞く。そやけど、そんな幸せは長くは続かんかった！！さらに2年後・・・アタシが11歳の時！ペンデュラムアッドを名乗る集団が世界のあちこちを潰し始めた。第1次現代世界対戦！！その軍勢に対抗するため、FBIの捜査官を中心に世界中の戦士を集めた。世界を守る軍団、特別部隊はこうして生まれた。するとディアナは言った、『この：RINGを使いなさい。きっとペンデュラムアッドとも戦える事でしょう。』とアタシ達に：RINGを差し出したんや。こうしてゲームを持ちかけて来たペンデュラムアッドに明美さんを中心とした特別部隊は戦った。たくさん犠牲・・・そして明美さんの胸のキズを代償に我々は勝利した。」

『負けか。しかし終焉ではない。死する事のないダゴンは、またいつか蘇る！！その時戦争は再び繰り返されるのだ！！』

リアン

「忌まわしい予言の通り、再び戦いは始まった！！ペンデュラムアッドは死んどらんかったんや！！ペンデュラムアッドの本当のトップはダゴンやない。その上に2人、キングとクイーンが存在した！アタシ達は血眼になって捜したが、結局ヘビの頭は見つからなかった・・・」

玲子

「その1人が・・・ベビーシッターの女性!!」

康太郎

「リアンさんや新一さんを、かわいがっていた人・・・」

リアン

「まさかベビーシッターがペンデュラムの中心人物やとは誰も思わへんで。そやる？アタシ達に：RINGを与え、組織対戦を勝利に導いた張本人なんやからな。しばらくして先代ボスが病に倒れた頃、ディアナはそのドス黒い本性の実体を現し始めた。」

『もつと美味なる物を私に持つておいで。欲しい、まだ欲しい。もつと美しい服を、宝石を私に持つておいで。欲しい、まだ欲しい。世界中に存在する魔力を秘めた：RINGを私に返しておくれ。欲しい、まだ欲しい。この世界が・・・欲しい。』

リアン

「自作自演やったんや。ペンデュラムを作り：RINGを渡したんも、特別部隊を作り：RINGを与えたんもディアナ。」

秀一

「1度敗戦にしたのは、信用を得るための故意か・・・もしくは想像以上の伏兵を与えてしまった失策か・・・」

松葉

「イズナとコナン君達が狙われた辺りから、ペンデュラムアッドが怪しいと思うとった。そやからコナン君達の仲間になる事で、クイーンの正体を知ろうとしたんや。ビンゴやったってワケや・・・」

ダゴン『それではクイーン・・・本当によろしいのですね?』

ディアナ

「・・・」

コクン!

松葉

「秀一さん。不死の絆をつけられたんはいつ?」

秀一

「8年前。前回の組織対戦の時だ。」

松葉

「不死の絆の能力・・・あれは多分、ディアナがダゴンに与えたハズ・・・その呪いの解き方も、ダゴンの殺し方も知っているのはディアナ・・・」

そんな中、ダゴン達が門の前に現れた。

ザッ!

ティム

「何だオマエらは!?!ここはインセディア!!侵略のつもり・・・」

ズバア！！

ティム

「か・・・」

ダゴン『侵略ねえ・・・クイーンの生まれた国だから、放っておいただけ。そのクイーンが許したんだから・・・好きにして良いのさ。』

ティムを斬り刻んだダゴンは、そう言った。

哀

「ちょっと！！オバサン！！」

哀は長老に詰め寄った。

哀

「いくら掟だからって姉妹で殺させ合うなんてヒドイわよ！！アンタには血も涙もないの！！？」

松葉

「（あ、哀ちゃん・・・大ババ様に向かって何て無礼な・・・）」

「この子供が元黒の組織の科学者か！フオフオフオ！元気が良い。」

コナン

「哀ちゃん！！たくさんの町や村を見たよね？哀ちゃんも！！ペン

デラムアッドにみんな殺されて・・・たくさんの人が辛い思いをしている・・・かわいがってくれた人と戦う事はとても辛いけど・・・あの人が原因で戦争が起こっているのだとしたら・・・ボクは日本警察の救世主として“ディアナ”を倒します。」

哀

「（重い。コナン君がこんなに重いなんて・・・）」

「世界の平和を乱したのはインセディアの民であるディアナじゃ。その責任は取ろう。あなた達に協力する。」

「えー・・・あなた・・・」

リアン

「？」

「そしてあなた・・・あなた・・・あなた・・・あなた・・・あなた・・・あなた・・・」

長老の側にいた女は、リアン・康太郎・秀一・瑛祐・玲子・ユーリ・コナンを次々に指差した。

「新しい：RINGを授けましょう。ついて来てください。」

玲子

「そんなにヘコンじゃダメよ、哀ちゃん！！組織対戦に参加した時点で覚悟は決まってたハズよ？」

リアン

「ゲームやないんや。戦争なんや。」

秀一

「オレはオレの戦いをする。君も自分の戦いを見出すんだな。」

へこむ哀に玲子達は次々に激励をかけると、女について行った。

哀

「（戦争・・・私の戦い・・・私は、甘かったのかもしれないわね・・・）」

イズナ

「しっかりしなさいバカ者ーっ!!」

パシィ!!

気落ちする哀を、イズナがはたいた。

イズナ

「悪は滅さなきゃいけない!! 悲劇が繰り返されないようにね!!」

そんなイズナに、長老が意外な一言を言った。

「なつかしいねえ、イズナか!! ここにあった物じゃ・・・」

松葉

「ええーっ!?!」

イズナ

「なっ・・・私がここで・・・!!?!」

「イズナはディアナが盗んだ：RINGでも特別じゃ。なぜなら・・」

そこまで言った時、突然爆発音が聞こえた。

ドンー！！

哀

「！何の・・音！？」

哀・松葉・イズナは、少し走った。

渡り廊下から外を見ると、所々で爆発が起こっていた。

ドン・・・

ドオン・・・

松葉

「インセディアが襲撃されとる・・・！！ディアナ・・・ついに自分の生まれた国まで・・・許せ・・・へんっ！！！！行くで哀ちゃん！！！！」

哀

「ええ！！！！」

・ ついにインセディアにまで襲撃範囲を広げたペンデュラムアッド・・

身勝手な姉の行い、許すわけにはいかない！！

次回、哀VSルーク38人!!

ファイル591：激闘！哀VSルーク38人！！

ゴオオオオオ・・・

インセディアの一角が、火の海になっている。

「パパーッ。ママーッ。ママ・・・」

泣いている子供。

その子供を、松葉が抱き締めた。

ギユ・・・

松葉

「ゴメンね・・・アタシの姉のせいでこんな・・・」

松葉に1人の女が近づく。

「アリス！敵は『ペンデュラムアッド』を名乗っていた。我々も忍法で応戦したが・・・人数が多すぎた。」

松葉

「ヤツらはどこに！？」

「恐らくは西の塔と、東の塔へ・・・」

哀

「やつぱり：RINGが狙いか！」

松葉

「2手に別れて先回りしよ、哀ちゃん！！西の広場まで飛ばすで！！」

哀

「うん！！」

松葉

「アタシを東の広場へ、哀ちゃんを西の広場へ飛ばせ！！ドロン・リドルウ！！」

松葉と哀は、2手に別れた。

哀は西の広場にワープした。

ウン！

西の広場に着いた哀を、38人の集団が待ちかまえていた。

「オイ。」

「見るよ。」

「へへ・・・シェリーだぜ。」

哀は鋭い目つきになった。

ミドリ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「あのジエネヴァやビターズを倒したヤツだ！」

レゼルブ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「オレ達じゃ倒せねえかもしれないねえ・・・」

エギユベル

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「相手が1人ずつだったらな！！」

ミドリ・レゼルブ・エギユベル

「かかれえーっ！！！！」

ミドリ達6人が、一斉に飛びかかって来た。

哀

「シャボンガトリンガー！」

ジャキン！

玲子『組織対戦に参加した時点で覚悟は決まってたハズよ？』

リアン『戦争なんや』

哀は一気に泡爆弾を発射した。

ドドドドドド！！

ミドリ

「ぐわ！！」

エギユベル

「ガハッ！！」

ミドリ達6人は、一気に倒された。

6人

ガリアーノ

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ルーク』

「やるわね！！次はアタシが相手よ！！！！」

鎧で武装した女が、剣を持って突っ込んだ。

秀一『オレはオレの戦いをする 君も自分の戦いを見出すんだな』

哀はハンマーに切り替えると、ガリアーノを殴り飛ばした。

ドカ！！

7人

コナン『ボクはディアナを倒します』

哀

「ハアアアア！！！」

ドゴォ！！

10人

哀

「（みんな必死で戦ってるんだ！あなたもそうだったんでしょ？お姉ちゃん。）」

ザン！！

16人

「まだだ！！」

「ヤツだって人間だ！！」

「疲れは必ず来る！！人海戦術だ！！」

複数人が、ズラリと並んだ。

ゾロツ！！

哀

「シェリングフォードガーゴイル!!!」

哀はガーゴイルを召喚し、シェリングガーゴイルレイを放った。

ゴオオオオオ!!!

一気にペンデュラム達が吹っ飛んだ。

38人

哀

「ハアハア・・・こっちは終わったわよ。松葉ちゃん。」

哀がそう言った、その時・・・

『まだ・・・終わりじゃないよ。』

ダゴンが哀の目の前に現れた。

ドン!!

哀

「ダ・・・ダゴン!!」

ダゴン『君も今日ここに来てたのかい？嬉しい偶然だよ、シェリー・・・ルーク級とはいえ、30数人を10数分で倒した・・・組織対戦じゃないんだけど・・・今ここで戦ってみたいなあ・・・』

哀の目の前に現れた、倒させばならない存在の1人・・・

次回、哀とダゴンが激突！！

ファイル592：ダゴンとの死闘！！その果てに・・・

哀

「（今、目の前に居る・・・倒さなければならぬヤツの1人・・・
ダゴン！！！！）」

ダゴン『来なよ。シエリー。』

哀

「わああああああ！！！！」

哀はダゴンに突っ込んだ。

ブンッ！！

ブンッ！！

力任せに攻撃する哀だが、ダゴンはそれを苦もなく避けている。

ダゴン『ヒドく疲れてるようだね、シエリー。第6感も全然定まっ
てないし。それじゃあ暴れているだけの獣のようだよ・・・フッフ・
・ホラ！もつとリラックスして！フッフ・・・』

哀

「（コイツ・・・バカにしてるの！？ムカツク！！！！）」

ミドリ

「ダゴン様殺してくれ！！」

エギユベル

「そっだー!!」

「組織対戦なんて関係ねえ!!」

「今すぐここで!!」

ダゴン『それはできないよ君達。シェリーは君達全員を倒した実力者だし・・・何よりその疲労がたまっている。やるならお互いベストの状態で行いたいからね。今日はお遊びさ。フッフッフ・・・』

哀

「こなくそーっ!!!!」

ブンッ!!

哀はダガーで攻撃したが、またもダゴンに避けられた。

ダゴン『ねえ哀。人間は醜い。嫌いしね。君も不死の絆を受けなよ。そこには永遠が約束される。』

哀

「脆くて嫌いからこそ人間は美しいのよ!!あなたはその輝きを失った!!私はその光を失いたくないのよ!!!!」

哀はシャボンガトリンガーに切り替え、泡爆弾を連射した。

ドン!!

ダゴンは右手を前にやると、鱗のような物を盾状にして泡爆弾を止

めた。

ゴンゴン!!

ダゴン『境遇から生まれる思想からして、相容れないんだろうなあ・
・ロマネ達みたいに自ら望む者は救われる。君は哀れだよ。この
戦いに勝って君に何のメリットがある?』

哀

「損得の問題じゃないわ!!正しいか・・間違ってるかどうかよ
!!」

ダゴン『君とも友達になれそうにないのかな?残念だけど。』

そう言うと、ダゴンは不気味な物体を召喚した。

ボツ!!

ドン!!

『ゲゲゲゲゲゲ!!』

物体は哀の方に飛んで来た。

ゴオオオオオ・・・

哀

「バージョン3!!ガーゴ・・・(ダメだわ!精神力が切れてる・
・)」

ドゴオオオオオ!!

物体の爆発に巻き込まれ、哀は気絶した。

「よっしやあーっ!!」

「殺しちまえ!!」

ダゴン『待て。』

哀に襲いかかろうとするルーク達を、ダゴンが止めた。

ドロ・・・

ダゴンの右腹部から、血が出ていた。

ダゴン『満身創痕の中でボクにキズをつけた・・・初めて会った時とは全然ちがう、強くなったね、哀。：RINGはもう良いや。帰るよ。東の塔に向かった連中にも伝えておいて。』

「はっ・・・はい!!」

ダゴン『哀。次、会う時は・・・殺すからね。』

そう言うのと、ダゴンとルーク達は消えた。

ウン、ウン、ウン、ウン・・・

松葉

「哀ちゃん!!哀ちゃん!!!!」

東の塔から帰って来た松葉が、哀に駆け寄った。

あの人だって・・・

あの人だって人間だったハズなのに・・・

ダゴンはどうして、クイーンの不死の絆を受け入れたのかしら？

・・・わかっているのは、今日私が・・・

ダゴンに何１つできなかったって事だわ・・・

ダゴンの圧倒的な力の前に、哀は手も足も出なかった・・・

果たして、哀は世界の希望になれるのか・・・？

次回、試練の扉が狙われる！！

ファイル593：狙われた試験の扉！！

哀

「ん……んう……」

哀が目を覚ますと、城の中にいた。

秀一

「起きたか。哀君！」

康太郎

「元気そうで良かったです！！」

哀

「あまり元気じゃない。頭クラクラする。」

リアン

「何10人もペンデュラムと1人でやりあつたらしいやないか！
ムチャな子やで。」

「下界の様子はいかがであつた？」

松葉

「半壊です。復旧には時間がかかるかもしれませんが……：RI
NGは無事でした。」

「そうか……不幸中の幸いじゃな……」

哀

「ダゴンがいた。」

哀の言葉に、全員が反応した。

秀一・ユーリ

「！」

コナン

「？」

玲子

「哀ちゃん……あなた……ダゴンとも戦ってたの……！」

哀

「うん。負けちゃった。私は自分の力を過信してた。」

玲子

「い、今気づいて良かったんじゃないの？」

哀

「うん。」

リアン

「（そ、そんなコンディションで戦ったら負けて当たり前やないか！……ムチャを通り越してアホな娘やで……！！）」

松葉

「……そういえば皆さ……RINGはもろたん？」

秀一

「皆それぞれの属性の：RINGを頂いたよ。いずれ戦いで見せてやるさ。」

「そうそう：RINGと言えば・・・イズナについての話が途中じやったな。そもそも特殊能力を秘めた：RINGは、我々忍者が特別な彫金を施したアクセサリーに、その忍法をダウンロードして造る物!!」

康太郎

「それが：RINGの正体!!?全ての：RINGはインセディアから生まれた!!?」

松葉

「ただの武器みたいに魔力の通っていない：RINGやったら普通の彫金師でも造れるけどな。マジックボールも含めて、発祥の地はインセディアと言うてええ。さらに：RING自体、別の世界にある：ARMという物を我々の先祖がいくつかインセディアに持ち帰り、その形状を研究して造られた物や!」

「イズナには前長老の意識が魔力と共に存在している!!つまり・・・『人間の意識』をもダウンロードできる数少ない：RINGなのじゃ!!!!」

イズナ

「私ってこの国の長老だったの?」

「そうじゃ。」

イズナ

「じゃあ偉いのね!?!」

「今はただの：RING、偉くも何ともないわ。」

イズナ

「シクシク・・・」

「問題は12年前の事じゃった。この国、インセディアにはこの世界全ての悪意、放たれてはならない人間の意識を封じていたオーブがあった。ディアナはそのオーブの封を解いて、その意識をイズナにダウンロードしてこの地を捨てたのじゃ!!」

リアン

「なるほどな・・・ほんで8年前のイズナは・・・」

「今はそれは入っていないようじゃ。ちがう意識が入っているように見える。お主、半分の人格の記憶を失っておるな？」

イズナ

「半分の人格!？」

「どれ・・・消えている記憶が戻るように忍法をかけてみよう。」

カッ!

哀

「イズナ・・・?」

イズナ

「・・・あなた・・・志保・・・か!？」

哀

「当たり前でしょ！！何言ってるのよ、バカッ。」

イズナ

「・・・ハッ。そ、そうね！！（今の感覚は・・・一体・・・！？）

」

松葉

「大ババ様、申し訳ありませんが、明日からも戦いがあるのです。」

「ウム。復旧は任せておけ。ディアナを・・・止めてくれ・・・」

哀達は、ディールゼイヴへと戻って行った。

ヴン・・・

ディールゼイヴに戻って来た哀達は、今回の事について考えていた。

哀

「やっぱり、また試練の扉に入った方が良いんじゃない？」

コナン

「そうだね。これからの相手はさらに手強くなるかも知れないし・・・

」

リアン

「決まりやな。ほな、今から行って来い。」

そう言うと、リアンは試練の扉を召喚した。

ドン！！

リアン

「中に入ったら、それぞれ2ヶ所修業場所がある。そこで修練には
げむんや。ええな？」

哀達は頷くと、中へと入って行つた。

ボタン！

リアン

「さて、アタシはどうしたもんかね・・・？」

リアンが頭をひねっていると、突然彼女の体が固まった。

ピキ！！

リアン

「な・・・何や！？」

リアンが動けないでいると、彼女の元に真っ黒な7人組がやって来た。

ザッザッ・・・

リアン

「な・・・何者や、アンタら・・・」

「我々は、ダゴンのやり方に不信感を抱く者・・・今から試練の扉は、我々が乗っ取る!!」

7人組は、一斉にリアンに襲いかかった。

リアン

「キャーッ!!」

果たして、彼らの正体は・・・!?

次回、瑛祐達に襲撃者が!!

ファイル594：襲撃！スリーレディースプラネッツ！！

康太郎と瑛祐は、襲い来る練習のガーディアン達を叩きのめしていた。

瑛祐

「へエ、君も姉がいるんだ。何か親近感が湧くな。」

康太郎

「本堂さんも姉がいるんですか？」

瑛祐

「ああ、今はワケあってペンデュラムアッドにいるんだがね。」

康太郎

「そうですね・・・早く抜けられると良いですね。」

瑛祐

「ああ。」

その2人を、謎の3人組が見つめていた。

3人組は不敵な笑みを浮かべると、その場から消えた。

コナンと哀は、湖が見える場所で仲良く添い寝をしていた。

それを秀一とユーリが微笑みながら見ている。

その4人を、向こう岸からコッソリと監視している2人がいた。

2人は静かにその場を去って行った。

6人の男女が、1ヶ所に集まっていた。

「ダゴンのやり方が気に入らないから、自ら来たワケだけど・・・大丈夫かしら？」

「相手が誰だろうと、全力で役目を全うするだけです!!」

「オレ達は形式上はルークだが、強さではナイト級。勝てるだろうよ。」

「やってみないとわからないけどね・・・」

「あら？1人足りないと思ったら、あのいまましい猫娘は？」

「集団で戦うのイヤだから、出番が来たら合図くれってさ。」

「相変わらず協調性ないヤツだな・・・」

6人の男女は、作戦会議を始めた。

松葉と玲子が、瑛祐と康太郎に合流していた。

ちなみにコナンと哀・ユウリと秀一は別の場所で休んでいる。

その松葉達4人を、3人の女性が監視していた。

3人はうなずき合つと、一斉に飛んで行った。

ドン!!

玲子

「松葉ちゃん、この気配・・・」

松葉

「ああ。魔力やね。あつちの方からしてきよるわ!!」

松葉が振り返ると、3人の女がいきなり突っ込んで来た。

松葉

「な、何やコイツら!?!」

4人は瞬時に攻撃をかわした。

3人は向こう側に着地する。

トッ!

マーキュリー

『ペンデュラムアッド構成員

『クラス』

ルーク』

「氷使いのマーキュリー!!」

ネプチューン

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「水使いのネプチューン!!」

ヴィーナス

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「雷使いのヴィーナス。我ら・・・」

マーキュリー・ネプチューン・ヴィーナス

「スリーレディース・プラネッツ!!!」

3人は決めポーズを取った。

ドン!!

玲子

「何なの、コイツら?」

松葉

「魔力は割りと高そうやね。そやけど頭は良くなさそう。」

ネプチューン

「そういうセリフは、この状況を打破してから言つべきセリフよ!!」

ネプチューンは両手から：RINGを発動した。

ネプチューン

「ネイチャー：RING・ユニコーンキャノン!!」

ネプチューンは両手からヤリ状のミサイルを発射した。

ドン!!

瑛祐

「3人共下がれ!!」

玲子達3人は後ろに下がった。

瑛祐

「アイアン・テオギドナ!!」

瑛祐は重力技でヤリを地面に沈めた。

ズドォ!!

だが・・・

マーキュリー

「ヨソ見はいけませんよ。」

瑛祐

「し、しまっ・・・」

マーキュリー

「ネイチャー：RING・バブリングブロー!!」

マーキュリーは水の拳で瑛祐を吹っ飛ばした。

ドガア!!

瑛祐

「ぐああ!!」

瑛祐は地面に落ち、気絶した。

康太郎

「本堂さん!!」

ヴィーナス

「ダークネス：RING・・・キューティア・ヴォイス!!」

ヴィーナスはマイク型：RINGを使ったキレイな歌声で、松葉達の動きを止めた。

ギシィ!!

松葉・玲子・康太郎

「うああああ!!」

ヴィーナス

「殺しはしない。少し気絶させるだけよ。」

松葉

「ぐ・・・」

もうダメかと思われた、その時・・・

「ラージア・デュリス!!」

マーキュリー・ネプチューン・ヴィーナス

「!!!」

突如空中から降り注いだ攻撃を、マーキュリー達は慌てて避けた。

ババツ!

「間に合って良かったよ、アル。」

2人の男女が、松葉達に近づいて来た。

松葉

「ア、アンタらは・・・」

瑛祐

「ファミリアさんとデュリオア!?!」

強力な助っ人、参戦!!

次回、デュリオアの力が炸裂!!

ファイル595：思わぬ味方！ファミリアとデュリオア！！

マーキュリー達を奇襲したデュリオアとファミリアは、松葉達に近づいた。

デュリオア

「間に合って良かった。」

瑛祐

「どうして、ファミリアさんとデュリオアが一緒にいるんです？」

ファミリア

「和解したのよ。一応ね。」

ギン！！

デュリオア

「！！！」

デュリオアはファミリアの冷たい視線にビクツとした。

ファミリア

「さて、サッサと片づけましょうか？」

ネプチューン

「アタシ達を倒すですって？」

マーキュリー

「良い度胸じゃないですか！」

ヴィーナス

「返り討ちにする・・・」

ヴィーナスは再びマイク型：RINGを出した。

ヴィーナス

「キューティア・ヴォイ・・・」

ファミリア

「新美ー！」

新美

「ガズン・ファミスー！」

ファミリアは両手から光弾を連射した。

ドドドドド！！

ヴィーナス

「し、しまっ・・・」

ヴィーナスは光弾をモロに喰らった。

ドガァ！！

ヴィーナス

「キャアアアアー！！」

ドサッ！

ヴィーナスは倒れた。

マーキュリー

「ヴィーナス先輩!!」

デュリオア

「キューティア・ヴォイスには弱点がある!歌を歌う瞬間、一瞬動けなくなるんだ!そこをつけば、術者は無防備で必ず攻撃を当てられる!」

マーキュリー

「よ・・・よくもヴィーナス先輩を!!」

マーキュリーは突っ込んで来た。

ダッ!

マーキュリー

「バブリングブロー!!」

マーキュリーはがむしゃらに殴りかかって来た。

デュリオアはそれを苦もなく避ける。

デュリオア

「イライラする状態になると、魔力も自然と荒れるものだ・・・ヴユノー。」

ヴユノー

「テオデュリス!!」

デュリオアは攻撃でマーキュリーを吹っ飛ばした。

ゴッ!!

マーキュリー

「キャン!!」

ドサッ!

マーキュリーは気絶した。

ネプチューン

「マ、マーキュリ・・・」

叫ぼうとするネプチューンの背後に、デュリオアが回った。

ヒュッ!

ネプチューン

「ゲ!？」

デュリオア

「油断は大敵だよ、お嬢さん。」

デュリオアは手刀でネプチューンを倒した。

トスッ!

ネプチューン

「あう・・・」

ドサッ！

康太郎

「つ、強い・・・圧倒的だ、この2人・・・」

松葉

「それにしても、2人共どうやって入って来たんや？そもそもリアンちゃんはどないなっとなるん？」

ファミリア

「コイツらに襲われて閉じ込められたって彼女は言っていました。」

瑛祐

「そうだったんですか。」

デュリオア

「とりあえず、君達はこの3人を縛っておいてくれ。オレとファミリア達はコナン君達に合流する。恐らくあの子達の所にも刺客が行ってるだろうからね・・・」

そう言うと、デュリオア達4人は走って行った。

次回、2人のコンビネーションが炸裂！！

ファイル596：強すぎ！？ファウナ兄妹のコンビネーション！！

3人の刺客を退けたファミリアとデュリオアは、コナン達4人に合流した。

コナン

「そうか、リアンちゃんがそんな事に。」

哀

「それで、変なヤツらが試練の扉内に紛れ込んでいるってワケね。」

デュリオア

「そういう事だ。4人共充分警戒してくれ。」

ファミリア

「既にこの辺りにいるかもしれませんがからね。」

コナン・哀

「わかった。」

8人が話をしていたその時、既に湖の中から3人の刺客が彼らを狙っていた。

弓の名手ウラノス。

人間離れしたサターン。

そして、もう1人・・・

ウラノス

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「（オレに貫けぬ物はない！！どんな距離にしようとも、必ず撃ち抜く自身がある！！）」

ウラノスはイルカの血が流れた魚類忍者である。

つまり、水の中からでも水の抵抗0で矢を撃てるため、的を外す事はほぼないのだ！！

ウラノス

「（必中必殺の間合いまで、後少し・・・！！）」

ウラノスは矢を引き始めた。

サターン

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「（『鉄矢のウラノス』の異名を持つウラノスは、随一の弓撃の名手だ。だが・・・ファミリアとデュリオアには魔力を察知する能力がある。2人共に矢を当てる事はできないだろう。そこで・・・オレ様の出番ってワケだ！！）」

サターンは持っている：RINGと並外れた身体能力を組み合わせ、恐ろしい速度を生み出すのだ。

サターン

「（ウラノスの弓撃と同時に繰り出されるオレ様の突進は、何人にも止める事はできねえ！！！）」

「?????」

『ペンデュラムアツド構成員

「クラス」

ルーク』

「・・・」

デュリオア

「どこから敵が来るかわからん。用心しろ、ファミリア。」

ファミリア

「言われなくてもわかってる。」

そう言ったファミリアが、ピクツとした。

デュリオア

「どうした？」

ファミリア

「魔力だわ・・・私の左の方向から1人、デュリオアの方から1人！私の方はかなり近づいて来てる！！」

デュリオア

「オレも感じた。後10秒・・・9・・・8・・・7・・・6・・・5・・・4・・・3・・・2・・・1！！！」

ファミリアがデュリオアの声と共に、右方向を向いた。

その瞬間、左方向から弓矢が飛んで来た。

ヒュッ！！

新美

「アム・ファミナグル！！」

ファミリアが腕を強化し前に突き出すと、その拳にサターンが衝突した。

ゴッ！！

サターン

「ふ・・・へ？」

ファミリアは左拳でウラノスの弓矢を掴み、右拳でサターンを殴り飛ばした。

ドゴォ！！

サターンは湖に落ちた。

バシャア！！

ウラノス

「（バカな！！オレの矢を防いだけじゃなく、逆方向からほぼ同時に突進して来たサターンの攻撃にも反応しただと！？）」

ウラノスが驚いていると、正面からデュリオアが突っ込んで来た。

ウラノス

「！！！」

ヴュノー

「リオル・ソルデュリス！！」

デュリオアは両手を剣に変えると、ウラノスを斬りつけた。

ザシュツ！！

ウラノス

「ぐあっ！！」

デュリオアが陸に上がると同時に、ウラノスが浮かび上がって来た。

ブカア・・・

ユーリ

「な、何が起こったんだ！？」

秀一

「（ファミリア君はあの一瞬で向こう側から突っ込んで来るサターンに目を向け、デュリオアは水中のウラノスを倒すために呼吸を整えていた・・・もし0・1秒でも遅ければ、ファミリア君はキズを負いデュリオアも水中の敵を仕留めきれず、この2人との戦いは何分もかかった事だろう・・・乗り切った・・・この2人の抜群のコンビネーションによって！！）」

秀一は2人のコンビネーションに感心した。

すると、1人の男がコナン達の前にやって来た。

「たいしたものだ。まさかこの子にまで出番が回ってくるとは思わなかったよ。」

男は不敵に笑っている。

「出番だ、ジュピターー!!」

男がそう言うと、1人の女が湖から飛び出して来た。

ザパア!!

果たして、この女の実力とは・・・?

次回、デュリオアとジュピターが激突!!

ファイル597：荒ぶる猫娘！デュリオアVSジュピター！！

「出番だ、ジュピター！！」

ザパア！！

タンッ！

ジュピター

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク」

「で？ファミリアってどいつかニヤ？」

マーズ『セブン・プラネッツのリーダー』

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク」

「ロングヘアーで桃色の髪をした女だ。ソイツ以外、好きにして良いよ。」

ジュピター

「マジかニヤ、リーダー？わーいニヤ」

ファミリア

「何なの、この娘は・・・」

新美

「魔力は今までの6人の中で一番高い感じよ。でも何か頭悪そう。」

新美の言葉に、ジュピターは過敏に反応した。

ジュピター

「今、頭悪そうって言ったのオマエかニャ？」

新美

「！！」

ジュピター

「アタシ、バカにされるの大嫌いニャ！！」

そう言うと、ジュピターは新美めがけて突っ込んで来た。

ダッ！

そのジュピターを、ファミリアが止めた。

ガシッ！

ジュピター

「ニャ？」

ファミリア

「あなたの相手はこの私です！！」

ファミリアはそう言うと、ジュピターを突き飛ばした。

ドンッ！

ジュピター

「ニャー!!」

ジュピターは少し先で踏ん張った。

ジュピター

「ウワサ通り強いヤツだニャー!ならアタシも本気で行かせてもらおうニャー!!ウエポン:RINGニャウブレード!!」

ジュピターは剣を持って向かって来た。

ジュピター

「ニャ、ニャ、ニャー!!」

ジュピターは高速で剣を振って来た。

ブンブンブン!!

ファミリア

「キャッ!キャッ!!」

ファミリアの足下がふらついた。

グラッ!

ファミリア

「あっ!!」

ジュピター

「もらったニャー!!」

ジュピターは剣を振り下ろした。

ブンッ！！

その剣を、デュリオアが腕をクロスさせて防いだ。

ガキン！！

ジュピター

「ニャ！？」

デュリオア

「ぐ・・・」

デュリオアはジュピターを振り払った。

彼の腕からは血が流れている。

ファミリア

「だ、大丈夫！？」

デュリオア

「これぐらい平気だ。さて、そろそろトドメを刺すか。」

デュリオアはそう言うと、再び腕をクロスさせた。

ババッ！

デュリオア

「ヴュノー！」

ヴュノー

「シラン・デュリオア・ジオデュアス！！！」

ヴュノーが呪文を唱えると、巨大な生物がジュピターの目の前に現れた。

ジュピター

「お、大きいニャ・・・」

ジオデュアスは巨大な手でジュピターを押し潰した。

グシャ！！

ジュピター

「フニャ〜！！」

ピクピク・・・

ジュピター

「や・・・やられた・・・ニャ・・・」

ジュピターは気絶した。

デュリオア

「さあ、後はオマエだけだな？」

マーズ

「・・・」

ジュピターを倒したデュリオア。

だが、マーズは余裕の様子？

次回、ついに決着！！

ファイル598：届け！哀の優しき愛力（あいぢから）！！

ジュピターを倒したデュリオアは、マーズの方を向いた。

デュリオア

「これで残るはオマエだけだな。」

マーズ

「そうだね。でもそう簡単にはやられませんよ。セブン・プラネットのリーダー、マーズの実力・・・とくと見せてやるよ。」

そう言うと、マーズは：RINGを取り出した。

マーズ

「ネイチャー：RING・・・フレイムウィップ！！」

マーズは炎のムチを召喚した。

ボオ・・・

マーズ

「行け！！」

炎のムチが、コナン達に向かって行った。

ズオオオオオ！！

ファミリア

「新美！！」

新美

「ゴウ・スクエア・イルミリオ!!」

新美が呪文を唱えると、強大な正方形の盾がムチを防いだ。

ガガン!!

マーズ

「何!？」

新美

「スクエア・イルミリオよりも数段パワーアップしたこの盾に、防げない攻撃はないわ!!」

マーズ

「なるほど、確かに強いね。だが、この力には勝てまい・・・」

そう言うと、マーズはディメンション：RINGでマーキュリー達を呼び寄せた。

ウン!

マーキュリー達6人は気絶したままだ。

マーズ

「見せてやろう。我ら7人の真の力を・・・」

そう言うと、マーズは：RINGを取り出した。

マーズ

「ガーディアン：RING・・・プラネッツ・プルトウ！！」

マーズがガーディアンを召喚すると、マーズ達7人がガーディアンに吸い込まれた。

スウウ・・・

ユーリ

「な、何だコイツは！？」

マーズ

「人間達が徐々に忘れつつある惑星の1つ、冥王星・・・このガーディアンは、それを払拭させるために造られた・・・人間達の愚かな行いを、幼き頃より惑星の名前をつけられたオレ達は忘れはしない！現にプルトーは『あの事が発表』された後、自ら命を断ったんだよ、『自分には生きている資格がない』ってね。アイツの無念を晴らすため、オレ達7人はペンデュラムに入ったんだ。人間達への恨みを晴らすために！！」

ガーディアンは動き始めた。

ゴゴゴ・・・

『ギシャアアア！！』

ガーディアンの口から、強大な光線が放たれた。

ドン！！

ユーリ

「ぐっ、瑛祐君!!」

瑛祐

「はい!!」

ユーリ

「アイアン・グラビ・・・」

瑛祐

「アイアン・テオ・・・」

秀一

「ダメだ、耐えられん!!」

ズドォ!!

ユーリ・瑛祐・秀一

「うわあああ!!」

ユーリ達3人は吹っ飛ばされた。

ドシャ!!

コナン

「な、何てパワーだ!!」

哀

「相当怨念がこもっているわね、このガーディアン・・・」

康太郎

「こんなの、どうしたら勝てるんですか!？」

康太郎が顔を青くしながら言う。

マーズ

「オマエ達に勝つ手段はない!!このガーディアンを倒す術などないのだ!!」

ガーディアンはコナン達を再び攻撃する。

ドゴォ!!

コナン達は吹っ飛ばされた。

玲子と松葉も気絶した。

コナン

「もう、ムリだよ・・・勝てない・・・」

コナンは絶望的な気持ちになった。

哀

「そんな事ないわ!ずっと耐えれば、いつかスキが・・・」

マーズ

「このガーディアンにスキなどない!!もう諦めるんだな!!」

哀

「クッ・・・」

哀が俯いた、その時だった。

ファミリアとデュリオアの声が聞こえた。

ファミリア

「まだ終わってないわ!!」

デュリオア

「オレ達が力を合わせれば、できる!!」

新美とヴュノーが、ファミリアとデュリオアの横に立った。

新美

「シイン・ファミリア・ジガディウス・ジオファウナ!!」

ヴュノー

「シラン・デュリオア・ジオデュアス・ディオファウナ!!」

新美とヴュノーが呪文を唱えると、強大な生物がガーディアンの両脇に現れた。

ズオオ!!

マーズ

「な、何だ!？」

そして、ガーディアンを押さえつけたのだ。

ガシイ!!

マーズ

「グオツ!!」

ファミリア

「今よ哀ちゃん!!」

哀

「はい!バージョン4・ルピナス!!」

哀がルピナスを召還すると、淡い光がガーディアンを包んだ。

パアアアア・・・

そして、マーズ達をガーディアンから解放し地面に降ろした。

トサツ!

哀

「今だわ!バージョン3・シェリングフォードガーゴイル!!」

哀はシェリングフォードガーゴイルを召還し、シェリングガーゴイルレイでガーディアンを破壊した。

ドン!!

パキーン!

マーズ

「勝てなかった・・・プルートの無念、晴らせなかった・・・」

コナン

「できるよ、これからでも。」

哀

「これからは自分達の意見を政府にちゃんと伝えれば良いのよ。ね？」

コナンと哀は笑顔でマーズ達に接した。

その2人に、マーズ達は笑顔を見せたのだった。

その後、マーズ達は自分達の目的を遂げるためにペンデュラムアツドを抜けた。

ちなみにリアンはというと、ダークネスで動きを止められた所をマーズ達に襲われ、大きな箱の中に監禁されていたらしい。

ともあれ、コナン達は無事に試練の扉から外に出た。

だが、7人との戦いで体力を消費したコナン達に、5THバトルに出る体力があるのだろうか・・・？

次回、ハヤテ達がようやく合流します！！

ファイル599：新たな援軍！任せて、5THバトル！！

セブン・プラネッツとの戦いを終えた哀達は、ディールゼイヴへと戻って来た。

もう時刻は夜中になっている。

哀

「疲れたわ・・・」

コナン

「7人との連戦だったからね・・・」

ファミリア

「今日はもう遅いです。すぐに寝ましょう。」

コナン達は、城の中に入って就寝した。

翌朝

カミュ

「皆さん、おはようございます。昨日はよく眠れました・・・か？」

カミュは言い切ろうとして、啞然とした。

コナン達は、みんなグッタリしていたからだ。

カミュ

「どうしました、皆さん？」

哀

「昨日ペンデュラムの連中7人がディメンション：RINGの中に入って来て、戦ってたのよ。」

カミュ

「セブン・プラネットの連中ですね。全く自分勝手な連中です。」

カミュがそう言うと、ディールゼイヴの姫がダイスを持って来た。

カミュ

「さて、どうやら皆さんかなり疲れているようですが・・・今日の5THバトルに出られる方はいませんか？」

コナン達は全員首を横に振った。

カミュ

「困りましたねえ・・・参加資格のある者全員が出場できないとなると、試合を延期するしか・・・」

「その必要はありませんよ。」

カミュや哀達が振り向くと、ハヤテや咲夜を始めとする27人以上の集団が現れたのだ。

その中に、歩もいる。

どうやら4THバトルの後、弟や叔父と共にペンデュラムを抜けた

ようだ。

コナン

「ハヤテ君!!」

哀

「咲夜ちゃん!!」

ハヤテ

「遅くなってすみません、皆さん。」

咲夜

「ここから先はしばらくウチらに任せて、ゆっくり休んでや、みんな!」

カミユ

「援軍というワケですか。それではダゴン様のルール変更に伴い、あなた方にも今から予選テストを受けてもらいますよ?」

千桜

「資格があるかどうかのテスト、というワケですか。」

ソニア

「望むところです。」

ハヤテ達は、予選テストを受けた。

結果は・・・

カミユ

「ぜ・・・全員合格・・・です・・・」

コナン

「よっしゃあ!!」

カミュは、これ以上はない真っ青な顔をしていた。

カミュ

「ま、まさか、全員に予選を突破されるとは・・・いくら今回はナイトが混じっていなかったとはいえ、何という強さなんですか、皆さんは・・・」

カミュが驚いていると、1人の女性が現れた。

「あら、今回は随分顔ぶれがちがうのね？」

カミュ

「あ、バラライカ様。」

バラライカ

「植物使いのあの男の子は出ないの？」

カミュ

「ええ、スタミナ切れでして。」

バラライカ

「そう。残念だわ。」

バラライカは残念そうな顔をした。

カミュ

「では、今回は人数と場所の決定を2個ずつのダイスで決めましょう。」

ディールゼイヴの姫が、ダイスを4個投げた。

ヒュッ！

カッ！

5 4 計9

4 3 計7

カミュ

「人数9VS9！場所は、草原フィールド！！さあ、誰が出ますか？」

進み出たのは、歩美・理沙・美希・泉・千桜・愛歌・鈴・サキ・そして結だ。

カミュ

「この9人ですか。ではこのメンバーを、草原フィールドへ！！」

組織対戦5THバトル 草原フィールド

ウン！！

歩美達9人は、草原フィールドへとやって来た。

歩美

「わー、見渡す限り草で一杯だわ！」

鈴

「暴れ甲斐があるじゃない。」

サキ

「・・・来ますよ。」

サキの言葉の直後、9人の構成員がやって来た。

ドン・・・

バラライカ

「アタシは最後に出るわ。ナイト級だしね。」

カミュ

「さあ、新規メンバーの初陣！！まずは誰が出ますか？」

歩美

「私よ。」

歩美が進み出たのだった。

次回、歩美が可憐に戦う！！

ファイル600：吉田歩美、可憐な舞！！

バラライカ

「相手はあの子か。こちらからはまず誰が出る？」

リカー

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「アタシ。急にしゃしゃり出て来たガキ如きが簡単に突破できない
つて事を、このリカーが教えてやる。」

カミュ

「5THバトル第1戦！アル、吉田歩美！ペンデュラムアッド、リ
カー！開始！！」

リカー

「ウェポン：RING・フェザーソード！！」

ボンッ！

リカー

「さあ、そっちはどんな攻撃を・・・え！？」

歩美

「ハアアアアッ！！」

歩美が力を込めると、彼女の手足に刃が生えた。

ジャキン！！

歩美

「行くわよお！！」

ドンッ！！

歩美はリカーに突っ込んだ。

リカー

「わっ！ちよっ、ちよっと待って・・・」

リカーは狼狽えるが、歩美は容赦なく攻撃を繰り返す。

歩美

「やっ！せい！！」

リカー

「キャッ！キャッ！！」

歩美

「ゼエイツ！！」

歩美は強力な一振りをした。

ブンッ！！

リカー

「キャアッ！！」

リカーは何とか避けると、後ろに下がった。

ザザザ・・・

リカー

「冗談じゃないわ、こんなの！こんな子、アタシじゃ倒せるわけない！！」

「相手が悪かったようですね、バラライカ。」

バラライカ

「そうね。相手の力量を軽く見たのが運のつきよ。」

リカー

「接近戦じゃ分が悪いわ！間合いを取って、何とかスキを・・・」

歩美

「ブレイドカッター！！」

歩美は両腕についた刃を飛ばして来た。

ビュン！！

リカー

「ウソオオオ！！」

リカーは飛んで避けた。

ドンッ！

リカー

「フウ、危ない危な・・・」

安心したリカーの後ろに、歩美が回り込んだ。

バツ！

リカー

「あ、しまっ・・・」

歩美

「寝なさい。」

歩美はリカーの後頭部に空手チョップを叩き込んだ。

トスッ！

リカー

「うっ！！」

リカーは地面に叩きつけられた。

ドスン！！

リカーは完全に気絶した。

ピクピク・・・

カミュ

「第1戦！勝者！アル、吉田歩美！！」

歩美

「ま、こんなものよ。」

歩美は、刃を手足に直した。

歩美にはルークも敵ではなかったようで・・・

次回、理沙が戦います！！

ファイル601：危うし！流血の理沙！！

「リカーめ、あんなガキにやられるとは情けない。まああの子が強かったって事だな。次はオレが出るぜ、良いよなボス？」

バラライカ

「好きにきなさい、ブラディ。」

ブラディ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク』

「了解、ボス。さあゝて、誰がオレと戦うんだ？」

ブラディはニヤニヤしている。

鈴

「じゃあ、ここはアタシが・・・」

理沙

「イヤ、鈴君。ここは私に任せてくれないか？」

進み出ようとする鈴を、理沙が止めた。

鈴

「わかったわ、頑張つてね理沙ちゃん。」

理沙

「ああ。」

理沙は笑顔で言った。

カミュ

「第2戦！アル、朝風理沙！ペンデュラムアッド、ブラディ！開始
！！」

理沙

「伊澄君の見ている前で、無様な戦いはしない！さあ、来い！！」

ブラディ

「威勢の良い女だねえ。オレそういう女は嫌いじゃないぜえ！！」

ブラディは突っ込んで来た。

ブラディ

「ネイチャー：RING・ブラッドソード！！」

ブラディは血でできた剣で、理沙に斬りかかった。

ブンッ！

理沙

「おっと！」

理沙は軽く避ける。

ヒュンッ！

理沙

「！！！」

理沙がブラディを見ると、彼の腕から血が流れていた。

理沙

「どういう事だ！？なぜ君の腕から血が・・・」

ブラディ

「この：RINGは、オレの血を糧カデとして攻撃力を高めるんだ。つまり、オレの血の容量キャパがなくなるまでしか戦えないってワケよ。」

理沙

「それでよく君生き延びてこられたな・・・」

ブラディ

「ああ、この：RINGは他の人間の血も吸えるからな。」

理沙

「な、何だと！？」

ブラディ

「そう、オレはこの：RINGで人間の血を吸い取りながら、容量を延ばし生き延びてきたのさ。つまり、だ。この戦いでオマエの血も頂く。そしてオレは、永遠にこの：RINGで戦い続けるんだよ！！！」

理沙

「君がどんな人生を送って来たか、私にはわからない。だが私は、何としても負けられないんだ！私をメイドとして雇ってくれた、伊澄君のためにも・・・私は絶対に負けない！！！」

理沙はお札を取り出す。

理沙

「ハアッ!!」

理沙はお札を放った。

ビッ!

ブラディ

「ナメるな。」

ブラディはお札を1枚残らず斬り裂いた。

ザシュ!!

理沙

「お、お札が!」

ブラディ

「頂くぜ、オマエの血液!!ダークネス:RING・モスキートロ
ープ!!」

ブラディは赤い縄を放った。

ドシュ!!

縄が理沙に巻きつく。

グルグルグルグル!!

理沙

「キャアアアア!!」

理沙は赤い縄でグルグル巻きに縛られてしまった。

理沙

「うぐ・・・」

縄がさらに赤く染まり出した。

ギリギリ!!

理沙

「キャアアアアッ!!」

理沙は苦しそうに叫んだ。

ブラディ

「この縄が巻きついている限り、オマエの血は徐々に吸われていくぜ。勝負あったな?」

理沙

「うう・・・」

理沙は座り込んだ。

ガクン・・・

伊澄

「理沙さん、ギブアップして！！このままじゃ死んじゃうわ！！」

伊澄が叫んだ。

だが、理沙は・・・

笑みを浮かべていた。

理沙

「言ったじゃないですか、伊澄君・・・私はあなたのためなら、どこまでも頑張れるって・・・朝風流陰陽術・・・朝日の癒風イヤシカゼ！！」

理沙が叫ぶと、彼女を縛っていた赤い縄が粉々になった。

ブチイイイイン！！

そして、理沙のキズが少しずつ治り始めた。

スウウウウ・・・

ブラディ

「な、何い！？」

理沙

「あらゆる呪いを跳ね飛ばし、身体のキズを直す朝風家に伝わる治療術・・・いざという時のために、勉強しておいて良かった・・・」

理沙はふらつきながら、立ち上がった。

ブラディ

「やられちまったなあ……こんな事になるなら、こんな：RING
G使わなきゃ良かったよ……」

そう言うブラディの体から、一気に血が噴き出した。

ブシュウ!!

ブラディ

「グハアアアア!!」

理沙

「ブラディ!?!」

ブラディ

「気にするな、これがこの：RINGの代償なのさ……相手の血
を吸いきれなかった場合、逆に術者の血液を一気に奪う……正々
堂々と勝負すれば良かったよ……すまなかつ……た……」

ブラディは倒れ、絶命した。

ドシャ!!

カミユ

「第2戦!勝者!アル、朝風理沙!!」

理沙

「ブラディ……」

理沙、流血の勝利!

次回は美希が出陣だ！！

ファイル602：美希、頑張る！！

バラライカ

「ブラディ、調子に乗って血を吸う：RINGを使い過ぎたわね。まあ仕方ないわ。さ、次は誰が出る？」

マリー

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「私が出るわ。これ以上アルにナメられてたまるか。」

バラライカ

「バカな事はしないでね。」

マリー

「わかってます。」

サキ

「こっちは誰が出ますか？」

美希

「私が出る。理沙だって頑張ったんだもの、私だってやれるトコ見せてやるわ。」

カミュ

「第3戦！アル、花菱美希！ペンデュラムアッド、マリー！開始！！」

マリー

「ウェポン：RING、ダブルブーメラン!!」

ポン!

マリー

「行くわよ、嬢ちゃん!!」

マリーは両手のブーメランを投げた。

ブン!

美希

「コピー能力、ミラー!リフレクトシールド!!」

美希はミラーのコピー能力で、ブーメランを弾いた。

バチン!

マリー

「へエ、やるじゃない?」

美希

「風月ちゃん達と迷い込んだあの洞窟で手に入れたこの道具、持ってきておいて良かったわ。さあ、今度はこっちから行くわよ!コピー能力、ジェット!!ジェットストリームアタック!!」

美希は背中にジェットパックを背負い、マリーに突っ込んだ。

ドゴォ!!

マリー

「グッ!!」

マリーはよろめいた。

マリー

「やるわね・・・でも、勝つのは私よ!!」

マリーは美希に突っ込んだ。

美希

「コピー能力、スープレックス!!」

美希の頭に紫色のハチマキが現れた。

美希

「ハッ!!」

美希はマリーの突進を避け、マリーを掴んだ。

ガシッ!

マリー

「キャッ!!」

美希はマリーを掴んだまま、空中に飛び上がった。

ドンッ!!

美希

「岩石落としいいいい！！！」

美希はマリーを地面めがけてブン投げた。

ブンッ！！

マリー

「キャアアアア！！」

マリーは地面に叩きつけられた。

ドシャアアアア！！

マリー

「ぐ・・・う・・・」

マリーはふらつきながら立ち上がった。

マリー

「ああ・・・」

だが、そのまま再び倒れた。

ドサッ・・・

カミュ

「第3戦！勝者！アル、花菱美希！！」

美希

「か、勝てた・・・この私が・・・？」

理沙

「スゴイじゃないか、美希!!」

美希

「う、うん・・・」

美希は赤面した。

泉

「よし!次、泉出ますよぉ!!」

泉が笑顔で名乗り出た。

果たして、泉は勝てるのか!?

次回、泉の初陣だ!!

ファイル603：泉、華麗な剣術！！

泉

「ルンルン」

泉は上機嫌で前に進んだ。

バラライカ

「向こうはあの笑顔がステキな子か。こっちは誰が行く？」

クワス

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク」

「ワイが出よ。」

ズン！

カミュ

「第4戦！アル、瀬川泉！ペンデュラムアッド、クワス！試合開始
！！」

クワス

「嬢ちゃん。戦うんは初めてかいな？」

泉

「うん。そだよ」

クワス

「さよか。ならワイが教えてやろつ。この戦いの厳しさいうもんを
！！」

クワスは身体硬質化タイプのネイチャー：RINGを発動させると、
泉に殴りかかった。

グオツ！！

泉

「わぁ！」

泉は軽やかに避けた。

クワスは地面を殴った。

ドゴォ！！

クワス

「なぬ？ワイの鉄拳が避けられたやと！？こんな小娘に！！？」

泉

「どうしたの？私はまだまだ元気だよ」

泉は元気に弾んでいる。

クワス

「お、おのれえ・・・このワイがこんな小娘にコケにされて・・・
黙つとれるかぁ！！！」

クワスは力任せに殴りかかって来た。

クワス

「うおおおおー!!」

クワスはがむしゃらに鉄拳を繰り出した。

ブン、ブン!!

だが泉はそれを全て避けた。

ヒョイ、ヒョイ!

クワス

「ハアハア、ハアハア・・・」

息も絶え絶えのクワスに対し、泉は相変わらず笑顔だ。

泉

「じゃあ、次は・・・私の番だね。」

泉の目つきが鋭くなった。

そして、腰に差していた何かを抜いた。

スラッ!

クワス

「な、何や、それは!?!」

泉

「これ？私がメイドする事になった家の子から貸してもらった、妖木刀・物干竿だよ。」

泉は冷静に答える。

泉

「さっきまで私の事、散々好き放題言ってくれたよねえ・・・今度は私の攻撃だよ。」

クワス

「ヒツ・・・」

泉

「行くよお！！」

泉は木刀を持って突っ込んで来た。

泉

「ハアアアア・・・」

泉が念じると、木刀が長く伸び始めた。

グググ・・・

泉

「弾ける！！」

泉が叫ぶと、木刀がいくつもの節状に弾けた。

泉

「必殺！！物干鋭利千先端刺し！！！」

いくつもの節が、クワスに襲いかかった。

ドガガガガガガガガ！！

クワス

「うおおおお！！」

クワスは何とか避けきった。

クワス

「ハア、ハア・・・」

そんなクワスの眼前に、泉が立っていた。

クワス

「ヒイイイイ！！」

泉

「セエイ！！」

泉は元に戻った木刀でクワスの頭を叩いた。

バシィ！！

クワス

「グハ・・・」

クワスは倒れた。

ドサッ・・・

カミュ

「第4戦！勝者！アル、瀬川泉！！」

泉

「わっ
い」

泉は笑顔に戻った。

泉、強い！

次回は千桜が頑張ります！！

ファイル604：千桜、戦うメイドさん！！

千桜

「この順番でいくと、次は私の番ですね。」

千桜が進み出る。

愛歌

「千桜さん、大丈夫なんですか？」

千桜

「大丈夫ですよ。ゲームセンターでよく格闘物やってますし。」

愛歌

「そ、そういう問題ではないのでは……」

千桜

「心配しないでください」

千桜は笑顔で言った。

ギムレット

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ビシヨップ』

「5戦目はボクが出るよ。」

カミュ

「第5戦！アル、春風千桜！ペンデュラムアッド、ギムレット！開

始!!」

ギムレット

「まずは軽く行くよ。ウエポン：RING、ボムチェーン!」

ポンッ!

ギムレット

「さ、そっちは何を出すかな?」

千桜

「メイドプリズムパワー!!変・身」

千桜は一瞬でメイド姿に変身した。

ギムレット

「ちよっ!今どうやって着替えたんだよ!?」

千桜

「禁則事項ですよ」

千桜は笑顔で言う。

ギムレット

「・・・」

両チーム共放心状態。

ギムレット

「気を取り直していくか・・・」

ギムレットは千桜に向かって行く。

ギムレット

「ハッ！」

ギムレットはチェーンを伸ばして攻撃した。

ギョーン！

千桜

「やつ！」

ヒョイ！

千桜は華麗に避けた。

千桜

「今度はこっちの番ですね？」

千桜は5章のマラソン大会でも使っていたブーメランを取り出した。

千桜

「このブーメランは、あの時よりもパワーアップしています。行きますよー！！」

千桜はブーメランを投げた。

ブン！

ギムレット

「チエーンよ、剣状になれ！」

ギムレットが叫ぶと、鎖は剣のように固くなった。

カチン！

ギムレット

「チエーンよ、ブーメランを斬り裂け！！」

ギムレットが剣状になった鎖を一振りする。

ザン！！

ブーメランは、見事真つ2つに・・・

ならなかった。

ギムレット

「な、何！？」

何と、真つ2つになったハズのブーメランが、2つに増えていた。

ギムレット

「な、何い！？」

2つになったブーメランが、ギムレットに迫った。

ギュン！

ギムレット

「ウオオオ!!」

ギムレットは辛くも避けた。

ギムレット

「これならどうだあ!!」

ギムレットは2つのブーメランを斬った。

ザシュ!

ギムレット

「よし、これで・・・」

そう安心したギムレットは、驚愕した。

何と、斬り裂いた2つのブーメランが今度は4つに増えていたのだ!

ギムレット

「バ、バカな!!」

ギムレットに迫る4つのブーメラン。

ギムレットは3つまで何とか避けたが、最後の1つを避けきれず腹部をかすった。

スパッ!

ギムレット

「グッ!!」

ギムレットは耐えきれず、ガクリとヒザをついた。

ガク・・・

ギムレット

「な、なぜ・・・」

ドサッ!

ギムレットは倒れた。

千桜

「このブーメランは改良を加え、斬られるたびに分裂するようになつたんですよ。残念でしたね」

千桜は最後まで笑顔だった。

カミュ

「第5戦!勝者!アル、春風千桜!!」

ビショップ相手に余裕の千桜!

次回、愛歌が真の力を発揮する!!

ファイル605：愛歌の真の力！！

愛歌

「頑張りましたね、千桜さん。流れからいって次は私の番ですね。」

愛歌が前に出た。

バラライカ

「次は6戦目か。あなたが行って来なさい、リキュール。」

リキュール

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「わかりました。」

カミュ

「第6戦！アル、霞愛歌！ペンデュラムアッド、リキュール！開始！！」

リキュール

「ネイチャー：RING、マジカルベիրーフ！！」

リキュールが：RINGを発動させると、草原の草がざわめきだした。

ザワザワ・・・

愛歌

「え？」

リキユール

「私は草使いのリキユール！私の：RINGは雑草を始めとするあらゆる草花を操る事ができるの。こんな風にね！」

リキユールが念じると、葉っぱが宙に浮かんだ。

リキユール

「行きなさい！！」

リキユールが愛歌を指差すと、葉っぱが矢のように愛歌を襲った。

ギューン！

ザシュ！

愛歌

「キャー！！」

葉っぱが愛歌の頬をかすった。

愛歌

「う・・・」

リキユール

「中々の高威力でしょう？このフィールドでの私の力はナイト級にも匹敵するの。」

愛歌

「確かにキツいですわね。でも、私だって負けるワケにはいかないんですよ!!」

愛歌はそう言うと、何かを取り出した。

スッ!

愛歌

「牧村さんに作ってもらった、この道具・・・私の真の力を引き出してくれるハズです。ハッ!」

愛歌が念じると、彼女の周りにいくつもの竜巻が発生した。

ゴオオオオオ・・・

愛歌

「ハアッ!!」

愛歌が竜巻を放つと、それはリキュールの視界を塞ぎ始めた。

ゴオオオオオ!!

リキュール

「な、何これ!? ま、周りが良く見えない!!」

リキュールは周りを見回している。

千桜

「そういう事ですか。愛歌さんの名字は『霞』。つまり愛歌さんの真の力とは、霧と霞で視界を遮り、相手を惑わせる・・・攻防一体

の力というワケですね・・・」

リキュール

「ぐ・・・う・・・」

リキュールは：RINGを取り出した。

リキュール

「ネイチャー：RING・霧払いの風!!」

リキュールは霧霞を吹き飛ばした。

ゴオオオオオ!!

そのリキュールの前に、愛歌が現れた。

スッ!

リキュール

「!」

愛歌

「えい!!」

愛歌はソニアに借りたトンファーで、リキュールの腹部に一撃を入れた。

ドゴオ!!

リキュール

「あ・・・」

ドサ・・・

リキユールは倒れた。

カミュ

「第6戦！勝者！アル、霞愛歌！！」

愛歌

「フウ・・・ギリギリでした・・・」

愛歌、可憐に勝利！！

次回はいよいよ鈴が戦う！！

ファイル606：鈴、怒りの鉄拳！！

鈴

「千桜ちゃんも愛歌ちゃんも、スゴイね。さあ、次はアタシが暴れて来るとしますか。」

鈴は右手を回しながら歩いて行つた。

バラライカ

「相手はあの子か。どちらが先に出る？」

マオタイ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「オレが出てえ。あの娘の態度が気に入らねんだ！！」

ズン！

カミュ

「第7戦！アル、遠蘭鈴！ペンデュラムアッド、マオタイ！開始！！」

マオタイ

「おい、小娘ナメた態度取ってんじゃねぞ？速攻で終わらせてやるよ。ネイチャー：RING・フレイムリング！！」

マオタイの周囲に、炎の輪が複数現れた。

ボン！

マオタイ

「行け！！」

マオタイは炎の輪を飛ばした。

ビュン！

鈴

「やつ！」

鈴は難なくかわした。

鈴

「アンタこそナメてんの？こんな攻撃じゃ元太君も倒せないよ？」

マオタイ

「オマエ、何も見てねえんだな・・・周りをよく見てみな！」

鈴

「？」

鈴が辺りを見回すと、周囲が火の海になっていた。

マオタイ

「オレの：RINGの攻撃で、オレとオマエの周囲は火に囲まれた！言わば炎上の闘技場ってワケよ。どうだ？オマエの死に場に相応しいステージだろう？」

マオタイは笑いながら言った。

だが、鈴は冷静にこう言い返した。

鈴

「言いたい事はそれだけ？」

マオタイ

「何？」

鈴

「アタシにケンカ売った事、後悔させてあげる・・・ラージア・バブルス！！」

鈴が地面に手をつく、地面から水が四方八方に飛び散った。

ドパアン！！

そして雨のように降り注いだ水が、一瞬にして炎の海を消火した。

ザアアアア！！

シュウウウウ・・・

マオタイ

「バ、バカな！！オレの炎の海が一瞬にして消されただとお！？テメエ、何をしたあ！？」

鈴

「別に？アタシの呪文の力で、アンタの自慢の炎の海を消火してあ

げたまでの事よ。さて、と。アンタ、さっきアタシにケンカ売ったわよね？」

鈴はマオタイに歩み寄った。

ツカツカ・・・

マオタイ

「ヒツ、ヒイツ・・・」

鈴

「後悔して眠りな!!」

鈴はマオタイの腹を殴った。

ドゴォ!!

マオタイ

「ガハアアアア!!」

マオタイは遠くに吹っ飛ばされ、気絶した。

ドザアア・・・

鈴

「あゝ、スッキリした!」

鈴の変貌振りに、歩美達は恐怖感を抱いていたという・・・

カミュ

「だ、第7戦！勝者！アル、遠蘭鈴！！」

鈴、怒りの鉄拳・・・

次回、メイドのサキが戦うよ！！

ファイル607：サキ、麗しき風！！

鈴

「口だけで大した事なかったわ。」

鈴はそう言いながら戻って来た。

サキ

「次は私が出ます！で、でも、メイドの私に戦えるのでしょうか・・・」

サキは戸惑っている。

鈴

「前まで普通の女子高生だったアタシだって勝てたんです。自信を持ってください、サキさん！」

サキ

「そ、そうですね！」

サキは鈴の言葉に励まされた。

バラライカ

「これで残るは、私とあなた・・・行きなさい、グラッパ。」

グラッパ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「了解。」

カミュ

「第8戦！アル、貴島沙希！ペンデュラムアッド、グラッパ！開始！！」

グラッパ

「ウエポン：RING、ニードルバット。」

ボン！

グラッパ

「行くぞ、メイド！！」

グラッパはバットを持って突っ込んで来た。

ブン！！

サキ

「キャア！！」

グラッパの攻撃を、サキはかろうじてかわした。

サキ

「この戦い方、どこかで見た事あると思ったら・・・前に若と一緒に遊んだSDK2のリメイク版のボスじゃないですか！」

サキが言っているSDK2とは、1995年にスーパーファミコン用ソフトとして任天堂から発売され、2004年にはゲームボーイアドバンス用ソフトとしてリメイク発売された大人気のゲーム・ス

ーパードンキーコング2の事である。

そのゲームのボスの1人に、トゲ棍棒を使って襲って来るグラッパというワニがいるのだ。

サキ

「あのワニと同じ戦い方を得意とするとは・・・私にとって不足はありません!」

サキは右手に風をまとわせた。

ギュルル・・・

サキ

「ジキルガ!!」

サキは風の攻撃を放った。

ギョオ!!

グラッパ

「フン!!」

ドカ!!

グラッパは棍棒で風を弾いた。

グラッパ

「この程度か?なら、次はオレの番だな。」

そう言うとグラッパは空高く飛び上がり、地面に着地した。

ドズン！！

サキ

「キャー！！」

サキの足下がしびれた。

サキ

「か、体がしびれる・・・」

グラッパ

「ククク・・・動けないだろう？」

グラッパはサキに近寄って来る。

ザッ、ザッ・・・

サキ

「こんな所で負けるワケにはいきません！私だって、頑張れるんです！！」

サキは両手と両足に風をまとわせた。

ギュルルル・・・

サキ

「シミン・サキュラオウ・ディオジキルガ！！！！」

サキは超巨大な風の魔物を放った。

ビュゴオオオオオ!!

グラッパ

「風の魔物を召喚する術かあ!! その力もはねのけてくれるわ!!」

グラッパは棍棒で風の魔物を受け止めようとした。

だが・・・

ガガン!!

グラッパ

「グオ・・・」

グラッパは押し返される。

グググ・・・

グラッパ

「バカな・・・このオレが力で押し負けているだど!!? こんな事が・・・こんな事があり得るかああああ!!」

グラッパは絶叫したが、ムダなあがきだった。

ドゴオオオ!!

グラッパ

「グハアア!!」

グラッパは吹っ飛ばされ、気絶した。

ドザア！

カミユ

「第8戦！勝者！アル、貴島沙希！！」

サキ

「フウ・・・」

さすがだね、サキ！

次回、結の初陣です！！

ファイル608：結の輝かしき光！！

結

「ここまで全勝ですね。みんな強いです！私も勝って、気持ち良く終わらせて来ますわ！！」

結は大きく深呼吸すると、走り出した。

バラライカ

「私の出番ね。行つて来るわ。」

バラライカも歩き出した。

ザッ！

カミュ

「さあ、5THバトルも最終戦！好戦を見せてもらいましょう！！5THバトル最終戦！アル、三千院結！！ペンデュラムアッド、バラライカ！！試合・・・開始！！！！」

バラライカ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「ネイチャー：RING・ボムハーブ！！」

バラライカは真っ赤な花を出して来た。

バラライカ

「さあ、これに対処はどう対処する？」

結

「ロンド・ナデイス！！」

結はムチ状になった光で、ボムハーブを攻撃した。

ビュン！

チョン！

ドカーン！！

結

「キャッ！！直接攻撃は少し危険ですね。ならば・・・ラージア・ナデイス！！」

ドン！！

ドゴオ、ドゴオン！！

結は波状に広がる光で、一気に植物を消し飛ばした。

バラライカ

「フッフ、中々面白い戦い方をするわね。私のボムハーブを一撃で根絶やしにした。ならばこちらも少しずつ本気を出していこうかしら。」

バラライカは新しい：RINGを取り出した。

スッ！

バラライカ

「ネイチャー：RING、ユグドラシル！」

バラライカは：RINGの力で、フィールドに巨大な大木を出した。

ドン！

バラライカ

「上がって来なさい、嬢ちゃん。勝負よ。」

バラライカは木の上に飛び登った。

ヒョイツ！

結

「望むところです！」

結も彼女の後を追った。

ヒョイツ！

バラライカ

「ここからが本番よ。リーフカッター！」

バラライカが叫ぶと、木に生えた葉っぱが結めがけて飛んで来た。

ザザッ！

ギョオ！

結は服を数力所斬られた。

ザクッ！

結

「うぐ！！これがナイトの力ですか。でも、負けませんよぉ！！ガズン・ナデイス！！」

結は光弾を連射した。

ドドドドド！！

バラライカ

「ローズウィップ！！」

ムチは光弾を弾きながら、結に襲いかかる。

バシィ、バシィ！

ムチが結を絡め取った。

ニユルルル！

結

「キャッ！！」

結はもがいた。

ジタバタ・・・

結

「このお！！ナデイス・ドローン！！」

結が呪文を唱えると、体が柔らかくなりムチが外れた。

スルツ・・・

結

「ここから先はムチによる拘束は効きませんよ。」

バラライカ

「やるわね・・・でも、そろそろ決めさせてもらっわ。」

ザワザワ・・・

バラライカ

「スネーキー・ボウ！！」

バラライカが叫ぶと、木がヘビのように変化し結に襲いかかった。

ギョオ！！

結

「ソルド・ナデイス！！」

結は光の剣を発動すると、木のヘビを斬り裂いた。

ザシュ！！

バラライカ

「何ですって!?!」

結は木のへびを全て斬り終えると、そのままバラライカに突っ込んだ。

ドンッ!!

結

「ハアアアアッ!!」

ブンッ!!

バラライカ

「キャッ!!」

バラライカは結の攻撃をかるうじてかわした。

バラライカ

「あ、危なかつ・・・」

結

「せい!!」

結はバラライカに追撃を喰らわせた。

ドゴォ!!

バラライカ

「あ．．．（一瞬で武器をハンマーに切り替えて．．．）」

結

「ホルド・ナデイス。光のハンマーを召喚する呪文です。ソルド・ナデイスは剣ですから、直接的攻撃力はありませんからね。」

バラライカ

「ぐ．．．」

バラライカは倒れた。

ズン．．

バラライカ

「私が油断したところについて攻撃して来るとはね．．．完敗だわ。」

「

カミュ

「5THバトル最終戦！！勝者！アル、三千院結！！」

結

「フウ．．．」

結の勝利で、5THバトルは全勝！！

次回は瀬川泉とマリアの話です！！

ファイル609：瀬川泉がメイドになるまで

瀬川泉、白皇学院の2年生で生徒会委員長。

現在彼女、東尾マリアのメイドとして休日に仕えているのだが・・・

もちろん、出会うまでの過程があったワケで・・・

今回はその話をお話しましょう！！

ハヤテと咲夜が付き合いだした頃、ナギやマリアなどはすぐに2人の交際を認めたが、中々すぐに受け入れられない者達もいた。

生徒会娘達、桂ヒナギク・瀬川泉・花菱美希・朝風理沙・春風千桜・霞愛歌の6人である。

実はこの6人、6人共が密かにハヤテに恋心を抱いていたのだ。

特にヒナギクと千桜、そして泉の3人はハヤテに告白しようと考えていたぐらいである。

そのハヤテが咲夜と付き合いだしたと聞かされたのだから、ビックリして当然だろう。

幸い美希・理沙・愛歌の3人はすぐに立ち直ったが、残りの3人は中々立ち直れなかった。

特に泉は夜通し泣いていて、兄の虎鉄がずっとなだめていたそうだ。ようやくヒナギクと千桜が立ち直った後も、泉だけはずっと元気がなかった。

授業が終わると、決まって1人だけどこかに行ってしまうのである。そして、そんな日が長く続いたその後、泉は1人の少女に出会う事になる……

美希や理沙がメイドになってからしばらく経ったある日の事・・・
泉はいつものように、授業が終わると1人でそそくさと帰っていた。

泉

「（ハヤ太君・・・）」

泉はハヤテの事を考えながら歩いていた。

そのためか、彼女は周りがよく見えていないようだ。

やがて、泉は前から歩いて来た3人組にぶつかった。

イヤ、正確に言うと3人組が意図的に彼女にぶつかったのだ。

ドン！

泉

「キヤツ!!」

泉はそこで3人組を見上げた。

「何じゃゴルア!!」

「やんのかワレエエ!!」

ハヤテ原作に時々出て来る、ダ シム・ ンギエフ・トル コ似の
3人組である。

泉

「キヤアアアア!!」

泉は悲鳴を上げた。

「デメエ、どこ見て歩いてやがんだああ!!?」

「兄貴がケガしたらどうするつもりだゴルアア!!」

泉

「ヒニヤアア!!ごめんなさい!!」

泉は再び悲鳴を上げた。

「グッ・・・右腕折れたかしんねえ・・・」

泉

「えええええ!!」

「兄貴ケガしたぞ!!どうすんだゴルアア!!」

「慰謝料払えや慰謝料!!」

泉

「ごめんなさいごめんなさい・・・」

泉はガタガタと震えている。

「とりあえずここじゃ何だから、ちがうつコ行って話そうか?」

男が泉の手を引っ張ろうとした、その時だった。

1人の少女の声が聞こえたのは。

「そこまでにしとき、チンピラ。」

男達と泉が振り返ると、東尾マリアが立っていた。

「何じゃオマエはああ!!」

「ただのクソガキじゃねえか!!」

マリア

「アンタらかてガキみたいなもんやないか。自分からぶつかつて相手に言いがかりつけるやなんて、中学生のガキレベルやね。」

「何だとゴルアア!!」

「調子こいてんじゃないやねえぞワレエエ!!」

マリア

「そんなデカイ声出したかて全然怖ないで。だいたいその骨折れたいうヤツ、アンタ口から出任せやる？」

「な、何言ってんだ!オレは確かに右腕が・・・」

マリア

「セエイ!!」

マリアは木刀を前に突き出した。

ヒュッ!!

「グッ!!」

男は右手で木刀を弾いた。

マリア

「ホラ見てみい。右手ちゃんと動くやないの？」

マリアは冷静に言った。

「テメエあんま調子乗ってると、たとえガキでも許さねえぞ!!」

そう言うと、兄貴の男はマリアの服を掴んで持ち上げた。

ガッ!

だが・・・

マリア

「調子乗つとんのは、オマエやあ!!」

マリアは木刀で男の右肩を強打した。

ドガア!!

「イデエエエ!!」

男は片膝をついた。

ガク・・・

「ア、兄貴イ!!」

マリア

「あゝら、ちょっとキツう当てすぎた?今度はホンマに折れたかもなあ?」

「テメエ!!兄貴をバカにするとこのオレ達が・・・」

2人の男が手を出そうとすると、マリアは2人を睨みながら言った。

マリア

「オレ達が・・・何やあ!?!」

マリアはモノスゴい殺気をみなぎらせている。

その背後に、テキーラの姿が映った。

マリア

「来るなら来いや。言うとかけど・・・ウチは弱い者イジメしようとする輩には、容赦せえへんでえ?」

マリアは凄まじいダークオーラで2人をにらみつけた。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

「ヒ、ヒイイイイ!!」

チンピラ達3人組は一目散に逃げに行った。

タタタタタ・・・

マリア

「大丈夫か?」

泉

「は、はい!!」

マリア

「さよか、良かった。」

マリアは微笑んだ。

泉

「あ、あの!私、瀬川泉と言います!あなたは何て名前なんです?」

マリア

「うちか？うちの名は東尾マリア。帝丹小学校で少年探偵団というグループに入っとう1人や。」

マリアは一拍おくと、再び口を開いた。

マリア

「うちはもう行くわ。ほなな。」

マリアはそう言うと、帰ろうとした。

泉

「ま、待つて！！」

泉はマリアを呼び止めた。

マリア

「ん？何や？」

泉

「あの、その・・・私を鍛えていただけませんか？」

マリア

「うちが・・・アンタを鍛える？」

泉

「はい！あなたスゴく強かったです！あなたに鍛えてもらえば、私も肉体的にも精神的にも強くなれると思います！」

マリア

「・・・」

マリアはしばらく考えたが、すぐに口を開いた。

マリア

「ええやろ。アンタを鍛えたるわ。」

泉

「ほ、本当ですか！」

マリア

「その代わりといっては何やけど、ちとウチの家に来てもらえるか？」

泉

「はい、わかりました。」

泉は快く返事した。

マリア

「よっしゃ。ほなウチについて来い。」

泉はマリアについて行った。

東尾邸

マリアと泉は、庭で1戦交えていた。

マリア

「ハアッ!!」

マリアの強烈な一撃が泉に迫る。

ゴッ!!

泉

「わわっ!!」

泉は竹刀でマリアの攻撃を受け止めた。

ガキン!

マリア

「とっさの判断には上出来や。そやけど・・・」

そう言うと、マリアは上空に飛んだ。

ドンッ!

マリア

「ハアアアアッ!!」

マリアは勢いよく竹刀を振り下ろす。

泉はとっさに目をつぶった。

ザンッ!!

泉が目を開けると、竹刀が真つ2つに折れていた。

泉

「し、竹刀でこれほどの斬れ味だなんて・・・」

マリア

「キレイ良いトコで、ちと休憩しよか？」

マリアは、笑顔で言った。

マリアと泉は、一緒にお菓子を食べていた。

お菓子を作ったのは泉である。

マリア

「うまい！こんなうまいん久しぶりに食べたわ！」

泉

「そう？良かったです。」

泉は微笑んでいる。

泉

「ところでマリアちゃん。あなたってスゴく強いよね。どうやってそこまで強くなったの？」

マリア

「ウチがここまで強くなったんは、オヤジに鍛えられたおかげなんや。半年前に爆発事故で亡くなったけどな。」

泉

「そうなの・・・ゴメンナサイ、変な事聞いちゃいましたね。」

マリア

「ええんよ。オヤジがある組織の一員やったんは事実なんやから。」

マリアは冷静な声で言った。

泉

「そ、その組織って、まさか・・・」

マリア

「ああ・・・ジン達が所属しとった、黒の組織や。オヤジの本名はヒガシオテイキロウ東尾禎鬼郎・・・コードネームはテキーラや。」

泉

「そっだったんですか・・・」

マリア

「ああ。あゝ、ところでアンタ・・・泉ちゃんっていう名前やったな？」

泉

「あ、はい。」

マリア

「ウチ決めた。アンタ、ウチのメイドやってくれへんか？」

泉はキョトンとした。

泉

「メ、メイドですか？」

マリア

「ああ。アンタ料理上手やし、剣術の腕も見込みある。うち、オカシさんが帰って来るん遅いさかい、いつも1人で寂しいんよ。たまにたくまが来てくれるんやけど、さすがに毎日頼むワケにもいかへんしな。」

泉

「そうなんですか。」

マリア

「どや？引き受けてくれるか？」

マリアが聞くと、泉は笑顔で答えた。

泉

「うん、良いよ 休日とかは時間あるからね。」

マリア

「おおきに。感謝するで。」

泉

「どういたしまして。」

こうして泉はマリアのメイドとなり、彼女から妖木刀・物干竿を貸

してもらえる事になったのである。

泉とマリア、これからも仲良くなれそうだね

次回は6THバトル開始です！！

ファイル610：6THバトル！海上の戦い！！

コナン達は、6THバトルの選手とフィールドを決めるためディールゼイヴに集まった。

カミュ

「皆さんおはようございます。昨日はよく眠れましたか？」

コナン達は微妙という表情をする。

カミュ

「微妙というところですか。このバトルが終わればまた1日休めますので、頑張つて乗り切ってくださいませ！」

カミュは敵らしからぬ激励をする。

ディールゼイヴの姫が4個のダイスを振った。

ヒュッ！

カッン！

6 3 計9

5 3 計8

カミュ

「人数9VS9！！対戦場所は海上フィールド！！さあ、誰が出ますか！？」

カミュが叫ぶ。

名乗り出たのは、ユリ・琴美・マリア・実希・園子・真・真（宝極）・隆太・マリア（東尾）の9人だった。

カミュ

「この9人ですか・・・」

そんな9人の前に、1人の男がやって来た。

ザッ！

「何だあ？ほとんど女ばかりじゃないか！本当にやる気あるのかあ？」

カミュ

「サンタリア様、それは愚問です。彼女達は予選テストを全員突破した実力者なんですから。」

サンタリア

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「はいはい。まあ死なない程度に頑張りな。」

サンタリアの挑発に、東尾マリアは殺意を覚えた。

カミュ

「・・・とりあえず、この10人を海上フィールドへ！！」

組織対戦6THバトル 海上フィールド

ユリ達9人は、海上フィールドへとワープして来た。

ウン！

隆太

「ヒヤーツ！本当に海の上だな！」

真

「向こうに浮島が見えますね。あそこで戦えという事ですか。」

マリア

「・・・来るで。」

ウン！！

ルーク級とビショップ級4人、そしてナイト級のサンテリアが現れた。

5THバトルと同じ構成である。

サンテリア

「オイラはナイトだから最後だ。さあ、まず誰が行くよ？」

カバ

『ペンデュラムアッド構成員』

「クラス」

「ルーク」

「オレが行くよ。」

ザッ！

カバが進み出た。

マリア

「相手はルーク級か。こっちはまず誰が出る？」

マリアが聞くと、1人の少女が進み出た。

ザッ！

ユリ

「私よ。」

海の上での6THバトル、最初に出るのは金田―ユリ！

次回、ユリとカバの戦いだ！！

ファイル611：ユリ、知識的戦略！！

カミュ

「6THバトル第1戦を始めます！！アル、金田ーユリ！ペンデュラムアッド、カバ！試合開始！！」

ユリ

「このバトル、3分で終わらせてあげるわ。ネイチャー：RING・スタンガントンファー！！」

ウン！

ユリ

「ハアアアアッ！！」

ユリはカバに向かって行く。

ユリ

「一気に行くわよ！！」

ユリはトンファーを振った。

ブンッ！

当たる直前に、カバは腕をクロスさせて攻撃を防いだ。

ズボォ！！

ユリ

「な!？」

カバ

「ネイチャー：RING・サンドフィンガー。腕を砂状にする：RINGだ。これによってオレに君の雷系の攻撃は効かん。3分で終わらせるのは、逆にオレになるかなあ？」

琴美

「あの男・・・砂使いか。」

ユリ

「だったら、他の方法で体力を減らすまで!!」

ユリは速度を上げ突っ込んだ。

ドンッ!!

カバ

「は、速い!!」

ユリはだんだん速度を上げて行く。

カバ

「クッ! ウェポン：RING・サンドキャノン!!」

カバは砂の弾丸を連射して来た。

ドンドンドン!!

だが、ユリには1発も当たらない。

ヒュ、ヒュ！

カバ

「クソ！なぜ1発も当たらん！！」

カバは焦っている。

ユリ

「後、2分。」

カバ

「クッソオオオ！！」

カバはがむしやらに撃った。

ドン、ドン！！

だが、そんな弾丸がユリに当たるワケもない。

ユリ

「最高速度。そして、後1分！」

カバ

「チツクシヨオオオ！！」

カバは力を溜め始めた。

カバ

「（最後の1撃のために、限界まで力を溜めてやる・・・）」

カバは高速移動するユリに狙いを定める。

カバ

「喰らええええ!!」

カバは全力の砂弾を放った。

ドン!!

砂弾がユリに向かって来るが、彼女は微動だにしない。

カバ

「当たる!!」

砂弾が当たるギリギリの所で、ユリは弾をかわした。

ヒュッ!

カバ

「バカな!!」

後退りするカバの眼前に、ユリが現れた。

ザッ!

カバ

「ヒッ・・・」

カバは恐怖のあまり、腕で攻撃を防ぐのが遅れた。

ユリ

「ハアアッ！！」

ユリはカバの腹部に鉄拳を叩き込んだ。

ドゴォ！！

カバ

「ガハアアア！！」

カバは吹っ飛ばされる。

ユリ

「塩分が入っている海の中なら、砂の力も関係ない！ハアッ！！」

ユリが海の中に電撃を撃ち込んだ瞬間、カバは海の中に落ちた。

バツシャアアアン！！

バリバリバリ！！

カバ

「ギアアアアアア！！」

カバは感電し、海に浮かんだ。

プカァ・・・

ユリ

「これで3分、時間通り。逆転はできなかったわね、残念でした」

カミユ

「第1戦！勝者！アル、金田ーユリ！！」

ユリ

「ルン」

相性をも覆す、ユリの知識・・・

次回は琴美が出陣！！

ファイル612：琴美、恋人のための気迫！！

マリア

「次は第2戦やな。誰が行く？」

マリアがそう言うと、琴美が進み出た。

琴美

「アタシが行くわ。瑛祐の分まで頑張らないと。」

サングリア

「こっちは誰が出ようか？」

トカイ

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ルーク』

「ボクが行くよ。」

カミュ

「6THバトル第2戦！アル、日向琴美！ペンデュラムアッド、トカイ！開始！！」

琴美

「ジェムド！！」

琴美は宝石の弾丸を発射した。

ドン！

トカイ

「ウエポン：RING・ダブルブレイド!!」

トカイは両端に刃物がついた武器を両手に持った。

トカイ

「てい!!」

トカイは弾丸を弾いた。

琴美

「まだ、まだあ!!ガズン・ジエムド!!」

琴美は弾丸を連射した。

ドドドドドドドド!!

トカイ

「うわ、うわ、うわ!!」

トカイは何とか避けていく。

琴美

「ゴウ・ジエムド!!」

琴美は一際大きな弾丸を放った。

ドオン!!

トカイ

「クツ!!」

トカイは腕をクロスさせて何とか弾いた。

だが、琴美は攻撃の手を緩めない。

琴美

「ギガム・ジエムド!!」

琴美はさらに大きな弾丸を放った。

ドオン!!

トカイ

「うわっ!!」

トカイは弾ききれず、弾丸に当たった。

ドゴオ!!

トカイ

「うわああ!! (何だ? この娘の気迫・・・尋常ではない!!)」

琴美

「ハアアアアッ!!」

琴美は雄叫びを上げながら、トカイに突っ込んだ。

琴美

「（私は今まで、瑛祐に頼ってばかりだった。そう、あの時も・・・だから、だから・・・今後は私が瑛祐を助けていく！！それが、瑛祐の恋人である私の誇り！！）アアアアッ！！」

トカイ

「う・・・うわあああ！！」

琴美

「トドメよおお！！シエン・コルミア・ディオジェムドン！！」

琴美はファミリア・プロトタイプとの戦いの時に使った『コルミア・ディオジェムドン』よりもはるかに強力な宝石の豪雨を降らせた。

トカイ

「ギャアアアア！！」

トカイは琴美の呪文に押し潰された。

ドゴオオオオオ！！

呪文が消えると、トカイは完全にノックアウトされた状態で出て来た。

シュウウウ・・・

ピクピク・・・

カミュ

「第2戦！勝者！アル、日向琴美！！」

琴美

「やったあ〜っ!」

琴美、相手に何もさせずに勝利!!

次回、メイドのマリアさんが可憐に戦います!!

ファイル613：マリア、可憐なメイド！！

マリア

「次は私が出ますわ。」

琴美が帰って来ると、マリア（ハヤテキャラ）が次に出ると発言した。

琴美

「大丈夫ですか？」

マリア

「心配しないでください。」

マリアは微笑むと、歩いて行った。

カミュ

「第3戦！アル、マリア！ペンデュラムアッド、ココモ！開始！！」

ココモ

『ペンデュラムアッド構成員

』
「クラス」

ルーク』

「フン、メイドさんが相手かよ。楽勝だねえ。」

ココモは、笑っている。

マリア

「相手がメイドさんと思ってナメてもらっちゃ困りますわね。」

マリアはそう言うと、三千院家から持って来たナイフを数本取り出した。

チャッ！

マリア

「このナイフは切れ味抜群ですわ。防げるものなら防いでみなさい
！」

マリアはナイフを投げた。

シュッ！！

ココモ

「シールド：RING、ボルカニックシールド！」

ドン！

ココモが盾を出すと、盾に当たったナイフが溶けた。

ボシュ！！

マリア

「あらあら、大した溶解力ですわね・・・」

ココモ

「三千院家ご自慢のナイフも溶けるようじゃ、アンタの体も溶けちゃうんじゃないか？」

マリア

「あら・・・なら試してみれば良いじゃないですか。」

マリアはシラッと言った。

ココモ

「言ってくれるねえ・・・ボルカニックシールド、変化！あの女を燃やせえ！！」

ココモが叫ぶと、盾から炎の竜が飛び出しマリアに襲いかかった。

ガアアアア！！

だが、マリアは平静を保っている。

マリア

「その程度の攻撃で、私を倒せると思ったのですか？」

マリアはそう言うと、大きな弓を取り出した。

ジャキッ！

ココモ

「！！」

マリア

「マラソン大会の時に使っていた弓です。この弓矢の威力は、ナイフの比ではありませんわよ。」

そう言うと、マリアは矢を放った。

パシュ！！

矢は一直線にココモめがけて飛んで行く。

ギューン！！

ココモ

「クッ！！ボルカニックシールド！！」

ココモは炎の盾を発動した。

ドン！！

だが・・・

ズドォ！！

矢が盾に当たると、盾にヒビが入り始めた。

ピシ、ピシ・・・

ココモ

「な、何！？」

ココモが驚いている前で、ついに盾が粉々に壊れた。

バギャアアア！！

ココモ

「そ、そんなバカな!!」

ココモは後退りする。

その後ろに、マリアが回り込んだ。

ザッ!

ココモ

「!!」

マリア

「えい!」

マリアはどこからかホウキを取り出すと、ココモの後頭部を叩いた。

パコッ!

ココモ

「ぐ・・・」

ココモはドサッと倒れた。

カミユ

「第3戦!勝者!アル、マリア!!」

マリア

「ウフフ」

さすが、最強メイド・マリア・・・

次回は真希の妹、実希出陣！！

ファイル614：実希、最強！？

マリア

「ルン」

マリアは上機嫌で戻って来た。

琴美

「次は誰が行く？」

実希

「ウチが行かせてもらう。」

実希が進み出た。

サンテリア

「相手はあの子か。行け、ウゾ。」

カミュ

「第4戦！アル、片桐実希！ペンデュラムアッド、ウゾ！開始！！」

実希

「来いや、ガキ。始めはノーガードでおったるわ。」

ウゾ

『ペンデュラムアッド構成員

』

「クラス」

「クッ！このオレを愚弄するかこのガキィ！！ネイチャー：R I N

G・キューブリックシュート!!」

ウゾは立方体の箱を5つ召喚した。

その箱に、次々と何かが宿っていく。

電気、炎、水、草、地面の5つのエネルギーだ。

琴美

「あの男・・・風月ちゃんと同じく複数属性使いか。でもまあ、実希ちゃんの敵じゃないわよね。」

ウゾ

「余裕かまして散りやがれ。行け!!」

ウゾは5つの箱を実希めがけて放った。

ドン!!

だが、実希は平然としている。

実希

「結論。やっぱりアンタではウチの相手は力不足やったなあ・・・ガズン・エムル!!」

実希は炎の弾丸を複数放った。

ドドドドドド!!

弾丸はあっという間に箱を壊した。

バガン、ドガン！！

ウゾ

「バ、バカな！！」

ウゾは後退りした。

実希

「終わりや。バルド・エムセン！！」

実希は炎をまとった砲弾を召喚した。

ズン！！

実希

「ファイア×4！！」

実希が叫ぶと、炎をまとった円柱の槍が4発放たれた。

ドオン！！

ウゾ

「ウ・・・ウオオオオオ！！」

槍は4つ共ウゾに命中した。

ドゴオオオオオ！！

大きな煙が上がる。

シュウウウ・・・

煙が晴れると、ウゾがふらついた状態で現れた。

ウゾ

「ハア、ハア・・・」

ウゾは気絶した。

ドサッ・・・

カミュ

「第4戦！勝者！アル、片桐実希！！」

実希

「だから言つたやないか。」

実希、アッサリ勝利！！

次回はお嬢様、園子が戦う！！

ファイル615：園子、戦うお嬢様！！

園子

「次は私が出ようかな？」

園子は半ば遠慮がちに言った。

マリア

「あなただっただけですわ。頑張つて来てください、園子さん！」

園子

「そうですね。」

マリアが励ますと、園子は微笑みながら歩いて行った。

サンテリア

「ルークは全滅か。次はビショップだな。行って来い、ウンター。」

ウンターベルク

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ

「わかりました。」

カミュ

「第5戦！アル、鈴木園子！ペンデュラムアッド、ウンターベルク！試合開始！！」

ウンターベルク

「聞いたよ。君、鈴木財閥のお嬢様なんだってね。」

園子

「そうよ、何か文句ある？」

ウンターベルク

「金持ちのお嬢様だからどんな子かと思ってたけど元気良いね。お嬢様と戦えるなんて光栄だよ。ウェポン：RING・電ノコブレード！ボクはペンデュラムアッドのウンターベルク、クラスはビショップ！よろしく。」

ウンターベルクは剣を持つと、園子に向かって行った。

ウンターベルク

「せい！！」

ウンターベルクは剣を振り下ろした。

ブン！

園子

「ハッ！！」

園子は剣を両手で受け止めた。

ウンターベルク

「何！」

園子

「ネイチャー：RING・ダイヤモンドアーム！この：RINGの

効果で、私の腕はダイヤのように硬くなるのよ!!」

琴美

「園子ちゃん、アタシと同じ宝石使いか。」

ウンターベルク

「やるね。電ノコブレードにヒビが入った。でも、まだ負けたワケじゃ・・・」

園子

「ネイチャー：RING・ダイヤモンドナックル!!」

園子は硬質化した拳で、剣を破壊した。

バキヤア!!

ウンターベルク

「なっ!!」

園子

「私は腕や拳を硬質化させる：RINGを使い戦う・・・真さんの足手まといにならないために・・・そして、真さんの恋人だと誇りを持つて言えるために!!ハアアアアツ!!」

園子は魔力を練り込み始めた。

コオオオオオ・・・

園子

「私の真の力、解放!!ガーディアン：RING・ダイヤモンドダ

ストレディー!!」

園子は宝石を身にまとうガーディアンを召喚した。

園子

「行きなさい!!」

ガッ!

園子のガーディアンは、宝石の豪雨をウンターベルクめがけ降らせた。

ザアッ!!

ウンターベルク

「ウオオオオオ!!」

ドザアアアア!!

ウンターベルク

「う・・・ぐ・・・こんな華奢な、お嬢様に・・・」

ウンターベルクは倒れた。

ドサッ!

カミュ

「第5戦!勝者!アル、鈴木園子!!」

園子

「勝てて良かった・・・」

強くなったね、園子！！

次回は京極が出陣だよ！！

ファイル616：京極真、優しき戦い！！

真（京極の方）

「園子さん、良くやりましたね。次は私が出て来ます。」

園子

「頑張つてね、真さん！」

真

「ええ。」

真は微笑んでから進み出た。

サングリア

「まさかただのお嬢様がガーディアンまで使えるとは……少しナメていたようだね。ヒーリング！次は君が行け。」

ヒーリング

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「はい。」

カミユ

「第6戦！アル、京極真！ペンデュラムアッド、ヒーリング！開始！！」

ヒーリング

「私は今までのビショップとは格がちがいますよ……ネイチャー：

R I N G・ブレイズナックル!! 行きます!!」

ヒーリングは両手の拳に炎をまとわせ、真に突っ込んだ。

ドン!

真

「女性と戦うのは気が引けますが・・・私も負けるワケにはいきませんからね!」

真はそう言つと、：R I N Gを取り出した。

スッ!

真

「発動!!」

真はそう叫ぶと、ヒーリングに突っ込んだ。

真・ヒーリング

「ハアアアアッ!!」

両者の拳がぶつかり合う。

ドゴォ!!

ヒーリングの方がわずかに押された形だ。

ヒーリング

「ぐっ、固い拳・・・岩使いですか。」

真

「ご名答。ネイチャー：RING・ストロングナックル！この：RINGの効果で、私の拳は岩の如く硬くなります！！」

真は拳を突き出した。

ゴッ！

ヒーリング

「キャー！！」

ヒーリングは辛くも避けたが、真は間髪入れずに次々と鉄拳を放つて来た。

ブン、ブン！

ヒーリング

「キャ、キャー！！」

ヒーリングは後退りしながら、拳を避けて行く。

だがやがて、端っこに追い詰められた。

ザッ！

ヒーリング

「あっ・・・」

真がヒーリングに近づく。

真

「私はできれば、女性をキズつける事はしたくありません。ですから、ヒーリングさん・・・」

ヒーリング

「は、はい!」

真は最後の一撃を繰り出した。

ゴッ!!

ヒーリング

「キャアッ!」

真の拳はヒーリングの真横をかすった。

ヒーリング

「ヒッ・・・」

真

「ギブアップしてください、ヒーリングさん。」

真は静かに言った。

ヒーリング

「は、はい・・・」

ヒーリングはヘタヘタと座り込んだ。

ペタッ・・・

カミュ

「第6戦！ヒーリングのギブアップにより、勝者！アル、京極真！
！」

園子

「さすが、真さん！！」

真

「フフ・・・」

京極、紳士的な勝ち方だね！

次回は隆太の彼女・真が戦うぞ！！

ファイル617：真、蒼海の天使！！

隆太

「残るは3人か。誰が先に出る？」

マリア

「ウチは確定やから・・・真ちゃんと隆太君の2人か。」

隆太

「え！マリアちゃん最後なの？」

マリア

「ああ。ウチ、あそこにおけるアイシャドー入れたヤツどうしてもぶちのめしたいさかいな。ビショップの2人はアンタらに任すわ。」

マリアは微笑んだ。

隆太

「（怖っ！！）」

隆太はビクツとした。

真（宝極の方）

「残り2人ですか。じゃあ、7戦目は私に任せてください、隆ちゃん。」

隆太

「わかった、気をつけろよ真ちゃん。」

真

「うん。」

真が進み出た。

カミュ

「第7戦！アル、宝極真！ペンデュラムアッド、ノイジー！開始！」

ノイジー

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ビショップ

「一気に行かせてもらっわよ！ウェポン：RING・チエーンウィップ！」

ノイジーは鎖のムチを出した。

ノイジー

「しなれ！」

ノイジーはムチを放った。

ムチは真っ直ぐに真に向かって行く。

ゴオッ！！

そして、真を絡め取った。

ギュルルル！！

真

「キャッ!!」

ノイジー

「これであなたは逃げられない・・・スピアレインボウ!!」

ノイジーが叫ぶと、槍の雨が誠を襲った。

ズバアアア!!

真

「キャアアアア!!」

ノイジー

「その状態じゃ動けないでしょう?勝負は見たわね。」

ノイジーは笑みを浮かべる。

真

「う・・・ま、負けるワケにはいきません・・・私は隆ちゃんの恋人として、誇りを持って戦います!!」

真が叫ぶと、彼女の服の胸ポケットから水色の宝石が出現した。

ポウ・・・

ノイジー

「?」

真

「この宝石はジュエリクトウルース、私の中に眠っていた宝石です。日本壊滅の危機を乗り越えた後、私と隆ちゃんにそれぞれ宝石が現れた。でも今まで使えなかったのは、私達の決意が弱かったから・・・でも、もう迷いません！私と隆ちゃんは、身分の差を乗り越えてきつと幸せになつてみせる！！」

真が叫んだ瞬間、真を縛っていたムチが粉々になった。

バチィ！！

パキン！

ノイジー

「な、何ですって！？」

ノイジーは焦った。

真

「蒼海色に輝く、ジュエリクトウルースよ！今ここに、その神秘の力を示せ！！セラフィック・セレナーデ！！」

真が叫ぶと、水色の光がノイジーを直撃した。

パアアアア！！

ノイジー

「キャアアアア！！」

ノイジーはふらついた。

ノイジー

「スゴいわね・・・あなた達の決意・・・負けたわ・・・」

ノイジーは倒れた。

ドシャ！

カミユ

「第7戦！勝者！アル、宝極真！！」

真

「見ててくれましたか、隆ちゃん・・・」

真、愛の力で勝利！！

次回は隆太が頑張ります！！

ファイル618：隆太、輝く橙色！！

隆太

「真ちゃん、スゴイよ！オレも頑張つて来るからね。」

真

「うん、頑張つてね。」

2人の周りの空気が少し和んだ。

カミユ

「ラブラブですねえ。では8戦目を始めましょう！第8戦！アル、平尾隆太！ペンデュラムアッド、ドラーゼー！試合、開始！！」

ドラーゼー

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビシヨップ』

「テメエら、戦場でラブラブやってんじゃねえぞ！ブチのめしたるかあ！！」

ドラーゼーは殺気満々だ。

隆太

「別に良いじゃない、オレと真ちゃん恋人同士なんだし。真ちゃん、すぐに終わらせて来るからね。」

真

「うん。」

さらに良い雰囲気の2人。

ドラーゼー

「いい加減にしろっ！！ネイチャー：RING・シャドーソーサ
ー！！！」

ドラーゼーは黒いfrisbeeを複数枚放った。

ドシュ！！

隆太

「やつ！よっ！」

隆太はそれを軽やかに避けた。

トッ！

隆太

「黒いfrisbee。影使いか。」

ドラーゼー

「そうだ！テメエなんか数秒で葬り去ってやる！！！」

ドラーゼーは殺る気満々だ。

隆太

「それはオレのセリフだ。」

そう言うと、隆太は朱色の宝石を取り出した。

スッ！

ドラーゼー

「何だ、それは？」

隆太

「オレの体内に入っていた宝石、バレンシアアライズ。瞬殺されるのは、君の方だよ。」

そう言うと、隆太は念を込め始めた。

ドラーゼー

「な、何だ？何かマズい気がする・・・何かする気だな？させるかあ！ー！」

ドラーゼーはシャドーソーサーを再び放った。

ドシュツ、ドシュツ！！

だが、隆太はそれを華麗に避ける。

隆太

「ハッ！やつ！よっ！」

ヒュツ、ヒュツ！

ドラーゼー

「なぜだ！なぜ当たらん！？」

隆太

「その理由は簡単だよ。君が弱いからさ。」

隆太はシレッと言う。

ドラーゼー

「チックショオオオオオ!!」

ドラーゼーはすっかり冷静さを失ってしまった。

隆太

「冷静さを失った事が、君の敗因だよ。」

隆太はそう言うと、宝石を持つ手を強く握った。

ギュッ!

隆太

「朱色に輝く、バレンシアアライズよ・・・今オレに、その橙の力を示せ!!」

隆太の身体を、オレンジの光が包み込む。

パアアアア・・・

隆太

「喰らえ!!! ルナティックプレリユード!!!」

隆太はオレンジ色の光を放った。

パアアアア！！

ドラーゼー

「ガハアア！！」

ドラーゼーは吹っ飛ばされ、海に落ちた。

バツシャアン！！

ブカア・・・

カミュ

「第8戦！勝者！アル、平尾隆太！！」

真

「やったあ、隆ちゃん」

隆太

「へへッ・・・」

隆太、強すぎです・・・

次回はいよいよ東尾マリアだ！！

ファイル619：東尾マリア、任意解除の人猫化！！

マリア

「2人共ようやくたな。最後はウチが頑張つて来るさかい、応援してや。」

マリアはそう言うと、バッグから村正を出した。

スッ！

マリア

「あ、そつや。これもこれも。」

マリアは続けて、バッグから小さな小瓶を取り出した。

小瓶をポケットに入れる。

マリア

「さあ、早う勝負始めようやサングリア？」

サングリア

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ナイト』

「望むところだよ、嬢ちゃん。相手になってやるよあー!!」

カミュ

「6THバトル最終戦！アル、東尾マリア！ペンデュラムアッド、サングリア！試合・・・開始ー!!」

サンテリア

「まずは軽くいくよお。ネイチャー：RING・モルフォライフル
！！」

サンテリアはライフルを構えた。

ジャキッ！

サンテリア

「喰らえ！毒の弾丸！！」

サンテリアはライフルを撃った。

ドン！！

弾丸はマリアに向かって行く。

ゴォ！！

マリアは村正で弾丸を叩き斬った。

ザン！！

サンテリア

「やるねえ、君。」

マリア

「先に言っとくけど、ウチには毒は効かへん。耐性があるさかいな。」

サンテリア

「そのようだな。だが、戦況はオイラの方が有利だ。君、ネコが
の苦手なんだろう？」

マリア

「ギクッ！！な、何でそれを・・・」

マリアは珍しく焦っている。

サンテリア

「忘れたのか？こないだの雷音寺獅子雅の野望に、オイラ達ペンデ
ユラムアッドが関わってた事を・・・あの時上から聞いたのさ、君
の弱点をな。」

マリア

「うつ・・・」

マリアは冷や汗が流れる。

マリア

「そやから何やねん！！弱点を知られたから言つて、まだウチの勝
つ可能性がなくなつたワケやない！！」

サンテリア

「それはどうかな？」

そう言つと、サンテリアは：RINGを取り出した。

スッ！

マリア

「え？」

サングリア

「既に君対策の：RINGは用意しておいた。出でよー!」

サングリアは海めがけて：RINGを投げた。

ポイツ！

ドボン!!

マリアは啞然とする。

マリア

「何しとんねん、アンタ・・・」

サングリア

「フッフ、何も気づいていないようだね、君は・・・」

マリア

「何やと？」

サングリア

「後ろの海を見てみな!!」

サングリアの発言にマリアが後ろの海を見ると、何かの影が海を漂っていた。

又ウ・・・

マリア

「!?!」

そして次の瞬間、『それ』は海の中から飛び出しマリアに襲いかか
つて来た。

ザパアアアン!!

マリア

「キャ〜ツ!!」

マリアは悲鳴を上げ、怪物に飲み込まれた。

バクン!!

ドパアン!!

実希

「マリアちゃんが飲み込まれた!?!」

サンテリア

「コイツはオイラのガーディアン『オーシャンキャット』!要する
に海の猫だ。猫が弱点である彼女への対策として用意しておいたの
さ。今頃彼女、腹の中で気絶してるだろうねえ・・・」

マリア（ハヤテキアラ）

「そ、そんな・・・」

サンテリア

「後1分もすれば、オイラの勝利は確実・・・」

サンテリアがそこまで言った時、突然海からオーシャンキャットが飛び上がって来た。

ザッパアアアアン！！

サンテリア

「ん？」

サンテリアが見ていると、オーシャンキャットの体から爪が出て来た。

ズボッ！！

サンテリア

「え？」

次の瞬間、ネコ化したマリアがオーシャンキャットの腹を斬り裂いて飛び出て来た。

マリア

「フニヤアアアア！！」

ザンッ！！

サンテリア

「な、何い！？」

マリアが着地すると同時に、オーシャンキャットは消滅した。

ウン・・・

パリン！

サンテリア

「バ、バカな！！なぜ・・・」

実希

「マリアちゃんの弱点知ってるんやったら、この事も知つとるやろ？彼女はネコに追い詰められた時、人猫化するんや！」

サンテリア

「何だとお・・・」

園子

「でもマズいわよ。前も見境なしに仲間を襲ったらしいし、このままだとまた仲間を攻撃して・・・」

園子がそこまで言った次の瞬間、マリアはポケットから小瓶を取り出した。

そして、フタを開けて中身を飲む。

グビグビ・・・

ゴクン！

すると、マリアの逆立った髪や血走った瞳が元に戻った。

スウウウウ・・・

サングリア

「な、何！？なぜ元に戻った！？」

マリア

「この小瓶の中身は、たくまの血液とマタタビのエキスを調合して作った、ウチ用の鎮静剤や。哀ちゃんに作ってもらたんよ。ともかくこれで、アンタのガーディアンはなくなった。さあ、本気でいくでえー！！」

マリアは村正を手に持ち、サングリアに突っ込んだ。

ドンッ！！

サングリア

「く、来るなあ！！モルフォライフル！！」

サングリアはがむしゃらに銃を撃った。

ドン、ドン！！

しかし、マリアには1発も当たっていない。

マリア

「この勝負、初めから結末は見えとったかもしれないなあ・・・」

サングリア

「ヒイツ・・・」

マリア

「アンタがウチに勝てへん最大の理由、教えたるか？」

サングリア

「うわあああ！！」

サングリアは最大の1発を放った。

ドオン！！

マリア

「ハッ！！」

ババツ！

マリアはそれを華麗に避けると、サングリアの背後に着地した。

トッ！

サングリア

「！！！！」

マリア

「アンタがウチに勝てへん最大の理由、それは・・・アンタが銃の力を過信しとる事や。銃は弾を発射した後、次の弾を撃つまでにスキがある。それに比べウチが使う木刀等は素早く攻撃できる故、相手に一切スキを与えへん！アンタとその実力やと、アンタが10発弾丸撃つまでにウチは5回はアンタを攻撃できるっちゅうこっちゃ！！」

サングリア

「ヒ・・・ヒイイイッ!!」

マリア

「終わりや!!」

マリアは村正でサングリアの後頭部を強打した。

ドカア!!

サングリア

「ぐあ・・・」

サングリアは倒れた。

ドサッ!

カミュ

「6THバトル最終戦!!勝者!アル、東尾マリア!!」

マリア

「ええ気分転換になったわ。」

さすがだね、マリア!!

今回は番外編、瑛祐と琴美の話だよ!!

ファイル620：瑛祐と琴美の愛しき過去！！

長い間明らかになかった、琴美が瑛祐に惚れた理由。

今回はその原因となった話をお話ししましょう！！

それは、2人が中学2年生だった頃まで遡る・・・

3年前・・・

当時瑛祐と琴美は、中学生でありながらFBI捜査官をやっていた。

2人の実力は大人達にも勝るとも劣らない実力であり、ボスにも認められていた。

そのため、大人でも難しい困難な任務を任される事も多かったのである。

瑛祐と琴美の2人はお互いに協力し合いながら、どんなに困難な任務でも最後には必ず成功させてきた。

そんなある日、2人に今までで最大最難関の任務が任される事になったのであった・・・

瑛祐と琴美は、日向邸でボスからの指令メールを見つめていた。

本堂瑛祐『当時14歳』

「今度の任務は、麻薬組織への潜入・及び壊滅か・・・」

日向琴美『当時14歳』

「今までで一番困難で、やりがいのある任務ね。」

瑛祐

「どうする、琴美？オレ最近寝不足だから、長時間の仕事はキツいぜ。」

琴美

「それなら、今回はアタシに任せてくれない？」

瑛祐

「大丈夫なのか？」

琴美

「ええ。アタシ、夜は強い方だから。」

瑛祐

「そうか。じゃあ頼むぜ。何かあったらメールしろよ。」

琴美

「ええ。」

琴美は頷くと、日向邸を出て行った。

しばらくして、琴美はコンビニに着いた。

琴美

「ボスの話だと、密売人はここによく買い物に来るって言ってたわね・・・とりあえず、何かしながら待つてみましょうか・・・」

琴美はそう呟くと、飲物を物色し始めた。

琴美

「あ、これが良さそう。昨日新発売されたメロン味のファンタ！」

琴美はメロン味のファンタのボトルを手にとると、レジに向かう。

琴美

「これ、ください！」

「150円になります。」

琴美はレジでお金を払うと、商品を入れた袋を受け取った。

琴美

「これは後で飲むとして・・・雑誌でも読もうかな？」

琴美は雑誌コーナーに向かうと、雑誌を読み始めた。

その時である。

1人の男がコンビニに入って来たのだ。

黒い服を着て帽子を目深にかぶった、いかにも怪しそうな男である。

琴美

「（何？あのいかにも怪しそうな男は・・・）」

琴美は雑誌を見ながら、男の様子を窺^{うかが}った。

「マイルドセブン1つ。」

男はタバコの箱を指差した。

「380円になります。」

男は500円を出し120円のお釣りをもらつと、袋を持ってコンビニを出た。

琴美

「（出たわね。よし、私も・・・）」

琴美は雑誌を棚に戻すと、男の尾行を開始した。

琴美はさつきから、男の尾行を続けていた。

男はタバコを吸いながら、ゆつくりと歩いている。

琴美はコンビニで買ったジュースを飲みながら歩く。

琴美

「（アイツ、振り返りすらしないなんて・・・よほど末端の密売人なのかしらね・・・）」

琴美はそう思いながら、尾行を続ける。

30分くらいして、男はどこかの廃ビルの前までやって来た。

琴美は影から様子を窺う。

男は辺りをキョロキョロすると、そのまま廃ビルの中に入って行った。

琴美

「（入って行ったわ！ここは、北杯戸のホテル跡地ね・・・）」

琴美は地名を確認すると、瑛祐に自分が今いる場所をメールした。

琴美

「（瑛祐にはメールした。今回はアタシ一人で任務を成功させてみせるー！）」

琴美はそう決意すると、廃ビルの中へと入って行った。

琴美は、ゆつくりと内部を探索している。

見張りがいる気配はない。

琴美

「見張りはいないのかしら。このまま楽にいけると良いけど・・・」

琴美はそう思いながら、上へと進んで行った。

その頃自分の部屋で寝ていた瑛祐はというと、ようやく目を覚まそうとしていた。

瑛祐

「ん・・・よく寝た・・・」

瑛祐は腕時計を見る。

瑛祐

「もうこんな時間かよ。ちと寝過ぎだな。」

瑛祐はぼやきながら、携帯の電源を入れた。

するとほどなく、メールが受信された。

瑛祐

「ん？メールか・・・琴美から？」

瑛祐はメールの内容を読んだ。

『麻薬組織のアジトを見つけたわ。北杯戸のホテル跡地にあるみたい。アタシ、頑張るからね!』

瑛祐はメールを確認すると、すぐに着替え出した。

瑛祐

「あのバカ!アイツはまだ能力者として未熟なんだぞ!」

瑛祐はそう言いながら、着替えを終える。

瑛祐は上着を羽織ると、日向邸を飛び出した。

瑛祐

「ムチャするなよ、琴美!」

同じ頃、琴美は廃ビルの最上階にたどり着いた。

琴美

「ついに何もなかったわね。」

琴美はそう言いながら、静かに扉を開ける。

キィ・・・

琴美の視線の先にあったのは、麻薬の取り引きをしている男達の姿だった。

琴美は真っ直ぐ進み出る。

琴美

「そこまでよ、麻薬密売組織!!」

男達は振り向く。

「誰だ!!」

琴美

「アタシは日向琴美! FBIよ!!」

「FBIの小娘か。ここを突き止めた事は誉めてやるぜ。」

「だが、もう終わりだ。」

男のセリフと同時に、複数の集団が琴美を取り囲んだ。

ズラッ!

「小娘を引っ捕らえろ!!」

リーダー格らしき男が叫ぶと、男達が琴美に飛びかかった。

琴美

「ジェムド!!」

琴美は宝石の弾丸を放った。

ドン!!

1人、また1人と男達を倒していく。

「やるな、嬢ちゃん。だが・・・」

リーダーの男は不敵に笑った。

どうやら琴美、まだ自分の能力を使いこなせていないらしく息が上がってしまっているようだ。

瑛祐が言った『まだ未熟』とは、この事だったのである。

琴美

「ハア、ハア・・・」

琴美は片膝をついた。

「ククク、ここまでだな。オマエ達!!」

リーダー格の男が一言言うと、男達が琴美に襲いかかった。

琴美

「キヤアアアア!!」

数分後、琴美は手足と体をロープで縛り上げられてしまった。

オマケに口には声が出せないようにガムテープまで貼られている。

その状態で、琴美は男達に取り囲まれていた。

琴美

「んゝ、んゝ・・・」

琴美はジタバタともがいている。

そんな彼女を、男達は笑いながら見つめていた。

「1人で乗り込んで来た勇氣は高評価だが、相手が悪かったなあ。」

「で、この子どうします？ボス。」

「そうだな・・・取引現場を目撃されだし、顔も見られている。生かしておくワケにもいかないだろう。」

リーダーの男は一拍おくと、こう言った。

「なかなかの上玉だが、仕方ない。かわいそうだが、始末するしかねえな・・・」

琴美

「!?!」

琴美はビクツとする。

「オマエ達、殺れ。」

リーダーの男が言うと、男達は拳銃を取り出した。

ジャキ！

そして、ゆっくりと琴美に近づいて行く。

琴美

「ん、んん・・・（イ、イヤ！まだ死にたくない！瑛祐にアタシの気持ちを伝えてないのに、こんなところで終わりたくない！！）」

琴美は震えている。

琴美

「んんんんっ！！！！（助けて、瑛祐っ！！！！）」

琴美は必死に叫んだ。

「ハハハ、もう終わりだあ！！！！」

男達が高笑いした、その時だった。

この状況を覆す、少年の声が聞こえたのは。

「アイアン・テオギドナ！！！！」

ゴッ！！

突然聞こえてきた声。

次の瞬間、男達は地面に叩きつけられた。

グシャアアアア！！

「ギヤアアアア！」

「な、何だ！？誰だ、出て来い！！」

男達を一気に倒され、リーダー格の男はたじろぎながら叫んだ。

ドアがゆっくり開くと、さっきの声の主が中に入って来た。

コツ、コツ・・・

琴美

「（え、瑛祐・・・）」

瑛祐は立ち止まると、リーダーの男を睨みつけた。

瑛祐

「よくもオレの仲間をヒドイ目に遭わせてくれたな・・・すっかり落とし前つけさせてもらうから、覚悟しやがれ！！」

瑛祐はかなり怒っている。

リーダーの男は自分1人だけだというのに、琴美という人質がいるせいか強気でこんな事を言った。

「ヘッ、オマエそこ動くんじゃねえぞ。1歩でも動いたら、この小娘の命は・・・」

瑛祐

「ギドナ。」

瑛祐は重力弾を放った。

ドン！！

「無視かゝ！？」

リーダーの男は吹っ飛ばされた。

瑛祐

「ロンド・ギドナ！」

瑛祐は重力のムチを放ち、琴美を救出した。

瑛祐

「大丈夫か、琴美？」

瑛祐はそう言うと、琴美のロープとガムテープを解いた。

琴美

「う、うん・・・大丈夫よ・・・」

琴美は俯き加減に答えた。

瑛祐

「そうか、安心したぜ。」

瑛祐は微笑むと、左手で琴美を抱き寄せた。

ギュッ！

琴美

「ちよつ、瑛祐!？」

琴美が頬を染める。

瑛祐

「琴美、オレの側から離れるなよ。」

瑛祐がそう言うと同時に、さっきの男達が瑛祐と琴美を取り囲んだ。

ズラッ!

瑛祐

「フン、まだやる気かよ……どうやらオレを本気にさせたようだな!！」

瑛祐は右手をかざす。

瑛祐

「ラージア・ギドナ!！」

ドドドドド!!

瑛祐は右足を軸にして高速回転しながら呪文を放ち、男達を吹っ飛ばした。

「な……」

たじろぐリーダー格の男。

瑛祐

「ハアアアアッ!!」

瑛祐はリーダー格の男に突っ込むと、鉄拳で男を殴り飛ばした。

ドゴォ!!

「ガハアア!!」

リーダーの男は気絶した。

その後、瑛祐と琴美は男達を拘束した上で警察に通報した。

そして警察が来る前に、2人は引き上げた。

こうして、瑛祐と琴美は最大最難関の任務を無事に成功させたのだ
った。

日向邸

瑛祐

「琴美、今日のオマエ授業中ずっと上の空だったな。」

琴美

「そう?」

瑛祐

「何か思い出してたのか？」

琴美

「あの時の任務の事思い出してたの。麻薬組織に捕まって殺されそうになって、あなたに守られたあの任務をね。」

瑛祐

「そうか。そういえばあの時からだったな。オマエの能力が飛躍的に上昇したのは。」

琴美

「うん。あなたに少しでも追いつきたくてね。」

瑛祐

「オマエはオマエなりに頑張れば良いんだよ。それがオマエの言いトコなんだから。」

琴美

「そうね。ありがとう、瑛祐。」

そう言うと、琴美は瑛祐の肩に寄りかかった。

ポスッ！

瑛祐

「琴美？」

琴美

「ゴメン、しばらくこのままでいさせて・・・」

瑛祐

「あ、ああ。」

琴美はしばらくすると、スヤスヤと寝息を立て始めた。

琴美

「スースー・・・」

瑛祐

「寝ちまいやがった。ったく、しょうがねえな・・・」

瑛祐は愚痴ると、琴美を抱きかかえた。

そして、琴美の部屋まで運んで行く。

瑛祐

「今日是一緒に寝てやるか・・・」

瑛祐はそう呟いた。

琴美は寝ているハズだが、その腕はしっかり瑛祐の首に回っていた。

琴美

「（大好きよ、瑛祐・・・）」

琴美は笑顔で眠っていた・・・

瑛祐と琴美は、昔なら仲が良かったんだね

次回は伊澄と理沙とワタルのお出かけ!!

ファイル621：伊澄と理沙とワタルのお出かけ！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル72

さぎのみや おぼろ さぎのみや つきや さぎのみや せつき さぎのみや なのは
鷺之宮朧・鷺之宮月夜・鷺之宮雪月・鷺之宮花

『ハヤテのごとく！』のキャラクター、鷺之宮伊澄の姉弟妹々（きようだい）である4人。

4人共伊澄と同じく方向オンチな事が多い。

朧はカワイイ男の子に目がなく（月夜曰く異常）、カワイイ男の子を見るとすぐに着せ替えゴッコに巻き込もうとするクセがある。

実際コナンとハヤテは初めて会った時、彼女の着せ替えゴッコにつき合わされそうになった。

月夜は咲夜に良くカワイがられていたためかお笑いが好きになり、常時ハリセン（突っ込み用）を持ち歩いている。

朧が度を越した事をしようとするハリセンで突っ込み止める立場にある。

彼女の異常過ぎるカワイイ男の子好きには迷惑しているようであり、コナンとハヤテの貞操の危機を救った（しかしコナンとハヤテは既に女装させられた経験があるので貞操を救ったと言えるかどうか不明）。

月夜の発言から察するに、彼自身も朧の着せ替えゴッコにつき合わされた事があったのだろうと思われる。

雪月と花はまだまだ甘えん坊で、伊澄にかまってもらえるならどんな事でもするという純粋で無垢な少女達である。

得意技はウソ泣きと抱きつきで、特にウソ泣きを応用した泣き落としをやられると伊澄は妥協せざるをえなくなる。

4人の伊澄と他の子に対する呼び方及び1人称は、朧が『伊澄姉』

『月夜』『せーちゃん』『なーちゃん』『アタシ』、月夜が『伊澄』

姉ちゃん』『臃』『せーちゃん』『なーちゃん』『オレ』、雪月が『伊澄姉ちゃん』『臃姉ちゃん』『兄ちゃん』『なーちゃん』『私』『花がおねーたん』『ねーね』『にーに』『せーせ』『私』。

何だかんだ言つて、4人共伊澄の事を愛しているのは確かである。

名前の由来は、臃と月夜が『臃月夜』オボロツキヨで、雪月と花が『雪月花』。

臃と月夜は11歳で、雪月は7歳、花は5歳。

ファイル621：伊澄と理沙とワタルのお出かけ！！

白皇学院から帰って来た鷺之宮伊澄と朝風理沙は、素早く私服に着替えていた。

なぜ2人がこれほどまでに急いでいるかというと、水曜日の夜10時に8チャンネルで放送されている『爆笑 レッドカーペット』の生放送を橘ワタルと観に行く事になっているからである。

早く行きたくなるのも当然といえよう。

伊澄

「じゃあ、行きましょうか・・・」

理沙

「絶対に音を立てないでくださいよ・・・」

伊澄と理沙の言葉に従うのは、氷田と火枝。

鷺之宮家執事衆の中でも1・2を争う実力者である。

彼らがいる限り伊澄の身は安全、誘拐犯だろうが暴漢だろうが指一本触れさせはしない。

さらに理沙もいるのだから、まさに最強のボディガードである。

．．
実に頼りになる3人だが、そんな彼らでも手の出せない相手がいた．

「お姉ちゃん！」

「おねーたん！」

伊澄

「ホギヤー！」

ド力！！

背後から突然の体当たりを喰らって、伊澄は床に頭から突っ込んだ。

彼女を転ばした張本人達は無垢な笑顔で笑っている。

伊澄

「イタタタ、これだから人の体は未熟で困るわ・・・」

「何、咲夜姉ちゃんみたいなボケやってるの、伊澄姉ちゃん？」

「わーい、おねーたんが転んだ転んだ」

伊澄

「あゝもう、離れなさい雪月に花ー！！」

倒れた状態で怒る伊澄だが、雪月と花は両足にくつついたままである。

大好きな長女にかまってもらいたいが故に見せる無邪気なスマイル。

伊澄に頭をいくら叩かれても、全く動じる気配がない。

サギノミヤ セツキ
鷺之宮雪月『7 伊澄の妹』

「アッハッハッ、姉ちゃんのチョップだチョップ」

サギノミヤ ナノハ
鷺之宮花『5 伊澄の妹』

「もつとやってやって、ウフフフ」

伊澄

「こ、この子達・・・氷田、火枝、理沙さん！何してるんです、私を助けなさいよー！！」

いくら伊澄の命令でも、氷田達にはどうしようもない。

なぜなら、仲の良い姉妹の馴れ合いに割り込めば、娘達を溺愛する源治郎や初穂から何を言われるかわかったものではないからなのだ。

無論、伊澄と理沙は後で弁護してくれるとは思いが・・・

後でも説明するが、こういう状況において伊澄が勝つ可能性はほぼ99パーセントないのである。

「あつ、伊澄姉ちゃんここにいたのか。」

玄関でじゃれ合う3姉妹と傍観する2人の青年。

理沙はどうしようどうしようとオロオロしている。

そんな膠着状態を破ったのは、家の奥からやって来た双子の姉弟だった。
コウチャク

11歳になる朧と月夜、
オボロ ツキヤ
反抗期になりつつある小憎らしい2人で

はあるが、今の伊澄には救いの女神に見えるだろう。

伊澄

「月夜、良いところに来てくれたわ！この2人をどうにかしてよ。」

朧

「お手柄よ、せーちゃん、なーちゃん。ところで伊澄姉、そんなに急いでどこに行く気だったの？」

伊澄

「お、朧、あなた・・・」

現れた2人が女神どころか猛獣使いだという事を瞬時に悟った伊澄。

しどろもどろになりながらも、妹の問いに答えた。

伊澄

「ど、どこでも良いでしょう。お年頃の女には野暮用も多いの、あなたもその内わかるわよ。」

朧

「まさか2人でレッカ（レッドカーペットの略）を観に行ったりなんかしないわよねえ、伊澄姉？」

伊澄

「どうしてあなた、それを・・・ハッ！！」

しまったと口を押さえた伊澄だったが、時既に遅し。

理沙は『もうダメですね』という表情をした。

予想通りの返事を聞いた朧は両手を素速く組み合わせると、瞳を潤ませてウソ泣きスタイルに入った。

その横では月夜が両手をヒラヒラさせて、雪月と花に『泣け』とサインを送る。

雪月

「伊澄姉ちゃん、私達の事置いて行くつもりだったの？」

花

「うええーん、おねーたん私達の事嫌いになったんだわ！！私達なんか、いない方が良くないんだわああ！！」

泣きじゃくる妹3人と、後ろから恨みのこもった視線で見つめる月夜。

それは理沙がメイドとして鷺之宮家に仕える以前からこの家で見られており、休日になるたびに繰り広げられている光景である。

そして、こうなってしまうては伊澄に選択の余地などない。

座り込んだ伊澄は雪月達の頭を撫でつつ、朧達の筋書き通りの敗北宣言を口にした。

伊澄

「わかったわかった、一緒に行きましょう。みんなでレッカ観に行きましょう。」

花

「嫌々言ってるんじゃないの？」

伊澄

「ちがうちがう、私達も雪月達とみんなで行けた方が楽しいの。さ、支度して来なさい、朧達と一緒にね。」

雪月

「わぁーい、姉ちゃん大好き!!」

そう言いながら朧達が支度しに自室に向かうと、伊澄と理沙はため息をついた。

負け犬公園で伊澄達の事を待っていたワタル・サキ・愛歌・ソニアの4人は、やって来た伊澄達を見て啞然とした。

なぜなら、伊澄と理沙と氷田と火枝の他に、朧達がいたからだ。

ワタル

「伊澄・・・」

愛歌

「どうやら、妹さん達の魔の手から逃げられなかったようですね・・・」

ソニア

「じつなると、やはり・・・」

サキ

「ああなりますね・・・」

ワタル達もため息をついた。

家族で観に行くとなれば、ガラス張りのVIPルームを借りて見る事になる。

伊澄達が朝から並んでようやく手に入れた、舞台すぐ側の指定席のチケットはゴミ箱に捨てるしかない。

その事に困り果てながら、伊澄達は目的地へと向かった。

伊澄達はVIPルームから、レッドカーペットの生放送を観ていた。

ワタル

「あゝあ、せっかく伊澄達と並んで買った特等席のチケットだったのになあ・・・」

ワタルが愚痴る。

理沙

「しょうがないじゃないか、伊澄君の妹達に見つかったら逃げられないんだから。」

ワタル

「それはそうだが・・・ま、いつか。みんなで観るのも楽しいし。」

ソニア

「優しいですね、ワタル君は。」

ソニアが微笑む。

伊澄

「私はワタル君のそういうところ、好きですよ」

伊澄は笑顔で言った。

ワタル

「い、伊澄・・・」

ワタルは赤面している。

そんな2人を、理沙達は保護者のような眼差しで見つめていた。

その後、ワタル達はレッカの生放送を満喫し、帰りに外食して帰路に着いた。

ちなみに一番面白かったのは、ナベアツとザ・パンチ、そしてバカリズムだったそうだ。

余談だが、最前列の座席には真希と実希と敦志が座っており、その3人も充分に楽しんでいたんだとか・・・

最強巫女さんの伊澄も、無邪気な妹達にはかなわないんだね

今回は虹の舞台で7THバトル!!

ファイル622：7THバトル！虹色の密室！！

1日休みを満喫したコナン達は、ディールゼイヴに戻って来た。

カミユ

「皆さんおはようございます。昨日はしっかり休みを取れたと思います。では早速、本日の対戦人数及びフィールドを決めさせていただきます。」

ディールゼイヴの姫が、ダイスを振った。

ヒュッ！

カツン！

7 2 計9

4 5 計9

カミユ

「人数9VS9！！フィールドはレインボーフィールド！！さあ、誰が出ますか！？」

名乗りを上げたのは、真希・暁・風月・伊澄・歩・咲夜・ソニア・ヒナギク・そしてハヤテの9人だ。

カミユ

「今までの18人とは魔力が桁違いですね・・・この9人が切り札というワケですか。では、こちら側もそれなりの強者を用意しなく

てはいけませんね。」

カミユが指をパチンと鳴らすと、黒いローブを着た3人がコナン達の前に現れた。

ザッ・・・

マンハッタン・ロワイヤル・X・Y・Z

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ナイト』

「・・・」

カミユ

「彼らはマンハッタン、ロワイヤル、そしてX・Y・Z様です。今までのナイトよりも数倍強いです。この3人を含めた9人が今回の相手ですよ。彼らは最後の3戦に控えてますので、皆さん好戦を見せてくださいね!!」

ハヤテ達9人は、頷いた。

カミユ

「それではこの12人を、レインボーフィールドへ!!」

組織対戦7THバトル レインボーフィールド

ウン!

ハヤテ達は、レインボーフィールドへとやって来た。

辺り一面虹で覆われ、大きな箱の中にいるような雰囲気だ。

咲夜

「キレイやなあ！こない幻想的な場所もあるやなんて！」

ハヤテ

「そうですね、咲夜さん。」

伊澄

「ハヤテ様、咲夜。景色を眺めている場合ではなさそうですよ。」

ソニア

「来ます。」

伊澄とソニアが静かに言うと、9人の構成員がワープして来た。

ウン！

ザッ！！

カミュ

「FTHバトル開始です！さあ、最初は誰が出ますか！？」

グレナデン

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「オレだ。」

真希

「私よ。」

ザッ！

実希の姉、真希出陣！！

次回、彼女のさらなる力が開花する！！

ファイル623：真希、冷静なる戦い！！

カミュ

「FTHバトル第1戦！アル、片桐真希！ペンデュラムアッド、グレナデン！開始！！」

グレナデン

「あの娘の姉か。楽しませてくれそうだな。まずは小手調べだ！」

グレナデンは槍型の武器を出すと、手に持って真希に向かって行った。

ダッ！

グレナデン

「オオオオオ！！」

真希は微動だにしない。

グレナデン

「そのまま突っ立っていると当たるぜえ！！」

ドス！！

そう言ったと同時に、槍が真希の体を貫いた。

グレナデン

「手応えあり！！」

真希

「残念！それは私の分身ですの。」

グレナデン

「え？」

グレナデンが声がした方に振り向くと、真希が平然と立っていた。

グレナデン

「なっ！？じゃあ槍が貫いたコイツは・・・？」

グレナデンが槍で貫いた真希に向き直ると、真希の体が水の粒子に変わった。

ドロオ・・・

グレナデン

「なっ・・・」

真希

「私の呪文の1つ、アクル・ドロン！水の粒子を変化させ、私の分身を作る術ですの！！」

グレナデン

「おのれえ・・・ならば当たるまでやるまでだあ！！ガトリングランス！！」

グレナデンはがむしゃらに槍を放った。

ドシュドシュドシュ！！

真希

「ガズン・アクル!!」

ドドドドド!!

真希は水の弾丸を連射し、槍を相殺した。

ボシユボシユボシユ!!

グレナデン

「ぐっ……」

真希

「この程度ですの?」

真希は冷静に言った。

グレナデン

「チッ……チックシヨオオオオ!!」

グレナデンは我を忘れて突っ込んで来た。

ドンッ!!

真希

「自分の攻撃全て防がれて、冷静さを失ったか……状態としては最悪ですの。」

真希は両手を前にかざした。

ババツ！！

真希

「ハアアアアツ・・・ディオ・アクルガ！！」

真希は強大な水弾を放った。

ドン！！

巨大水弾は真っ直ぐグレナデンに向かって行き、彼に直撃した。

ドゴオ！！

グレナデン

「がああああゝっ！！」

グレナデンは吹っ飛ばされ、後方の壁に激突した。

ドゴオオオオオン！！

グレナデン

「ぐう・・・」

グレナデンは地面に落下すると、そのまま気絶した。

ドサツ！

カミュ

「第1戦！勝者！アル、片桐真希！！」

真希

「楽勝過ぎですの。」

真希は笑顔で言った。

真希、強すぎ!!

次回は暁が実力発揮!!

ファイル624：暁、紅蓮の炎！！

暁

「真希ちゃん、相変わらず強いなあ。次はオレが行って来るよ。」

真希が戻って来ると、暁が準備を始めていた。

マンハッタン

「こっちは誰が出る？」

ローゼル

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「次は私が行く。」

カミユ

「第2戦！アル、常盤暁！ペンデュラムアッド、ローゼル！開始！
！」

ローゼル

「先手必勝！ネイチャー：RING・ローズダンス！！」

ローゼルの周りに、花びらが舞い始めた。

ヒラヒラ・・・

ローゼル

「行きなさい！！」

ドシュ！！

花びらが暁に向かって行く。

暁

「火炎の輪舞^{ロンド}！！」

暁が叫ぶと、彼の周りに炎が出現した。

ボオオオオオ・・・

暁

「ハッ！！」

暁が放った炎は、花びらをあっという間に焼き尽くした。

ボウウ・・・

ローゼル

「やっぱりやるわね、あなた。花びらが一瞬にして黒こげだわ。」

暁

「オレは女に手を上げるのは趣味じゃないが、負けるワケにはいかないんでね。」

暁はそう言つと、ズボンから紅蓮色の宝石を取り出した。

スッ！

ローゼル

「それは？」

暁

「オレの体内で眠っていた宝石、ブロンジエルサンライズだ。風月の看病をした次の日、オレの手の中にあった。きっと、風月を守りたいという想いに共鳴して出現したんだとオレは思ってる。そしてオレを愛してくれる風月のためにも、オレは全力でオマエを倒す！2年間音信不通にしまっていた償いを、少しずつしていくためにも・・・オレは絶対に負けられねえ！！」

そう言うと、暁は宝石をかざした。

暁

「紅蓮色に光り輝くブロンジエルサンライズよ！今ここに、その灼熱の力をオレに示せ！！」

宝石から吹き出した炎が、暁の体を包んでいく。

ゴオオオオオ・・・

ローゼル

「な、何かヤバいわね・・・シールド：RING・・・」

暁

「もう遅い！！全てを焼き尽くせ！！真・暁・灼熱業火の炎帝！！」
！
」

暁は業火に包まれた炎神を召喚した。

暁

「いけえ!!」

ゴツ!!

炎神はローゼルに突っ込み、彼女を炎で取り囲んだ。

ゴオオオオオ!!

ローゼル

「キャアアアア!!」

シューウウウウ・・・

炎が消えると、ローゼルは黒焦げになった状態でバタリと倒れた。

パタ・・・

カミュ

「第2戦!勝者!アル、常盤暁!!」

暁

「フウ・・・」

暁、愛妻のために頑張ったね!

次回は風月が戦います!!

ファイル625：風月、虹色の翼！！

風月

「暁、スゴいわ！」

暁

「ああ、楽しかったね。」

風月

「次は私が頑張ってきて来るね！」

風月はそう言っていると、走って行った。

カミュ

「第3戦！アル、如月風月！ペンデュラムアッド、セミヨン！開始！！！」

セミヨン

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ルーク』

「最初から全力で行かせてもらっぞ。ネイチャー：RING・デュアルウィング！！！」

セミヨンは翼を背中に生やした。

バサッ！

セミヨン

「行くぞ、小娘！」

セミヨンは風月に突っ込んだ。

ギャン！

風月

「空中戦なら負けないわ！シボン・ザ・ビューティ・オブ・ネイチ
ヤー！！！」

風月も4枚の翼を生やした。

バサアツ！

セミヨン

「空中戦か。望むところだ！！」

風月とセミヨンは飛び上がると、空中で向き合った。

セミヨン

「行くぜえ！！」

風月

「望むところよ！！」

2人は同時に飛び出した。

ドン！！

セミヨンは風月の頭上に飛び上がると、急降下した。

セミヨン

「オラァ!!」

セミヨンは風月の体を強打した。

ドゴォ!!

風月

「キャッ!!ぐっ・・・」

風月はすれすれで停止した。

ピタッ!

風月

「不意打ちぐらいでナメないでよね!」

風月はそう言うと、空中に飛び上がりセミヨンの頭上をとらえた。

ビュン!!

セミヨン

「は、速い!!」

風月の体を虹色の光が包み込む。

風月

「行くわよ!!シボン・スプゼルク!!」

風月はセミヨンに突っ込んだ。

風月

「ハアアアアッ！！」

風月はセミヨンを吹っ飛ばした。

ドゴォ！！

セミヨン

「ぐわぁー！！」

セミヨンはフィールドに激突した。

ドゴォォォォン！！

煙が晴れると、セミヨンは完全に気絶した姿で現れた。

ピクピク・・・

カミュ

「第3戦！勝者！アル、如月風月！！」

風月

「やったあ！暁、私勝ったよ！！」

風月はハヤテ達の所に戻って来た。

暁

「ああ、やったな！」

風月

「暁のおかげよ」

そう言うと、風月は暁の頬にキスをした。

チュツ！

暁

「〜！！」

暁は顔を真っ赤にし、倒れた。

パタ！

風月

「きゃ〜、暁〜！！」

風月は叫んだ。

・ そんな風月の行動に、ハヤテ達は全員赤面しながら見つめていた・

風月のカワイさに、暁ももうメロメロだね！

次回からはビショップ戦、鷺之宮伊澄が出陣だ！！

ファイル626：伊澄、八葉六式の実力！！

歩

「次からはビショップ戦みたいだね。誰が先に行く？」

伊澄（鷺之宮）

「私が行きます。咲夜、私流の戦いを見ていてくださいね。」

伊澄はそう言うと、前に出た。

ブルゴーニュ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「次はオレが行こう。」

ペンデュラムアッドからは、ブルゴーニュが進み出た。

カミュ

「第4戦！アル、鷺之宮伊澄！ペンデュラムアッド、ブルゴーニュ！開始！！」

ブルゴーニュ

「君が5THバトルでブラディを倒したメイドの雇い主か？」

伊澄

「そうですが、何か？」

伊澄は強い目つきで言う。

ブルゴーニユ

「ブラディはオレの親友だったんだ。だが死んだのはアイツの自業自得、別に君や彼女を恨む気はない。ただオレは、正々堂々と戦いたいだけだ。この意味わかるな？」

伊澄

「わかります、その意味。さあ、勝負といきましょう!!」

ブルゴーニユ

「あいにくオレは：RINGを使うのが苦手だね。己の技で主に戦わせてもらう!!」

そう言うと、ブルゴーニユは数珠のような物を取り出した。

サッ!

ブルゴーニユ

「オレはペンデュラムに入る前は坊主をしていたのだ。だからいつも愛用の数珠を持ち歩いている。さあ、参られよ!!」

伊澄もお札を数枚取り出した。

伊澄

「八葉六式・お札の弾丸!!」

伊澄はお札を放った。

シュッ!

ブルゴーニユ

「数珠の盾!!」

ドゴォ!!

ブルゴーニユは数珠を盾状に変え、攻撃を防いだ。

ブルゴーニユ

「数珠のムチ!!」

ブルゴーニユは数珠をムチ状にし、伊澄を攻撃した。

シュツ!

バシュ!

伊澄

「キャン!! やりますね。では、私も本気でいきましょう。八葉六式・収束撃破滅却!!」

伊澄は1枚のお札に力を集中させ、一気に放った。

ドシュ!!

ブルゴーニユ

「ホウ! これは大きい! だが・・・効かん!!」

ブルゴーニユは数珠をまとった拳で、伊澄の攻撃を弾いた。

ガキィ!

ブルゴーニユ
「そら！！」

ブルゴーニユは数珠のムチを伸ばし、伊澄を絡め取った。

ギュルルル！！

伊澄
「キャツ！！！」

ブルゴーニユ
「ハッ！！！」

ブルゴーニユは伊澄を引き寄せた。

ギョオ！

ブルゴーニユ
「これで、オレの勝ち・・・」

伊澄
「それはどうでしょうか？」

ブルゴーニユ
「何！？」

伊澄は引き寄せられながら、攻撃の照準をブルゴーニユに合わせていた。

伊澄

「あなたが焦って私を引き寄せて来るこの時を待ってたんです！！
八葉六式・真・伊澄・撃破滅却！！！！」

ドン！！

ブルゴーニユ

「ぐわぁ！！」

伊澄は強烈な術で、数珠ごとブルゴーニユを吹っ飛ばした。

ドザァ！

ブルゴーニユは叫ぶ間もなく気絶した。

カミユ

「第4戦！勝者！アル、鷲之宮伊澄！！」

伊澄

「クスッ」

やっぱりビショップも伊澄にはかなわなかった・・・

次回は歩が戦います！！

味方になるのがやけにアツサリしてる歩ですが、突っ込まないでくださいね・・・

ファイル627：歩の気迫！炎の木刀と氷の木刀！！

歩

「よし、次はアタシが出ますよぉー！！」

歩は軽快に進み出た。

マンハッタン

「相手は我らを裏切ったあの女が。ソーテルヌ、行け。」

ソーテルヌ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「はい。」

カミュ

「第5戦！アル、西沢歩！ペンデュラムアッド、ソーテルヌ！開始！！」

ソーテルヌ

「アタシも：RINGは使わない。アンタなんか、これで充分よ！！」

そう言うと、ソーテルヌは水色の木刀を出した。

ジャキッ！

ソーテルヌ

「アタシ愛用の木刀、影氷斬よ。アンタも持ってるんでしょ？これと対になる刀を。出しな、勝負しましょう。」

歩

「言われずとも出してあげる。影炎斬！！」

歩も影炎斬をかまえた。

歩・ソーテルヌ

「勝負！！」

歩とソーテルヌは、ぶつかり合った。

ガキーン！！

ソーテルヌ

「1つ聞く！なぜペンデュラムを裏切った！！」

歩

「そんなの簡単。自分が間違った事をしている事に気づいたからよ。その事を気づかせてくれた康太郎君に、アタシは感謝している。アタシは康太郎君のためなら、この命だって捨てられる覚悟がある！アタシは、彼の一生懸命で健気な姿に惹かれ、惚れたから・・・」

歩はソーテルヌを弾き飛ばす。

ドカ！！

ソーテルヌ

「ぐっ！！」

ソートル又は体勢を立て直す。

歩

「だからアタシは彼のために戦う！！まがりなりにも彼の執事と約束したしね。」

歩は笑顔で言った。

ソートル又

「ぬかせ！ならその決意、アタシが粉々に砕いてやる！！」

ソートル又は魔力を込め始めた。

コオオオオオ・・・

ソートル又

「散りな！！絶対零度雪崩！！」

ソートル又は雪雪崩のエネルギー波を放った。

ヒュゴオ！！

歩

「そこまで言うなら、アタシも本気でやらないとね。」

歩は魔力を込め始めた。

コオオオオオ・・・

歩

「焼き尽くせ！！真・歩・影超爆裂炎冥斬！！！」

シャドーセーフティージャッター

歩は強烈な炎を放った。

ゴォッ！！

炎の竜は雪崩の壁を突き破り、ソートル又に向かって行った。

ソートル又

「キャアアアア！！」

直撃を受けたソートル又は、吹き飛ばされ気絶した。

ドザア！

歩はソートル又に近寄ると、彼女の手から木刀を取った。

歩

「この木刀、有意義に使わせてもらっわね？」

歩は笑顔で言った。

カミュ

「第5戦！勝者！アル、西沢歩！！」

やっぱり歩は強かった！！

今回はハヤテの恋人、咲夜が戦う！！

ファイル628：咲夜、ハヤテの誇れる愛妻！！

咲夜

「伊澄さんも歩はんも強いなあ。次がウチが行くさかいな。」

ハヤテ

「頑張つて来てくださいね、咲夜。」

咲夜

「ああ。」

咲夜は頷くと、前に進んだ。

カミユ

「第6戦！アル、愛沢咲夜！ペンデュラムアッド、スプマンテ！開始！！」

スプマンテ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビシヨップ』

「速攻で終わらせてやろう、小娘！ネイチャー：RING・マッドランチャー！！」

スプマンテは銃型：RINGを取り出した。

ジャカ！！

スプマンテ

「喰らえ!!」

スプマンテは泥の弾丸を撃ち出した。

ドン!!

咲夜

「（泥使い!!）ハッ!!」

咲夜は素速く弾丸を避けた。

ババッ!

咲夜

「やるな、アンタ!」

スプマンテ

「オレはビショップの中でも上位の者だ。オマエのような小娘に負けるワケにはイカンのだ!!」

スプマンテは泥弾丸を連射した。

ドドドドド!!

咲夜

「くっ!!ハリセンの盾!!」

咲夜がハリセンを前にかざすと、ハリセンが巨大化し盾状になった。

ポウン!!

盾状になったハリセンが、泥弾丸を防いだ。

ドォン！！

スプマンテ

「やるじゃないか。だが、質量を変えればどうかな？」

ズズズズズ！

質量が大きくなっていく。

スプマンテは巨大化した弾丸を発射した。

ドン！！

咲夜

「ハッ！！」

咲夜は再びハリセンを盾にする。

だが、泥弾丸が大きすぎたのか防ぎきれなかった。

ドゴォ！！

弾丸は盾を弾き飛ばし、咲夜に直撃した。

ドガァン！！

咲夜

「キヤアアアア！！くっ・・・」

咲夜は吹っ飛ばされつつも、体勢を立て直した。

ザザザ！

スプマンテ

「そろそろトドメを刺してやろう・・・」

スプマンテは咲夜に近づいて行く。

カツ、カツ！

咲夜

「まだや。まだ負けるワケにはいかへん！ウチはハヤテの、誇れる愛妻になるんやあ！！」

咲夜は叫ぶと、金色のハリセンを取り出した。

咲夜

「サクハヤテ
センザンコウウチが伊澄さんとの修業で得た新たな力、見せたる！！真・愛・
咲颯・穿山甲！！！！」

咲夜が叫ぶと、ハリセンが変化し巨大な金色の哺乳類となった。

ズン！！

咲夜

「いけえええ！！！！」

穿山甲はスプマンテめがけ、金色の光線を放った。

ドン！！

スプマンテ

「ウオオオオオ！！」

スプマンテは泥の盾を出す。

だが、光線は泥の盾ごとスプマンテに直撃した。

ドゴオオオオ！！

シュウウウ・・・

スプマンテ

「グ・・・ハア・・・」

スプマンテは倒れた。

ドサッ！

カミユ

「第6戦！勝者！アル、愛沢咲夜！！」

ハヤテ

「（咲夜・・・何て大胆な言葉を・・・）」

咲夜

「（恥ずかったあ・・・ハヤテの目の前でないな事言ってるや

なんて・・・」

ハヤテと咲夜は、お互いに赤面していた。

2人の愛の力が、悪に勝ったんだね！

次回からはナイト戦、ソニアがナイトに立ち向かう！！

ファイル629：ソニア、頑丈なシスター！！

咲夜

「勝つて来たで！ハ、ハヤテ・・・」

ハヤテ

「ええ、頑張りましたね！さ、咲夜・・・」

ハヤテと咲夜は、まだ赤面している。

暁

「次からはナイトですね。誰が先に行きます？」

ヒナギク

「じゃあ、私が・・・」

ソニア

「いえ、私が行きますわ。」

ソニアが進み出た。

ペンデュラムアッド側からは、マンハッタンが進み出る。

マンハッタンはロープを取り去った。

バサッ！

その姿は、小さなビックリ箱に入った巨漢の男だった。

ヒュオッ！

ドン！

マンハッタン

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ナイト』

「プフフ・・・さあ来いシスターよ。オレがナイト級の強さというものをその身に教えてやろう。」

カミュ

「第7戦！アル、ソニア・シャフルナーズ！ペンデュラムアッド、マンハッタン！試合・・・開始！！」

試合が始まると、マンハッタンは：RINGを取り出した。

マンハッタン

「先手必勝・・・ってね。」

マンハッタンは：RINGをフィールドの下に投げた。

ポイツ！

ソニア

「何をしたのか知りませんが、負けませんよ！」

ソニアは純金製のトンファーを取り出した。

ジャキッ！

マンハッタン

「純金製のトンファーを2つも手に持つとは、中々の腕力だな。」

ソニア

「お褒めにあずかり光荣ですわ!!」

ドンッ!

ソニアはマンハッタンに突っ込むと、長い方を前に突き出し殴りかった。

だが、マンハッタンは寸前で攻撃をかわすと、空中に飛び上がった。

ヒュオッ!

ソニア

「!!」

マンハッタン

「だが、いかなる怪力でも当てられなければ意味などなさない。」

伊澄

「な・・・箱に入った状態で、ソニアさんより高く跳躍した!？」

マンハッタン

「デイメンション：RING・トイザラスイズキューブ!! ちなみにこのオレ、身体の身軽さにおいては何者にも負けぬ自身があるぞ。」

マンハッタンは箱に入り込むと、回転しながらソニアに照準を合わせた。

ギョルルルルル・・・

マンハッタン

「キューブリック・クラッシュュ！！」

マンハッタンは箱ごとソニアを直撃した。

ドゴォ！！

ソニア

「キャッッ！！」

ソニアは吹っ飛ばされる。

ソニア

「くっ・・・」

ソニアは片方のトンファーを投げ、フィールドの端をつかんだ。

ガッ！

ソニアが投げたトンファーは下に落ちて行き、針山らしき物に突き刺さった。

ザクッ！

ソニア

「!」

暁

「バ、バカな!! 純金のトンファーが串刺しだと!？」

マンハッタン

「そうそう・・・最初にオレが投げたのは、ネイチャー：RING・グレギオスニードル! 鉄製の物より硬い合金でできた針山を出現させる：RINGだ。もちろん使い手であるオレの鉄箱もオレ自身の体も、紙の如く貫かれてしまうだろう。だが・・・ヨガの神髄『サハスラー・ムドラー』を会得したこのオレには、何の問題もないのだがな。」

ギギイイ・・・

ハヤテ

「サハスラー・ムドラー・・・古代インドにおいてヨガ行者が伝えた闘技法ですね。彼のように小さな鉄箱に体を収め体重や重心移動を巧みに行う事で、サルのような如き身軽さと象の踏みつけものともしない硬さの箱で相手を打ち倒す。元々は自らを束縛する事で精神の解放や覚醒を促す修練法でしたが、いつしかヨガとは枝分かれし独自の形体を形作つたと聞いています。最近有名な番長マンガにもこの闘技法の使い手が登場していますしね。」

咲夜

「ハヤテは相変わらずいろいろ知つとうなあ・・・」

伊澄

「でも、サハスラー・ムドラーの使い手が相手になるとは・・・」

ヒナギク

「この勝負、ソニアさんの分があまりにも悪いわ!!」

マンハッタン

「どうだ？あまりの絶望的状况に声も出ないかな？」

ソニア

「1つ気になったのですが・・・どうしてムリをしてまでそんな小さな箱に入る必要があるんですか？」

X・Y・Z

「!!」

ロワイヤル

「そこを突っ込んできたか、あの娘・・・」

ソニア

「そんなに狭い所が好きなんですか？」

ビキビキ！

マンハッタン

「ソニア・シャフルナーズ・・・」

ソニア

「はい？」

ギャルルルル！

マンハッタンは箱ごとソニアにぶつかって来た。

マンハッタン

「キューブリック・クラッシュュ!!」

ソニアはトンファーで箱を受け止めた。

ガガアアアアンツ!!

マンハッタン

「オマエがメイドとして仕えている橘家は、三千院家や愛沢家と並ぶ財界でも有名な大富豪!今は財政難も乗り越えてきていて、自宅の敷地面積もかなりのものと聞いている!!」

ギギギ・・・

ソニア

「それがあなたの話と何の関係があるんですか?」

ソニアはマンハッタン入りの箱を弾いた。

ガキインツ!!

マンハッタンは空中で体勢を立て直すと、影分身を始めた。

ブオオオオオツ!!

マンハッタン

「オマエ達大富豪は、在宅事情に苦しむ今の日本にあってはなん存在なのだぁ!!イリュージョン・キューブリック!!」

ソニア

「はい？そ．．．そんな事が理由なんですか．．．？」

マンハッタン

「そ．．．そんな事だと．．．！？これ以上の理由がどこにあるんだあーっ！！」

マンハッタンはソニアを突き飛ばした。

ドゴォ！！

ソニア

「キャン！キャアアアアッ！！」

ソニアはフィールドの外に飛び出し、針山に真っ逆さまに落ちた。

ギュアンッ！！

ザウッ！！

ハヤテ

「．．．！！」

ヒナギク

「何て事．．．！！」

マンハッタン

「天に召されるが良い．．．この戦争が我々の勝ちで終わった際には、日本だけでなく世界各国の国民にオレと同じ箱形の住宅を与える。これで在宅事情も一挙解決するし、とても素晴らしい生活が実

現するのだ!!」

ソニア

「どうでも良いですけど・・・妄想を語るのは、私を倒してからにしていただけですか？」

下からソニアの声が聞こえた。

マンハッタン

「!!なっ・・・この声は!?!純金をも貫く針山に落ちたハズ。生きてるワケが・・・」

ソニア

「真・ソニア・サイキックチェーン!!」

ギョオ!!

下から鎖のような物が伸びて来て、マンハッタンの箱に巻きついた。

ギョルルルル!!

マンハッタン

「うおっ!!」

ソニア

「ハアアアアッ!!」

ソニアはマンハッタンを引っ張った。

ギョン!!

針山に近づいて行くマンハッタン。

マンハッタン

「ヒッ、ヒイイ・・・」

思わず箱に体を収める。

そして、ついに針山に箱が突き刺さった。

ドスッ！！

マンハッタン

「ウオオオオオ・・・」

痛みに耐えるマンハッタン。

ソニア

「ハアアアアッ・・・ハッ！！」

ソニアは鎖で箱を投げ飛ばした。

ビュン！！

マンハッタン

「うわああああ！！」

マンハッタンは空中に吹っ飛ぶ。

ソニアは後を追って空中に飛ぶと、真上から箱を叩き落とした。

ドゴォ！！

箱は一直線に落ちて行き、地面に落下した。

ズドォォォォン！！

マンハッタン

「な・・・なぜ・・・」

マンハッタンは箱から体を出し、気絶した。

ドサッ！

カミュ

「だ、第7戦！勝者！アル、ソニア・シャフルナース！！」

ソニア

「ちなみに私も・・・体の頑丈さなら、誰にも負けない自信がありますわ。」

ハヤテ

「道理で結さんの攻撃で体を締めつけられても、吹っ飛ばされても無傷だったワケですね・・・」

ハヤテはフィールドの下を見ながら言う。

ソニアが落ちた場所の針は、見事にひしゃげていた。

咲夜・伊澄・真希・暁・風月・歩・ヒナギク

「・・・」

ハヤテの冷静な解説に、咲夜達は啞然としていた・・・

ソニア、頑丈過ぎです・・・

次回はヒナギクが戦うよ！！

ファイル630：ヒナギク、正宗との共鳴！！

ヒナギク

「ソニアさんもやるわね。次は私が出て来るわ。」

ヒナギクは前へと進み出た。

ロワイヤル

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「次はオレが出る。良いな、X-Y-Z？」

X-Y-Z

「・・・」

X-Y-Z、無言。

ロワイヤル

「無言かよ。まあ良い。早くかかって来やがれ、小娘。」

カミュ

「第8戦！アル、桂雛菊！ペンデュラムアッド、ロワイヤル！試合開始！！」

ロワイヤル

「フッ。」

ロワイヤルはロープを取り去った。

バサッ！

ロワイヤル

「ウエポン：RING・プラチナブレード！！」

ジャキッ！

ロワイヤル

「さあ来いや、小娘。」

ヒナギク

「望むところよ。正宗！！」

ビュン！

ガシッ！！

ヒナギクは正宗を握った。

ヒナギク

「行くわよ、ロワイヤル！！」

ヒナギクは正宗を握ってロワイヤルに突っ込んだ。

ドンッ！

ヒナギク

「オオオオオ・・・」

ロワイヤル

「フン、ナメるなよ。」

ロワイヤルは剣をかざす。

ロワイヤル

「きらめけ、プラチナブレード！！プラチナリティ・パーティクル！！」

ロワイヤルの剣から、白金の粒子が放たれた。

バシュツ！

ヒナギク

「クツ・・・」

ヒナギクは正宗を両手に持ち、攻撃を防ごうとした。

だが・・・

ガキイイン！！

ピシ！

ヒナギク

「なっ！？ま、正宗にヒビが！？」

伊澄

「どうして！？正宗は村正と並ぶ木刀！硬さは相当なものハズよ！！」

ヒナギクに正宗を預けた伊澄も、驚いている。

ロワイヤル

「その木刀がどれだけ強いかはオレは知らぬ。だが、白金から造られたこの：RINGの剣圧に耐えられる物はそうはないだろう。我が王国の家宝の：RINGだからな、この剣は。」

ヒナギク

「あなた、王国の王様なの!？」

ロワイヤル

「そうだ。オレは一国の王をやっている。今は己のために、ペンデユラムに協力するハメになったがなあ!！」

ロワイヤルは魔力を込めると、ヒナギクに突っ込んだ。

ドンッ!!

ロワイヤル

「喰らえ、小娘え!!スラッシュ!!！」

ロワイヤルは強烈な一閃を放った。

ドンッ!!

ヒナギク

「わわっ!!！」

ヒナギクは正宗をかまえる。

一閃が正宗にブチ当たる。

ズドツ！！

ピシ、ピシ・・・

ヒナギク

「え！？」

バキーン！！

正宗は真つ2つに折れてしまった。

ヒナギク

「そ、そんな！？」

伊澄

「正宗が、折れた・・・」

ロワイヤル

「終わりだ・・・生徒会長、桂ヒナギク。」

ロワイヤルは、新たなRINGを取り出した。

スッ！

ロワイヤル

「ネイチャー：RING・プラチナリティ・ローズウィップ！！」

ロワイヤルは白金のバラのムチを放った。

バシユッ！！

ヒナギク

「わっ！！キャッ！！」

ヒナギクは必死に攻撃を避ける。

しかし、次の攻撃を避けた彼女の眼前にロワイヤルが現れた。

ザッ！

ヒナギク

「！！」

ロワイヤル

「ハッ！！」

ゴッ！！

ヒナギク

「キャアッ！！」

ロワイヤルの鉄拳を喰らい、ヒナギクは吹っ飛ぶ。

そこに、バラのムチが襲いかかった。

ギュルルルル！！

ヒナギク

「キヤアアアアッ!!」

ヒナギクはムチで縛られた。

ギユウウウ!!

ヒナギク

「アアアアア!!」

ムチに締めつけられ、ヒナギクは悲鳴を上げた。

歩

「ヒナギク!!」

咲夜

「もう止める!!ヒナギクはんの負けやあ!!」

ロワイヤル

「お生憎様だね・・・オレはこの娘のようなヤツが大嫌いなんだ。なぜなら、昔オレはこの娘のような正義感の強い娘とつき合っていたからだ。」

ロワイヤルは、自身の過去を語った。

ロワイヤル

「オレが付き合っていた娘も、この娘のように正義感の強い子だった。オレは昔イジメられていたんだが、そのたびに彼女に助けてもらっていた。その当時は感謝していた。だが・・・」

ロワイヤルは顔をしかめた。

ロワイヤル

「正義感が強過ぎて、ヤクザにまで注意を始めたんだ、彼女は・・・最初はまだ良かった。だが、最終的に彼女はヤクザの長にケンカを売り、そして殺された・・・オレは悲しかった。彼女を守れなかった事も、彼女の正義感が強過ぎた事も全て・・・憎らしかった。だからオレは、正義感の強い者を皆殺しにする事を決めたのだ!!」

ロワイヤルは再び魔力を込め始めた。

ロワイヤル

「抹殺してやる・・・この世の見かけだけの正義者を、全てなあ!!」

ロワイヤルの言葉を聞いていたヒナギクは、口を開いた。

ヒナギク

「・・・バカみたい。」

ロワイヤル

「何？何だと！？もう1回言ってみろお!!」

ロワイヤルは絶叫する。

ヒナギク

「何度でも言っただけ。あなたは所詮弱い人間に過ぎない。だからそのイライラを、誰かにぶつける事で晴らすとしてるだけよ!!」

ロワイヤル

「言うだけ言っているが良い・・・所詮その状態のオマエに、この事態を打開する策などありはしないのだからなあ!!」

ヒナギク

「・・・それはどうかしら?」

ロワイヤル

「?」

ヒナギク

「私のお姉ちゃんが言っていた。人は信じれば強くなれると。私はお姉ちゃんの言葉を信じ、今まで頑張ってきた・・・信じる者がどれだけ強くなれるのか、あなたに見せてあげるわ!!」

ヒナギクが叫ぶと同時に、折れた正宗が空中に浮かんだ。

そして・・・

スウウウウ・・・

正宗が元に戻っていく。

伊澄

「折れた正宗が、元に戻っていく・・・!!」

ヒナギク

「正宗!私を拘束しているムチを斬って!!」

完全に元に戻った正宗はヒナギクに接近すると、彼女を縛っている

ムチを斬った。

ザンツ！！

ロワイヤル

「な、何だとお！？」

ヒナギクは正宗を右手に握った。

ガシッ！

ヒナギク

「さあ、お仕置き時間よロワイヤル！！」

ヒナギクはロワイヤルに突っ込んだ。

ドンツ！！

ロワイヤル

「ふざけるなあ！！プラチナリテイ・パーティークル！！」

ロワイヤルは質量を大きくした白金の攻撃を放った。

ドシュツ、ドシュツ、ドシュツ！！

ヒナギク

「全てを斬り裂きなさい！！真・雛菊・花椿一閃波動！！！！」

ヒナギクは強力な波動で粒子を斬り裂きながら、ロワイヤルに向かって行く。

ザンッ！！

ザシユッ！！

ロワイヤル

「な！！？」

ダダダダダ・・・

あっという間にロワイヤルとの間合いを詰めるヒナギク。

そして・・・

ザッ！

ヒナギク

「覚悟お！！」

ヒナギクは正宗を握っていない左拳で、ロワイヤルの腹に鉄拳を打ち込んだ。

ドゴオ！！

ロワイヤル

「ぐわああああ！！」

ロワイヤルは後ろに飛んで行き、壁に突っ込んだ。

ドゴオオオオオン！！

ロワイヤル

「ガ・・・ハア・・・」

ロワイヤルは地面に落ちた。

ドサツ！

カミユ

「第8戦！勝者！アル、桂雛菊！！」

ヒナギク

「感謝するわ、お姉ちゃん・・・」

姉の言葉を信じるヒナギクは、ナイト級にも勝るんだね！！

今回は7THバトル最終戦、ハヤテが戦うよ！！

ファイル631：対決！ハヤテとロボット！！

ハヤテ

「最後はボクですね。では、行って来ます。」

咲夜

「頑張つてな、ハヤテ！」

ハヤテ

「ええ。」

ハヤテは咲夜の頬にキスすると、前へと進んだ。

ロワイヤル

「最後はオマエだ。行って来い、X-Y-Z。」

X-Y-Zは無言で頷くと、前に進んだ。

ロワイヤル

「無言になるなよ！！！」

カミュ

「7THバトル最終戦！！アル、綾崎颯！ペンデュラムアッド、X-Y-Z！試合・・・開始！！！」

X-Y-Z

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「ヤット来マシタネ、私ノ出番ガ・・・」

X-Y-Zは羽織っていたロープを取り去った。

バサッ！

ロープを取り去ったX-Y-Zの姿は、何とロボットだった。

ハヤテ

「ロボットだったんですか、あなたは・・・」

X-Y-Z

「エエ。私ハ某有名ゲーむ二モ登場シタ『ファミコンロボ』ヲもでる二開発サレタろぼつとデス。私ハ世界最高水準ノ兵士・・・生身ノ人間二、私ヲ倒ス事ガデキマスカナ？」

ハヤテ

「そんな事、やってみなければわかりませんよ！疾風の如く！！」

ハヤテは高速でX-Y-Zに突っ込んだ。

ギョオ！！

ドゴオ！！

ハヤテ

「（硬つ・・・）」

X-Y-Z

「言ッタはずデスヨ？私ハ世界最高水準ノろぼつとダト。硬サモ普

通ノ人間ヨリ上デス。」

ハヤテ

「クツ・・・」

X - Y - Z

「今度ハこちらノ番デス。ウェポン：RING・ポッドミサイル！
！」

X - Y - Zはポッド型ミサイルを数発放った。

ドドドドド！！

ハヤテ

「疾風の如く・ウィンドカッター！！」

ハヤテは風の刃でミサイルを全て叩き斬った。

ザンツ！！

ハヤテ

「ボクをナメないでください。それでも三千院家の執事ですよ。」

X - Y - Z

「ノヨウデスネ。デハ私モ本気ヲ出シテイキマシヨウカ。スピード：RING・ジャイロレッグ！！」

X - Y - Zは足をジャイロに変え、ハヤテに突っ込んで来た。

X - Y - Z

「行キマスヨ、はやてサン!!」

ハヤテも疾風の如くで応戦する。

ドゴォ!!

しかし、X-Y-Zは寸前で足をハヤテに向けると、ジェット噴射を当てた。

ボオオオオオ!!

ハヤテ

「熱っ!!」

ハヤテが一瞬怯む。

X-Y-Z

「すきアリデス!!」

X-Y-Zはハヤテを蹴り飛ばした。

ドカ!!

ハヤテ

「うわっ!!」

ハヤテは場外に吹っ飛ばされた。

ヒナギク

「ヤバいわ!場外には、第7戦でマンハッタンが出した:RING

の効果がまだ・・・」

ハヤテは下へと落ちた。

咲夜

「ハヤテエー!!」

咲夜が叫ぶ。

X - Y - Z

「下二落ちマシタカ。下二八まんはったんガ出シタ：RINGノ効
果ガ残ッテマス。下二落ちタはやてサンハ今頃串刺しニ・・・」

X - Y - Zがそう言った時、ハヤテの声が聞こえてきた。

ハヤテ

「疾風の如く・神速!!」

ハヤテは下の針床を踏み台にすると、高速で上に飛んだ。

ドンッ!!

X - Y - Z

「ナ、何デスッテ!?」

ハヤテ

「あいにくボクにもグレギオン合金の針は効きません。」

ハヤテはそう言いながら、フィールドに着地した。

ソニア

「そういえば、ハヤテ君も体が頑丈でしたねえ・・・」

ひしゃげた針山をのぞき込みながら、ソニアが言った。

ハヤテ

「今度はこちらの番です。疾風の如く・ウィンドスピア!!」

ハヤテは風を槍に変え、X・Y・Zめがけ放った。

ドシュツ!!

ザクザク!!

X・Y・Z

「グッ・・・さすがニこれハきついデスネ。私ノぼでいーニきずヲツケルホドトハ。やはり強イデスネ、はやてサンハ!!」

X・Y・Zは再び足をジャイロに変えて空中に飛んだ。

X・Y・Z

「ここカラハ空中戦デス。行キマスヨ、はやてサン!!」

ハヤテとX・Y・Zは、空中でぶつかり合った。

ドゴォ!!

X・Y・Z

「1つ聞キタイデス。ドウシテあなたハソレホドマデニ強イノデスカ?」

ハヤテ

「え？」

X - Y - Z

「人間誰シモどこか二弱サヲ持ツテイルモノデス。私ヲ作ツタ博士モ、研究所ニイタ職員達モ皆弱サヲ持ツテイマシタ。ダカラ私ハ研究所ヲ逃ゲ出シマシタ。弱キ者ト一緒ニイテモ何モ得ラレナイト。今マデ旅ノ中デ会ツタ人達モソウデシタ。シカシだごんハチガツタ弱サナド微塵モ感ジラレマセンデシタ。ダカラ私ハペンでゆらむ二入ッタノデス。ココナラ強クナレルダロウト。ダカラ私ハ今疑問ヲ感ジテイマス。ナゼあなたハ強イノデス力？」

X - Y - Zの言葉に、ハヤテは静かに返答した。

ハヤテ

「ボクも最初は弱かったんですよ。ぐうたらな両親のせいで幼い頃から働かざるをえず、転校を繰り返していたから友達もできない。兄はいなくなっただけで帰って来ない。正直生きているのが絶望的でした。でも、そんなボクにも大切な仲間達ができたんです。ボクを強く鍛えてくれたアーたん、ボクを執事として雇ってくれたナギお嬢様、優しくしてくれるマリアさんやヒナギクさんや西沢さんや瀬川さん達同級生、そしてボクの恋人になってくれた咲夜。みんなボクに笑顔を与えてくれました。だからボクは、一生懸命皆さんにお礼をしていくつもりです。それが、ボクができるせめてもの恩返しだから……」

咲夜

「ハヤテ……」

ヒナギク・歩

「ハヤテ君・・・」

X - Y - Z

「ナルホド、ソレがあなたノ強サノ秘密トイウわけデスカ。トテモ羨マシイデス。ソノ強サガドレホドノものナノカ、私モ確カメテミタクナリマシタヨ!!!」

X - Y - Zは：RINGを発動すると、その上に乗った。

X - Y - Z

「これが私ノ最後ノ：RING、ガーディアン『ギガントランドマスター』デス。あなたノ底力、私ニ見セテクダサイ!!!」

X - Y - Zが指を差すと、戦車型ガーディアンの砲台から弾丸が放たれた。

ドン!!!

ハヤテ

「わかりました、見せてあげますよ。見ていてくださいね、咲夜。」

そう言うと、ハヤテは体に風をまとった。

ゴオオオオオ・・・

ハヤテ

ハヤテ
「真・颯・疾風怒濤!!!!」

ハヤテはまとった風を竜巻に変え、X - Y - Zとギガントランドマ

スターに突っ込んだ。

ドン！！

X - Y - Z

「オオ・・・」

ハヤテ

「ハアアアアッ！！！」

ハヤテはX - Y - Zのガーディアンを直撃し、ギガントランドマスタ―を破壊した。

ドゴオ！！

パキーン！！

X - Y - Z

「キヤアアアアア！！」

X - Y - Zは真つ逆様に落ちて行く。

ハヤテはすぐに後を追うと、X - Y - Zめがけ右手を向けた。

ハヤテ

「疾風の如く・レスキューウィンド！！」

ハヤテは緩やかな風を放ち、X - Y - Zを救出した。

ゆっくりと地面に降り立つ。

ザッ！

X-Y-Z

「ナ、ナゼ私ヲ・・・私ハ敵ナノニ・・・」

ハヤテ

「たとえ敵であっても、困っている人は助けなさいとアーたんからの教えです。」

ハヤテは笑顔で言った。

X-Y-Z

「さすがデスネ・・・私ノ負けデスヨ・・・」

カミユ

「FTHバトル最終戦！！X-Y-Zのギブアップにより、勝者！綾崎颯！！」

咲夜

「よっしゃあー！！」

ハヤテの優しさはロボットの心も和ませる！！

今回は美保とヒカルの過去話です！！

え、ヒカルって誰だっけ？

えっと、それについては『FBIから来た女：5』逆鱗・黄の章』のファイル529：みんなでお祝い！愛子と琴葉の誕生日！！を先

にお読みください！

少ししか出ていませんが・・・

ファイル632：美保とヒカルの最初の出会い！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル73

刹那ヒカル

白野蘭学塾の塾生で、美保のお目付役を務める青年。

宮本武蔵の弟子である柳生十兵衛に憧れており、ショックを受けると切腹をしようとするクセがある（美保はこの事について『ヒカルは憧れの人になりきり過ぎ』と言っている）。

昔は相当な不良だったらしく（この頃は源義経の部下の武蔵坊弁慶に憧れていたらしい）、日本各地を周り竹刀やら木刀を片っ端から奪っていた。

999本まで集め1000本目を探していた所、京都の五条大橋で当時11歳だった美保と出会う（源義経と武蔵坊弁慶の出会いそのものである）。

1000本目を狙って美保に勝負を挑んだが、1回目はあつという間に負けてしまう。

その後数10回にわたって彼女に様々な分野のスポーツで勝負を挑んだが（通っている小学校に転入までして押し掛けて来た）、いずれもことごとくあしらわれてしまう。

リベンジのために彼女の幼なじみだった銀一を誘拐し、彼を人質にして美保に1VS1の再試合を持ちかける。

しかしそのような卑怯な手を使うヒカルに美保が負けるハズもなく、11回目も彼女にコテンパンにされてしまう。

その後改心したのか、白野蘭学塾の塾生になる事を決意した。

美保と銀一の仲を羨ましく思っている一方、エルの片想いには気づけないという鈍感なところもある。

だが最近は少し彼女の想いに気づいてきたようだ。

美保と銀一を暴漢から守るために彼女達をかばい、その結果左目の視力を失い隻眼となった。

もっとも彼は『名誉の負傷』だと思っている。

年齢は18歳。

ファイル632：美保とヒカルの最初の出会い！！

白野美保と刹那ヒカルは、いかにして出会ったのか？

今回はその出会いの話をしましょう！

7年前 京都

刹那ヒカルは京都では有名な不良で、日本各地で竹刀や木刀を集めていた。

なぜヒカルがこんな事をしているのかというと、彼は歴史上の人物である武蔵坊弁慶という男に憧れているからなのである。

何でも形から入る性格である彼は、弁慶のマネ事をしているというワケだ。

そんなヒカルは、既に999本までの刀を集めていたのである。

刹那ヒカル『当時11歳』

「ハハハ、もうコレクションも999本目。全く笑いが止まらないぜ。」

ヒカルは笑いながら、奪った木刀の1つを持って京都府内を歩いていた。

他の刀類は家の倉庫に保管しているようである。

ヒカル

「後1本で1000本目だ。早くコレクションを完成させたいものだ。」

ヒカルがそう言いながら五条大橋に差し掛かると、向こう側から1人の少女が歩いて来た。

牛若丸の格好をし笛を吹きながらやって来た、当時11歳の白野美保である。

ヒカルはその姿に少し見惚れた。

ヒカル

「（フーン、なかなかカワイイ子じゃないか・・・ん？）」

ヒカルは、美保が腰に差している木刀に目をやった。

色は金色をしている。

ヒカル

「（丁度良い・・・コイツからも木刀を奪って、記念すべき1000本目達成だ！）」

そう思ったヒカルは、美保に襲いかかった。

ヒカル

「おありやあああ!!」

ヒカルの一振りが美保に降り注ぐ。

ビュッ!!

だが彼女はまるで本物の義経のように攻撃をヒラリとかわすと、橋の上に降り立った。

トッ!

ヒカル

「オ、オマエ一体何者だ!!」

白野美保『当時11歳』

「あなたこそいきなり何?見たトコ普通の人間みたいだけど・・・」

ヒカルは率直に用件を言った。

ヒカル

「オマエが腰に差しているその木刀が気に入った。オレによこせ。」

美保

「イヤよ。どうしても欲しいのなら、私を倒してからにしろ。」

美保は強気で言った。

ヒカル

「望むところだ・・・負けて後悔するなよ!!」

ヒカルは木刀を握ると、再び美保に襲いかかった。

ヒカル

「おらあ！！」

ヒカルは美保めがけ木刀を振り下ろす。

だが美保はアツサリかわすと、ヒカルの後頭部に一撃を叩き込んだ。

ゴスツ！！

ヒカル

「ギャ！！」

ヒカルはアツサリ地面に沈んだ。

ドサツ！

美保

「私の勝ちよ、じゃあね。」

ヒカル

「ま、待て！せめて名を名乗って行け！！」

美保

「あなたいつの時代の人間よ・・・まあ良いわ。私は白野美保、1歳よ。これに懲りたら、2度と私にケンカを売らない事ね。」

美保はそう言うと、足早にその場を立ち去った。

ヒカル

「白野美保・・・覚えたぞ・・・絶対にあの木刀を奪ってやる・・・諦めるものか・・・」

ヒカルはそう呟くと、早速行動を開始した。

公立三ツ葉小学校

5・Bの教室では、美保がクラスメイト達に囲まれていた。

昨日、彼女がヒカルに襲われたという話を銀一から聞かされたからである。

「美っちゃん、昨日不良に襲われたんですって!？」

「大丈夫だったのか、白野!？」

美保

「別に大丈夫だったわよ？私と同年だったし、一撃入れたら倒れたしね。」

美保はシレッと言った。

「美っちゃん、カッコイイ!!」

「スゲエな、白野!!」

「さすが、クール&スパイシー!!」

「憧れちゃうー!!」

クラスメイト達は絶賛する。

そんな中、隣にいる銀一が話しかけた。

銀一

「本当に大丈夫なの？」

美保

「大丈夫なんじゃないの？何か立ち去る時に殺気みたいなのが見えたけど。」

銀一

「・・・」

銀一の目が点になる。

しばらくすると、担任の先生が教室に入ってきた。

ガラッ！

「授業を始める前に転校生を紹介する。入って来なさい。」

先生に言われ入って来た子供に、美保は見覚えがあった。

「今日から皆と一緒に勉強する事になった、刹那ヒカル君です。みんな仲良くしてあげてね！」

「はい・・・」

美保

「学校まで押しかけて来るとはね・・・」

美保はため息をついた。

体育の時間

美保達はドッジボールをやっていた。

両チームで残っているのは、それぞれヒカルと美保だ。

ヒカル

「勝負だ、白野!!」

美保

「はいはい、わかったわよ・・・サッサとかわかって来なさい。」

ヒカル

「喰らええええ!!」

ヒカルはボールを勢い良く放った。

ブン!!

美保

「・・・遅い。」

美保はそう呟くと、ボールに鉄拳を打ち込んだ。

ドン！

ボールは真っ直ぐ飛び、ヒカルの顔を直撃した。

ドカツ！

ヒカル

「グハア！」

「白野チームの勝ち！」

その放課後

美保と銀一は、一緒に帰っていた。

銀一

「美保、今からスポーツ施設巡りしない？」

美保

「良いわね。母さんのカード使わせてもらいましょう。」

ヒカル

「ちょっと待ったあ!!」

美保と銀一が振り向くと、ヒカルが立っていた。

ヒカル

「オマエ達、これから何ヶ所施設を回るんだ？」

美保

「9施設よ。」

ヒカル

「丁度良い。その9戦、オレとオマエで勝負してもらおう!!」

美保

「別に良いけど、負けたら代金奢りなさいよ?」

ヒカル

「良いだろう。」

1戦目 ボーリング

美保

「ハッ!!」

美保はボールを思いきり投げた。

ブンッ!

バカン！！

『ストライク』

ヒカル

「何い！？」

美保

「これで全ストライク。私の圧勝ね。」

ヒカル

「・・・」

ヒカルは銀一にも負けた。

ヒカル

「気を取り直して次々。」

それから3人はカラオケ・野球・ビリヤード・パターゴルフ・エアホッケー・テニス・バドミントン・サッカーの8施設に行ったが、ヒカルはことごとく美保に負けた。

ヒカル

「バカな・・・9施設連続で負けるとは・・・」

美保

「これで満足した？じゃあね。」

そう言うと、美保は銀一を引っ張って去って行った。

ヒカル

「チクシヨウ・・・このままでは納得イカン・・・どうすれば・・・
そうだ。あのガキ、使えるな・・・」

ヒカルはニヤリとした。

1週間後

美保は今日、少し不機嫌な顔で帰っていた。

ヒカルだけならともかく、銀一も学校を休んでいたからだ。

美保

「全く、銀一が学校休むだなんて・・・何してんのかしら・・・」

美保は愚痴りながら、銀一の家に向かった。

瀬藤邸

美保

「ごめんください。」

美保が呼び鈴を鳴らすと、銀一の姉・金美が出て来た。

ガラッ！

金美

「み、美つちゃん！？」

美保

「金美ちゃん！！銀一は！？」

美保が聞くと、金美は涙を出しながら美保の手を握った。

金美

「美つちゃん、助けて！！」

美保

「ちよつ、どうしたの金美ちゃん！？」

金美

「銀一が・・・さらわれたの・・・」

美保

「何ですって！？」

美保は驚いた。

銅香と鉄斗が美保に抱きついて来る。

銅香

「お兄ちゃん今日カゼ引いて休んでたんだけど、小学校から帰って

来たらお兄ちゃんいなくて・・・しばらくしたら、刹那ヒカルって男の人からお兄ちゃんを誘拐したって三ツ葉町の西外れの倉庫まで来いって電話が・・・」

鉄斗

「美保おねーたん、お願い！おにーたんを助けて！！」

銅香と鉄斗も、泣きじゃくっている。

美保

「大丈夫よ、銅香ちゃん、鉄斗君。銀一は必ず私が助け出すわ。」

美保は微笑むと、瀬藤邸を飛び出して行った。

美保

「刹那ヒカル・・・ブツ飛ばす！！」

美保の目は殺気に満ちていた。

三ツ葉町 西外れの倉庫

ヒカルは倉庫内で、美保が来るのを待っていた。

倉庫の端には、銀一が寝転がっている。

しばらくして、美保が倉庫内に入ってきた。

ガラッ！！

美保

「来たわよ、このバカ。」

ヒカル

「バカとは何だよ、バカとは……とりあえず、オレと勝負しろ。」

美保

「性懲りもなくまたなの？しょうがないわね……」

美保とヒカルは、お互いに木刀を構えた。

美保・ヒカル

「勝負！！」

3分後

ヒカルは美保に負け、床に沈んでいた。

ヒカル

「やられた……」

美保

「これで気が済んだ？じゃあね。」

美保はそう言うと、銀一を抱えて倉庫から出て行った。

その後ヒカルは改心したのか、白野蘭学塾の塾生の1人として加わったのだった。

美保は幼少の頃から強かった・・・

次回は子供好きなナイト級の女が登場！！

ファイル633：子供大好きナイト、スロージン！！

7THバトルを終えたハヤテ達と合流した哀達は、ディールゼイヴに戻って来た。

ウン！

「おお！灰原達が戻って来たぞ！！」

「大変なんだ、灰原！！」

哀

「どうしたの？」

「う、うん、そこで・・・ペンデュラムアッドを名乗っている女が・・・子供達と遊んでるんだ。」

哀達が指差した方向を見ると、確かに何者かが子供達と遊んでいた。

キャッ、キャッ

哀はコケた。

ドテッ！

哀

「なっ・・・何者よあなたーっ！！？」

「ん？」

謎の人物は、振り向いた。

クルッ！

その姿は、ドクロの仮面をかぶり舌を出した、とても女性と思えない者だった。

「やっと帰って来たの、待ち疲れたわよーっ。ま、子供達と遊んだから楽しかったけどね。伝えたい事があってね。『青井玲子』ってどの子？」

玲子

「アタシ。何か用？」

「あなたに会いたがっている女がいるのよ。次の8THバトルに必ず出て来てほしいってさ！！」

女は玲子を指差した。

スロージン

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「そしてアタシは、トウエンフォルアックのメンバーの1人『スロージン』！！アタシが戦いたいのは・・・哀ちゃん、あなたよ。」

スロージンは哀を指差すと、消えて行った。

シュウウウ・・・

その夜

鈴はディールゼイヴ城内に割り当てられた、ジンの部屋の目の前まで来ていた。

鈴

「ジン、入るよ。」

鈴は部屋に入った。

ジンは起き上がると、鈴の方を向いた。

ジン

「来たのか、鈴。」

鈴

「ええ、せっかく休みなんだから、あなたと一緒にいたくてね。」

鈴は笑顔で言った。

ジン

「そうか。だがせめて元の姿になってくれないか？その姿だと、万が一誰か入って来た時に気まずいだろう。」

鈴

「そうね、確実にいじられるわよね。特にあなたが」

鈴はニヤついている。

ジン

「オマエ、そうなる事を楽しんでないか？」

鈴

「いいえ？」

鈴はシレッと言った。

ジン

「(クツ、逆らえん・・・) まあそういう事にしといてやるよ。」

鈴

「じゃ、薬飲むわね。」

鈴はA T B T 6 4 8 9を飲むと、蘭の姿になった。

ムクムク・・・

蘭

「これで良いでしょ、ジン？」

ジン

「ああ・・・しかし見事なもんだな、この薬は・・・」

蘭

「そうね。」

蘭はそう言つと、ジンのベッドに潜り込んだ。

ゴソッ・・・

ジン

「近くで見ると良く似てるな、宮野明美に。」

蘭

「そう?。」

ジン

「ああ。シェリーが明美とオマエを重ね合わせるのも、わかる気がする。」

蘭

「そうね。それよりジン、本当にアタシなんかで良いの?。」

ジン

「オレがオマエとつき合う事か?。」

蘭

「ええ。」

ジン

「フツ。くどいようだが、オレはオマエが良いんだ。今のシェリーには頼もしい騎士がいるからな。」

蘭

「クスッ、そうね。」

蘭とジンはお互いに笑うと、眠りに落ちた。

その寝顔は、2人共幸せそうな顔だったという。

- ・ 毛利蘭と黒澤陣、この2人の恋愛は誰にも邪魔する事はできない・

次回は回想編、刃が純一と接触！！

ファイル634：刃と純一の秘密の接触！！（前書き）

オリジナルキャラクター・ファイル74

すめらぎ じゅんいち
皇純一

ペンデュラムアッドの構成員の1人で、工藤新一の双子の兄。だが新一とはちがい冷酷な性格で、最強の1人であるクラレットのパートナー。

新一とは離れて暮らしており、祖父と祖母に引き取られていた。しかしその数年間に謎の博士によって拉致され、強制的に研究に協力させられた挙げ句南極の地にて破棄処分されそうになってしまう。施設を爆破された後クラレットことローズに出会い、恨みを晴らすべくペンデュラムアッドに入った。

そのため、両親の愛を受けて育った新一を恨んでいる。

新一の事を『シン』と呼んでおり、本人に対し『殺す』とまで発言しているなど、かなり歪んだ性格になってしまった。

『金色のガッシュ！！』に登場するデューフォーや清磨と似た超能力『アンサーリドラー（答えを導き出す者）』を会得しており、純一の方が能力の強さは上。

ローズに『J』と呼ばれているが、どうやら元々からそう呼ばれていたらしい。

刃の事を気にしているのか偶然を装って接触したり、ユリに怒られていた彼女をアメーzing・グレイスを歌って助けるなど意外な一面もある。

ユリとの戦いで憎しみを全てローズの術に込めぶつけるが、ユリの涙を見たために自らも涙を流し、戦闘不能となる。

その後ローズに『オマエは生きる』と言われ、生きる事を約束しローズの最期を看取った。

ペンデュラムアッドが壊滅した後は京都府警に籍を置き、超能力を生かして日夜働いている。

実は密かに刃に惚れており、彼女が結婚式強盗によって人質に取られた際は圧倒的实力で強盗を叩きのめし刃を救出。

その後ブーケをもらった刃に対して遠回しに告白し、ようやく彼女と結ばれ1年後に結婚した。

新一と双子であるため髪型もソックリだが、首の所にあるクセ毛の数が2本になっている点がちがう（新一は1本）。

ファイル634：刃と純一の秘密の接触！！

体験旅行でコナンと哀が失踪し、その事を自分のせいだと思い込んで落ち込んでしまった刃。

事件が解決した後も、彼女は自分を責めてばかりいた。

そしてそんな中、彼女は1人の男と接触する事となる。

刃は1人、大阪市内を歩いていた。

刃

「グス・・・グスン・・・」

刃は泣いている。

そんな彼女に、1人の男が話しかけてきた。

「また泣いているのか・・・」

刃

「え？」

「オマエはいつも泣いているな・・・」

刃

「アカンのか？」

「イヤ、思い出していたんだ・・・オマエによく似た女を・・・平静を装って影で泣いていた、アホな女の顔をな・・・」

刃

「ア、アホな女!？」

「じゃあな。」

男は行こうとした。

刃

「待たんかい!!せめて名前教えんかい!!」

純一

「純一だ。これで良いか？」

刃

「あ、ああ。」

純一

「そうか。」

純一は帰って行った。

純一

「ただいま。」

クラレット

「お帰り、」。どこに行ってたんだい？」

純一

「別に。ただの散歩だ。それより、ちょっと話を聞いてくれるか？」

クラレット

「何だい？」

純一

「さっき1人の少女に会ったんだが、とても寂しそうな瞳をしていてな。その顔を見ると、なぜか無性に励ましたくなるんだ。この感情が何なのか、アンタわかるか？」

クラレット

「それは恋ってヤツだよ。」

純一

「恋だと？バカバカしい。第一私にはやらねばならん事がある。そんな事にかまけているヒマはない。」

クラレット

「たまには息抜きも必要だよ？」

純一

「まあ、アンタがそう言うなら。」

その後純一は、ちよくちよく刃の様子を見に行くようになった。

もちろん、コナン達に見つからないように。

そして、彼女が好きな歌の事も知ったのだ。

純一

「クラレット、アメージンググレイスという歌を知っているか？」

クラレット

「知ってるけど、それがどうしたんだ？」

純一

「私にその歌の歌詞を教えてほしいんだが。」

クラレット

「わかったよ。君の恋路を応援したいしね。」

純一

「だからそんなのではない。」

純一はその後、クラレットから習ったアメージンググレイスで刃の窮地を救う事になる。

これが恋なのかどうか、刃と純一はまだわかっていない。

刃と純一、恋人同士になれたら良いね！

今回は8THバトル開始だ！！

ファイル635：8THバトル！再び砂漠の舞台！！

ダゴン『ただ今帰還しました、クイーン。』

ディアナ

「そう。私の故郷はそうだったかしら？」

ダゴン『とてもステキだったと思います。ボク達が行くまでは……』

ディアナ

「収穫はあったのかしら？」

ダゴン『：RINGはないです。……でもありましたよ。』

ディアナ

「それ以外の収穫だとしたら……他の楽しみかしら。」

ダゴン『ええ！哀です！！偶然いたんですよ、嬉しかったなあ！』

ディアナはダゴンの体のキズを見た。

ディアナ

「あなたにキズをつけるなんて……驚きね。」

ダゴン『強くなってますよ哀は……1戦1戦で成長している。果実が熟すのに、そう時間はかからないでしょう。』

その頃哀は、考え事をしていた。

康太郎

「どうしたんですか哀さん。5THバトルから元気ないですよ？」

哀

「うん・・・私は非力だった。組織対戦でダゴンに勝てるのかなって・・・」

康太郎

「だって、その戦いの前に30人以上のペンデュラムと暴れてたんでしょ？疲れてて仕方ないですよ！！負けるの当然！」

イズナ

「うん。今までの戦いからして、あの子らはルーク級。それを全員倒しただけでも大成長だと思うわよ。」

康太郎

「それよりさ・・・コナンさんは自分をカワイがっていた人と戦うって言うってた・・・自分が同じ立場だったら、それ言う自信ないや。哀さんは戦争みたいな事の経験は？」

哀

「ううん、なかった。」

康太郎

「じゃあボクと同じですね！人を殺すなんて事が全然想像つかない。」

哀

「私だって想像してなかった。でも今やってるのは戦争で、私達は
その渦中にあるのよね。」

スロージン

「ヘエ・・・じゃああなたも！明日の組織対戦に出るのね？」

「そうね。どうにもあの『哀』という子が許せなくてね。」

スロージン

「子供相手に怒らないの。子供なんてカワイイものよーっ」

「子供だろうと何だろうと！！私のダゴンにキズをつけるなんて許
せないのよ！！」

スロージン

「ダメ。哀とやるのはアタシよ。譲れない。」

「なら絶対殺すのよ！！」

スロージン

「うーん。子供・・・殺せるかしら・・・あなたも・・・やりたい
相手決まってるもんね！」

ヒヨオオオオオ・・・

翌日

カミュ

「おはようございます!! 昨日は良く眠れましたか!？」

コナン

「あんまりーっ。」

哀

「一睡もしてないわよ、文句ある。」

玲子

「ずーっと男の子と遊んでた!」

カミュ

「(コイツら・・・) 今回から私、カミュ自らダイスを振ります。よろしく願いします。」

リアン

「イカサマしたら殺すで。」

カミュ

「ヤ、ヤダなーっ。そんな事しませんよおーっ。」

しようとしてた。

カミュ

「では!-!」

カミュはダイスを投げた。

5 2

カミュ

「5VS5!!砂漠ステージ!!出でよ、ペンデュラムアッド!!」

ドン・・・

男女2人が現れた。

哀

「2人しかいないじゃないのよコノヤローツ!!」

哀はカミュを蹴飛ばした。

カミュ

「ギャース!!そ、そんなハズは・・・!!」

「大変だ!!灰原!!」

哀

「何よ!!?」

「昨日のヤツがまた子供達と遊んでいる。」

わーい、わーい!

哀はコケた。

スロージン

「これで3人・・・後は・・・」

ザ・・・

「マルガリータ。4人目ね。」

どいつもコイツも強そうな4人・・・

次回、コナンがブチキレる！？

ファイル636：世界一ブサイク決定戦！？コナンキレる！！『1』

マルガリータ

「これで・・・4人。もう1人は、最後になつたら出て来るそうよ。玲子と縁のある人間らしいわ。さて、そちらは・・・誰が出て来るのかしら？」

哀

「まずは私！！哀！！」

康太郎

「ボク！！」

秀一

「オレ。」

コナン

「ボク！！」

玲子

「そしてえ。アタシよ。誰のリクエストがよくわからないけどね。」

リアンは今回も出ず。

カミユ

「とりあえずそろいましたね。ではこのメンバーを・・・」

「おいあれ見ろ！！」

「あの城のテラスだ!!」

そこには、ダゴンがいた。

哀

「（ダゴン!!!）」

ダゴン『よくここまで来たね、君達。これからはもうルークも、ハンパなビショップも出さないよ。そこにいる2人はね、ビショップの中でも最も強い3人が存在するんだけど・・・その3人の中の2人なのさ! ナイトに最も近い3人の内の2人! そしてナイトが3人! 全員マラスキーノなんかより強いから頑張ってね』

マルガリータ

「ダゴン!!!」

マルガリータは仮面を外した。

ス・・・

マルガリータ

「わ、私が勝つところを見ててね・・・! わ、私・・・頑張るからね!」

ダゴン『うん。頑張ってねマルガリータ。』

マルガリータ

「キーン!!! 頑張るっ、頑張るっ!!!」

康太郎

「・・・何か今回もクセのあるヤツがいますねえ・・・」

哀

「うん。注意が必要だわ!!」

カミュ

「それではこのメンバーを砂漠フィールドへ!!」

哀達は、砂漠フィールドへとやって来た。

ウン!

「ボクウ。一番に出るからあ。」

ドン!

「魔剣エクスカリバー。世界で一番力ワイイのって誰え?」

『あなたです、マスター。』

「じゃーあー。あそこにいるブサイクとボク、どっちがイケてるう?」

コナン

「?」

『マスターに決まっております・・・あの男の子はブスです!』

カッチーン!!

コナン

「ボク、一番に出るね。文句ないね?」

コナンはかなり怒っている。

哀・康太郎・秀一・玲子

「ど・・・どうぞ!!」

カミュ

「アル、江戸川コナン!!ペンデュラムアッド・ビショップ3人衆の1人、シトロン!!試合開始!!」

シトロン

『ペンデュラムアッド構成員

IIクラスII

ビショップ』

「ランッ」

ボンッ!

康太郎

「花?ボクと同じネイチャー:RING使いか?」

コナン

「?」

シトロン

「君をお・・・占ってあげるしいーっ。」

そう言うと、シトロンは花びらをむしり始めた。

シトロン

「ブス。美少年。」

むしり、むしり！

花びらをむしると同時に、コナンの髪の毛もむしれた。

コナン

「あ痛っ！！か、髪の毛が！！？」

シトロン

「ブス。美少年。ブス。ブス。おーや今2回言っちゃったしー。美少年。ブス。」

むしりむしり！

コナン

「アイタタターッ！！痛いーっ！！」

ワシャワシャ！

康太郎

「・・・あれがビシヨップの中でも3人いるトップの1人なの？」

哀

「さあ・・・」

シトロ

「最後の1枚はあーっ、ブ・ス。」

むしり！

コナンの周りが爆発した。

ドカアアアアン！！

コナン

「アタタ・・・ケホツケホツ！！」

シトロ

「えー、ボクの『花占いでドカン！』でも死なないー。以外とタフだしー。ブスだけどあーっ。」

コナン

「コッ・・・コイツーッ。」

ゴゴゴゴゴ・・・

コナン、爆発寸前！！

次回、お菓子の魔法に翻弄される！？

ファイル637：世界一ブサイク決定戦！？コナンキレる！！』2』

ゴゴゴゴゴ...

フツ...

玲子

「ひよ、表情は変わってるけど、あれは怒ってる！！こっ、怖いわ・・・」

コナン

「さっきから、ブスだの何だのって・・・温厚なボクだって怒るんだぞぉーっ！！」

コナンはフレアドアースを放った。

ギャン！！

しかし、シトロンはそれをすべて避けた。

シトロン

「フン、フン、フン、フン。」

康太郎

「ぜ、全部避けてる！！」

哀

「しかも何か怖い！！」

秀一

「太っている割に俊敏だな・・・」

シトロン

「君ってー、顔もブサイクで弱いんだねえー。可愛いそーつ。そう思うっしょエキスカリバー？」

『イエスマスター。その通りですね。（あっちの子の方が全然カワイイよ・・・正直ウソつくのは疲れるなあ・・・）』

シトロン

「何か言ったあー？」

『いえいえ、何も！』

シトロン

「いくよおーつ。」

シトロンは縮小した剣を握ると、突っ込んで来た。

ドン！

ブン、ブン、ブン！！

コナン

「わー！わわー！！フウちゃん！！」

カッ！

ドスン！！

康太郎

「やったー!!」

哀

「あの男潰れたか!？」

秀一

「イヤ・・・」

ザンツ!!

コナン

「フ、フウちゃんが・・・効かない!？」

シトロ

「君なんてえー、こんなもんだしーっ。ボクのもっとスゴい所見せるしーっ。出て来いーっ、お菓子の家ーっ。」

ドーン!!

シトロはお菓子の家を出すと、壁等を食べ始めた。

シトロ

「うまいしーっ。」

ムシャムシャ!

コナン

「バ、バトル中に食事!?!?っていつかアレ何の属性…RINGな

の!？」

シトロ

「うまつ。ルン」

秀一

「確かに変な：RINGだ・・・これで何が起こるか未知・・・ビシヨップ最強の3人の中の1人か・・・」

ガツ、ガツ!

コナン

「もう!!バカにされてるみたいで腹立つ!!」

コナンはシトロに突っ込んだ。

シトロ

「食べたらあ、食べただけえ・・・」

シトロは息を吸うと、一気に吹き出した。

ブオオオオオ!!

コナン

「うわ!!わああああ!!」

コナンは吹き飛ばされた。

シトロ

「強くなるしいーつ。エフツ、エフツ。」

スロージン

「あーあ、コナン君もかわいそうに。よりによって相手がシトロンなんてねえーっ。」

スロージンがそう言うと、マルガリータが彼女をはたいた。

パシ！

スロージン

「アイター！！」

マルガリータ

「何言ってるの！バカじゃないの！？」

スロージン

「だって相手は子供よー！？」

バク、バク！

ゴクン！

クチャクチャ！

玲子

「シュウちゃん。気のせいかな？」

秀一

「気のせいじゃないね。あのシトロンという男……体がふくらんでいる。」

モコ、モコ・・・

巨大化したシトロンは、巨大な岩を持ち上げた。

ゴゴゴゴゴ・・・

シトロン

「潰して・・・あげるしいーっ!!」

シトロンはコナンに近づいて行く。

ドスン、ドスン!

康太郎

「ヤバイよ・・・!! あんなの喰らったらいくら何でも・・・」

哀

「コナン君ーっ!!」

コナン

「忍者の国、インセディアで頂いた：RINGを使う時が・・・来たようだね。（行くよ・・・!! ボクの新しい力・・・!!）」

果たして、コナンがもらった：RINGとは!?

次回、炎水の妖精が登場!!

ファイル638：世界一ブサイク決定戦！？コナンキレる！！』3

ジン

「忍者の国インセディアで・・・頂いた：RING！！？それは本当なのかリアン！？」

リアン

「ああ。忍者の国のお墨付きや。康太郎も玲子もシュウも瑛祐も・・・そしてアタシも頂いた！！使いこなせるかわからへん位ハンパないヤツをな！！」

ザザザ・・・

哀

「魔力を練り込み始めた！！それも・・・速い！！」

秀一

「正直驚いたな・・・コナン君の魔力蓄積量が想像をはるかに超えている！」

シトロ

「そんなもん出したってムダだしーっ！！」

ブンツ！！

コナン

「ファルディーネ・・・」

ボヒュ！

赤色と青色の妖精が現れ、大岩を粉々に砕いた。

ボゴォ!!

康太郎

「あ・・・あれが!!」

秀一

「コナン君の新しい・・・RING!」

哀

「スッゴイ!!」

玲子

「炎と水の、ガーディアン・・・」

「初めまして、コナン。ボクがファルディーネです。」

コナン

「はっ・・・初めまして!!」

「今回ボクが倒すべきは・・・あちらの方なの?」

ゴゴゴゴゴ・・・

「クスクス・・・美しい方だね。」

シトロン

「ボクが美しくないってーっ!!!?エクスカリバー!!どう思うし

「っ！！？」

『美しいです・・・あちらの方が・・・』

シトロンはその言葉にキレ、エクスカリバーを破壊した。

ドゴォー！！

シトロン

「もう君みたいなガーディアンいらないし！ボクにはまだお菓子の家があるんだしいーっ！！」

モシャモシャ！

「それではボクは命ぜられた事を全うする事にしましょう。コナン、ご命令を。」

コナン

「アイツを倒すよー！！」

「承知。フレアニードルスー！！」

炎の柱が、お菓子の家を破壊した。

ドンー！！

シトロン

「ボ・・・ボクのお菓子の家が・・・！！許せないしいーっ！！」

ドンッ！！

ファルディーネは左手に水玉を出現させた。

ポン！

シトロン

「バーカ！ーそんな小さな水玉で・・・」

ヒュン！

ファルディーネが放った水玉が、シトロンの顔を捕らえた。

ガボボ！！

シトロン

「！！」

コナン

「そうか！どんなに大きくても、人間である以上息を止められたら！！」

「あのような者でも人は人。命の選択をさせてあげてはいかがかな？」

哀

「コナン君！！」

コクリ！

コナン

「ギブアップするなら、手を叩きなさい。シトロン！」

チラ・・・

スロージン

「良いわよ、ギブアップしても。」

シトロン

「（ボクはビショップ3人衆の1人・・・あんなガキに負けるなんて許されないし・・・）」

ダラン・・・

コナン

「手を叩いて！！シトロン！！」

ゴボボ・・・

パチン！

ファルディーネが水玉を解除すると、シトロンは地面に倒れた。

ズズ・・・ン！！

「あの方は死ぬまでギブアップしなかったでしょうね。だからその前に水を解きました。」

フシュルル・・・

カミユ

「勝者！！アル、江戸川コナン！！」

「それではまたお会いしましょう、コナン。」

ポン！

カミユ

「それでは第2戦！！出て来る戦士は！！？」

ヒヨウ・・・

またも一クセありそうな女が・・・

次回、秀一が大ピンチ！？

ファイル639：奪われた魔力！秀一の危機！！』1』

コナン

「次は誰が出る？」

秀一

「哀君と、玲子君は決まってるからな。」

康太郎

「じゃ！ボク・・・」

秀一

「オレが行く。」

康太郎

「な、何ですか？」

秀一

「康太郎君、男なら君も今回のバトルで1度ナイト級と戦え。コナン君以外は皆戦う事になるんだ。」

康太郎

「ナ、ナイトって、あの女の人・・・！？」

ジーッ！

康太郎

「わかりました！！今のボクがどれくらい戦えるかわからないけど、やります！！（女の人だし、そんな厳しい戦いにはならないだろう・

・・）」

ポワーン！

コナン

「（康太郎君・・・変な事考えてなければ良いけど・・・）」

カミユ

「ペンデュラムアッド、ドランブイ！！アル、赤井秀一！！試合つ、開始！！」

ドランブイ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「・・・」

ボソボソ！

秀一

「聞こえないね。14トーテムポールロッド！！」

秀一はロッドを持って突っ込んだ。

ポン！

ドランブイ

「イーターフルート。」

ドランブイはフルートを吹いた。

秀一

「！こ、これは・・・」

秀一の体から、何かが吸い出された。

ドランブイ

「魔力は頂く。って言ったのヨ・・・」

哀

「何て：RINGなの・・・！！私達の距離からでも魔力を吸ってくる！近距離にいる赤井さんは・・・」

玲子

「離れてシュウちゃん！！」

秀一

「クッ！！（コイツもナイトに近い女だった！！音が魔力を吸収するならば・・・聴こえない所まで距離を保って・・・！！）」

ザザザ・・・

秀一

「14トーテムポール！！」

秀一は距離を保つと、14トーテムポールを放った。

ガシャガシャガシャ・・・

ガシャ！！

だが、ドランブイは当たる寸前で空中へと舞い上がった。

バサッ！

秀一

「あ．．．！！」

ドランブイ

「届かないわ．．．ヨ．．．」

ブンッ！

秀一

「グ．．．！！（羽を使って．．．砂嵐！！）」

砂嵐が晴れると、ドランブイが何人にも増えていた。

ドランブイ

「チャージングホルン。分身。あなたに．．．本体が、わかる？」

ドランブイは分身達と共に、秀一に襲いかかった。

バサアッ！！

ナイフをガンガン投げて来る。

ブン、ブン！

秀一は次々と避けていたが、ドランブイに殴られ一瞬スキができた。

ドカ！

その瞬間、秀一の左肩にナイフが突き刺さった。

ザクッ！！

ドランブイ

「当たった・・・アハハ・・・」

秀一

「フフ・・・フフフ・・・オレを・・・怒らせたな。」

秀一が・・・

キレた！？

次回、明暗を分ける激闘！！

ファイル640：奪われた魔力！秀一の危機！！』2』

ドランブイ

「怒らせたらどうなるのヨ？私の本体がわかるのかしら？」

秀一

「ダークネス：RING・・・ストップングスカル！！」

カキン！！

ドランブイ

「うつ・・・！？動け・・・ないワ！！呪い！？」

ズキン！！

秀一

「クツ・・・！！（本体は・・・影が・・・ない！！本物には影が映るハズ。つまり・・・真上！！）14トーテムポール！！」

ドン！！

ボールがドランブイを直撃した。

ズシャア！！

ドランブイ

「ブハッ！！や、やるわネ・・・でも私にはまだ秘策があるのヨ。イーターフルート！！」

ドランブイはフルートを吹いた。

秀一

「もうその笛は聴かない!!」

ザッ!

ドランブイ

「今度は、逃げられないわヨ。ドランブイ、最後にして・・・最強の：RING!! ガーディアン：RING『ヴァリオス』!!」

ドオン!!

ドランブイが召喚した鬼は、秀一に襲いかかった。

ガァァ!!

秀一

「ウェポン：RING・バルデス!!」

秀一は盾で鬼の攻撃を防ぐ。

ガン、ガン!

『誇り高き戦士、赤井秀一。あなたにはこの：RINGを与えましょう。』

秀一

「（まだまだ・・・まだ、使わない。）たかがビショップ相手にあれを使うのは、かわいそうすぎる。」

ドランブイ

「たかがビショップって言ったわネ？ならヴァリオスを倒して見せてヨー！！」

秀一

「倒す必要も・・・ないのさ。ストップピングスカル！！」

カキン！！

秀一はヴァリオスの動きを止めた。

秀一

「君のガーディアンに呪いをかけた。これがどういう事かわかるな？」

ドランブイ

「・・・！！」

ザッ、ザッ！

秀一

「君の秘策のガーディアンは出現したまま動けない。そしてガーディアンを出している間、術者は動けない。つまり・・・君の負けだ。」

ドゴォ！！

ドサッ！

ドランブイ

「ゴホッ・・・！！さ、さすがアル最強の1人赤井秀一・・・勝てるワケがない・・・」

カミュ

「勝負あり！！勝者、赤井秀一！！」

リアン

「何て・・・ヤツや！あの子・・・新しい：RING、いくつかもろてたハズなのに・・・1つも使わんと勝ちよった！！」

「スゲエぞシュウ！！イカすーっ！！」

リアン

「喜ぶんはまだ早い。問題は・・・次からや。」

スロージン

「次。どっちが出よっか？」

マルガリータ

「私。これ以上アルの人間を勝たせてたまるか。それでたくさん・・・たくさん・・・ダゴンに誉めてもらうんだ私・・・」

康太郎

「向こうは・・・あっちの女の人か！じゃ。ボクですね。」

哀

「女だからって油断しないでよ東宮君！！」

玲子

「そうよ！！相手はナイトよーっ。」

康太郎

「オッケーッ！！」

コナンと秀一は完勝したが、康太郎は果たして・・・

次回、マルガリータが力の差を見せつける！！

ファイル641：快感！石使いのナイト、マルガリータ！！『1』

哀

「東宮君、頑張つてよーっ！！」

コナン

「ボクも勝てたんだからねっ、気合いだよーっ！！」

カミユ

「アル、東宮康太郎！！ペンデュラムアッド、マルガリータ！！試合開始！！」

康太郎

「ぬりゃあーっ！！自然のスコップ！！」

ズアッ！！

康太郎

「ん？」

ギコオオオン！！

マルガリータ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「ロールダーアックス！！本当は哀を倒して、ダゴンに誉めてもらいたかったんだけど・・・アンタでガマンしてやる。」

マルガリータは石の斧を持って突っ込んで来た。

ドンッ！！

康太郎

「こっ！！こんな差、汚いですよーっ！！」

ガイン！！

ガン、ガキン！！

キシィ・・・

康太郎

「（女の人なのに・・・何て力だ！！接近戦じゃ不利だ！！離れろ！！）」

ザザザザ！！

ザクッ！

康太郎

「ビーンズウィップ！！」

ニョロオオオ！！

ポン！

マルガリータ

「ロールダークロウ！」

マルガリータは石の爪で、向かって来たツルをブチ斬った。

ブチィィィ！！

康太郎

「！」

哀

「東宮君のビーンズウィップが！斬られた！？」

コナン

「石の斧に石の爪・・・」

秀一

「石使いか。」

康太郎

「クッ！それなら！！ウェーブアース！！」

ドン！！

康太郎

「（これなら石の爪でも斬れない！！！どうするナイト！？）」

マルガリータは右目を塞ぐ眼帯をズラした。

ス・・・

玲子

「義眼!!?」

秀一

「あの右目・・・マジックボールだ!!」

マルガリータ

「空間転移。」

マルガリータと康太郎の位置が、入れ替わった。

ウン!

康太郎

「あれ?」

ゴゴゴゴゴ!!

ウェーブアースは康太郎を直撃した。

康太郎

「のぎゃあーっ!!」

ドカン!!

マルガリータ

「クスクス・・・おバかな子。」

康太郎

「(っ、強い・・・!!これがナイトの力!!)」

哀

「男を見せるんでしょ！？弱気にならないでよ、東宮君！！」

康太郎

「了解ーっ！！」

玲子

「元気だけはあるわねえ。」

秀一

「それが勝利につながるとは限らない。」

イズナ

「何よあなた達、クールねえ。」

マルガリータ

「男らしさなんて、見させてあげない。強力なヤツいくよお・・・！！ロールダーファング！！」

ドム！！

康太郎

「わ！！わっわっ！！」

ズボッ！

康太郎

「！？」

マルガリータ

「ロールダークラッシュュ!!」

空中に浮かんだ石の槍が、一斉に康太郎を襲った。

ガキガキガキン!!

哀

「あ・・・東宮君ーっ!!」

マルガリータ

「あーああ・・・ゾクゾクするう・・・気持ち良いわあ・・・愛しのダゴン・・・見てくれてるかしら・・・」

圧倒的実力の差に、康太郎の命運は・・・!?

次回、SM女マルガリータの逆襲が始まる!!

ファイル642：快感！石使いのナイト、マルガリータ！！『2』

マルガリータ

「さあ、カミュ。勝利の宣言を行って頂戴。」

カミュ

「は、はい！！勝者・・・」

哀

「イヤ・・・！！まだよ！！」

コナン

「まだ康太郎君は終わってないよお！！」

マルガリータ

「何？」

マルガリータが見ると、石の塊から何かが生えてきた。

ニョロニョロ・・・

ポコ・・・

ピシィ！

出現した巨大豆から、康太郎が出て来た。

パカン！

マルガリータ

「！」

哀

「おおーっ！？」

イズナ

「豆の中から生まれたーっ！！」

康太郎

「ビーンズウィップを応用した『ビーンズバリアー』！！こんな時のため考えてた技です！！」

秀一

「良いアイデアじゃないか・・・」

マルガリータ

「思ったより・・・やるじゃないさ。」

マルガリータは左腕につけてある：RINGを取り外した。

ジャラ・・・

康太郎

「（新しい・・・：RING！！）」

マルガリータ

「出ておいで・・・『刻みの秤』。」

ポン！

大きな秤のような物が現れた。

玲子

「何？あれ。」

秀一

「わからん。」

康太郎

「そっちがどういう攻撃してきてもおーっ！！ガンガン行きますよ
お！！ウェーブアース！！」

ドン！！

康太郎が攻撃を放ったが、マルガリータは今度は避けもせず攻撃を
喰らった。

ドカア！！

康太郎

「あらっ・・・よ、避けない？」

マルガリータ

「フフ・・・快・感。」

カチッ！

マルガリータ

「グラン・ロールダー。」

パキパキ・・・

マルガリータは巨大な岩を出すと、それを自分に当てた。

ズドン！！

啞然・・・

カチン！

マルガリータ

「気持ち良いよ・・・この悦^{よろこ}び・・・子供にはきつとわからないね・
・・・」

康太郎

「そんなのわからないですよーっ！！」

哀

「東宮君、チャンスよ！！攻めて！！」

秀一

「おかしい・・・様子が変わだ。康太郎君の攻撃を受ける。自らをキ
ズつける・・・そのたびに・・・」

カチッ！

秀一

「あの秤は・・・」

カチッ！

秀一

「時を指し示している！！（何かの前兆！！）攻撃を止める、康太郎君！！」

カチッ！

ジリリリリリ！！

マルガリータ

「この体に刻み込まれた、数多のキズは悦び・・・そしてそれは相手にとって地獄の苦しみの糧となる。出でよ・・・メデューサ！！」

『ウロロロロロロロロ！！！！』

ドクン！

メデューサが睨みつけると、康太郎の足が石化を始めた。

ピキ・・・

康太郎

「！？」

マルガリータの逆襲に、康太郎絶体絶命！！

次回、康太郎が大殊勲を果たす！！

ファイル643：快感！石使いのナイト、マルガリータ！！『3』

『ウ□□□□□□□□□□！！！』

ドクン！

ピキ・・・

ピキ、ピキ・・・

康太郎

「何だこりゃあーっ！！？」

哀

「東宮君の足が・・・石化してる！！？」

マルガリータ

「ガーディアン：RING『メデューサ』！その瞳を見た者は、その体を石とされていく・・・私はサディストでもありマゾヒスト・・・メデューサを出す時はいつも相手に好きに^{なぶ}溺られるの・・・そうして悦んで悦んで・・・相手の苦しむ姿を楽しむサディストの一面に変わる。」

秀一

「（刻みの秤・・・！！あれは自分へのダメージを蓄積させる事で魔力を倍増させる媒体だったんだ！！）」

ピキパキ！

康太郎

「グヌツ・・・ググググ！！グアアアアアア・・・」

マルガリータ

「ああ・・・良いよ、その表情・・・ゾクゾクするわよ・・・堪らない・・・」

哀

「東宮君が石になっても、ルピナスで元に戻せないの!？」

秀一

「難しいな。あれはガーディアンだし、何より能力が高い!!あの：RINGを破壊しない限り・・・康太郎君は永遠に石像となる。」

哀

「東宮君、ギブアップしてーっ!!石になっちゃうなんて、許さないわよーっ!!」

マルガリータ

「ギブアップなんかさせてあげるもんですか・・・オマエ達は、仲間が石という屍になっていくのを見届けなさい。」

哀

「（東宮君・・・今のあなたには、歩ちゃんという恋人がいるのよ・・・）東宮君ーっ!!!!」

ザス!

ピキピキ!

康太郎

「（左手は、まだ動く！！）」

康太郎は左手をズボンのポケットに入れた。

ゴソゴソ！

『その力をまだ眠らせている者、東宮康太郎。あなたには、この3つの：RINGを差し上げましょう。』

スッ！

康太郎

「良かった。：RINGは石化されてなかった！」

マルガリータ

「この期に及んでまだそんな表情を見せるなんて・・・カワイくない子ね康太郎」

康太郎

「もうダメかなって思いましたよ。でも・・・声が聞こえた。まだお別れしたくない、友達の声が聞こえたんだ！！」

康太郎はそう言うと、：RINGを投げた。

シュッ！

ズアッ・・・

次の瞬間、マルガリータは背後から巨大な食虫植物に噛みつかれた。

ズゴオオオオオ！！

康太郎

「ガーディアン：RING・メフュトス！！！」

マルガリータ

「ギャ・・・グギャアアアア！！」

ピキン！

康太郎

「（まだ、まだ・・・まだだよ！！！！）」

植物の1匹がマルガリータに突っ込み、頭の：RINGを奪った。

そして奪った：RINGを地面に叩きつけ、破壊した。

バキン！！

フッ！

マルガリータは地面に叩きつけられた。

ドサッ！！

マルガリータ

「（体が、動かない・・・私が・・・負ける？ダゴン、ゴメンね・・・）」

石化が解けた康太郎も、地面に沈んだ。

ズン・・・

カミュ

「両者ノックダウン！！ドロー！！」

哀

「東宮君！！」

コナン

「康太郎君！！」

哀達が康太郎に駆け寄る。

康太郎

「ボク・・・どうなったの？」

哀

「ドローよ！！負けなかったのよ、ナイトに！！」

康太郎

「そうか。もうちょっと・・・もうちょっとだったなあ・・・」

秀一

「善戦だったよ、オレが認める。次に期待しよう。何といっても次に出るのは・・・アルの大将だからな。」

康太郎、引き分けに持ち込む大殊勲！！

次回は哀と女の影使いが激突！！

ファイル644：戦慄の戦場！サイキックスペース！！『1』

マルガリータ

「・・・情けない戦い方しちゃった・・・ダゴン・・・怒るかなあ？」

スロージン

「別に。良いんじゃない？とりあえずアタシが言いたい事は1つ！あなた達は子供の扱いがなっていないって事！アタシが手本を見せるよ。」

ユラリ・・・

イズナ

「良い、哀ちゃん！これで2勝1分。勝ち越しているけど・・・でもあなたはキャプテン！！あなたが負けたら1発で終わり！！よく覚えておきなさい！！」

哀

「うるさいわねゝあなたはゝゝそんな事わかってんのよーっ。」

ポカポカ！

イズナ

「あー！！痛い！！殴ったわね！？おのれ無礼者！！」

カミュ

「8THバトル！！第4戦！！アル、キャプテン灰原哀！！ペンデラムアッド、スロージン！！試合開始！！」

哀

「よーしゃってやるわ！！イズナバージョン……。！！？」

スロージンの体が2つに分かれたのを見て、哀は目が点になった。

コナン・秀一・康太郎・玲子

「！！！！」

スロージン

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ナイト』

「行くわよー。」

ドン！

スロージンは上半身だけで突っ込んで来た。

哀

「キャアアアア！！」

イズナ

「うぁーっ！！おいていかないで哀ちゃんーっ！！」

パカン！

スロージンの右腕が体から外れると、哀の頭を掴んだ。

ガシ！

良い子良い子！

ナデナデ・・・

右腕は哀の頭を撫でた後、哀を殴った。

ガンッ！！

哀

「なっ なっ なっ、何なのよこの人は・・・！！」

スロージン

「これはデイメンション：RING『セプレートパーツ』！！体の部分を分けて空間移動ができるのよ　こんな風にね！」

哀

「こっ！！この野郎ーっ！！」

スカッ、スカッ！

哀

「うおおおおーっ！！」

スカスカスカスカ！

哀

「ハアハア、ハアハア・・・」

スロージン

「合体っ」

スロージンは体を元に戻した。

カン、カシン！

哀

「テメエーッ！！おちよくってんじゃないわよーっ！！」

ジャキ！

哀

「シャボンガトリンガー！！」

ドコ！！

スロージン

「3次元シャドー！！」

ニユルオ！

スロージンが出した影が、泡を吸収した。

スポスポ！

康太郎

「シャボンが影に吸収された！！？」

コナン

「影使い！？」

スロージンの影が、哀を殴る。

バキ！

哀

「ググッ・・・！！（強い！！）」

スロージン

「本当はこんな事あまり乗り気じゃないのよ。アタシの子供と同じくらいなのね、実年齢の哀は。アタシは子供が大好きなのよ！」

哀

「じゃあ・・・！！どうしてペンデュラムなんかにいるのよ！！」

スロージン

「ペンデュラムが強いからよ。ペンデュラムにつかないとアタシの子供の命も危ない。ペンデュラムが世界を統べる事で争いはなくなり、平和が訪れる。世界の子供達も死なずに済むでしょ？」

哀

「ちがう！！現にペンデュラムは子供も殺してるじゃない！！ペンデュラムが消えた方が子供達も平和に暮らせるのよ！！」

イズナ

「うん、この女の言い分はまちがってる。」

スロージン

「あなたはまだ子供だからわからないのよ。誰にもダゴンは倒せない。戦争を起こす事で、平和を作るのよ。ペンデュラムアッドが世

界を平和にする！さて・・・ここでマジックを1つ。」

スロージンの言い分は果たして正しいのか・・・？

次回、魔力を半分にされ哀が大ピンチ！！

ファイル645：戦慄の戦場！サイキックスペース！！『2』

スロージン

「さて・・・ここでマジックを1つ。見学者の中には子供達だっている。これから先の戦いは・・・子供達に見せたくない。サイキックスペース！！」

カツ！

スロージンが：RINGを発動すると、紫色の巨大なドームが哀とスロージンを包み込んだ。

オオオオオ・・・

ウン・・・

コナン

「何これ！！？」

康太郎

「中の2人の様子が、見えないよ！！」

秀一

「デモンション：RING『サイキックスペース』だ。これを使われると哀君は・・・」

哀

「何？ここは？」

クラ・・・

哀

「うつ・・・何？力が減ってるような・・・」

イズナ

「私もよく、苦しい・・・」

スロージン

「サイキックスペースの能力よ、哀！この空間にいる者は術者以外魔力は強制的に1/2になる！どう？厳しいでしょ。そしてここで！新しい：RINGをまた1つ！」

バラッ！

スロージンは左手を飛ばした。

哀の肩に触れる。

トン！

スロージン

「タッチ。」

ボン！

哀の横に丸い物が現れた。

哀

「！？な、何これ？イズナかしら？」

イズナ

「私はこんなマヌケな顔はしてないわよ!!」

哀

「何か爆弾みたいね。」

スロージン

「ピンポーン 爆弾よ。ウェポン：RING『ルーレットボム』！このボムは相手にダメージを与えると、ダメージを喰らった人間の頭の上に移動する。そういった攻撃のやり合いをやっている内に、ボムはみるみる大きくなり・・・最後は、ドカン!!ね。名づけて『ロシアンルーレットドツカーンゲーム』!!ちなみにアタシは負けた事ないわよ。」

哀

「面白いわねそれ!!要はあなたにダメージを与え続ければ良いのね?」

スロージン

「ロシアンルーレットドツカーン!!スタート!!」

哀

「ハアアーツ!!」

ガッ!

スロージン

「ムムツ。(魔力は1/2なのに・・・モノスゴい集中力だわ。ダゴンが興味を示すのもわかるわね。)行くわよお哀!!」

ドカ！

哀

「（この人っ・・・ワザと攻撃を受けている。ゲームを楽しんでるんだわ。）」

スロージン

「さて、このボムの大きさからして・・・そろそろ爆発かしら。」

ジャラ・・・

スロージン

「出でよ！！ガーディアン！！ルシュファー！！！！」

スロージンは巨大な女性の死神を召喚した。

ズン！！

ルシュファーは4つの腕から鎌を分離させ、一斉に投げた。

ブン！！

ザクザク！！

攻撃を4連続で受ける哀。

その哀の前に、爆弾が現れた。

哀

「！」

チツチツチツ、ピーッ！

スロージン

「ゲーム終了よ。哀！」

ボム！！

爆発に巻き込まれた哀・・・

果たして、哀の運命は・・・！？

次回、2人の信念が激突！！

ファイル646：戦慄の戦場！サイキックスペース！！』3』

ボムー！！

スロージン

「哀ーっー！！」

スロージンは哀に向かって飛んで行った。

スロージン

「大丈夫！？死んでない！？哀！！」

煙が晴れると、巨大ゼリーに包まれた哀が現れた。

シュウウウ・・・

哀

「生きてるわよ。」

スロージン

「おおー！！ディフェンスジェリーね！でも出すタイミングが遅かったみたいね、キズだらけだわ！」

哀

「あなたに心配されたくないわよー！！」

スロージン

「・・・哀。ギブアップして！そしたらまだ子供のあなたを殺さなくて済む！ダゴンにも・・・アタシからよく言ってあげるから！！

ね？そしたら世界も平和になるのよ。」

哀

「（ダゴン・・・）ちがう。ダゴンは世界の平和なんか少しも望んでない！ヤツが求めているのは殺戮と破壊だけよ！！ダゴンを倒すの！！あなたなんかに負けてられない！！」

哀の魔力が、上がり始めた。

ゴゴゴ・・・

スロージン

「なっ・・・（魔力が・・・半分にされているハズなのに・・・ドンドン上がっている！！）」

イズナ

「それでこそ私の使い手だわ、哀ちゃん！！行くわよ！！」

哀

「シェリングフォードガーゴイル！！！！」

スロージン

「ルシュファアー！！！！」

ドン！！

スロージン

「そう！わかってもらえないの！！なら気絶させるしかないわね哀！！！！」

ゴッ！

ザクザク！

哀

「・・・わかるワケがないじゃないの。スロージン！あなたは間違ってる！！ペンデュラムアッドが子供達の笑顔なんて作れるワケないのよ！！」

ゴッ！！

スロージン

「（な、何て娘なの・・・！！子供とは思えない・・・！！）」

ギギギギギ・・・

哀

「行きなさい！！ガーゴイル！！」

ガーゴイルの光線が、ルシユファーを貫いた。

ドン！！

ドドドドドドドドドド！！

コナン

「ドームが・・・割れていく・・・」

康太郎

「哀さんは！？哀さんはどうなったんだ！？」

シュウウウ・・・

秀一

「生きてる！」

玲子

「勝負はどうなったの！？」

スロージン

「・・・大した信念だわ。どうせなら本当にダゴンを倒してみせなさい！子供達の笑顔・・・あなたに託すわ。アタシの負けよ。」

イズナ

「変なヤツねあなた、まだ戦えるでしょうに！」

スロージン

「なーに。アタシは子供達がニコニコして暮らせるならどっちでも良いのよ！」

そう言うと、スロージンは仮面を外した。

パカ！

スロージン

「頼むわよ。哀。」

カミュ

「勝者！！アル！！灰原哀！！！！」

カミュが勝利宣言をしたと同時に、空間に穴が開き始めた。

ズズズズ・・・

「・・・やれやれ・・・スロージンともあろう者が、戦意を喪失するとはね。」

玲子・康太郎

「！」

「久しぶりね。玲子・・・」

ゴゴゴゴ・・・

スロージンの心を動かした哀・・・

しかし、そのすぐ後に謎の女が・・・

果たして、玲子の事を知るこの女の正体は・・・！？

次回、因縁の再会！！

ファイル647：氷VS氷！玲子、蘇る記憶！！』1』

ゴゴゴゴ・・・

ザ・・・

「久しぶりね、玲子。」

桃色の髪をし、左目を眼帯で塞いだ女性が現れた。

ザッザッ・・・

玲子

「誰？」

哀と康太郎はコケた。

哀

「知らないの！？玲子さんに縁のある人間らしいじゃない！！」

玲子

「そんな事言われても記憶にないわねえ。」

「記憶がないのもムリはない。アタシが、アタシに対する記憶を消したのだからね。」

玲子

「！？」

「しかし直に思い出す。再会の時記憶は戻るようにしたからね。昔話は後にしよう。戦いながらもできる・・・」

カミュ

「組織対戦8THバトル!!最終戦!!アル、青井玲子!!ペンデユラムアッド・・・桃井鈴子、マンダリン!!試合開始!!」

玲子

「(桃井鈴子・・・!?その名前は・・・知ってる!!)」

鈴子はツボを召喚した。

ドン!

桃井鈴子〓マンダリン

『ペンデユラムアッド構成員

〓クラス〓

ナイト』

「ミラクルロープ。こうして戦うのも久しぶりね、玲子。」

ニユルニユル!

バツ!

ロープが玲子に襲いかかる。

玲子

「ペガサスランス!!」

玲子はロープを斬り始めた。

スパスパ！

だが、再生してきたロープに巻きつかれた。

ニユルニユル！

グルグル！

玲子

「キャー！チツ・・・（あのツボを壊せば・・・良いのね！！）フロスティックアイ！！」

ガシャア！

玲子

「うつ・・・」

ズキ・・・

玲子

「そうか・・・これを使うたびに出て来る影はあなただったのね！どうやらアタシ、あなたを確かに知ってたらしいわ。」

鈴子

「まあね。あなたの命を救ったのはアタシだからね。」

玲子

「アタシの・・・命！？」

鈴子

「そうよ。今はあなたの命を・・・狙う側になったけどね!-!」

ガシャ!

鈴子

「フロスティックソーサー!-!」

鈴子は複数の水色の円盤を放った。

ギャン、ギャン!

円盤から円盤に冷気が移り、玲子を直撃した。

ヒュドン!-!

玲子

「キヤ!-!（この人も・・・氷使い!-?）」

『もう少しで死ぬトコだったのよ、あなた』

玲子

「!-?」

『今日からあなたの名前は青井玲子よ』

玲子

「（何・・・この声・・・?）」

哀

「玲子さんーっ!!」

秀一

「あの円盤を壊せ!!あれが冷気を操作しているんだ!!」

玲子

「言われなくてもそうするわ。いくら冷気に耐性があるっていつてもこう何回も受けたくないからね!必殺・・・ミリオネスニードル!!」

バギヤ!!

玲子

「フロステイック・・・」

『これはあなたにあげよう』

ジャキッ!

鈴子は剣をかざした。

バリバリバリ・・・

剣に冷気が吸収されていく。

康太郎

「冷気を剣が吸収した!？」

ブンッ!!

ヒュドンー！！

ビキビキビキー！！

『然らば、玲子』

玲子

「（思い出した・・・！！！！）」

玲子は何を思い出したのか！？

次回、かつての女ボスとの激突！！

ファイル648：氷VS氷！玲子、蘇る記憶！！『2』

玲子

「青井玲子・・・この名前はあなた・・・桃井鈴子からもらった名前だわ。命も、救われた・・・！」

哀・康太郎

「なぬーっ！？」

鈴子

「記憶が戻ったようね。」

玲子

「ええ、思い出したわ。あなたは・・・元メアリードの女ボス！！桃井鈴子！！！」

コナン

「メアリード・・・？盗賊団・・・玲子さんの前の女ボス！」

リアン

「ホンマなんか！！？ヤツはアンタらの女ボスやったんか！？」

「ほ、本当です！確かに鈴子様です・・・しかし、なぜペンデュラムにいるのか・・・！？」

玲子は、昔の事を思い出し始めた。

『（ここは、どこ・・・？アタシ・・・かなり大ケガしてるみたいね。全く動けないわ・・・）』

『大丈夫？今ホーリー：RINGで直してあげるからね。』

『（誰・・・？っていうかホーリーリングって何？）』

『大分元気になったわね。もう少しで死ぬトコだったのよ、あなた。』

『あなた、誰？』

桃井鈴子『アタシは桃井鈴子。ここ、メアリードの女ボスよ。』

『メアリード？』

鈴子『盗賊よ。まだ記憶が戻らないのね。あんなに大ケガしてた理由もわからないの？』

『何も思い出せない・・・自分の名前さえも・・・』

鈴子『じゃあ今日からあなたの名前は青井玲子よ。アタシの昔の夫、青葉玲からもじったのよ。』

鈴子『今日はこれくらいにしよう。でも大した力だわ。このアタシと互角に戦えるんだからね。』

『玲子、一生ここにいて良いのよ！-！』

『アンタはもうファミリヤ。』

『一緒に盗賊稼業やっていこうや。』

青井玲子『（ファミリヤか・・・悪くないわね・・・）』

鈴子『玲子、話がある。これをあなたにあげましょう。フロステイツクアイという、メアリードの女ボスの象徴よ。今日からあなたがメアリードの女ボスよ。アタシの事は忘れなさい。いつか再び会うその時までね。然らば、玲子・・・』

玲子『待つて、鈴子！！待つて・・・りん・・・こ・・・』

玲子

「そつよ！全てを思い出したわ！どうしてメアリードを捨ててペンデュラムに入ってるのよ！！ペンデュラムのせいでメアリードがど

うなっただか知ってるの!!?」

鈴子

「知っている。」

玲子

「だったらどうして!? メアリードはあなたが作ったファミリーでしょ!?!」

鈴子

「ファミリーの絆よりも・・・ペンデュラムの強さの虜になったのよ。確かにアタシはメアリードを組織し、：RING集めをしたり仲間と楽しく過ごしていた。でも8年前ペンデュラムが現れ組織対戦での戦いを見て・・・メアリードよりも・・・FBIよりも・・・ペンデュラムの力に魅了された。組織対戦が終わりを告げた時・・・」

「

スレイプニル『君が鈴子だね? ペンデュラムのスレイプニルという。大した強さらしいじゃないか。どうだ? スカウトされてみないか?』

鈴子

「あなたを拾ったのは・・・そんな時だった。」

玲子

「だから自分を女ボスに仕立てて・・・メアリードを捨てたのね!?!」

鈴子

「そつよ!! そしてアタシはペンデュラムでナイト級まで登り詰めた!! アタシには力という才能があったのよ!!」

玲子

「・・・許されないわね・・・己の欲望のために仲間を見殺しにするなんてね・・・命の恩人とはいえ倒さなきゃいけない！！」

鈴子

「倒せるかしら？あなたに。」

玲子の周りに、無数の水色の羽が舞い始めた。

フワフワ・・・

玲子

「！？」

鈴子

「ウエポン：RING『フロスティックフェザー』！！」

ビキビキ！

羽から発する冷気が、玲子を襲った。

バリッ！！

玲子

「アダ！！」

鈴子

「正直驚いたものよ。初めて会った時から、あなたの潜在能力の高さには・・・組織対戦が始まれば、あなたの性格からしてペンデュ

ラムと戦うと思った。その時はアタシが戦おうと・・・」

玲子

「ふざけるんじゃないわよ!!」

玲子はペガススランスを握り鈴子に突っ込む。

ドンッ!!

鈴子

「ふざけてなどいない、至って大マジメよ!!アタシとあなたはこ
うなる運命だったのよ!!」

玲子と鈴子は、組み合った。

ギン、ギン!!

玲子

「桃井鈴子。お腹一杯後悔させてやるわ!!」

道を違えた恩人の鈴子に、玲子は想いを乗せられるのか・・・!?

次回、氷使い同士の戦いに決着!!

ファイル649：氷VS氷！玲子、蘇る記憶！！ 3

ギン、ギン！！

鈴子

「ハアアアアア！！！！氷速真斬劍！！！！」

カツ
！！

鈴子は高速で剣を連打した。

ボツ
！！

ザクツ、ザクツ、ザクツ！！

玲子

「ググ！」

ズ
・
・
・

玲子

「（強いわ・・・でも・・・負けるワケにはいけないのよ！！）ハ
アアアアアアアーツ！！！」

鈴子と玲子は、斬り合った。

ザシュツ！！

玲子

「うつうつ・・・」

ヨロ・・・

哀

「感情に流されないで、玲子さんーっ！！まだあなたには！メアリードの仇を取るっていう先があるハズよー！！」

玲子

「（そうだわ・・・そうだったわね。）」

鈴子

「アタシはあなたを倒す！！自分のとった行動が間違っていなかった事を・・・確かめるために！！ガーディアン：RING・・・ホルスエヴィーネー！！！」

鈴子は水色のエイを召喚した。

ドンー！！

哀

「エイ・・・冷氣エイ！？」

エイの背中が割れると、冷氣が一点に集中する。

ビキッ！

カッ！！

集中した冷氣が、玲子を襲った。

ヒュドン！！

イズナ

「避けなさいバカーツ！！」

秀一

「イヤ・・・玲子君はあえてあの冷氣の中で・・・魔力を最大限に練り込んでるんだ！！恐ろしい娘だ・・・」

『メアリードの女ボス、青井玲子・・・あなたには、このガーディアンを授けましょう。』

玲子

「いくわよ・・・」

玲子は左手に乗せた：RINGを強く握った。

カッ！！

玲子

「ガーディアン：RING『ジェムニード』！！！！」

玲子は水色のウナギを召喚した。

『キシヤアアアア！！！！』

ジェムニードはホルスエヴィーネに突っ込み、エイの体に巻きついた。

グルグル！

ギリギリ・・・

『ギル・・・ギルル・・・』

ビキッ！！

ジェムニードはホルスエヴィーネを締め上げ、押し潰した。

ズンッ！！

パキーン！

鈴子

「アッ、アタシの・・・ホルスエヴィーネが！！？」

ジェムニードは強烈な冷撃を放つ。

ヒュドン！！

鈴子

「帯氷せよ！！避冷剣！！」

鈴子は剣をかざす。

しかし、ジェムニードの冷撃は強かったようだ。

ビキビキ、ビキビキ・・・

避冷剣にヒビが入り出し、剣が割れると同時に鈴子を冷撃が直撃した。

ズドン！！

鈴子

「うきやああああーっ！！！！カッ・・・ハッ・・・！」

鈴子は倒れた。

ズン・・・

鈴子

「な、なぜなの・・・なぜペンデュラムでナイトにまでなったアタシが・・・」

玲子

「力っていうのは仲間のために使うのよ！仲間を捨てたあなたに力なんてありはしないのよ。」

鈴子

「立派な女ボスになったわね、玲子・・・アタシはきっと、どこかであなただに嫉妬していたんでしょうね・・・」

玲子

「あなたにもらった名前と命だけは・・・これからも使わせてもらうわよ！」

カミュ

「勝者！！青井玲子！！！！」

想いの強さがものを言い、見事鈴子に勝った玲子！

次回は強くなった瑛美が宣戦布告！！

ファイル650：新生ナイト、復讐の本堂瑛美！！

カミュ

「8THバトル終了！！勝利チーム、アル！！今からこのメンバーを・・・デイルゼイヴへ！！」

カツ！

哀達はデイルゼイヴに戻って来た。

ウン！

「やったな！！今回も大勝利だ！！」

リアン

「スロージン戦はヒヤヒヤしたで。やったな。」

哀

「うん！」

松葉

「流石やで、哀ちゃん！」

哀

「ありがと、松葉ちゃん・・・」

ゾク！！

突然の寒気。

哀が寒気がした方向に目をやると、瑛美が歩いて来るのが見えた。

ザ、ザ、ザ・・・

哀

「え、瑛美さん・・・久しぶりね・・・」

イズナ

「待つて。様子がおかしい。」

ビッ！

瑛美

「次。殺す。」

瑛美はそう言い残すと、消えた。

ウン・・・

哀が自分の手に目をやると、大量に汗をかいていた。

哀

「こんなに汗かいてる・・・前に会った瑛美さんとは何かちがう！
」

リアン

「瑛美さんは確か、ルーク級やったな。そやけど今の彼女は・・・」

ペンデュラム城に、25人のナイトが集まっていた。

ロマネコンティ（女）、マラスキーノ（女）、バラライカ（女）、サングリア（男）。

マンハッタン（男）、ロワイヤル（男）、X・Y・Z（女のロボット）、マルガリータ（女）。

スロージン（女）、マンダリン（女）、イフリート（女）、サイクロプス（男）。

トード（不明）、ドレイク（男？）、スフィンクス（女）、ティタイン（男）。

????（不明）、????（不明）、???（不明）、???
???（不明）。

ワイバーン（男）、ゴーゴン（女）、クラレット（男）、スレイプニル（男）、そしてダゴン（男）。

数あるペンデュラムアッド構成員の中から選ばれた、25人の実力者達だ。

マルガリータ

「ダゴン・・・私やられちゃったよ・・・ゴメンナサイ・・・」

ダゴン『良いよ。気にしないで、マルガリータ。』

マルガリータ

「ダゴン……」

スロージン

「アタシも負けたーしかも自分から負けたーっ。制裁して良いわよーっ。」

ダゴン『君はそういう人間だからね、スロージン。憎めないんだよねえ……。それより制裁を受ける人間は別にいるよ。ね？マラスキーン。』

マラスキーン

「！！！」

ビターズ

「ど、どうしてお姉ちゃんなんですかダゴン！！納得ができません！！！」

ダゴン『勝手に身内を何人も殺すのは良くないよね。でも君にチャンスをあげるよ。出ておいで。』

仮面をつけた瑛美が、歩いて来た。

カツン……

ダゴン『ルークの、キュラソーだ。』

マラスキーン

「ルーク？キュラソー？誰さソイツ！存在も知らないねえ！！！」

ダゴン『キュラソーと今ここで戦って勝てたら・・・罰を許すよマラスキーノ。』

マラスキーノ

「ルークと戦う！！？バカにしてんのかい！！？やってやるうじやないのさ！！！」

マラスキーノは瑛美の事をルークだと思って侮っていた。

ビターズ

「ま、待ってお姉ちゃん！！その人・・・ルークの魔力じゃないよお！！！」

スレイプニル『死合・・・開始・・・』

数分後、死合はかなり残酷な形で終わった。

ルーク相手と侮ったマラスキーノを、瑛美は首を斬り惨殺したのだ。

鈴子

「な・・・」

瑛美はマラスキーノの首を床に投げた。

ドン！

ビターズ

「お姉ちゃん！！うああああーっ！！！！！」

マラスキーノの首に駆け寄り泣くビターズの前で、ダゴンは瑛美に近づいた。

ダゴン『トウエンフォルアックが1人入れ替わったね。キュラソー。今日から君はナイトの1人だ！』

ダゴンからピアスを受け取る瑛美。

瑛美

「一言言っておく。この24人の中に、アタシの大事なものを奪ったヤツがいる。ソイツが誰かわかったらソイツも殺す。それがたとえダゴンでもね。それから明日の9THバトル、アタシも出るからね。」

そう言うと、瑛美は去って行った。

スレイプニル『信じられない成長の仕方ですね。まさか本当に生きて帰って来るとは・・・』

ダゴン『やはり人間が一番成長する方法はこれに限るね。憤怒。憎しみだ。』

瑛美はペンデュラム城の地下へとやって来た。

瑛美

「・・・海斗・・・」

瑛美は恋人の名前を呼ぶ。

海斗

「あー・・・あー・・・あー・・・」

海斗の姿は、見るも無惨な姿だった。

まるで蟲^{ムシ}のようだ。

瑛美

「海斗・・・アタシ、ナイトになったわよ。約束通りナイトに登り詰めたのよ・・・」

海斗

「あー・・・うー・・・あー・・・」

海斗は瑛美のピアスに手を伸ばした。

瑛美

「うつ・・・うつ・・・うわぁ・・・うわぁぁぁぁぁーっ！
！！」

地下室に、瑛美の絶叫が響き渡った・・・

愛する恋人を制裁で蟲にされてしまった海斗・・・

海斗を無惨な姿にされた瑛美の怒りの矛先が、9THバトルで哀達に向く・・・！！

次回、哀達それぞれの休息！！

ファイル651：それぞれの休息

1 コナンの場合

コナン

「あー哀ちゃん。哀ちゃ……。！」

哀は康太郎と話をしている。

コナン

「（な、何だよー……。仲良さそうに……。クソウゝー！！）」

やがて、康太郎は走って行った。

コナン

「（行った……。）」

コナンは哀に近づいた。

コナン

「あーいーちゃん。」

ドンー！

哀

「うわー！！コナン君ー！！」

コナン

「哀ちゃん。ノド渴いてない？」

哀

「渴いてる、渴いてる！！何かくれるの！？」

コナン

「あつつういスープいかあっスか？おいちいよお。わーい、うれちいね」

グツグツグツ・・・

哀

「・・・イヤ、いらな・・・」

コナン

「左様でゴザイマスか 鬼のように熱いチキンいかあっスか？おいちいよお。わーい、うれちいね」

哀

「な、何か怒ってるのコナン君？」

多分哀が原因です。

2 瑛祐と琴美の場合

2人は森の中を歩いていた。

琴美

「何か怖いよ瑛祐くっ。」

瑛祐

「大丈夫だよ琴美。」

ガサガサ！

ドン！！

琴美

「ヒギヤアーツ！！」

瑛祐

「怪物か！！？」

瑛祐は怪物らしき物体を殴った。

パコン！

「痛っ！」

ゾリゾリ・・・

「わ、私ですよ！メアリードの！さっきそこで沼に落ちたんですーっ。」

瑛祐

「何だ。琴美をあまり怯えさせるな。」

琴美

「瑛祐・・・ありがとう・・・」

瑛祐

「琴美はオレが守ってやる。」

「あの2人仲良いですねーっ。」

「アイテテ・・・私は殴られ損だよ・・・」

3 リアンとユーリの場合

リアン

「カーツ・・・」

リアンは寝ていた。

ユーリ

「ここに来てても結局・・・寝てばかりだなあこの女は・・・」

4 玲子の場合

玲子は男達に囲まれている。

「ボス!!! いい加減にしてください!!! ナンパにも程がありますよ!!!」

玲子

「あら、兄ちゃんカワイイわねえ。一緒に飲まない？」

ジャスミン

「ボス・・・オレはジャスミン、女だつてば！（相当酔ってるな。）」

5 松葉の場合

松葉

「キヤー 見つけたあ！！フフン」

ジャラ・・・

松葉

「いくら組織大戦中でも、RINGハンティングは止められへん
んなあーつ。インセディアに1つでも多く・・・返還せんとな・・・」

6 イズナの場合

イズナ

「あなたの女の麗しさは素晴らしい！！女としての美しさを是非見
習いたい！！」

鈴

「そうね。女の魅力とは外見じゃない。内から出るものだわ。」

ジン

「イズナも外見は少々あれだが、中々良い女気を持っている。」

イズナ

「おお！！流石わかつている！！」

鈴・ジン

「！！」

康太郎

「鈴さん、ジンさん。話があります。」

7 康太郎と鈴とジンの場合

康太郎は鈴とジンに話をしていた。

康太郎

「ボクをもっと強くしてください！！もう足手まといはイヤだ！！」

鈴・ジン

「死ぬ覚悟で来るか？」

康太郎

「はい！！！！」

鈴とジンは康太郎に突っ込んだ。

ドゴッ！！

ヨロ・・・

康太郎

「ボクは・・・もっと強くなりたいんだぁーっ！！！！」

8 哀の場合

哀

「（私・・・ここまで来たわよお姉ちゃん。お姉ちゃんができなかった事を私がやり遂げるからね！）」

イズナ

「何を黄昏れてるのよぉーっ！！このバカ者がぁーっ！！」

ドーン！！

哀

「フフツ。（明日も頑張りましょ、みんな！！）」

それぞれの思いを胸に秘めて・・・

次回、戦慄の9THバトル開始！！

リアンがかつてない危機に！？

ファイル652：リアンのサブイボ『1』

カミュ

「おはようございます、アルの皆さん。今日は9THバトル！よく進みましたね。それでは・・・ステージとメンバーの人数を決めさせて頂きます。」

カミュは4つのダイスを投げた。

バツ！

カッン！

3 4

4 2

カミュ

「キノコフィールド！！人数は7VS7！！誰が出ますか！？」

哀・コナン・松葉・瑛祐・秀一・銀一が名乗り出た。

リアン

「そしてアタシや！ウフフ・・・」

哀

「リアンちゃん出るの久しぶりね！」

リアン

「たまには体動かさへんとなまってまうしな。アハハハハハハハハハハ！」

玲子

「そついえば康太郎君はどこ行つたの？」

秀一

「ジンと鈴君がいない事を考えると、修業でもしているのだろう。」

カミユ

「それではこの7人を・・・ワープゲート!!」

カッ!

組織対戦9THステージ キノコフィールド

ウン!

哀達は、9番目のバトルステージにワープして来た。

哀

「キノコスゴいーっ!!」

瑛祐

「中央に一番大きなキノコがあるな。あの上で・・・戦えという事か・・・」

松葉

「・・・来るで。」

ウン、ウン、ウン！

7人の構成員達が、ワープして来た。

その中に、ロマネコンティと瑛美もいる。

哀

「（瑛美さん・・・！！）」

瑛祐

「1人1人の魔力が禍々しく高い！！恐らく全員ナイト級・・・！！」

リアン

「アタシが一番に出たるわ！！」

「行きなさい、バイオレット。」

タン！

「全員がナイトじゃないよ。ボクはビショップ3人衆最後の1人！！そして最強の1人！！」

カミュ

「アル！！リアン・ハートネス！！ペンデュラムアッド！！バイオレット！！始め！！」

バイオレットはローブを取った。

バサッ！

バイオレット

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ビショップ』

「ワァーン！！ボクがバイオレット君だワン」

その姿に、リアンは目が点になった。

リアン

「・・・なあ誰か替わってくれへんか？」

哀

「どうして？」

カミュ

「1度戦闘の宣告をした場合・・・戦士の変更は認められません！
！試合続行です！！」

バイオレット

「いっくよぉーっ！！ウェポン・RING『シェラ・クロー』だワ
ン」

ブン！

リアン

「うぉー！！うわー！！うわー！！」

瑛祐

「おかしいな・・・いつものリアンさんと様子がちがう。」

哀

「テオハンマー出して、リアンちゃん!!」

リアン

「うるっさいーっ、わかってらあ!!テオ・・・ハンマー!!」

リアンは雷の鉄拳を放った。

ゴッ!!

バイオレット

「うわ・・・」

ジワッ!

バイオレット

「うわーん!痛いワーン!!ワーン!ワーン!」

バイオレットは泣き出す。

リアンは冷や汗をかきだした。

ゾゾゾゾ・・・

秀一

「オレ・・・思い出した!!リアン君は犬アレルギーなんだ!!」

バン！

リアンに意外な弱点が判明！！

ってか読者の皆さんは以前の話で読んで知ってますよね。

次回、最悪の展開！？

ファイル653：リアンのサバイボ『2』

瑛祐

「リアンさんが・・・犬アレルギー？」

銀一

「そういえば、前に敵の忍者が言ってたなあ・・・」

ちなみにコナンと哀は知りません。

松葉

「そやけどカツコ悪い！！」

リアン

「あーっ、うるせえーっ！！」

哀

「待つて。でもおかしいわ！！リアンちゃん、ガーディアン：RINGでリリンさん持つてるわ！」

リリンとは、2章でリアンが試練の扉内で発動させていた：R I N Gです。

描写はないですが。

瑛祐

「ああ！あの子も犬耳だな。」

松葉

「変やんな。」

リアン

「あれは：RINGやから平気なんやーっ!!」

バイオレット

「フム、フム。姉ちゃんボクの事が苦手みたいだね。ラッキー」

リアン

「寄って来るんやないでクソガキヤ!!テオハンマーが飛んで来るで。」

バイオレット

「うーん、じゃあねえ・・・そっちから近づくようにしてあげるワ。ネイチャー：RING・イヌワラビー!!」

ポン!

フリフリフリフリ!

リアン

「うあ!!?体が・・・勝手に動く・・・!!」

リアンはネイチャー：RINGの力で、少しずつバイオレットに近づき始めた。

ズリズリ・・・

バイオレット

「おいでー、おいでワーン。」

ザ！

バイオレット

「フムツ。範囲内っ。シエラ・クロー！！」

バイオレットはリアンを攻撃した。

ザシュ！！

リアン

「グッ……体の自由が効かへん……その爪……マヒ効果があるんか？」

バイオレット

「当たたりーっ イヌパンチイヌパンチ！！イヌパンチイヌパンチ！！」

ガガガガガ！！

リアンはバイオレットの連打攻撃を受け、吹っ飛ばされた。

ズザザ！

リアン

「うあっ！！……チクショウ……（一番最初に出るんやなかったわ……）」

倒れたリアンに、バイオレットが近づいて来る。

そして、リアンの唇にキスをした。

チム

リアン

「ホホホホホーッ!!」

グルグルグルグル!

バイオレット

「姉ちゃんカワイイワン」

瑛祐

「あ、あんなリアンさん見た事ない……っていうか見たくなかった!」

哀

「私達の中でも最強のハズなのにね……」

ユラリ……

リアン

「おのれ……アタシを怒らせよったな犬男!!後悔させたるで!!」

『前回の組織対戦でペンデュラムを倒しまくったFBIのナンバー2、リアン。あなたにはこの：RINGを授けましょう。』

リアンは上着に手を突っ込んだ。

ゴソゴソ・・・

コナン

「リアンちゃんがインセディアからもらった・RINGを出すよ！
」

しかし・・・

スカスカ！

哀

「あの顔・・・まさか・・・！！あの娘：RING忘れてるわよー
っ！！」

瑛祐

「なっ、何て事だ！！」

コナン

「バカッ、リアンちゃんーっ！」

松葉

「死ね！！そこで死ね！！」

バイオレット

「そろそろ白黒決めさせてもらっワン！！ガーディアン！ニャルル
！！」

ゴン！

『グルルルルッ！！』

猫がリアンに突っ込む。

リアン

「アホが！猫やったら・・・1撃で終わらせてやれるで！！」

リアンはニャルルを粉碎した。

ドン！！

そんなリアンに、バイオレットが近寄って来た。

トッ！

リアン

「！！」

バイオレット

「ニャルル、ただのオトリ」

リアン

「ヒッ・・・」

バイオレット

「ハアアアア・・・ワンワン波！！！！」

ドゴォ！！

リアンは吹っ飛ばされた。

ズン・・・

カミュ

「第1試合・・・勝者、バイオレット!!」

松葉

「アホや、あの娘・・・実力を10パーセントも出せへんかった・・・」

リアン

「犬なんて・・・大っ嫌いや。」

バイオレット

「ワン」

ああ、最低な幕切れ・・・

次からは頑張ってもらわないと、ね？

次回、銀一が美保のために戦う!!

ファイル654：カップルの絆『1』

コナン

「全く・・・リアンちゃんが負けるトコ初めて見たよ。大丈夫？」

リアン

「大丈夫やない・・・」

銀一

「次はオレが出よう。」

タンッ！

「私の番ね。」

シュタン！

カミュ

「9THバトル第2戦！！アル！瀬藤銀一！！ペンデュラムアッド！パステイス！！試合開始！！」

パステイス

『ペンデュラムアッド構成員

〓クラス〓

ナイト』

「私の姿を見て、驚きなさい。」

パステイスはロープを取り去った。

バサッ！

銀一

「な、何！？」

パステイスの姿は、美保に瓜2つだった。

といつても、髪の色は水色だが。

銀一

「なぜだ！なぜ美保に似ている！？」

パステイス

「似てて当然。私は人の姿ソックリに変身する事ができるのだから。

」

そう言うと、パステイスは指をパチンと鳴らした。

パチン！

すると、球体に包まれた美保が現れた。

ポン！

銀一

「み、美保！！」

美保

「！んっ、んんんっ（ぎっ、銀一っ）！-！」

美保は手足を縛られ、口をテープで塞がれている。

パステイス

「この子はこないだ京都に行った時に見かけてね。丁度良いから顔をコピーさせてもらったのよ。それにこの事バラされちゃ困るから、拉致っちゃった」

銀一

「テ、メエ・・・よくも美保を！！許さねえ！！」

銀一は腕に風をまとわせた。

銀一

「ウルレン！！」

銀一は風をまとった鉄拳を放った。

ゴッ！

パステイス

「グハッ！！」

パステイスはふらついた。

パステイス

「この男、風使い・・・」

銀一

「ご名答だ。オレを怒らせたんだ、目一杯後悔させてやるよ。」

銀一は両手に風をまとわせた。

ゴオオオオオ！！

銀一

「リオル・ウル・・・」

パステイス

「フフフ。」

パステイスは美保が入った球体を自分の目の前に引き寄せた。

ギユオ！！

美保

「んんっ！！」

銀一

「！！」

銀一は腕を止めた。

パステイス

「スキあり！！ネイチャー：RING・炎の渦潮！！」

パステイスは炎の渦で銀一を包み込んだ。

ボオオオオオ！！

銀一

「グオツ・・・!!」

哀

「あの女・・・炎使い!!」

美保

「んんんん!!」

瑛祐

「マズイぞ・・・銀一君は美保ちゃんの事が自分の命と同等ぐらい大切な存在!!彼女を人質に取られている今、戦況は圧倒的に不利だ!!」

パステイスは容赦なく銀一を攻撃する。

ゴオオオオ!!

銀一

「熱っ・・・ぐああああ!!」

徐々にヤケドを負っていく銀一。

秀一

「このままでは、分が悪いぞ・・・」

哀

「銀一君っ!!」

パステイス

「そろそろ虫の息ねえ・・・」

ヨロ・・・

銀一

「ク・・・ククク・・・」

パステイス

「？」

銀一

「オレを怒らせたな・・・テメエ、もう許さねえ・・・」

恋人を人質に取られた銀一に、逆転の策はあるのか!?

次回、銀一が男気を見せる!!

ファイル655：カップルの絆『2』

銀一

「オレを怒らせたな、この女・・・絶対許さねえぞ、テメエ・・・」

銀一の周りに、風が漂い始めた。

ゴオオオオオ・・・

さしずめ、これが銀一の怒りのオーラだろう。

パステイス

「怒らせたらどうなるのよ？どのみちあなたの恋人がこちらの手の中にある限り、あなたの戦況的不利は否めないのよ？」

銀一

「確かにそうだな。このまま続ければオレが勝つ可能性は低いな。」

「

パステイス

「ホラ見なさい。私の勝利は確実・・・」

銀一

「だが、3分あればどうか？」

パステイス

「何ですって？」

銀一

「3分あればカタをつけられる自信があるぜ。」

パステイス

「えらい自信ね。その自信が本当かどうか、確かめてやるわ。」

銀一

「望むところだ。行くぞ！！ギルウルク！！」

銀一は風をまとして突っ込んだ。

ドンッ！！

パステイス

「は、速っ！！」

銀一

「リオル・ウルレン！！」

ドンッ！！

銀一はパステイスめかけ風を放った。

パステイス

「クッ！！」

パステイスはすんでのところで避けた。

ババッ！

パステイス

「クッ・・・コイツのスピードが速くて、女を盾にする余裕ができな・・・」

銀一

「オラア!!」

ドゴッ!!

パステイス

「キャッ!!」

パステイスは吹っ飛ばされる。

パステイス

「クソッ!!こうなったら女ごと燃やし尽くしてやる!!」

パステイスはさっきの：RINGの威力を、さらに増大させた。

炎が美保の入っている球体ごと包み込み始めた。

ゴオオオオ!!

美保

「んんん・・・!!」

銀一はゆっくり風をまとわせていく。

銀一

「フォレストシルバー!!白銀のさざめき!!」

銀一は強風を放った。

ゴオオオオオ！！

パステイス

「ぐう・・・！！」

銀一

「（まだだ・・・まだまだ・・・！！）」

銀一はパステイスとの間合いを詰め始める。

ジリジリ・・・

パステイス

「（コイツ、何かをしようとしている！？）させるかぁ！！」

パステイスは炎を放った。

ゴオッ！！

銀一

「ぐ・・・」

パステイス

「残念だったわね。」

銀一

「イヤ・・・作戦通りだ！上を見な！」

パステイス

「え？」

パステイスが上を見ると、美保が入っていた球体が割れていた。

銀一は美保を抱えている。

銀一

「大丈夫か、美保？」

美保

「う、うん……」

銀一は微笑むと、パステイスを睨んだ。

銀一

「パステイス!!」

パステイス

「な、何？」

銀一

「次にこんな事をしやがったら、今度こそオマエの息の根を止めてやるからそのつもりでいろ!!」

パステイス

「は、はい!!」

銀一

「それで……良い。」

銀一はそう言うと、バタリと倒れた。

パタ・・・

シュツ！！

パステイス

「！！」

パステイスが頬をさすると、風が頬をかすっていた。

パステイス

「（この一撃は、あの一瞬の内に女を助けなおかつ私を倒すチャンスを伺ってたって証拠・・・一歩間違えれば、私は負けていたわ・・・」

カミュ

「第2戦！！勝者！ペンデュラムアッド、パステイス！！」

後一步のところで倒れた銀一・・・

でも恋人を想う力はさすがだね！

今回は秀一がリベンジバトル！！

ファイル656：永遠の刹那『1』

秀一

「次はオレだ。来いよロマネ、もう1度勝負しよう。」

ロマネコンティ

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス』

ナイト』

「はい。」

カミュ

「9THバトル第3戦！！アル、赤井秀一！！ペンデュラムアッド、ロマネコンティ！！開始！！」

ゴオ・・・

ロマネコンティ

「跳ねなさい。」

ロマネコンティは爆弾石を数発放った。

ゴアッ！！

秀一はそれを全て避ける。

ヒュッ、ヒュッ！

秀一

「この程度か？」

ロマネコンティ

「動きが全然ちがう。成長なされたんですね。ではこうしましょう！レイピアウィップ。」

ジャキ！

秀一

「ウェポンか。」

秀一はロッドを持つ。

ロマネコンティ

「行きまーす。せー．．．の！！」

ビュン！！

ドカン！！

秀一

「グッ！！（剣ではなく、爆発を生むムチだったか。）」

ロマネコンティ

「ドンドン行きますね」

ドカンドカンドカン！！

ビシッ！

ロマネコンティ

「！」

秀一

「救いたいんだ。世界を！！」

秀一はムチを掴むと、引きちぎった。

ブチッ！！

パキン！

ロマネコンティ

「レイピアウィップを引きちぎるなんて・・・ムチャな人ですね。」

秀一

「世界を救う時間が、オレにはもう残り少ない。不死の絆がほぼ全身に回りつつある。」

ロマネコンティ

「喜ばしい事じゃないですか！！もうすぐあなたはダゴンと同類になれる！！私はまだ時間が必要ですからね。実に羨ましい。」

秀一

「ふざけるな！！」

ドンドン！！

ロマネコンティ

「ふざけていませんよ。私は本気です。永遠の命を得られるのです

よ？老いる事もなく。そう・・・ダゴンのように・・・」

秀一

「全ての人間がそんなものに憧れるワケじゃない！！オマエは自ら生ける屍になりたいのか、ロマネ！？ハイスピード14トーテムポール！！」

ガキン！！

ロマネコンティ

「うつ！！」

秀一

「限りある命を・・・大切な人と歩む事に人間の意味があるんだ。」

ロマネコンティ

「ちがいますよ。大切な人と限りなく歩む事の方が素晴らしいのです。ねえ秀一さん。永遠に生きていきましょうよ。」

秀一

「断るね。オレはダゴンと共に歩いていくつもりはない！」

ロマネコンティ

「理解できません・・・永遠の命が手に入れば、大切な人が死ぬ苦しみから・・・解放されるのですよ？わかっていただけるまで、戦います。アン・ジェラス！！」

バサッ！！

ロマネコンティは空中に飛び上がった。

ロマネコンティ

「跳ねなさい。」

ババツ！！

秀一

「バルデス！！ちがう、ちがうだロマネ。大切な人が死んでいくのは確かに辛い。しかし・・・人間は・・・新しい命を育む事ができる。それは永遠に屍として徘徊する事よりも素晴らしい事なんだ！！」

ロマネコンティ

「・・・あなたにはわかりません。両親に先立たれてたった1人で生きてきた私がどんな気持ちだったかを・・・！！私にはダゴンしかない。」

秀一

「ダゴンは歪んでいる！！なぜそれに気づかない！？」

秀一はトーテムポールをバラバラにすると、一気に放った。

ババツ！！

トーテム達はロマネコンティを直撃した。

ドカドカドカドカ！！

シュウウウ・・・

ロマネコンティ

「それでも大好きなんです。彼が・・・」

ロマネコンティは、：RINGを取り出した。

ロマネコンティ

「臨兵闘者皆陣列在前・・・」

激突する2人の信念・・・

次回、秀一が信念を貫く！！

ファイル657：永遠の刹那『2』

ロマネコンティ

「あなたには、自分よりも大切なものがありますか？」

秀一

「・・・ある。世界の平和だ!!」

ロマネコンティ

「私は・・・ダゴンです。」

秀一

「ダゴンがオマエに与えているのは愛情じゃない!!永遠という名の束縛だ!!」

ロマネコンティ

「束縛でも、構わない・・・ガーディアン：RING『バシリスク』
!!!!」

カッ!!

ズアッ!!

ロマネコンティは大蛇を召喚した。

ロマネコンティ

「私は1人で生きるのも死ぬのも・・・怖いのです・・・」

バシリスクは、石化する息を秀一に放った。

バァアァア!!

ピキピキ・・・

秀一の体が石化を始めた。

哀

「赤井さんが石化していく!!」

康太郎

「マルガリータのメデューサと・・・同じだ!!」

秀一

「人間は皆同じなんだよ、ロマネ・・・ガーディアン：RING」
ア・バオア・クー」!!」

カツ!!

ウオオオオオン!!

ギラッ!!

クルン!!

ロマネコンティとバシリスクが、球体に包まれた、

ロマネコンティ

「しっ・・・しまった!!」

秀一

「オマエが出会っていたのがダゴンではなく明美だったら・・・同じ道を歩めたかもしれないな、ロマネ。バーストアップ・・・」

ドゴン！！

ロマネコンティを包んでいた球体が、爆発した。

ザッ・・・

ロマネコンティ

「ダ・・・ゴン・・・」

カミュ

「勝者！！アル、赤井秀一！！」

リアン

「シュウはゾンビになる事を心から望んどらへん。もし・・・ゾンビになりそうになった時・・・アイツは・・・自らの命を断つやろうな。」

哀

「そんな事させないわよ！！あの人も仲間だわ！！」

イズナ

「仲間というよか、家来ね。」

秀一

「もう聞こえてるぞ、イズナ！！」

信念を貫き通したシュウ、ロマネコンティに見事リベンジ！！

次回、ゼクト以上に顔のコンプレックスがある男が瑛祐を強襲！？

ファイル658：瑛祐が許せない『1』

タン！

ザ・・・

瑛祐

「次はオレが出る。」

「こっちは誰が出ましょうか？」

「オレ様がやりてえ。あのヤロウのツラが気に入らねえんだ！！」

ブンッ！

ズンン！

バサッ！

「おいチビ、ビビったか？ブチ殺してやるぜ。」

カミュ

「9THバトル第4戦！！アル、本堂瑛祐！！ペンデュラムアッド、ラオチユウ！！試合開始！！」

伊賀高岩「ラオチユウ

『ペンデュラムアッド構成員

「クラス」

ナイト』

「ウエポン：RING！七文字！！行くぜえ！！」

ラオチュウは七文字を握って突っ込んだ。

ドンッ！

瑛祐

「ギドナ・エルド！！」

瑛祐はロッドのような物を持って応戦する。

カキン、カキン！

ガッキイイン！！

瑛祐はラオチュウを睨む。

ラオチュウ

「ああ・・・その目・・・そのツラ・・・！！気に入らねえって言うてんだろーっ！！ディメンション：RING！砂地獄！！」

ラオチュウが：RINGを発動すると、瑛祐の足が沈み出した。

ズブ・・・

瑛祐

「！（体が・・・流砂の中のように潜っていく！？）」

ズブズブ・・・

ラオチュウ

「その辺で止めといてやるぜ。全部潜らせちまったら楽しみが少なくなっちまう。ウェポン：RING！アノマロカリス！！」

ズルル！！

ラオチュウ

「そりゃあ！！」

ラオチュウは瑛祐を攻撃した。

バキヤ、バキイ！！

哀

「瑛祐君！！」

ラオチュウ

「オレ様はなあ、オマエみたいに美少年ぶってるヤツが大っ嫌いなんだよ！虫唾が走る！！理由を教えてやるぜ！！」

ラオチュウは仮面を外した。

パカ！

ラオチュウ

「見る。この顔！！」

その顔は、ゼクトに勝るとも劣らない醜い顔だ。

ラオチュウ

「オマエとちがつてオレ様は醜い！！オマエみたいなヤツは、殺したくて殺したくて仕方ねえんだよ！！」

瑛祐

「確かに醜いね、心も顔も・・・万死に値する。」

静かに激昂する瑛祐・・・

次回、瑛祐が本領発揮！！

ファイル659：瑛祐が許せない『2』

瑛祐

「確かに醜いね、心も顔も・・・万死に値する。」

ラオチュウ

「言ってくれるじゃねえかこのクソガキヤア！！脳ミソぶちまけやがれ！！」

ラオチュウはムカデを放った。

ゴォッ！

ググ・・・

瑛祐

「ハアア・・・」

瑛祐はロッドをムカデに打ち込んだ。

バコッ！！

ラオチュウ

「カッ・・・オレ様のアノマロカリスが・・・！！！！？」

ズブッ！

瑛祐はロッドを流砂に刺すと、ロッドを長くして飛び上がった。

タン！

ザ！

瑛祐

「脱出しようと思えばいつでもできたさ。ナイト級としてのキサマの力量を測っていたんだ。結論。オマエはナイトでも下位クラスだ！マラスキーノよりも弱い！！」

ラオチュウ

「グッ・・・この・・・！！ブツ殺してやるあーっ！！チビーツ！！ネイチャー！：RING！霧霞！！」

ラオチュウは霧霞を吹いた。

フシュウウウウ！！

瑛祐の周りが煙に包まれた。

哀

「何あれ！！？」

コナン

「煙だよ！！」

ラオチュウ

「ククク・・・オレ様がどこにいるか見えないだろう！？この霧霞は魔力も消すぜ！！どうする色男！？ヒエヘヘ！！」

ラオチュウは周りが見えない瑛祐を攻撃し始めた。

ラオチュウ

「撤回しろ!!」

バキヤ!

ラオチュウ

「オレ様が弱いという事を!!」

ドコッ!

ラオチュウ

「そして死ねチビ!!死にやがれ!!」

ガンッ!

瑛祐

「撤回はしない。なぜなら・・・次のオレの攻撃でキサマは終わるからだ。」

ラオチュウ

「ホウ、面白え。」

ザザザザ!

ラオチュウ

「ガーディアン：RING『クンフーレオン』!!コイツを出しちまったオレ様に同じ事が言えるかな!!?」

ラオチュウが巨大カメレオンに乗って現れた。

ラオチュウ

「クンフーレオンはクンフーの達人！！テメエなんざ黽り殺してやるってよぉーっ！！」

『その心の中に憤怒を隠す少年、本堂瑛祐。あなたには、赤井秀一に授けたのと同じタイプのガーディアンを授けましょう。』

ゴソ・・・

瑛祐はズボンから：RINGを取り出した。

ラオチュウ

「何をするかは知らねえがもう遅え！！クンフーレオンの餌食となれ！！」

ラオチュウは突っ込んで来た。

ザザザザ！

瑛祐

「撤回するよ。キサマはナイト級の器でもない。」

シュッ！

ボンッ！

カキン！

瑛祐

「ガーディアン：RING・・・ジガ・ディラス・ボウ！！！」

ラオチユウ

「なっ・・・何だあこりゃあ！！？」

瑛祐

「それを知った時・・・キサマは地獄に堕ちている。」

果たして、この：RINGの能力とは！？

次回、瑛祐が地獄を見せる！！

ファイル660：瑛祐が許せない『3』

瑛祐

「ガーディアン：RING・・・ジガ・ディラス・ボウ！！！」

哀

「あ・・・あれが！！瑛祐君の新しい・・・ガーディアン！！！」

コナン

「何か・・・怖い・・・」

松葉

「とんでもない物をインセディアは渡しよったな。ガーディアン：RING『ジガ・ディラス・ボウ』、これであのデカイヤツは逃げられへん。」

ラオチュウ

「な、何かヤバそうだな・・・！！クンフーレオン！！動けない術者を狙え！！！」

ガーディアンがラオチュウとクンフーレオンを睨む。

カッ！

すると、ラオチュウとクンフーレオンが球体に包まれた。

ポワン！

ラオチュウ

「うっ！！？」

瑛祐

「残念な事だが・・・オレがある一言を言つと、オマエは終わりだ。」

「

ラオチュウ

「でっ、出られねえ！！！」

瑛祐

「最後に言つ事はあるか？」

ラオチュウ

「ちよつと待つてストップストップ！！美少年はもつと優しいもんだぜ兄ちゃん！！！」

瑛祐

「オレは別に美少年じゃあないからな。つまらない辞世の句だった。ブラストバーン！！！」

カッ！

ガーディアンが目光ると、ラオチュウを包んでいた球体が爆発した。

ドゴオオオオオン！！！！

ラオチュウ

「グギャッ！！アアアアア！！！」

ラオチュウは地面に落ちた。

ボスン！！

ピクピク・・・

瑛祐

「殺しはしない。キサマにはその価値もない。」

カミュ

「勝者ーっ！！アル、本堂瑛祐！！」

哀

「爆発するガーディアン！！？」

松葉

「そやで。シュウが持つとうア・バオア・クーと同じく、カプセルの中に相手を閉じ込めてその中で爆発させるんや。魔力を相当消費するハズやけど・・・」

トン！

瑛祐

「勝って来た。」

元気っ！

コナン

「全然・・・平気だね・・・」

哀

「うん・・・」

リアン

「（ホンマに強うなりよったなコイツ・・・アタシをも凌ぐ・・・か？瑛祐君・・・）」

「次・・・ワタシが出るワ。」

バサッ！

タンッ！

哀

「あの娘・・・人間じゃない！！！」

コナン

「人形！！？」

「ホラ、アリス。新しい人形作ってあげたのよ。」

「わーい、ありがとうお姉ちゃん。」

「もう壊しちゃダメよ。」

松葉

「次はアタシが出るで。あれはディアナの作り物や！！」

次に出て来たのは、ディアナが作りし人形！！

次回、松葉が女人形と激突！！

ファイル661：松葉が食べられた『1』

哀

「あの娘がディアナの造った人形！！？」

松葉

「そやで。ディアナはよう人形をアタシに造ってくれとったわ。そやからあれは・・・アタシが破壊する。」

タン！

カミュ

「9THバトル第5戦！！アル！桜野松葉！！ペンデュラムアッド！ピノー！！試合、開始！！」

松葉

「ディアナは元気か？」

ピノー

『ペンデュラムアッド構成員

ⅡクラスⅡ

ナイト』

「ううん、病気ヨ。死にそうなの・・・」

ピノーの鼻が伸び出した。

グングン！

松葉

「アンタはディアナに造られたんやろっ?」

ピノー

「ううん、ちがうわヨ。」

グングン!

カシン!

松葉

「アタシに勝てると思てる?」

ピノー

「とんでもないワ。負けると思ってる・・・」

グン!

ガシン!!

ピノーは弾丸を放った。

ドンドン!!

ドカン、ドカン!!

松葉は微動だにしない。

ピノー

「避けようとししないのネ。憎たらしい人だワ!!ワタシをナメない方が良くわヨ・・・」

チャキ！

ピノーは右腕を回し始めた。

ギュラギュラ・・・

ピノー

「ウエポン：RING・・・ノコギリギン！！」

ピノーは3本の腕でノコギリを持った。

ガシャ！

哀

「右腕が1本増えてる！！」

リアン

「人形やからな。あれくらいは：RINGなしでもできるやろ。」

松葉は翼を生やすと、ピノーに突っ込んだ。

タン！

タツ！

ガガガガガガ！！

ピノーのノコギリが松葉の翼を弾き、そのまま腹部をかすった。

ガキン！

ザシュ！

松葉

「アイタ！！チツ！！」

タン！

ピノー

「せーの・・・」

ピノーはノコギリを投げた。

ブン！

松葉

「ナメんなや！！人形！！ファイアリウィング！！」

ガシャガシャ！

松葉

「フウ・・・ディアナも凶悪なもんを造ったもんやな・・・」

ピノー

「ちがうわヨ。ワタシ凶悪じゃないわヨ。」

グングン！

松葉

「ディアナはペンデュラム城におるな？」

ピノー

「いないわヨ。」

ジャキ！

ドカン！！

松葉

「ゴホッゴホッ。マトモに会話もできへんな。このウソツキ人形。」

ピノー

「そんな事言わないで・・・近くでお話しましょうヨ、お姉さん。ワイヤーハンズ！！」

ピノーは3つの手を伸ばした。

ニョルウ！！

手が松葉の手足を掴んだ。

ガッ！

松葉

「キャ！！」

ピノー

「いいものを、あげるわヨ。」

女人形の攻撃に翻弄される松葉・・・

次回、松葉最大の危機！？

ファイル662：松葉が食べられた『2』

ピノー

「キレイなお姉さん・・・いいものをあげるわヨ。」

ピノーの服のボタンが外れる。

ピッ、ピッ！

ガシャ！

ピノーのお腹から、回転式ノコギリが飛び出した。

ウィィィィン！

ピノーは松葉を引き寄せようとする。

グッ！

ピノー

「こっちへ・・・おいデ・・・」

松葉

「アホウ！！冗談ちゃうわ！！プリキス！！」

松葉は自分達の真上にプリキスを落とした。

ドカアアアアン！！

哀

「ブリキスを・・・自分の上にまで落とした！！？」

リアン

「ファイアリウイングは腕を掴まれて使われへん。あの娘にはガーディアンしか道はなかったんや。」

コナン

「松葉ちゃん・・・」

フッ！

シュウウウ・・・

松葉が無傷で現れた。

哀

「松葉ちゃんは無事だわ！！ピノーは！？」

ピノーは右腕と左腕が1本分欠け、右足がヒザの辺りまで欠けていた。

松葉

「その体じゃもうムリやね。後一撃でバラバラにしたるわ。」

ピノー

「バラバラになんてされてたまるもんですか・・・ワタシは・・・ワタシは・・・アンタを倒してディアナ様に人間にしてもらったヨ
ーッ！！！！」

ピノーは：RINGを振り上げた。

ピノー

「ガーディアン：RING『ヴァスディトカロン』！！！」

ピノーは巨大鯨のガーディアンを召喚した。

バツ！

松葉

「キヤーツ！」

バクン！

松葉はガーディアンに飲み込まれた。

瑛祐

「鯨の・・・ガーディアン！？」

哀

「松葉ちゃんーっ！！」

ピノー

「ケケケ・・・ワタシはこれでもう人形じゃあない・・・人間になれるんだワッ！！人間になれるんだワッ！！！」

松葉、鯨の体内。

松葉

「うつわ！クツサ！！まいったなこりゃ・・・」

そう呟いた松葉は、何かの気配に振り返った。

松葉

「誰や!!?」

「やぁお嬢ちゃん。君もヴァスデイトカロンの中に入って来たんだね。」

松葉

「アンタ、何者?」

「ヴァスデイトカロンの・・・住人さ。」

鯨に飲み込まれた松葉が出会ったのは、謎の生物らしき者・・・

果たしてこの生物は一体何者!?

次回、松葉が逆転勝利!!

ファイル663：松葉が食べられた『3』

リオ

「やぁお嬢ちゃん。君もヴァスデイトカロンの中に入って来たんだね。ボクはヴァスデイトカロンの住人。リオっていうんだ、ヨロシク。」

松葉

「アンタ・・・ずっとこの鯨の中に住んでるん？」

リオ

「そうだよ。普通の人間はこの中にいると、溶けてしまうんだ。ホラ、そこ見てみそ。」

リオが指差した方を松葉が見ると、頭蓋骨が浮いていた。

プカプカ！

松葉

「お生憎様！こんな中すぐに出てやるで！溶けてまうやなんて、松葉ちゃん真つ平！！レインキャット！！！」

松葉はレインキャットを召喚・・・

できなかった。

松葉

「あら？あらら？」

リオ

「ムリムリ。この中では：RINGは発動できないんだ。ボクの許可なしではね。」

松葉

「許可せんかい!!」

リオ

「ダメだよ。これは・・・ディアナの呪いなんだ。元々ボクはディアナの召使いだっただ。ところがある日、彼女のスカートを間違って踏んでしまったのさ。これは呪いなんだ。彼女は言ったよ、『一生この中で暮らすが良い。せめてもの情けにこの中にいても溶けない体にしてあげる。』と。で、今ボクはヴァスデイトカロンの住人ってワケ。」

松葉

「・・・アンタ、外に出たくないん？」

リオ

「そりゃあ出たいさ！もう何年もこんな所にいるからね。」

松葉

「ほな：RING使っん許可してや。アンタも一緒に外に出したる。」

「

リオ

「ダメだよダメだよ!!ヴァスデイトカロンの死なないとボクは外に出られないんだ!!お嬢ちゃんにヴァスデイトカロンを殺せるワケないじゃないか!!それにお嬢ちゃんだけが外に出たらまたボクは独りぼっちだ!!」

チウ！

松葉

「ヴァスデイトカロンは一撃で殺すわ。信用して。」

松葉を心配する哀達。

哀

「ちょっと・・・もう15分は経ったわよ・・・あの中に・・・ずっと松葉ちゃんが・・・！！どうしたら良いの・・・！！」

ピノー

「助かるわヨ、お姉さんなら！！キャハハハハ！！！！」

パンツ！

カミュ

「これはもう終わりですねっ！勝者・・・」

コナン

「待って！！様子が変だよ！！」

ピノー

「！？」

ピノーが振り返ると、ヴァスデイトカロンの背中が破れ始めた。

ビシビシ！

松葉

「レインキャット『リリ』!!!」

リリで鯨の背中を食い破り、松葉とリオは外に脱出した。

リオ

「出られた・・・外に出られたよぉっつ。」

松葉

「なっ、言つたやろ?」

ブン!

パキーン!

ピノー

「ワ、ワタシの・・・ヴァスデイトカロンが・・・!!」

松葉

「アンタからはディアナの匂いがプンプンしよう。不快や、消えな。」

「

リリはピノーに噛みつき、バラバラに碎いた。

メキャー!!

コン!

哀

「やった!!!大逆転だわーっ!!!・・・って、あなた何?」

リオ

「リオと言います、ハイ。」

ピノー

「あなたみたいなキレイな人にやられて嬉しいワ。」

松葉はそう言うピノーの鼻をへし折った。

ボキッ！

松葉

「ウソ吐き。」

カミユ

「勝者・・・アル、桜野松葉！！」

松葉

「悪いな、ディアナ。また壊してもうたわ」

松葉、カラクリ女人形を見事撃砕！！

しかし、次に出るペンデュラムは・・・！？

次回、コナンに衝撃！！

ファイル664：コナンが笑った『1』

哀

「やったわね松葉ちゃん！！鯨の中に入れられた時はヒヤヒヤしたわ！！」

松葉

「あら哀ちゃん、心配してくれたん？おおきにーっ。」

リオ

「やお嬢ちゃん、ヴァスデイトカロンの中から出してくれてありがとな。」

松葉

「何でアンタここにおるんや・・・」

リアン

「残り・・・2人・・・」

ズズズズ・・・

瑛美じゃない方の人間が、進み出て来た。

トン！

コナン

「哀ちゃん、瑛美さんでしょ？だから・・・次、ボクが行く！！」

哀

「ええ！！頑張つて来なさいよコナン君！！」

イズナ

「コナン君なら大勝利間違いなしだわ！！」

コナンは微笑むと、進み出た。

タツ！

哀

「ダメだわ・・・」

秀一

「どうした哀君？」

哀

「・・・あつ、イヤ・・・何でもない・・・（ただ、今・・・何か、スゴクイヤな予感がしたのよ。）」

「さて・・・お久しぶりです。新一様・・・」

バサッ！

ローブを脱ぎ去った人間の正体に、コナンは驚愕した。

なぜなら・・・

コナン

「き！！君は・・・マジカル・ユウ！！？」

「お元気そうで、何よりですわ・・・」

リアン

「ア・・・アイツは・・・」

そう、コナンとリアンが昔世話になったベビーシッターの1人だったからだ。

コナン

「どうして君がペンデュラムアッドに!？」

回想

新一「えーん・・・えーん・・・うええ・・・ん。」

ディアナ「泣かないで、新一君・・・今日は楽しい人を連れて来たの。」

新一「楽しい・・・人?どこ?」

ポン!

マジカル・ユウ「初めまして、新一様。私、マジカル・ユウと申す者でございます。今日はあなた様を笑わせに参上いたしました。」

ギョルギョル!

マジカル・ユウ「ホラご覧ください!!何でもジャグリングでございます!!」

マジカル・ユウはそれから、次々とマジックを新一に見せた。

新一「スゴイ!!スゴイスゴイ!!」

ボン!!

マジカル・ユウ「新一様、どうぞ。」

マジカル・ユウは新一に花束を渡した。

新一は満面の笑顔を見せた・・・

「あなた様とこのような形で再会するのは、正直心が痛みます。あの頃は毎日遊んでいましたからね。」

コナン

「君がペンデュラムなんて納得いかないよぉ！！あんなに優しくしてくれたじゃない！！」

「ペンデュラムに入っただけではなく、元々ペンデュラムだったので。私の父はシールド、父の主人はディアナ様。その命令に従っただけ……」

コナン

「（そんな……）」

イズナ

「コナン君、どうしたの？」

リアン

「コナン君にとっては……戦いにくい相手やっちゅうこっちゃ。」

カミユ

「9THバトル第6戦！！ペンデュラムアッド！！マジカル・ユウ
「アマレット！！アル！！江戸川コナン！！試合……開始！！！！」

マジカル・ユウ「アマレット

「ペンデュラムアッド構成員

「クラス」

ナイト」

「運命が私達を手繰り寄せた。勝負です、新一様。」

自分に優しくしてくれたベビーシッターと、コナンは戦わなくてはならないのか・・・!?

次回、躊躇^{ためら}いのコナン・・・!!

ファイル665：コナンが笑った『2』

マジカル・ユウ

「ウエポン：RING・・・ニードルボール！」

ジャキン！！

マジカル・ユウはボールを召喚すると、上に乗った。

ギャルルルル・・・

マジカル・ユウ

「行きますよ新様！！」

マジカル・ユウはコナンに突っ込んだ。

ギャギャギャ・・・

コナンはボールを避け、後ろに下がった。

ザシャ！

マジカル・ユウ

「フウム・・・絶対に当たらない距離を作りますね。本当にお強くなられましたね。素晴らしい。それでは・・・これならいかがされる？ネイチヤー：RING！ブリザードウィール！！」

マジカル・ユウは氷の輪を複数放った。

ザザザザザ！

哀

「氷の輪がコナン君に突っ込んで行くわ!!」

コナンは氷の輪に突っ込んだ。

ゴッ！

コナン

「ネイチャー：RING・・・ファルシクル!!」

コナンは氷の輪を全てくぐり終えると、炎の：RINGで氷の輪を燃やした。

ボシユウウウ!!

マジカル・ユウ

「お見事。ドンドンいきますよ。ネイチャー：RING・・・バブル・タイガー!!」

マジカル・ユウは泡の虎を放った。

ガオオオオオ!!

ゴアッ！

コナン

「フレアド・・・アース!!」

コナンは炎を放ち、泡の虎を消し去った。

ボシュー!!

マジカル・ユウ

「フム、一撃か。これはますます驚きましたわ。」

コナン

「ハア、ハア・・・」

哀

「コナン君絶対好調じゃないのよりアンちゃん!!」

イズナ

「そうよそうよ!!」

リアン

「イヤ・・・魔力が荒れとる。コナン君はホンマはアイツと戦いたくないんや。」

コナン

「マジカル・ユウ・・・ボク・・・君と戦いたくない。」

マジカル・ユウ

「私事です。しかしこれもディアナ様の命。戦わなければならないのです!! ガーディアン：RING・トランプファイターズ!!」

マジカル・ユウは4体のトランプ兵を召喚した。

コナン

「どうしても・・・ダメなんだね・・・」

ディアナ「オマエに指令を出す、マジカル・ユウ。工藤新一を・・・」

マジカル・ユウ

「・・・やれ。」

4体のトランプ兵は、コナンに襲いかかった。

コナンは覚悟を決められるのか!?

次回、コナンを悲劇が襲う!!

ファイル666：コナンが笑った『3』

ハートの兵士は、矢を放った。

チュン！

ザス！

コナン

「あう！！」

クラブとダイヤも、コナンに向かって来る。

コナン

「たくさんの・・・フウちゃん！！」

コナンは複数の炎のダルマを放った。

バツ！

フレアマン達はトランプファイターズ4体を押し潰した。

ドン、ドン、ドン！！

マジカル・ユウ

「今だ！！マネツ子メダルオン！！」

マジカル・ユウはメダルのような物を出した。

すると、フレアマンが複数現れた。

ブン！

コナン

「え！？」

コナンはフレアマンに襲われた。

コナン

「うわぁーっ！！」

ドン、ドン！！

コナン

「な、何で・・・フウちゃんがボクを・・・？」

マジカル・ユウ

「マネツ子メダルオンは相手と同じ：RINGの能力を発動できるのです。ランプファイターズはただのオトリだったのですよ。」

コナン

「ハア、ハア・・・」

マジカル・ユウ

「いきますよ、新一様！ガーディアン：RING！！ナイトメア！！」

マジカル・ユウはキバが生えたボールを複数召喚した。

ボボボ！！

ボールは合体する。

ガチン！

ボールはバラツと弾けると、コナンを襲った。

バラツ！

ドカ、バキ！！

哀

「おかしいわ・・・コナン君は今まで1度もあの子に直接攻撃して
いない！！」

松葉

「リアンちゃん！コナン君が戦いたくないってどういう意味や？」

リアン

「アタシや新一君が小さかった頃世話になっていたベビーシッター・
・・・その1人やったんや、あの女は。」

秀一

「心理的なものか・・・」

リアン

「ええ加減にせえコナン君！！アンタは戦う覚悟を決めたんやなかつたんか！！？」

コナン

「（そうだ・・・ボクはまだ甘えている・・・戦わなきゃいけない！！）ファルディーネ！！」

ボウン！

「お久しぶり、コナン。今回ボクが倒すべきは・・・あのガーディアンかな？」

コナン

「そうだよっ、行ってファルディーネ！！」

「フレアニードルス！！」

ファルディーネは炎の槍でナイトメアを撃破した。

ドガア！！

その時だった。

コナンが謎の球体に包まれたのは。

ポウ・・・

哀

「！？」

マジカル・ユウ

「ナイトメアもオトリだったのですよ。私の本当の目的はあなた様を倒す事ではなく・・・」

ディアナ『オマエに指令を出す、マジカル・ユウ。工藤新一とコナ
ー王子を・・・私の元まで連れて来るのです。』

マジカル・ユウ

「これもディアナ様の命・・・新一様はペンデュラム城に連れて行
く!」

ゴゴゴゴゴ・・・

コナン

「そんなのヤダよ志保!!志保お!!」

哀

「新一っ!!」

マジカル・ユウ

「新一様は頂きましたよ・・・アルの皆様・・・」

フッ!

コナンがマジカル・ユウに連れ去られて行くのを、哀達は呆然と見
ているしかなかった・・・

マジカル・ユウにさらわれてしまったコナン・・・

なぜ彼はさらわれたのか?

そして、彼をさらうよう指示したディアナの目的とは・・・!?

哀達アルの面々は、コナンを必ず救い出さなくてはいけない！

そして、ペンデュラムアッドを絶対に滅ぼさなくてはならないのだ
！！

回り出した運命の歯車が、今1つにつながった！！！！

運命の最終決戦が、もうすぐ始まる・・・

第6章・完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2970e/>

FBIから来た女:6 ~ 漆黒・黒の章

2010年10月9日18時14分発行